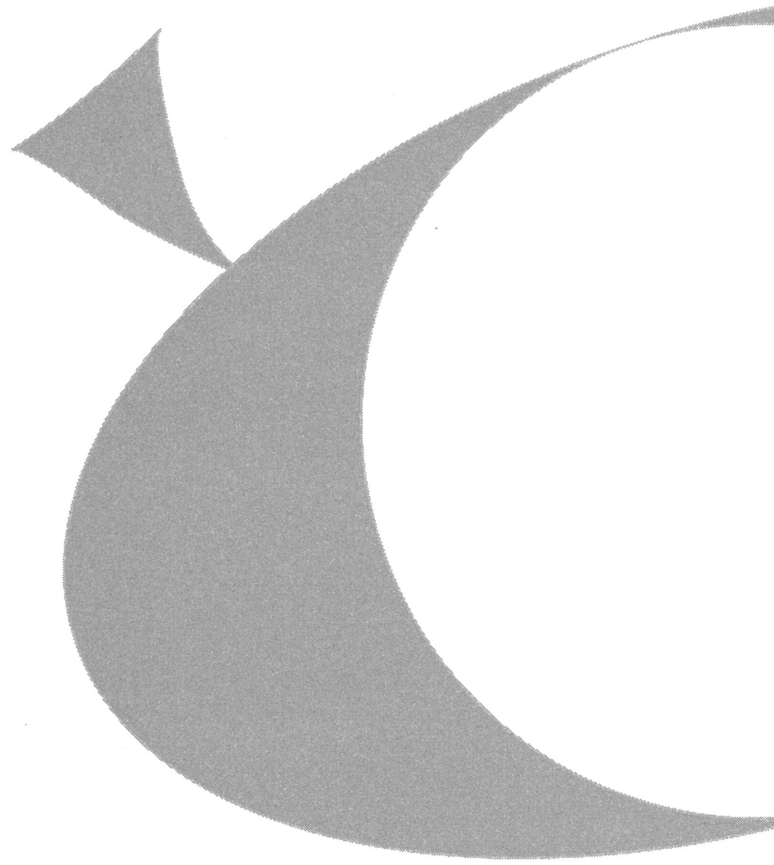


南部地域の活性化に向けた調査研究Ⅱ



南部地域の活性化に向けた調査研究Ⅱ

豊中市政策企画部 とよなか都市創造研究所

研 究 員 比嘉 康則

目次

第1章 はじめに	1
1-1. 調査研究の背景・目的.....	2
1-2. 昨年度の調査研究の結果.....	3
1-3. 本年度の調査研究の計画.....	5
第2章 庄内駅周辺の空間における学生の滞留状況	9
2-1. 問題設定.....	10
2-2. 方法.....	10
2-3. 結果.....	12
2-3-1. データの概要.....	12
2-3-2. 属性と行動の分析.....	16
2-4. 考察.....	20
第3章 豊中市の若い世代の地域イメージと居住意向の関連	23
3-1. 問題設定.....	24
3-2. 方法.....	24
3-3. 結果.....	25
3-3-1. 事前作業とデータの概要.....	25
3-3-2. 頻出語の分析.....	26
3-3-3. 共起関係の分析.....	30
3-3-4. 居住意向との関連の分析.....	41
3-4. 考察.....	44
第4章 南部地域の20～40歳代の生活と地域の関連	47
4-1. 問題設定.....	48
4-2. 方法.....	49
4-3. 結果.....	52
4-3-1. 整理の枠組み.....	52
4-3-2. ライフコースと地域.....	53
(1) 進学・仕事.....	53
(2) 結婚・子育て.....	75
(3) 小括.....	89
4-3-3. ライフスタイルと地域.....	92

(1) 消費活動	92
(2) つながり構築	106
(3) 治安の評価	124
(4) 小括	136
4-3-4. 地域の今後について	139
4-4. 考察	142
第5章 おわりに	149
5-1. 本年度の調査研究の結果	150
5-2. 活性化の方向性についての考察	151
参考文献	158
謝辞	160

第1章 はじめに

1-1. 調査研究の背景・目的	2
1-2. 昨年度の調査研究の結果	3
1-3. 本年度の調査研究の計画	5

第1章 はじめに

1-1. 調査研究の背景・目的

日本全体で人口減少が進むなか、豊中市の人口は近年増加傾向を示しており、現在のところ約39万人を維持している。しかし、同じ市内でも地域によって状況は異なっており、特に南部地域では人口減少と少子高齢化が顕著である。また、子育て環境や自然環境などをはじめとする地域の環境に対する市民の評価の多くが、南部地域は他地域と比べて低いという結果もみられる（豊中市2016、とよなか都市創造研究所2016）。

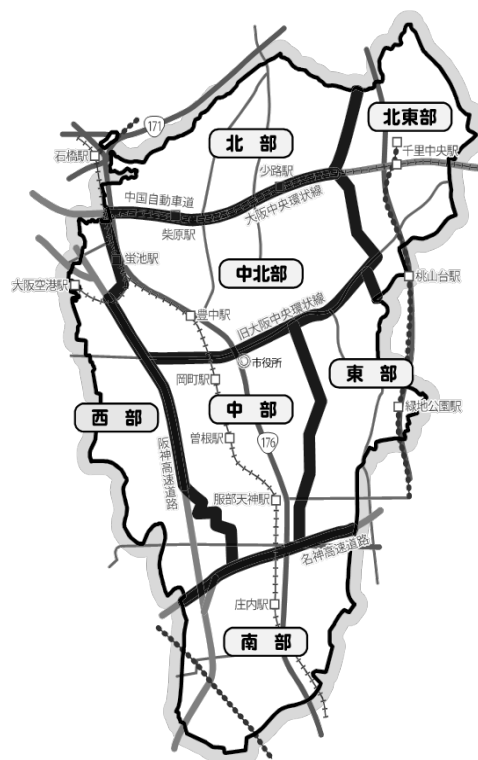
このような背景のもと、南部地域では活性化に向けた取り組みが求められている。平成29年度（2017年度）には、「豊中市南部地域活性化構想」が策定された。また、平成30年（2018年）4月にスタートする新たな総合計画では、リーディングプロジェクトとして南部地域の活性化が位置づけられている。

本調査研究は、これらの計画策定と並行しながら、2年間を通じて南部地域の現状を多角的に分析し、今後の活性化の方向性について考察することを目的として行われた。昨年度は、国勢調査や経済センサスなど既存の統計データの分析や、質問紙調査の新たな実施と分析など、主として量的アプローチを用いた研究を行った。今年度は、観察調査やインタビュー調査、テキストの分析など、質的アプローチも取り入れながら昨年度の研究結果を補足・修正していきたい。

なお、本調査研究で用いる地域区分は豊中市都市計画マスタープランに準拠し、南部地域は「名神高速道路以南の地域」を指すこととする（図表1）。

図表1 都市計画マスタープラン7地域

地域	説明
北東部	千里ニュータウンおよび上新田からなる地域
北部	大阪中央環状線以北の地域および千里緑地以西の地域
東部	北大阪急行・御堂筋線沿線地域で天竺川以东および名神高速道路以北の地域
中北部	阪急宝塚線沿線地域で千里緑地以西および旧大阪中央環状線以北の地域
中部	阪急宝塚線沿線地域で旧大阪中央環状線以南および名神高速道路以北の地域
西部	阪神高速道路および大阪国際空港周辺緑地以西の地域と阪急蛸池駅周辺の地域
南部	名神高速道路以南の地域



1-2. 昨年度の調査研究の結果

まず、昨年度の調査研究の主な結果を整理しておく。昨年度の調査研究は(1)既存データの分析、(2)大阪音楽大学・短期大学(以下、大阪音大)の学生を対象とした質問紙調査の分析、(3)若い世代を対象とした質問紙調査の分析という3つのパートからなる。

(1) 既存データの分析

国勢調査や経済センサス、過去に本研究所で実施された質問紙調査の結果など、既存データの分析を行い、南部地域の変遷と現状を把握した。変遷については、昭和45年(1970年)ごろを境に南部地域の人口が増加から減少へと大きく変化していることを押さえた上で、その背景を検討した。背景には、高度成長期に進行した地方圏から都市圏への大規模な人口移動がそのころから鈍化していったこと、人口急増期に地域内に大量供給されたいわゆる文化住宅などが、居住者の世帯拡大、子育て世代への移行に伴い手狭な住宅となってしまったこと、人口の急増などによる地域環境の悪化が懸念されるようになったこと、などが考えられた。実際、人口減少期に入ると、南部地域は20歳代から30歳代にかけての子育て世帯が社会減(転出超過)の傾向を示すようになった。

その上で、現在の地域の状況について、人口、産業・経済、コミュニティという3つの側面から分析を行った。特に人口面で注目されたのは、南部地域では30歳代の子育て世帯が転出超過であること、20歳代の社会増がみられること、20歳代後半以降の単独世帯の比率が高いこと、20歳前後の女性(主として大阪音大の学生)の交流人口がみられること、などである。以上のことから、学生や若い世代の意識や行動から地域活性化の契機を探ることが必要ではないかと考えられた。

(2) 大阪音大の学生を対象とした質問紙調査の分析

大阪音大の学生を対象とした質問紙調査を実施・分析した。音大生の日常的な流入が南部地域のひとつの特徴であることに鑑み、彼女ら・彼らの南部地域での消費活動や、地域に対して抱いているイメージを中心に検討した。

その結果、学生の中心は実家暮らしの女性であり、豊中市外から電車を使って通学しているが、庄内駅周辺店舗の利用は少ないことがうかがわれた。大学帰りの遊びの中心は梅田での買い物や食事、カフェなどである。また、地域イメージについては、治安や雑多な雰囲気などに関するネガティブなものが多いが、地域内にある店舗や「レトロ」な雰囲気には、ポジティブな感覚が含まれていることがわかった。

(3) 若い世代を対象とした質問紙調査の分析

豊中市内の北東部・中北部・南部の若い世代(18~39歳)を対象とした質問紙調査を実施・分析した。質問項目としては、居住意向、地域の環境評価、社会的つながり、ライフスタイル、などを設定した。

その結果、まず、南部では20歳代後半で地域に関する各種の指標（居留意向、教育環境・自然環境・治安・防災・まちなみなどの地域環境評価、など）でネガティブな傾向を示すことがわかった。実際の人口動態と照らし合わせても、地域に対してネガティブな評価を抱いている30歳前後の子育て世代が、実際に転出している可能性が示唆された。

また、南部地域は他の2地域と比較すると、社会的なつながりが弱い人が多いことがうかがわれた。南部地域に対する事前のイメージとは矛盾する結果だが、これは地域に単身者が比較的多いことによるものと推察された。

若い世代のライフスタイルについての分析も行った。南部地域は他の2地域に比べ、ひとりでの行動を志向し、文化系の趣味に積極的な「ソロ行動系」とまとめたライフスタイルの人が多かった。対して、音楽、スポーツ、ネット利用など幅広い趣味や余暇の分野で積極的に行動し、他人と一緒に行動することを好む「アクティブ系」とまとめたライフスタイルの人が少ない傾向にあった。南部の「ソロ行動系」は経済不安が強いが定住志向が比較的強く、「アクティブ系」は経済不安が弱い、地域での転出志向が比較的強いという特徴もみられた。

さらに、地域環境のどの側面が、南部の若い世代の居留意向の好転に結びつきやすいと言える

図表 2 南部地域の強みと弱み（昨年度の調査研究の結果）

	弱み	強み
人口	<ul style="list-style-type: none"> ・高齢化の進展 ・単身世帯の多さ ・子育て世帯の社会減 ・地域に対するネガティブな評価（特にまちなみ、教育環境、自然環境、防犯・防災面、など）と居留意向の関連 ・移動志向の強さ（特に25～29歳、アクティブ系・パッシブ系のライフスタイル） ・地域に対するネガティブな評価（特に25～29歳） ・社会経済的制約が小さい人の教育環境へのネガティブな評価 ・子育て世帯、社会経済的制約が小さい人の防犯面へのネガティブな評価 ・出生率が低い可能性。子育てに対する不安は強い（特に30歳前後） 	<ul style="list-style-type: none"> ・20歳代の社会増 ・音大の学生を中心とした20歳前後の流入者（特に女性）の多さ ・職住近接の暮らし ・ソロ行動系のライフスタイルの人の定住志向の強さ
産業・経済	<ul style="list-style-type: none"> ・音大生と駅周辺の店舗との接触は非常に少ない ・社会経済的制約が大きく、経済不安を抱える若い世代が多い（生活満足度との関連） ・地元の店舗への選好が弱い人が多い（特に25～29歳） ・消費に対して消極的なライフスタイルの人が多い 	<ul style="list-style-type: none"> ・産業の集積（卸売・小売業、製造業） ・事業所の立地としての課題が小さい可能性 ・一部の音大生による店舗やまちの雰囲気に対する肯定的な評価 ・庶民的な店舗を選好する人が多い可能性（社会経済的制約との関連性） ・駅周辺を中心とした商業的魅力への評価は比較的高く、居留意向の向上への寄与度も高い可能性がある
コミュニティ	<ul style="list-style-type: none"> ・社会的なつながりや、地域への愛着が弱い若い世代が多い（特に25～29歳。居留意向とも関連） ・単身者を中心にひとりでの生活を志向するライフスタイルにある人が比較的多い ・地域内での子育て・教育への志向が弱い（特に子育て世帯・25～29歳） 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域自治や市民公益活動が活発な可能性 ・子育て世帯・30歳代の社会的つながりは他地域と同程度 ・近隣住民とのつながりに関する評価を高めることは、居留意向の向上への寄与度が高い可能性がある（特に家庭生活系のライフスタイルで）

のかを検討した。その結果、教育環境の改善は、特に 20 歳代後半の居留意向の好転に結びつきやすいことがうかがわれた。また、地域のまちなみの改善は、幅広い若い世代において居留意向の好転への効果が期待された。

図表 2 は、以上のような昨年度の調査研究に基づき整理された、南部地域の強みと弱みである。

1-3. 本年度の調査研究の計画

以上のような昨年度の結果をふまえ、本年度の調査研究をどのように進めていくか。議論の枠組みを検討した上で、調査研究の内容・方法について計画を示したい。

まず、議論の枠組みについて。昨年度は、先行研究をふまえた上で地域活性化という概念について定義した。すなわち、地域活性化とは、「人口」「産業・経済」「コミュニティ」という 3 つの側面において、ネガティブに推移している状況にポジティブな変化が起こること、として捉えられた。この場合、「人口」には定住人口だけではなく、交流人口なども含まれる。「産業・経済」とは、地域の産業の状況、雇用状況、居住者の経済状況などである。「コミュニティ」とは、地域内の非営利活動（地域自治、NPO 活動、など）や近隣づきあいなどである。

ただ、以上の 3 つの側面のうち、「産業・経済」「コミュニティ」の 2 つと「人口」は、同じ水準にあるとは言い難い。また、3 つの側面を並列的に捉えると、地域が活性化された状態へといったルートが複数あることは確認できるものの、各側面が互いにどう関連しているのかも表現しづらい。

そこで本年度は、地域活性化を「人口」×「活動（産業・経済、コミュニティ）」として捉え、議論を進める上での枠組みとしていくことにしたい。このような捉え方は、「まちの活力」を「人口」と「意欲」の積として捉える河合（2017、pp.26-32）¹や、「人口」の総量ではなく地域に参加し「活動」する人の量、つまり「活動人口」を増やすことがこれからの人口減少社会においては重要であるとする山崎（2016、pp.9-10）²を参考にした。

では、以上のような枠組みに基づきつつ、どのような内容について、どのような方法で取り組むか。昨年度の結果をふまえ、本年度は大きくわけて 3 つの調査分析を行う（図表 3）。

第 1 に、庄内駅周辺の滞留状況について、大阪音大の学生に注目した分析を行う。昨年度の調査によると、20 歳前後の女性を中心とした大阪音大の学生が庄内駅を使って日常的に流入してい

¹ 河合（2017）は、シティプロモーションの評価指標として、「人口」と「意欲」から構成される「まちの活力」を設定している。「人口」はさらに、地域の定住人口と、プロモーション上のターゲットとなる地域外の人口に分解される。「意欲」も、まちを推奨する意欲（地域推奨意欲）、まちをより良くする取り組みに参加する意欲（地域参加意欲）、地域をより良くしようとする働きに感謝する意欲（地域感謝意欲）に分解される。今回の枠組みは、「意欲」に焦点化する河合とは異なり、具体的な「活動」レベルに注目するものである。

² 山崎（2016）が「活動人口」と呼ぶ際の「活動」として念頭に置かれているのは、経済活動からは少し距離を置いた、コミュニティをより良くする「活動」である。そのため、今回の枠組みでは「活動」に消費活動をはじめとした経済活動を含めているが、山崎のいう「活動」には入らないと考えられる。

る点に、南部地域の人口面での特徴を認めることができる。しかし、彼女ら・彼らの多くは駅周辺の店舗を利用しているとは言い難い。

ただ、学生の行動は質問紙調査から示唆されたのみであり、実際に学生が庄内駅周辺の空間をどのように利用しているのか、その具体的な様態は明確ではなかった。また、そもそも庄内駅周辺の空間が、地域の人びとも含めた往来者によってどのように利用されているのかをふまえた上で、学生の行動を捉える必要もあると思われる。そこで今回は、駅周辺を往来する学生がどのような行動をしているのか、含めた滞留に注目した観察調査を行うこととした。

第2に、若い世代が地域に対して抱いているイメージと居留意向の関連について分析する。昨年度の質問紙調査からは、30歳代の子育て世帯を中心とした南部の社会減の背景には、地域に対するネガティブな評価が関係していると考えられた。

そこで今回は、若い世代がどのようなイメージを抱いており、それが居留意向とどのように関連しているのかについてテキスト分析を行うこととした。使用するデータは、昨年度行った質問紙調査に含まれていた、地域のイメージについての自由記述の回答である。

第3に、南部地域の居住者の地域での生活と地域の関連についての分析を行う。繰り返しになるが、昨年度の調査研究では、南部の若い世代は特に20歳代後半で移動志向が強まり、その背景には、特に治安や教育環境など地域に対するネガティブな評価があることがうかがえた。

では、居住地選択や地域の環境評価、消費やつながり構築などの活動は、どのような具体的な生活のなかで行われているのだろうか。生活の変化のなかで、地域内での行動や地域の環境に対する評価はどのように変化するのだろうか。生活利便性、子育て・教育環境、治安の課題として、そもそもどういう事柄が指し示されているのだろうか。そのような問いに取り組むために、南部地域に住む20～40歳代に対して、インタビュー調査を行う。

以上のような一連の調査と分析を通じて、南部の人口と活動を抑制しているかもしれない要素や、人口と活動の促進に結びつく可能性のある要素を見だし、南部地域の活性化の方向性について考察を行うことにしたい。

図表 3 昨年度の調査と本年度の調査の関係

	昨年度の主な結果	主な問い	今年度の調査
学生調査	・大阪音楽大学の学生は庄内駅周辺の店舗利用が少ない	・駅周辺の空間を学生はどのように利用しているのか	・学生の駅周辺での滞留に関する観察調査
若い世代調査	・南部の若い世代は、特に20歳代後半で移動志向が強くなる ・南部の若い世代は、地域に対する評価がネガティブ（特に、治安、教育環境、など）	・居留意向と地域のイメージにはどのような関連があるのか	・自由記述データを用いた地域イメージと居留意向の関連についての分析
		・居住者はどのような生活の中で居住地選択、地域環境の評価、活動を行っているのか	・フィールドワークを通じた20～40歳代の地域居住者へのインタビュー調査

最後に、本年度の調査研究全体を通じた、調査者の分析・考察の視点の置き方について述べておきたい。昨年度の調査研究を終えて感じられたのは、南部地域のネガティブな側面が強調されすぎてしまったのではないかという危惧である。過去に本研究所で行われたものだけを振り返っても、量的データ、特に生活上の意識を尋ねる質問紙調査の結果を他地域と比較すると、南部は相対的にネガティブな数字が示される傾向にある。

ただ、その数字をネガティブなものとして解釈するのは分析する側であり、実際に地域で生活する人びとにとってその数字で示される状況がどのように意味づけられているかは、別の話である。あるいは、地域の状況が仮に居住者にネガティブなものとして受け取られていたとしても、それを「ネガティブである」と断じてしまうだけでは、そのような地域の状況をふまえながらも地域に愛着をもち、住み続ける人たちの生活感覚を掬い取ることは難しい。

加えて、再帰性の問題も懸念される。たとえば、交通渋滞の可能性は小さいという予測報道は、人びとの車での外出を促し、実際には交通渋滞を引き起こしてしまうかもしれない。学力格差の拡大に警鐘を鳴らす主張は、我が子にだけは学力をつけたいという一部の親の意識を刺激し、意図せざる結果として学力格差の拡大を後押ししてしまうかもしれない。このように、ある対象を観察し、それに対して何事かを言及することが、もとの対象自体に影響を与える可能性がある。

同様のことが、南部地域に関する各種の調査などから生じてはいないだろうか。つまり、各種の調査などに基づく情報が、地域やその周辺に住む人びとの意識を左右してはいないだろうか。質問紙調査で確認できるネガティブにみえる情報は、地域に対するネガティブな感覚を芽生えさせたり、もともとあったネガティブな意識を強化する裏づけを与えたりはしていないだろうか。さらに言えば、調査が意識を生むだけではなく、その意識が調査に反映され、さらにその調査が意識に影響し——というような循環関係が、形成されてはいないだろうか。昨年度の調査研究を終えて感じられたのは、このようなことである。

もちろん、昨年度の調査研究だけで再帰的な状況が生じてしまった、というようなことではない。過去から現在にまで行われてきた数多くの調査群が、(意図せざる結果として) 上述のような構造を形成しているとすれば、少なくとも活性化の方向性を模索する調査研究として、そのような群に加わるのは適切ではないだろう、ということである。

では、どうするか。仮に上のような循環関係が形成されているとすれば、地域全体の平均を捉えるだけではなく、地域の状況を別の角度から捉えなおすことを迫るような、特異点を強調することも必要だろう。もとより、地域の活性化を探求のテーマに掲げる際には、そのような視点が求められるとも言える。

よって今年度の調査研究では、地域の活性化に向けた好転的な循環を形成する一助となることを(本調査研究だけでそのようなことが可能になるわけではないが) 企図し、一定の手続きをふまえたデータを収集することで、地域のネガティブな側面が見られればそれは客観的に記述すると同時に、地域のポジティブな側面を意識的に押し出すことにしたい。

第2章 庄内駅周辺の空間における学生の滞留状況

2-1. 問題設定	10
2-2. 方法	10
2-3. 結果	12
2-4. 考察	20

第2章 庄内駅周辺の空間における学生の滞留状況

2-1. 問題設定

昨年度の調査からは、大阪音大の学生が交流人口として日常的に流入していることが、南部地域の人口面での特性のひとつと言えた。ただし、学生を対象とした質問紙調査からは、彼女ら・彼らが庄内駅周辺の店舗をあまり利用していないことがうかがわれた。ここからは、一定の交流人口が存在するものの、それが地域内での活動へと十分に結びついておらず、地域の活力が阻害されている可能性を指摘できる。

以上をふまえ、本年度は、実際の庄内駅周辺で学生をはじめとした往来者の活動の観察を行うことにしたい。だが、往来者の活動の観察といっても、すべての活動を網羅的に記録することはもとより不可能である。何か特定の現象に注目する必要があるが、では、何を見ればよいのだろうか。何に注目すれば、地域の活性化に関する議論へと結びつく情報が得られるのだろうか。

本章では、人びとの「滞留」に注目することにする。都市計画の分野でヒューマンスケールの都市空間のあり方を主張するヤン・ゲールによれば、ある空間にたくさんの人がいることは、必ずしもそこが活気づいていることを意味しない。人びとが滞留し、いかに多くの時間をその空間で過ごすかが重要である。すなわち、「少数の人でもその場所で長い時間を過ごせば、多くの人短い時間しか過ごさない場合と比べて、遜色のない活気を空間に与えることができる」(ゲール 2014、p.240)。

そこで今回は、庄内駅周辺を往来する人びとがある場所に一定の時間とどまる滞留行動に注目する。特に焦点になるのは学生の行動である。庄内駅周辺では学生がどこでどの程度滞留しているのか。その現状を学生以外の人びととの比較も行いながら把握し、交流人口である学生を活動へと結びつける回路について考察することにした。

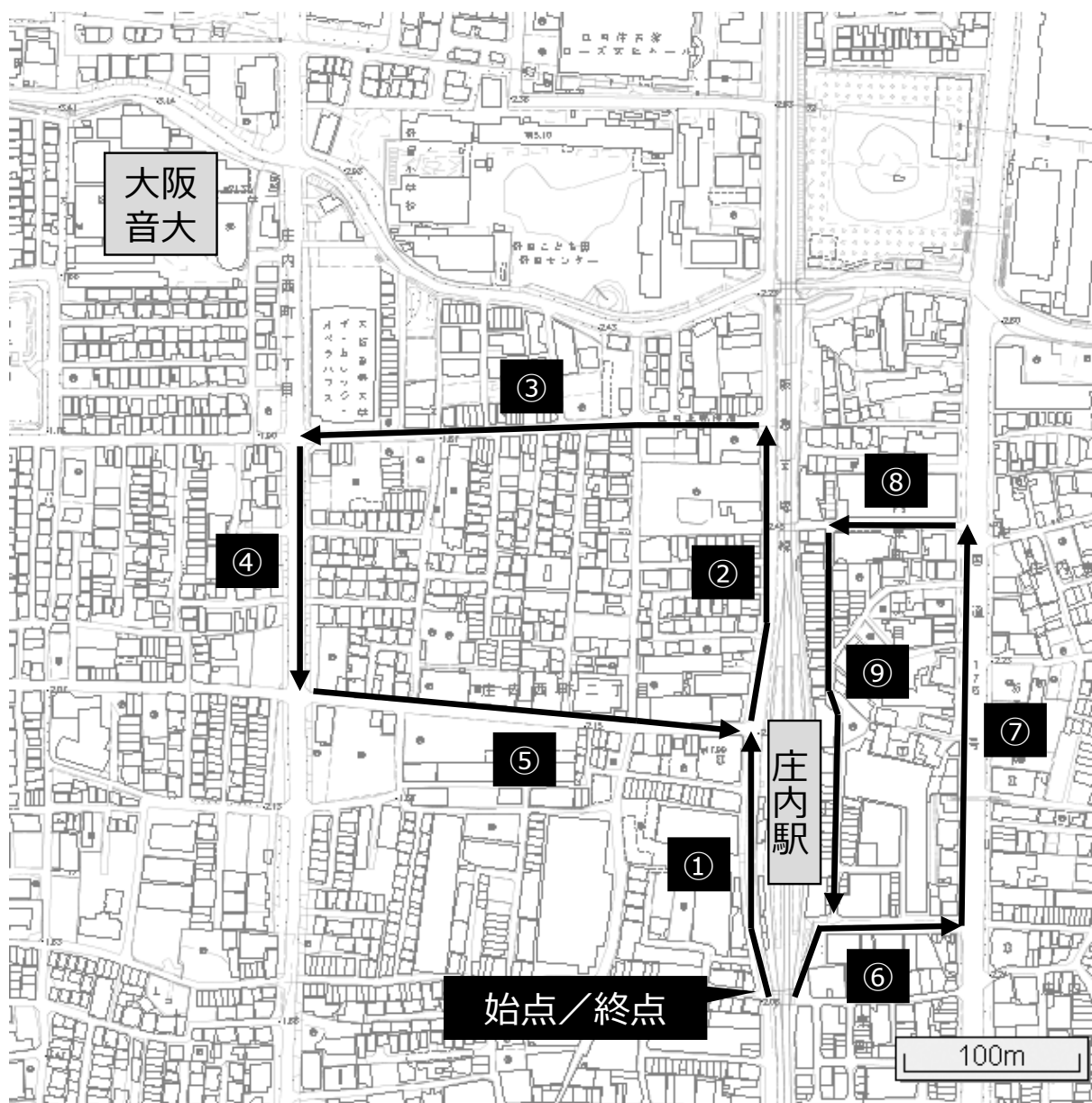
2-2. 方法

観察の方法としては、観察経路法を用いる。これは、事前に設定した観察経路に沿って移動し、移動時に観察できる行動を記録する調査方法のことである。「広範かつ多数のエリアを同一調査者によって効率的に観察することが可能な調査方法」とされ(武田ほか 2010、p.788)、庄内駅周辺の必ずしも狭くないエリアを対象とする今回の調査にとって適切と言える。

観察を行う経路であるが、多くの学生が通学に利用していること、通行量が多すぎて観察と記録が不可能になる箇所は避けること、おおむね1時間程度で往復可能なルートであること、といった観点から予備調査を行い検討した。また、大阪音大がある駅の西側だけではなく、比較のために東側も経路に含むこととした。

結果、観察経路を図表4のように設定した。距離は片道約1.6km(西側ルート=約980m、東側ルート=約650m)であり、約1時間かけて徒歩で往復する。庄内駅の南西を始点ないし終点とし、図表の矢印の方向が往路の進行方向である(図中の①～⑨はルート番号)。

図表 4 観察経路



具体的な観察方法であるが、10～11時、12～13時、14～15時、16～17時の時間帯ごとに経路を移動し、観察できる往来者の数、属性、行動を目視により記録した。観察時期については、屋外空間の利用において通年のうち最も平均的な利用者数および利用内容が見込まれるとされる（武田ほか2010）、秋季に行うこととした。具体的な実施日は、平成29年（2017年）10月5日（木）と、同年11月15日（水）である。天候については、1日めは曇り（23.4℃）、2日めは晴れ（16.3℃）であった（気温はいずれも14時時点）³。

記録にあたっては、場所により一度に複数の往来者を目視で判別する場合があります。簡便な方法が求められたため、事前調査をもとに属性と行動のカテゴリを事前に設定した。属性のカテゴリ

³ 気温は気象庁「過去の気象データ検索」(<http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php>)を参照した。

は、「子ども」「学生」「青年・壮年者」「高齢者」である。「子ども」は18歳未満、「学生」は18歳から22歳、「青年・壮年者」は18歳から65歳未満、「高齢者」は65歳以上をおおまかな目安とした。行動のカテゴリについては「歩く」「自転車に乗る」「立つ」「座る」「買う」「立ち話をする」「タバコを吸う」「携帯電話などを操作する」とした。駐輪や発車のために自転車を操作している場合は「歩く」に含めた。

なお、沿道で営業している店舗の関係者と見なされた者、長時間同一場所で作業をしている工事関係者は、往来者とは見なし難いため記録からは除いた。また、大人数の同一目的の集団と思われる往来者についても、変則的な出来事であり結果を歪める外れ値と見なし、記録は行ったが分析からは除外した⁴。

観察は以上のように進められたが、すべて目視による判断のため、往来者の見落としや属性の誤認などが発生していると思われる。よって、今回の観察調査の結果は、駅周辺の通行量などを正確に反映するものとは言えない。ただ、今回の調査の主目的は、正確な通行量を知ることではなく、学生の滞留状況を把握することであり、目視によるカウントでも問題ないと判断した。

2-3. 結果

2-3-1. データの概要

結果の分析にあたり、観察された行動を、移動と滞留の2つに大別する。移動には、「歩く」「自転車に乗る」が含まれる。滞留には、「立つ」「座る」「買う」「立ち話をする」「タバコを吸う」「携帯電話などを操作する」が含まれる。

全ルート・全時間帯では、合計で3,937人の往来者が記録された。時間帯別にみると、10時台が1,132人、12時台が1,013人、14時台は770人、16時台に1,022人となった。14時台に往来者が若干少なくなるが、それ以外の日中の時間帯にはコンスタントに人通りがある。

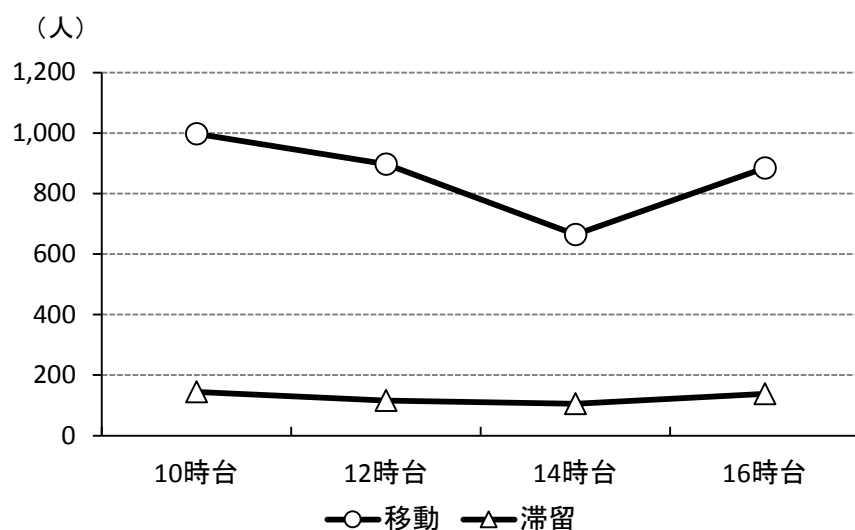
また、行動別にみると、移動が14時台に減少するものの、滞留は時間帯によらず110～140人程度、往来者全体の12～14%程度で推移していた（図表5、6、7）。

図表 5 全ルート・時間帯別の往来者数

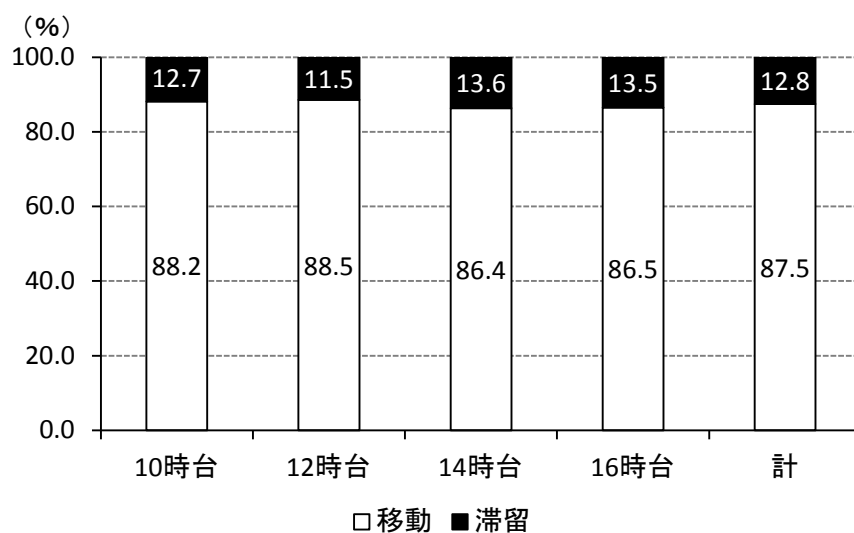
	10時台	12時台	14時台	16時台	計
移動（人）	998	897	665	884	3,444
滞留（人）	144	116	105	138	503
計（人）	1,132	1,013	770	1,022	3,937

⁴ たとえば、1日目には、大阪音大のオペラハウスから大学方向に移動していた外国人の集団（15人程度・10時台・ルート③往路）、豊南市場の見学から移動する小学生と教員の集団（カウント不能・14時台・ルート⑥往路）がみられた。2日目には、鮮魚店前の購買者（20人程度・10時台・ルート⑨往路ならびに復路）、移動中の保育所の子どもと保育士（15人程度・10時台・ルート⑨往路ならびにルート⑧復路）がみられた。

図表 6 全ルート・時間帯別の行動の比較 (実数)



図表 7 全ルート・時間帯別の行動の比較 (割合)



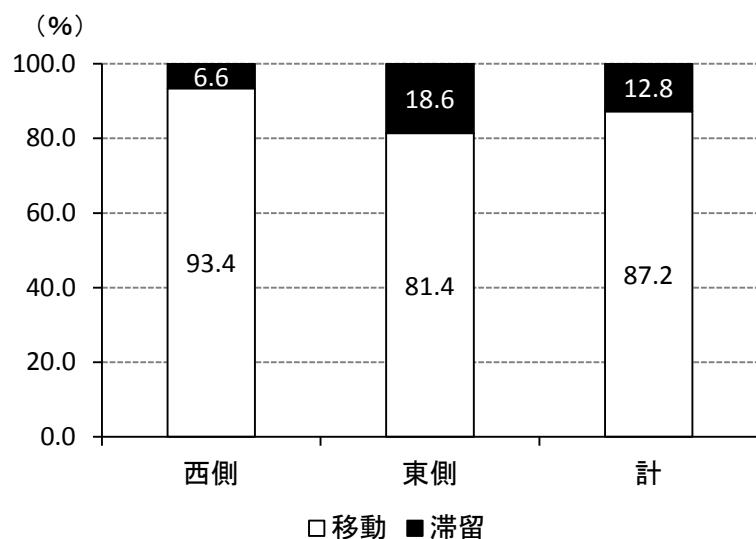
線路の東西で往来者数を比較すると、西側ルートは1,907人、東側ルートは2,030人である。西側ルートの方が距離は長いが、往来者数は東側の方が120人程度多い(図表8)。

また、行動別にみると、往来者全体に占める滞留の割合は西側ルート6.6%に対し、東側ルート18.6%と、線路の東側で滞留が多く起こっている(図表9)。

図表 8 全時間帯・東西ルート別の往来者数

	西側	東側	計
移動(人)	1,782	1,652	3,434
滞留(人)	125	378	503
計(人)	1,907	2,030	3,937

図表 9 全時間帯・ルート別の行動の比較



ルートをさらに細分化すると、当然ではあるが、駅に近く店舗が並ぶルート（西側の①②、東側の⑥⑨）で往来者は多い（図表 10）。

また、行動別にみると（図表 11）、滞留が東側のルート⑨で 27.3%、ルート⑥で 18.8%と比較的高い値を示している。ルート⑨は線路東側沿いの商店街であり、狭い街路にせり出した店舗も多く、商品の購入や商品を眺める行動が多く見られたためである⁵。ルート⑥は喫煙所やベンチがあることに加え、駅の東側出口付近での待ち合わせ、市場周辺での立ち話などが見られた。

西側ルートでは滞留行動が比較的少なくなっているが、そのなかではルート①が 10.3%と比較的高い。店舗や自動販売機での購入行動に加え、駅の西側出口付近での待ち合わせなどが見られた。

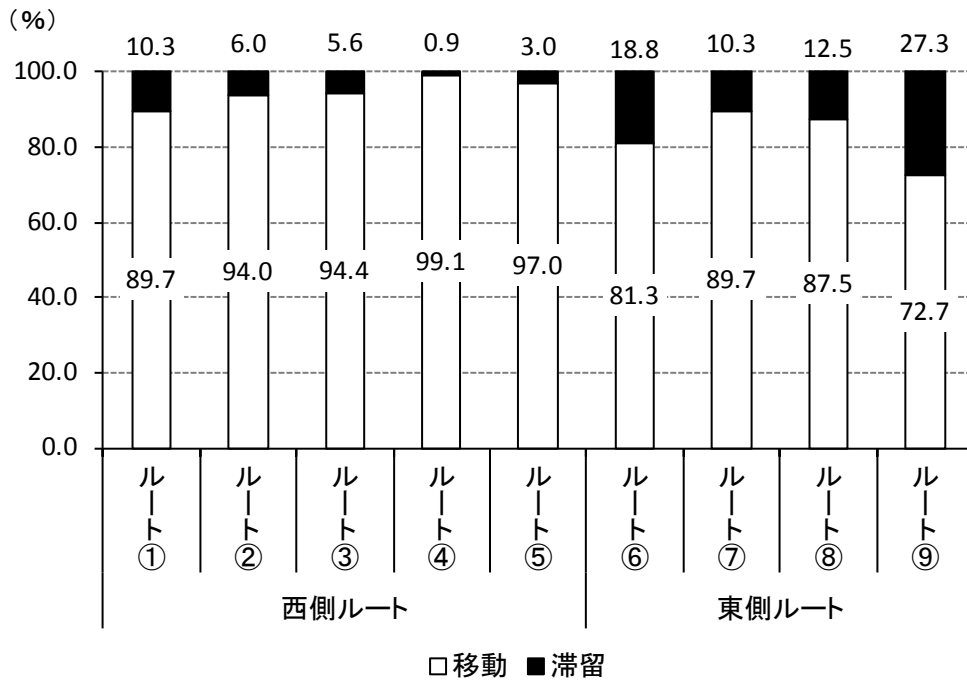
図表 10 全時間帯・細分ルート別の往来者数

	西側ルート					計
	ルート①	ルート②	ルート③	ルート④	ルート⑤	
移動 (人)	603	424	289	113	353	1,782
滞留 (人)	69	27	17	1	11	125
計 (人)	672	451	306	114	364	1,907

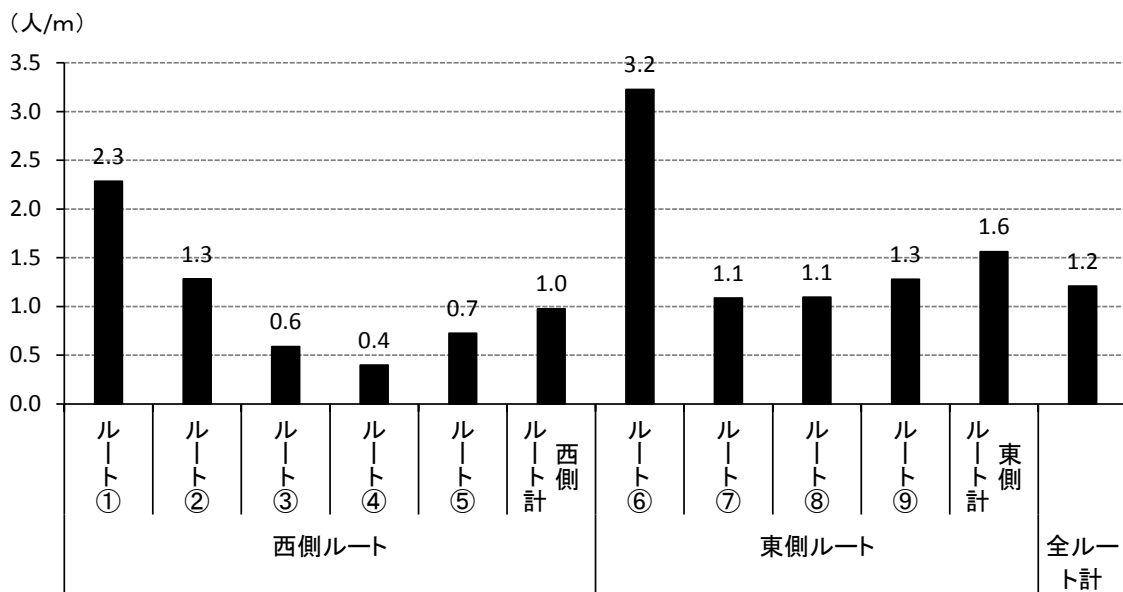
	東側ルート				計
	ルート⑥	ルート⑦	ルート⑧	ルート⑨	
移動 (人)	650	444	140	418	1,652
滞留 (人)	150	51	20	157	378
計 (人)	800	495	160	575	2,030

⁵ また、今回の分析からは外れ値とみなして除外しているが、ルート⑨では複数回、同一集団の移動ないし滞留が見られた。12 ページの注 4 を参照。

図表 11 全時間帯・細分ルート別の行動の比較



図表 12 全時間・細分ルート別の 1mあたり往来者数



各ルートはそれぞれ長さが異なるため、1mあたりの往来者数についても示しておく(図表 12)。東西ルート別では、東側ルートの方が若干、数値が高い。中でも、庄内駅東側出口や豊南市場を含むルート⑥で 3.2 人/m と最も高くなっている。西側ルートでは、庄内駅西側出口を含むルート①が 2.3 人/m と高い。ルート①やルート⑥は踏切も近く、その影響もあると思われる⁶。

⁶ なお今回は、踏切待ちが発生する庄内駅南側の踏切のごく周辺は観察ルートに含めていない。ルート②に駅北側の踏切があるが、踏切待ちをしている人は移動途中であり滞留行動ではないとみなし、「歩く」あるいは「自転車に乗る」として移動に含めている。

2-3-2. 属性と行動の分析

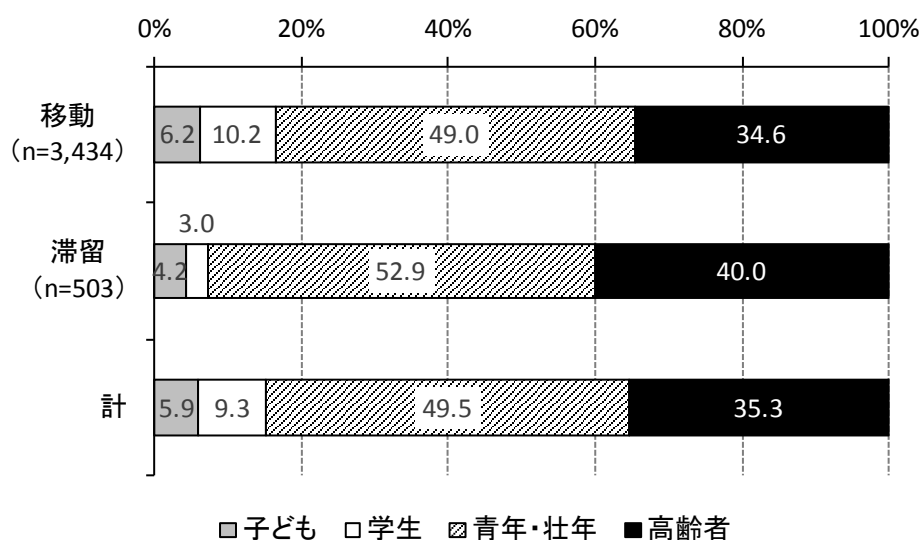
次に、属性と行動の分析を行う。全ルート・全時間帯の往来者を属性別にみると（図表 13、14）、青年・壮年が 1,949 人（49.5%）と最も多く、続いて高齢者が 1,389 人（35.3%）となる。学生は 365 人であり、全往来者の約 1 割（9.3%）にあたる。行動別の属性の割合をみてみると、滞留行動を起こしている者の多くは青年・壮年と高齢者であり、学生の滞留は 15 人（3.0%）と少ない。

属性別に行動を比較してみると（図表 15）、全体で滞留行動は 1 割強だが、なかでも学生の滞留は少なく、4.1%にとどまっている。学生の庄内駅周辺での行動のほとんどは移動であると言ってよい。

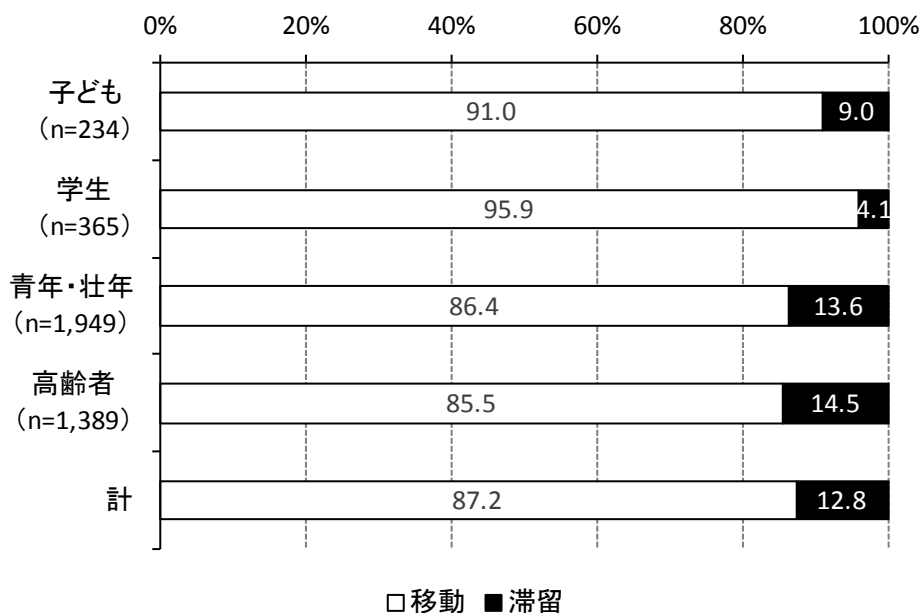
図表 13 全ルート・全時間帯の属性別の往来者数

	子ども	学生	青年・壮年	高齢者	計
移動（人）	213	350	1,683	1,188	3,434
滞留（人）	21	15	266	201	503
計（人）	234	365	1,949	1,389	3,937

図表 14 全ルート・全時間帯の行動別の属性の比較

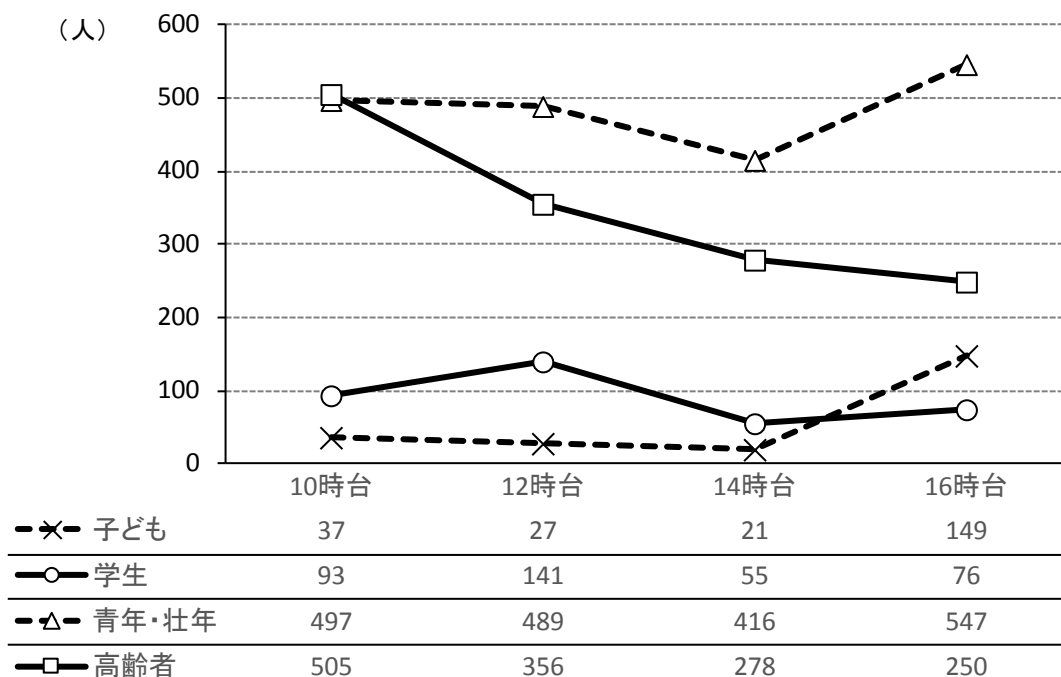


図表 15 全ルート・全時間帯別の属性別の行動の比較



時間帯別にみると（図表 16）、青年・壮年の往来は 14 時台に若干減るものの、時間帯によらずほぼコンスタントにみられる。それに対し、高齢者の往来は 10 時台をピークに徐々に減少していく。放課後の時間帯（16 時台）になると子どもの往来が増えることもわかる。学生の往来者数にはあまり変動はないものの、12 時台で若干増えるようだ。学生の登校時間帯を示しているのかもしれない。下校のピークは 16 時台以降になっている可能性もある。

図表 16 全ルートの時間帯別・属性別の往来者数



東西ルート別の往来者数を属性別にみると（図表 17、18）、学生の往来は西側ルートで 333 人と全往来者数の 2 割弱を占めるのに対し、東側ルートでは 32 人と全往来者数の 1.6%を占めるにすぎない。学生の往来は西側に偏っていることがわかる。西側と東側では高齢者の往来者数にもちがいがみられ、西側では 530 人と全往来者数の 3 割弱だが、東側ルートでは 859 人と 4 割強が高齢者となる。

ルート別の往来者数をさらに行動別にみると（図表 19）、学生を除く属性では東側ルートで滞留行動が増えているのに対し、学生はもともと東側ルートに少ないことに加え、滞留行動を起こしている者がいないという結果となった。

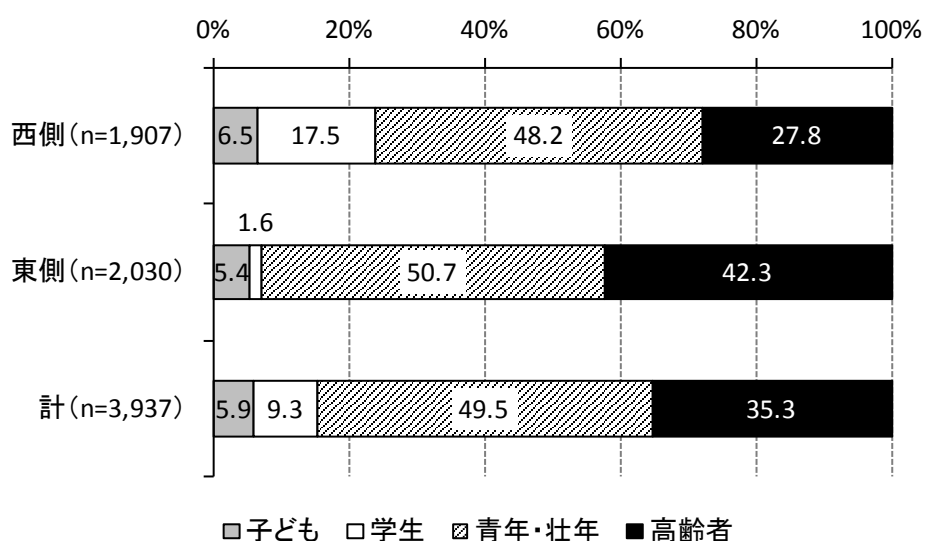
他方で、西側ルートについて言えば、学生と他の属性との間に滞留が起きる頻度はあまりちがいがいいようだ。学生の滞留の少なさは、学生の特性というよりも、学生が多く往来する線路の西側の空間が、滞留が起りにくいものになっているためと推察される。西側で最も滞留が多いルート①においても、滞留の割合は全体で約 1 割に留まる（図表 11）。

図表 17 全時間帯のルート別・属性別・行動別の往来者数

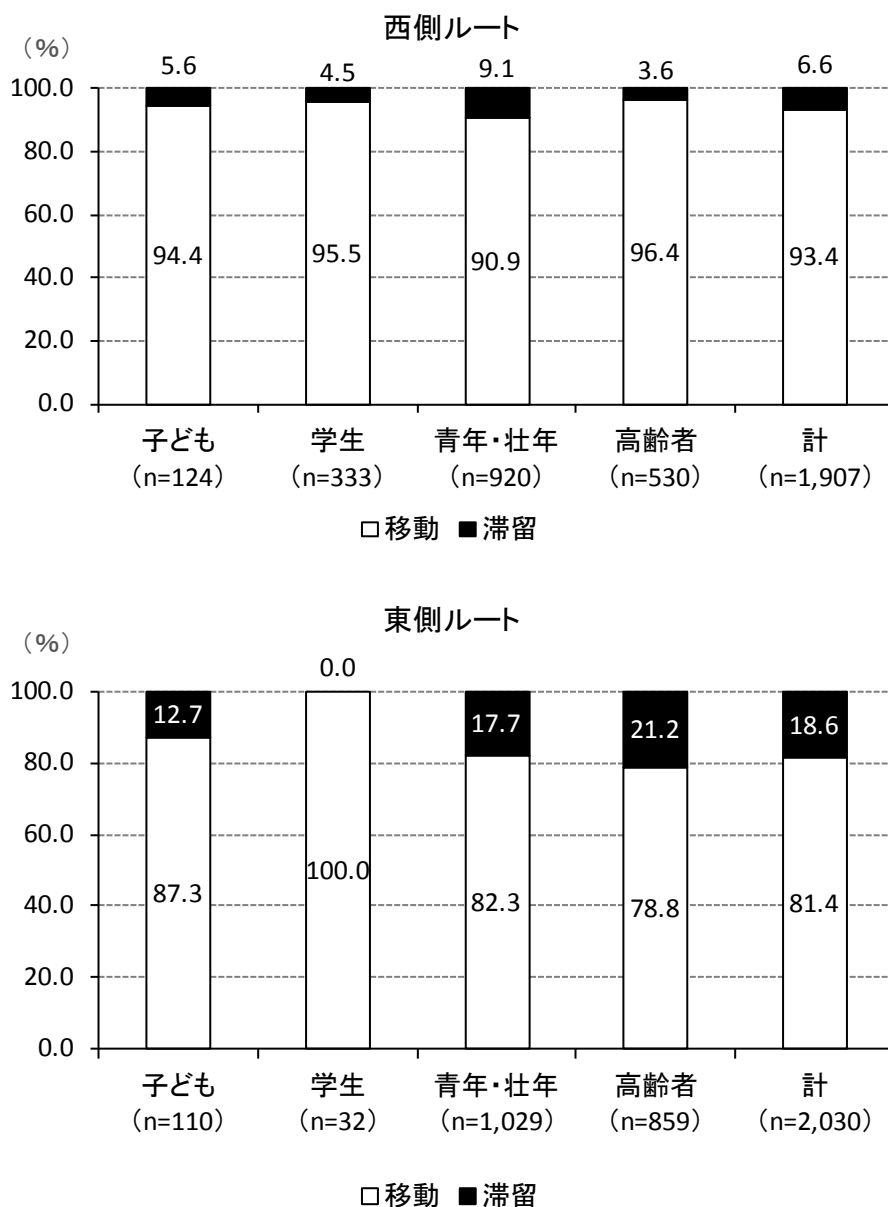
・西側ルート		子ども	学生	青年・壮年	高齢者	計
移動 (人)		117	318	836	511	1,782
滞留 (人)		7	15	84	19	125
計 (人)		124	333	920	530	1,907

・東側ルート		子ども	学生	青年・壮年	高齢者	計
移動 (人)		96	32	847	677	1,652
滞留 (人)		14	0	182	182	378
計 (人)		110	32	1,029	859	2,030

図表 18 全時間帯のルート別の属性の比較



図表 19 全時間帯のルート別・属性別の行動の比較



情報として細かすぎると思われるが、ルート別・属性別に行動をさらに細分化したのも示しておく（図表 20）。全ルートでみると、学生の行動の 9 割は「歩く」であり、滞留行動としては「会話をする」「タバコを吸う」「買い物をする」「立つ」「携帯電話などを操作する」がそれぞれ数人見られる。青年・壮年や高齢者では東側ルートでの「買い物をする」が 1 割近くある他、高齢者では「会話をする」「座る」といった滞留行動が 4～5%程度ではあるが見られている。

図表 20 ルート別・属性別の細分行動

西側	(人)					%				
	子ども	学生	青年・壮年	高齢者	計	子ども	学生	青年・壮年	高齢者	計
歩く	42	301	436	270	1,049	33.9	90.4	47.4	50.9	55.0
自転車	75	17	400	241	733	60.5	5.1	43.5	45.5	38.4
立つ	4	2	19	5	30	3.2	0.6	2.1	0.9	1.6
携帯電話	1	1	13	2	17	0.8	0.3	1.4	0.4	0.9
タバコ	0	4	7	0	11	0.0	1.2	0.8	0.0	0.6
会話	0	6	18	2	26	0.0	1.8	2.0	0.4	1.4
座る	0	0	2	3	5	0.0	0.0	0.2	0.6	0.3
買い物	2	2	25	7	36	1.6	0.6	2.7	1.3	1.9
計	124	333	920	530	1,907	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

東側	(人)					%				
	子ども	学生	青年・壮年	高齢者	計	子ども	学生	青年・壮年	高齢者	計
歩く	46	29	578	481	1,134	41.8	90.6	56.2	56.0	55.9
自転車	50	3	269	196	518	45.5	9.4	26.1	22.8	25.5
立つ	3	0	25	21	49	2.7	0.0	2.4	2.4	2.4
携帯電話	2	0	14	2	18	1.8	0.0	1.4	0.2	0.9
タバコ	1	0	25	7	33	0.9	0.0	2.4	0.8	1.6
会話	0	0	22	39	61	0.0	0.0	2.1	4.5	3.0
座る	0	0	6	34	40	0.0	0.0	0.6	4.0	2.0
買い物	8	0	90	79	177	7.3	0.0	8.7	9.2	8.7
計	110	32	1,029	859	2,030	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

計	(人)					%				
	子ども	学生	青年・壮年	高齢者	計	子ども	学生	青年・壮年	高齢者	計
歩く	88	330	1,014	751	2,183	37.6	90.4	52.0	54.1	55.4
自転車	125	20	669	437	1,251	53.4	5.5	34.3	31.5	31.8
立つ	7	2	44	26	79	3.0	0.5	2.3	1.9	2.0
携帯電話	3	1	27	4	35	1.3	0.3	1.4	0.3	0.9
タバコ	1	4	32	7	44	0.4	1.1	1.6	0.5	1.1
会話	0	6	40	41	87	0.0	1.6	2.1	3.0	2.2
座る	0	0	8	37	45	0.0	0.0	0.4	2.7	1.1
買い物	10	2	115	86	213	4.3	0.5	5.9	6.2	5.4
計	234	365	1,949	1,389	3,937	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

2-4. 考察

以上、観察調査をもとに、庄内駅周辺での往来者とその行動について、学生に注目した分析を行ってきた。昨年度の質問紙調査では、学生は地域での買い物行動など、地域との接点が少ないのではないかと推察されたが、今回の調査結果はその推察を裏打ちするものと言える。また、今回の調査では、線路の東西で学生の往来に偏りがあることも数字として示された。

つまり、学生の多くにとって、庄内駅周辺はもっぱら移動のための空間であることがうかがえる。とどまって何かをするという空間になっているとは言い難い。加えて、他の属性では滞留が比較的にみられる線路の東側に、学生が渡ることは少ないようだ。

ただし、線路の西側は学生だけではなく、他の属性の滞留もさほど多くない。学生の滞留の少なさは、学生の特性によるものというよりも、学生の往来が多い線路の西側の空間の特性によるものと考えの方が適切であると考えられる。商店街のなかに入るとまた異なる状況が見えてくるだろうが、今回の観察対象となった線路の西側の空間は、学生だけではなくあらゆる人にとって滞留が引き起こされにくいものになっていると推察される。

恒常的な交流人口である大阪音大の学生にとって、日常的な地域との接点は登校・帰宅のタイミングである。そのタイミングで地域がもっぱら移動の空間として利用されるのみで、活動への展開がなされにくいとするならば、それは地域の活性化にとって損失だろう。

今回の観察調査の結果から考えられる活性化に向けた方向性は2つである。第1に、線路の西側の空間を滞留が引き起こされやすいものとする。第2に、線路の東側に学生を移動させる仕掛けをつくること。

では、滞留を引き起こされやすい空間のあり方とはどのようなものか。第4章で詳細を分析するインタビュー調査で、示唆的な話が聞かれた。庄内駅周辺をよく行き来する人によると、学生が買い物をしている姿はもっぱら特定の店で見かけるそうだ。インタビューであがった店に該当するのは、駅西側（ルート①）の路面にある食品販売の店舗である。当該店舗はスペースが狭いため歩道との境界に壁がなく、ショーケースやレジが直接歩道と面しており、客の購買行為が街路にはみ出して行われる。学生の滞留は、このような店舗の空間特性により引き起こされやすくなっていると言えるのではないかと。

さらに、この話からは、滞留の効果をうかがい知ることできる。インタビュー対象者が言うように、確かに日常的にこの店舗では学生の買い物が見られるのだろう。しかし、今回の観察調査では、タイミングをずらせば違う結果になったかもしれないものの、この店舗での学生の購買が必ずしも多かったわけではない（西側ルート全体でも買い物が観察できた学生は2人。図表20参照）。いずれにせよ、おそらくコンビニエンスストアの方が学生の購買頻度は多いだろう。上述のような当該店舗の特性をふまえるならば、実際に買い物をする学生の人数以上に、外からの滞留の視認しやすさが、学生の存在と行動を「見える」ものとしている可能性が考えられる。

詳しくは第4章で述べるが、インタビュー調査をふまえると、大阪音大の学生のなかには庄内駅周辺での消費活動が活発な者も存在する。今回の観察調査では、観察が特定のルート、時間帯に限られていた。別のルート、より遅い時間帯では、別の状況が見える可能性もある。外からは見えにくい屋内での行動もあるだろう。今回の観察調査の結果は、特定の条件に基づいたひとつの傾向である。

ただ、「少数の人でもその場所で長い時間を過ごせば、多くの人が短い時間しか過ごさない場合と比べて、遜色のない活気を空間に与えることができる」（ゲール2014、p.240）。そうだとすれば、空間的なアプローチを通じて、たとえ一部であったとしてもその一部の学生の滞留がより可視化されることは、庄内駅周辺を活性化するひとつの方向性として重要ではないだろうか。まちなかで起こる活動は、「自己増殖するプロセス」であるとも言われる。「何も起こらないから何も起こらず、そして何も起こらない」（同前、p.73）。線路の東側への学生の移動を含めて、滞留が可視的な形態で引き起こされる仕掛けが庄内駅周辺の空間のなかに埋め込まれることが、幅広い学生や地域の人びとの滞留の増加へと波及し、地域の活性化につながっていくのではないだろうか。

最後に、繰り返しになるが、今回の調査は目視による観察という方法をとったため、カウント漏れや属性の誤認などが発生していると思われる。今回の調査で示される数値は必ずしも正確なものではなく、おおまかな傾向として理解していただきたい。ただ、新たな仮説を導き、活性化に向けた手立てを考えるための、基礎的な知見を提示することはできたのではないかと考える。

第3章 豊中市の若い世代の地域イメージと 居住意向の関連

3-1. 問題設定	24
3-2. 方法	24
3-3. 結果	25
3-4. 考察	44

第3章 豊中市の若い世代の地域イメージと居留意向の関連

3-1. 問題設定

地域のイメージは、人びとの居留意向や活動を左右している可能性がある。田中（1997）によると、ポジティブな地域のイメージは、一方で、「住民が当該地域に誇りをもって住むことができるという動機づけを与える」。他方で、地域に対してポジティブなイメージを抱いていることは、「強固な地域アイデンティティの確立に向けて住民が努力していくことに対する動機を高める」（p.46）。第1章で示した地域活性化の枠組みを用いると、ポジティブな地域イメージは、「人口」の定住化に寄与すると同時に、地域での「活動」を活発にする可能性があるという意味で、地域活性化にとって重要な意味をもつと言える。

では、南部地域について、居住者はどのようなイメージを抱いているのだろうか。また、地域のイメージと居留意向はどのように関連しているのだろうか。過去、当研究所においても、市民が豊中市に対して抱くイメージについて質問紙を用いた調査と分析が行われたことがあるが、地域のイメージは把握されてはいない（とよなか都市創造研究所 2013）⁷。

そこで本章では、昨年度新たに行われた質問紙調査の結果をもとに、南部の若い世代の地域に対するイメージを取り出すとともに、居留意向との関連を分析することにした。

3-2. 方法

調査方法としては、質問紙調査の自由記述欄の計量テキスト分析を採用する。計量テキスト分析とは、「計量的分析手法を用いてテキスト型データを整理または分析し、内容分析（content analysis）を行う方法」である（樋口 2014、p.15）。調査者のバイアスがかかる可能性がある自由記述欄の分析において（鈴木 2011、pp.200-202）、コンピュータを用いた量的分析を用いる計量テキスト分析は、結果の信頼性・客観性を比較的担保することができる。また、膨大なデータの全体像を要約し、そのなかでの素データの位置づけを探索する手法としても有意義である。

もっとも、量的方法が介在するとしても、テキスト型データのコーディング作業や結果の解釈、素になるデータの引用などの記述に関しては質的な作業が不可欠である。計量テキスト分析は、計量的な分析を行うことで元のデータの特徴を把握し、それをもとに質的な分析を試みる点、量的方法と質的方法を循環的に用いる点に特徴がある（樋口 2014、pp.5-9）。

⁷ 同研究では、豊中市に対して抱くイメージの、地域ごとのちがいについては分析されている。南部地域の回答者は、今後大切にしていけるべき市のイメージとして「楽しさ」「にぎやかさ」「温かさ」「触れ合い」「チャレンジ」を重視する傾向にあるものの、「美しさ」「おしゃれ」「安心・安全」「のどかな」「健やかな」といったキーワードは、あまり選択されない傾向にある。また、市の現状については、「音楽あふれるまち」「ものづくりが盛んなまち」「人とのふれあいを感じさせるまち」という認識が南部地域の人びとには抱かれており、南部の特性である「大阪音楽大学があること、住工共存市街地があること、下町特有の人情があることなどがアンケートの結果に反映された」可能性がある（とよなか都市創造研究所 2013、p.26）。ただし、これはあくまでも、南部地域のイメージを南部地域の人がどのように捉えているのかを知るためではなく、豊中市のイメージを南部地域の人がどのように捉えているかを把握する目的で設計された調査である。

分析にあたっては、樋口（2014）が作成・公表しているフリーウェアソフトである KH Coder を用いる⁸。KH Coder は品詞の分解・抽出や多変量解析まで幅広い分析を可能としており、多岐にわたる分野の研究論文で利用されている。

データは、平成 28 年度（2016 年度）に実施した「若い世代の意識と行動に関するアンケート」の結果を用いる。同調査は、豊中市の 3 地域（北東部・中北部・南部）の若い世代（18～39 歳）6,000 人を対象に実施された⁹。

質問文は、塚田ほか（2015）を参考に、「現在お住まいの地域のイメージを、短い言葉や文で、自由に書いてください」とした。なお、「現在お住まいの地域」の範囲については、当該の質問の前に現在の居住地を「北東部地域」「中北部地域」「南部地域」のなかから 1 つ選ぶ質問を設け（図表 1 と同様の地図を併記）、その回答に基づくように指示文で説明している。

3-3. 結果

分析は次のような手順で進めた。まず、データクリーニングなど事前作業を行った（3-3-1）。次に、全体（3 地域合計）ならびに各地域でよく使われている語（頻出語）の分析などを行い、地域イメージの大まかな傾向を確認した（3-3-2）。そして、より詳細な地域イメージを捉えるために共起ネット分析を行い、語と語の結びつき、語が使われている文脈の解釈を行った（3-3-3）。そのうえで、南部地域に焦点を絞り、コーディングを行いながら、居住意向と地域イメージとの関連について分析を行った（3-3-4）¹⁰。以下、結果を示していく。

3-3-1. 事前作業とデータの概要

事前作業について説明する。まず、KH coder を用いて、個々の文章から語を切り出した上で品詞等を特定する作業（形態素解析）の後、下記①～⑤のようにデータクリーニングを行った¹¹。

- ①明らかな誤字の修正 例)「往宅」→「住宅」
- ②主要な複数表記の統一 例)「まち」「町」「街」→「まち」
- ③主要な同義語の統一 例)「高齢者」「老人」→「高齢者」
- ④複合語の強制抽出 例)「高齢」と「者」で抽出→「高齢者」で抽出
- ⑤無回答の除外 例)「特になし」「わからない」→無回答として分析から除外

⁸ KH Coder (<http://khc.sourceforge.net/>)

⁹ より詳しい調査概要は、とよなか都市創造研究所（2017、pp.81-83）を参照。

¹⁰ 分析全体の手順としては、樋口（2014）、高（2015）を参考にした。

¹¹ データクリーニングの方法は、森田ほか（2012）、塚田ほか（2015）、細井ほか（2011）、山口ほか（2014）を参考にした。作業①～③については KH Coder の「抽出語リスト」の機能を、④については「複合語の検出」の機能をそれぞれ利用し、統一・修正すべき語の特定を行っている。

図表 21 同義語と複合語

同義語	子ども（子）、高齢者（老人、年寄り、お年寄り、高齢の方、年配の方）、小学校・中学校（小中学校）、単身者（1人暮らし、単身世帯）、人（人々）、若い世代（若い、若い人、若い方、若者）、店（店舗、商店）
複合語	高齢者、住宅街、若い世代

図表 22 自由回答の記入率

	自由回答 記述票数	有効回収数	記述率
北東部	476	595	80.0%
中北部	731	979	74.7%
南部	373	479	77.9%
全体	1,580	2,053	77.0%

図表 23 使用語数

	使用語数	自由回答 記述票数	1サンプル あたり語数
北東部	2,589	476	5.4
中北部	3,924	731	5.4
南部	2,185	373	5.9
全体	8,698	1,580	5.5

上記③同義語の統一と④複合語の強制抽出については、具体的には図表 21 の語が対象となった。複合語の強制抽出については、先行研究（越中・目久田 2017）を参考に、出現数が 20 以上のものを対象とした。

次に、データの概要を確認する（図表 22）。自由回答が記載された回収票は全体で 1,580 票、記入率は有効回収数の 77.0%となった。地域別の記入率は、北東部が約 8 割、中北部が 7 割半ば、南部が 8 割弱となった。若干の地域差はあるものの、いずれも記入率は高いと判断できるだろう。

総サンプル数 1,580 の自由記述データ全文を対象に形態素解析を行い、使用する語¹²を抽出した。結果（図表 23）、抽出語の合計は 8,698 語、1 サンプルあたり 5.5 語であり、回答者はおおむね「短い言葉や文で」という指示文をふまえて記述していると言える。地域別の 1 サンプル当たりの語数は、南部でやや多くなっているものの、分析結果の解釈で特別な考慮が必要となるほどの顕著な差があるとは判断できない。

3-3-2. 頻出語の分析

まず、頻出語の分析を行い、地域イメージのおおまかな傾向を確認する。全体（3 地域合計）について頻出語（上位 50 語）をみたものが次の図表 24 である¹³。

¹² KH Coder による形態素解析では、助詞・助動詞をはじめとしたどのような文の中にも出現する品詞や、句読点やカギ括弧といった記号などは、分析しにくい語として「その他」に分類される。今回の分析では、「その他」を除いた語を使用することにする。

¹³ KH Coder で「動詞 B」（ひらがなのみの動詞。「する」「ある」など）、「否定助動詞」（「ない」

出現回数の多い名詞（「サ変名詞」を含む。図表ではグレーの塗りつぶしで表示。以下同様）をみると、「まち」（4位・193回）、「地域」（6位・166回）、「緑」（7位・151回）、「子ども」（11位・99回）、「高齢者」（12位・90回）、「住宅街」（12位・90回）、「治安」（14位・88回）、「子育て」（15位・85回）、「人」（16位・83回）、「イメージ」（19位・61回）、「環境」（19位・61回）、「駅」（22位・57回）、「下町」（23位・55回）、「交通」（24位・54回）などとなっている。

次に、地域別に頻出語をみしてみる。図表 25 は地域別の上位 20 語¹⁴である。名詞をみると、まず、「緑」が北東部（2位・103回）と中北部（13位・39回）ではみられるものの、南部にはみられない（「緑」に類似する語として、北東部では「公園」も 20 位（17回）となっている）。また、中北部では「住宅街」が 8 位（72回）と上位に見られるほか、北東部では「マンション」の語が見られる。住宅を中心としたまち、ベッドタウンとしてのイメージが反映されていると言えるかもしれないが、ここでも同様の語は南部には見られない。

図表 24 全体の頻出語

順位	抽出語	品詞	出現回数	順位	抽出語	品詞	出現回数
1	多い	形容詞	368	26	閑静	形容動詞	43
2	良い	形容詞	264	26	道	名詞C	43
3	住む	動詞	231	28	安全	形容動詞	42
4	まち	名詞B	193	28	狭い	形容詞	42
5	便利	形容動詞	179	28	豊中	地名	42
6	地域	名詞	166	31	豊か	形容動詞	41
7	緑	名詞C	151	32	近い	形容詞	40
8	思う	動詞	128	32	買い物	サ変名詞	40
9	静か	形容動詞	125	34	店	名詞C	39
10	ない	形容詞B	112	35	感じる	動詞	38
11	子ども	名詞	99	35	場所	名詞	38
12	高齢者	名詞	90	35	生活	サ変名詞	38
12	住宅街	名詞	90	35	都会	名詞	38
14	治安	名詞	88	39	とても	副詞B	37
15	子育て	サ変名詞	85	39	安心	サ変名詞	37
16	人	名詞C	83	39	高い	形容詞	37
17	少ない	形容詞	82	42	公園	名詞	36
18	悪い	形容詞	78	42	少し	副詞	36
19	イメージ	サ変名詞	61	44	古い	形容詞	35
19	環境	名詞	61	44	田舎	名詞	35
21	落ち着く	動詞	58	46	近く	副詞可能	32
22	駅	名詞C	57	46	若い世代	名詞	32
23	下町	名詞	55	48	穏やか	形容動詞	29
24	交通	名詞	54	48	車	名詞C	29
25	不便	形容動詞	47	48	綺麗	形容動詞	29

など）、「形容詞（非自立）」（「がたい」「つらい」「にくい」など）に分類される語については、一般的な語を多く含む品詞であると判断し、頻出語のリストからは除いている。、「感動詞」、「未知語」については、分析に適さないと判断し、やはり頻出語のリストからは除いている。

¹⁴ 出現数が同じ語が 20 位に 2 つあるため北東部と中北部は上位 21 語。

図表 25 各地域の頻出語

北東部				中北部				南部			
順位	抽出語	品詞	出現数	順位	抽出語	品詞	出現数	順位	抽出語	品詞	出現数
1	多い	形容詞	152	1	良い	形容詞	132	1	多い	形容詞	87
2	緑	名詞C	103	2	多い	形容詞	129	2	下町	名詞	49
3	良い	形容詞	85	3	住む	動詞	118	3	悪い	形容詞	47
4	まち	名詞B	75	4	便利	形容動詞	82	3	高齢者	名詞	47
5	住む	動詞	72	5	まち	名詞B	78	3	良い	形容詞	47
6	便利	形容動詞	67	6	静か	形容動詞	76	6	住む	動詞	41
7	地域	名詞	52	7	地域	名詞	75	7	まち	名詞B	40
8	静か	形容動詞	39	8	住宅街	名詞	72	8	地域	名詞	39
9	子育て	サ変名詞	36	9	思う	動詞	62	9	思う	動詞	35
10	思う	動詞	31	10	ない	形容詞B	56	10	ない	形容詞B	33
11	子ども	名詞	30	11	子ども	名詞	43	11	治安	名詞	32
11	豊か	形容動詞	30	12	子育て	サ変名詞	42	11	人	名詞C	32
13	環境	名詞	26	13	緑	名詞C	39	13	便利	形容動詞	30
14	人	名詞C	24	14	治安	名詞	37	14	少ない	形容詞	28
15	ない	形容詞B	23	15	交通	名詞	35	15	子ども	名詞	26
15	落ち着く	動詞	23	15	少ない	形容詞	35	16	イメージ	サ変名詞	15
17	マンション	名詞	19	17	イメージ	サ変名詞	31	16	汚い	形容詞	15
17	治安	名詞	19	17	閑静	形容動詞	31	16	柄	名詞C	15
17	少ない	形容詞	19	19	狭い	形容詞	30	19	駅	名詞C	14
20	公園	名詞	17	20	不便	形容動詞	29	19	近い	形容詞	14
20	高齢者	名詞	17	20	落ち着く	動詞	29				

対して、南部では「下町」が2位（49回）となっている点が他地域との比較で際立つ。また、「高齢者」（3位・47回）も上位に入っており、高齢化が進む地域というイメージも南部では特徴的に抱かれていることがうかがわれる。

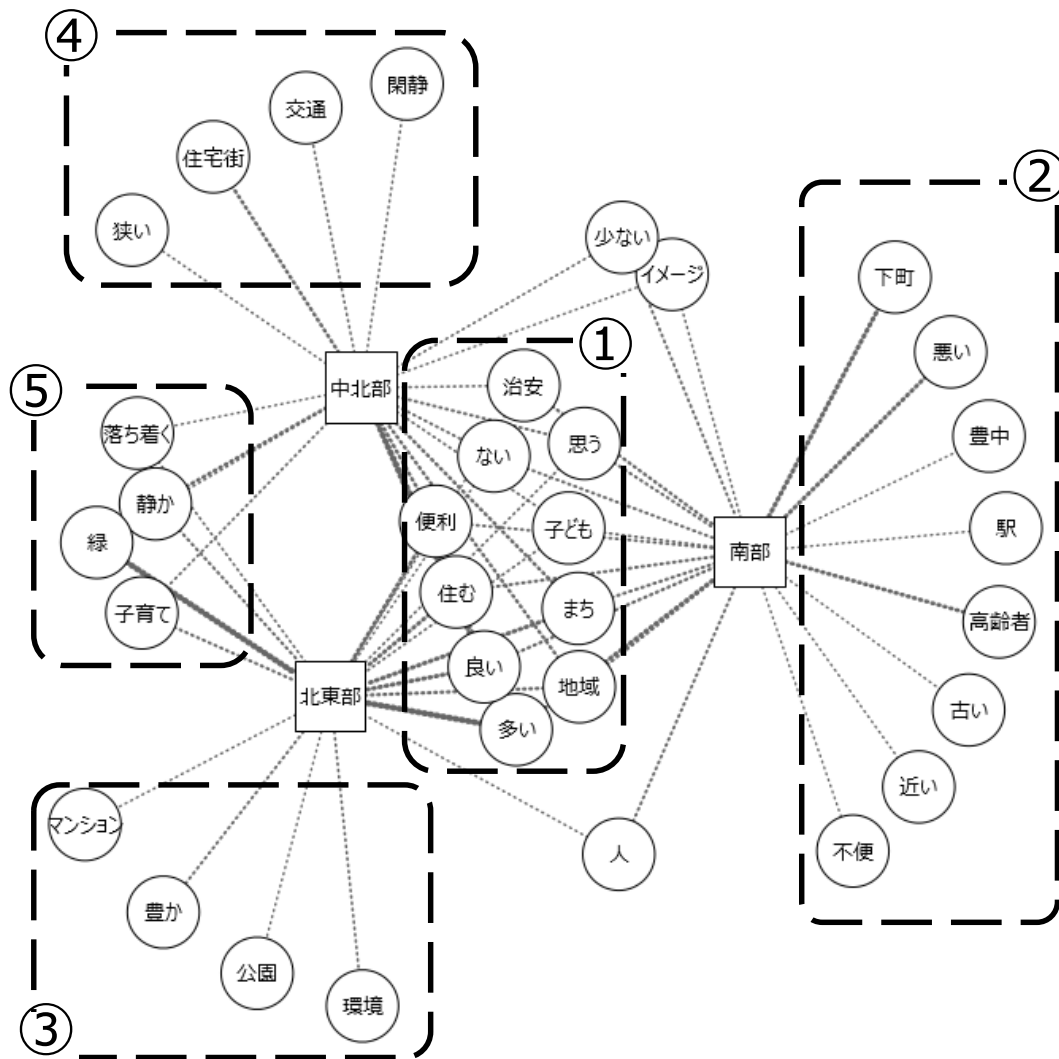
さらに、名詞ではないが、他地域では見られない「悪い」が南部では3位（47回）となっており、ネガティブな地域イメージが比較的多いことを想像させる。

地域別の特徴をよりわかりやすく表現してみよう。地域と語との結びつきを、図表 26 のように共起ネットワーク図を描いて検討してみる。共起ネットワーク図とは、ある語がどのような語や外部変数と共起しやすいか（結びつきやすいか）を示した図である。丸で結ばれた各語と、四角で囲まれている各地域の間には、強い結びつきがある。より強い共起関係ほど、太い線となっている。語や関係の数が増えすぎると視認性が低下し解釈も難しくなるため、今回は20回以上出現している語を対象を絞り込み、描画される関係（線）の数も60となるように設定した¹⁵。

中央部分①の点線で囲った語は、北東部・中北部・南部からそれぞれ線が伸びていることから、3地域に共通してみられる語である。「ない」「多い」「地域」「まち」など、地域のイメージを記述する際に用いられる一般的な語が多い。ただ、そのなかで「治安」がやや一般性を欠くようにも思われる。若い世代にとっての地域のイメージを想起する際に（少なくとも豊中市においては）、治安は言及されやすいテーマであることがうかがえる。ただ、昨年度の質問紙調査でも治安に対する評価には地域差が見られたことをふまえると、「治安」の語は地域によって異なる文脈で使用されている可能性がある。

¹⁵ 共起関係の強さの判断は、Jaccard 係数を用いている。同係数は0～1の間の値をとり、値が大きいほど共起しやすいことを意味している。

図表 26 各地域の特徴語



次に、右側②にあるのは、南部のみから線が伸びていることから、特に南部地域との結びつきが強い語であると言える。「高齢者」「古い」「下町」「駅」「悪い」「豊中」「近い」「不便」といった語が並ぶ。同様に、左下③にある「環境」「豊か」「公園」「マンション」は北東部の特徴語、左上④にある「住宅街」「閑静」「狭い」「交通」は中北部の特徴語である。

また、左側⑤にあるのは、北東部と中北部に共通する特徴語である。「緑」「子育て」「静か」「落ち着く」という語の並びからは、特に子育て中の人たちにとって居住環境が良い地域といったイメージが、両地域に重なって見られるのではないかと推察される。

他方、「少ない」「イメージ」は南部と中北部、「人」は南部と北東部に共通する特徴語だが、いずれも一般的な語であると判断できる。このことから、南部と他の2地域間のイメージの重なりは小さいのではないかと考えられる。

以上の分析からは、南部とそれ以外の2地域の間で、地域イメージのギャップがあることがうかがえる。南部の地域イメージの記述では「下町」や「高齢者」といった語が使われることが多

く、居住環境が良い住宅都市としての特徴を表す語が多く使われる北東部や中北部とは、地域イメージがあまり重なっていないようだ。また、他地域に比したときの「悪い」という語の出現回数の多さからは、ネガティブなイメージが少なくない可能性がある。

3-3-3. 共起関係の分析

次に、語と語の結びつき（共起関係）の傾向を地域別に分析する。語の出現回数の多さだけでは、その語がどのような文脈で使われているのか判断することができない。たとえば、「子ども」という語が「多い」と「少ない」のどちらと一緒に使われやすい（結びつきやすい）のかによって、地域のイメージは大きく異なる。共起関係の分析を通じ、語が用いられている文脈を捉え、それぞれの地域のイメージを析出することにしたい。

具体的には、共起ネットワーク図を地域別に作成したうえで、素データと照合しながら主要な地域イメージの解釈を行う。可読性を考慮して、共起ネットワーク図の作成にあたっては、各地域で利用する語がおおよそ 50 となるように語の最小出現数を調整（北東部=8、中北部=15、南部=7）、Jaccard 係数が高いものから 30 本のパスを使用、という条件を設けた。また、出現数が多いほど大きい円に、共起関係が強いほど太い線になるように作図した。加えて今回は、比較的強くお互いに結びついている部分を自動的に検出してグループ分けを行うサブグラフ検出を行っている。

分析にあたっては、共起ネットワーク図の解釈を補足するために、素データ（自由記述の回答）の引用を行う（ゴシック体で表記）。素データの引用に際しては、文の省略や固有名詞の削除など、元の文意を改変しない程度にテキストを一部修正していることがある。

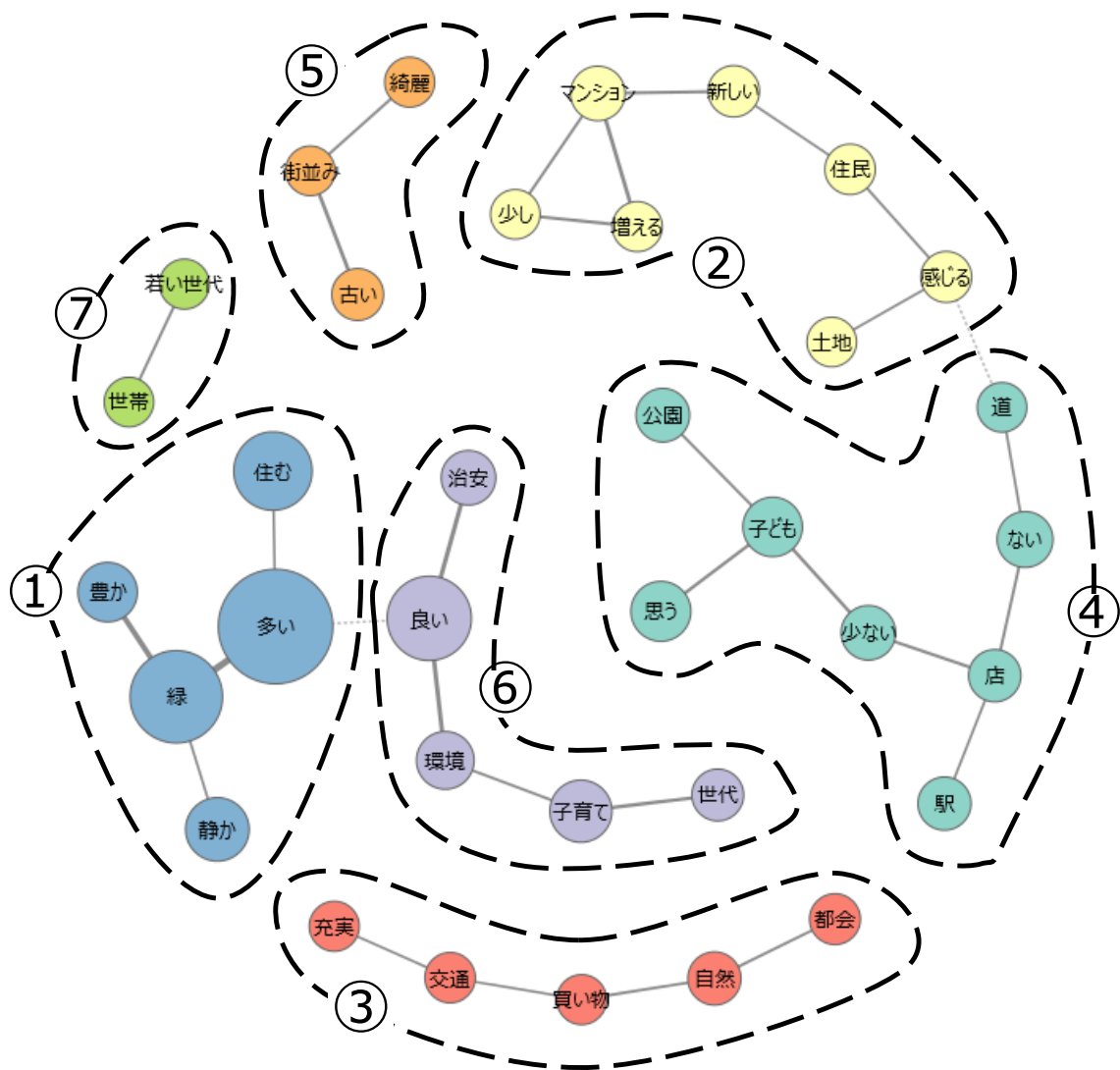
<北東部地域>

まず、図表 27 は北東部の地域イメージの共起ネットワーク図である。

グループ①をみると、頻出語で上位だった「緑」は、「多い」や「豊か」、「静か」と強く結びついている。素データをみると、「緑が多く、住みやすい」「緑が多く、のんびりとした住み心地の良い所」「便利で緑も多いまち」「緑や公園が多く子育てにはとても良い地域」など、おおむねポジティブな評価となっている。また、「緑があって、静かで、暮らしやすい」「緑豊かで静かで落ち着いている」など、静けさに関するイメージとの重なりも見られる。

グループ②をみると、「マンションが増える」や「新しい一住民」といった語の結びつきが見られ、まちの更新や人の流入が進んでいるというイメージがうかがわれる。たとえば、「新しいマンションがたくさんある」「新しいマンションが多く、子育て世代が多い」「新しい人の多いまち」「古くからの住民と新しく移住してきた住民のバランスが良いまち」「昔からの住民（家）と新しい住民（マンション）が混在する地域」などの回答がみられる。

図表 27 北東部地域の共起ネットワーク図



ただ、マンションの増加については、「マンションが増えて緑が消えた」「昔に比べて緑が減った気がします。新しいマンションがどんどんできて、景色が少し変わった」「緑豊かで空が広くて美しかったのに、最寄りの駅の高層化マンションの乱立が目立ってきた（残念）」など、緑の減少が進行していることに対するネガティブな反応も一部で見られる。

グループ③は、「交通－充実」や「買い物－交通」といった語の結びつきがみられることから、生活利便性に関するイメージとして解釈できる。具体的には、「交通機関が充実している」「交通の便がとても良い」「交通も便利だし、駅の周りも栄えていて買い物も不自由はない」といった記述が確認できる。また、「自然」や「都会」という語との関連もみられることから、都会的な利便性と自然環境の調和のとれたまちという印象が抱かれていると言えるかもしれない。素データからは、「自然が多く、買い物に困らない」「緑も多く買い物も便利で住みやすい地域」「自然環境が良く、交通機関の利用や買い物にも便利」「交通の便が良いが、コンクリートやビルばかりではなく、公園や街路樹も多い」「自然を感じる都会」「都会の中の自然が残る地域」「都会の便利さと自然の豊かさがちょうど良いバランスのまち」などの記述もみられる。

ただ、買い物環境については、グループ④の一部に「店—少ない」「店—ない」という語の結びつきがあることからわかるように、「魅力的なお店が少ない」「カフェやちょっとしたお店がない」「飲食店が少なすぎる」「買い物、飲食店に物足りなさを感じる」「駅の周りがもっとお店が増えてほしい」「緑が多いのは良いことなのですが、もう少し飲食店等を増やしてほしい」など、ネガティブなイメージも一部に見られる。素データでは「魅力的なお店」や「飲食店」といった語がみられるため、ここでのネガティブなイメージは、日常的な買い物の利便性に対してというよりも、個人のライフスタイルに左右されるような、付加的な消費の場の少なさに対する不満であると言えるかもしれない。地域内の居住エリアのちがいも考えられる。

グループ⑤は「街並み」を中心とした結びつきである。一方には、「とてもきれいな街並み」「街並みが綺麗に整えられている」「緑豊かで街並みが美しい」など、「綺麗」という語と結びついたイメージがみられる。他方で、「古い街並みが残る地域」「千里中央の街並みが古い」など、「古い」という語と結びついた評価もあるようだ。イメージのズレは、ニュータウン地区と上新田地区の違い、開発時期や更新状況の違いなど、地域内でのエリアのちがいを反映しているのかもしれない。

そして、グループ⑥にあるように、「治安」は主として「良い」という語と結びついている。「治安の良い、住むには良い地域」「自然が多く、治安が良い」「治安が良いので安心して外出などできる」「駅近くの建物も綺麗に保たれ、スーパーも多く、治安が良いところが好き」など。ただ少数ではあるが、「治安が悪くなってきた」などの声もみられる。

また、グループ⑥には、「子育て—環境—良い」「子育て—世代」という語の結びつきもみられる。グループ⑦には「若い世代—世帯」という語の結びつきもみられるが、若い世代を中心とした子育て世帯の暮らしやすさ、子育て環境の良さに関するイメージと見てよいだろう。治安の良さと子育て環境の良さは同じグループに分類されており、相互に関連したイメージであることも推察される。「子育てに良い環境」「安全で緑が多いので子育てしやすい」「子育て世代が住みやすい地域」「安心して子育てできる」「子育て世帯が多いので、親も子どもも地域にとけこみやすい」など。他方で、「子育て世代が多いからか、保育園や幼稚園に入るのがとても大変」「環境も良く子育てには良いと思うが保育園の倍率が高いのが難点」といった待機児童問題への言及など、子育て環境についての課題の指摘も一部にみられる。

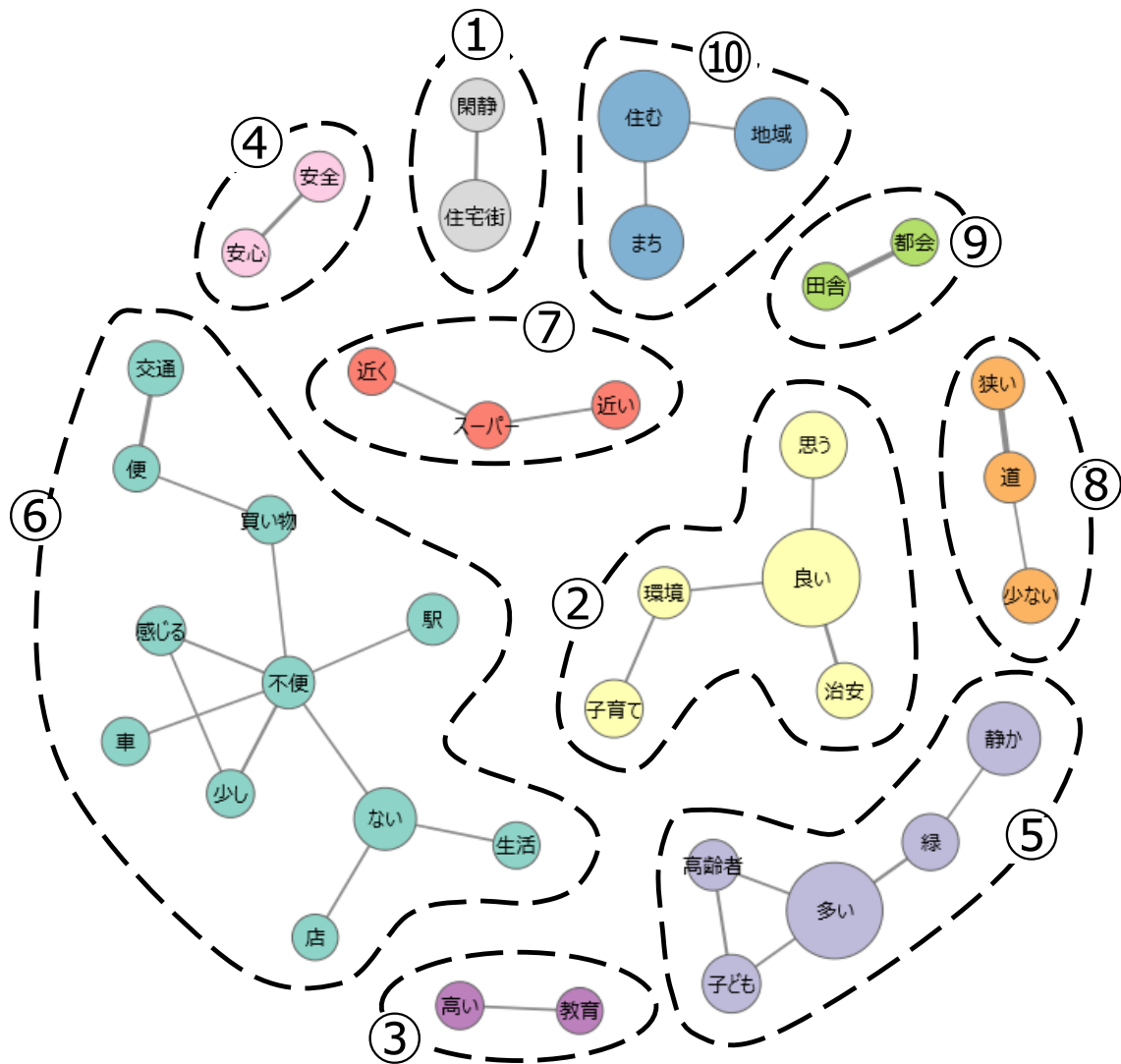
まとめると、北東部に住む若い世代の地域イメージには、緑が豊富で静かなまち、人の流入や建物の更新が進むまち、生活が便利／不便なまち、街並みが新しい／古いまち、治安の良いまち、子育て・教育環境の良いまち、といったものがあると言える。

<中北部地域>

次に、図表 28 は中北部の共起ネットワーク図である。

まず、中北部の頻出語として目立っていた「住宅街」は、グループ①に見られるように、主に「閑静」という語と結びついている。中北部では「住宅街」が 72 回出現しているが、そのうち 3

図表 28 中北部地域の共起ネットワーク図



割弱の 20 回は「閑静な住宅街」という定形句として使われている。「住宅街」の使用ケースとしては他に、「静かな住宅街」「安全な住宅街」「穏やかな住宅街」「落ち着いた雰囲気住宅街」などもみられ、類似する表現も含めて、「閑静な住宅街」は中北部のひとつのイメージを形成していることがうかがえる。

グループ②は、「環境 - 良い」や「治安 - 良い」など、「良い」という語を中心とした共起がみられるグループである。「良い環境」「環境が良い」「静かで環境が良い」「住みやすくなじみやすい環境」など、どのような環境が評価されているのか具体性を欠く記述も少なくないが、居住環境についての総合的なポジティブイメージとして捉えることができる。上述の「閑静な住宅街」のイメージと、緩やかに重なっているのかもしれない。

具体的な言及を含むものとしては、「子育て - 環境 - 良い」という共起関係も確認できているように、子育て環境の良さを指摘する記述が複数みられた。「子育てに良い環境」「子育て世代にとって環境が良い」「住みやすい。清潔。子どもを育てる環境に適している」「結婚前は梅田の近く

に住んでいたのが不便に感じるが、子育て環境は良いと思う」「便利で子育てするには良い環境だと思います。子どもができてからは良い所に住んでと思うようになりました」「ファミリー層が多く、子育てには良いと思う」「子育てしやすさが現住居を選んだ理由です」「子どもが多く、安心して遊ばせられる場所も多いので、子育てに優しい地域」「子育てされている家庭が増えている様子。教育環境が良いイメージ」「居住環境やまちの雰囲気は何年も住みたいくらい魅力的ですが、吹田や川西などに比べると若い世代や0歳未満の子どもを持つ夫婦には少し敷居が高い気がします（教育環境が良いので子どもが5~6才のタイミングでは戻ってきたい）」。

なお、グループ③に「高い教育」の共起関係が確認できるが、これは「教育水準が高い」や「教育レベルが高い」といった記述の結果であり、子育てや教育環境に対するイメージに含むことができるだろう。

グループ②の解釈に戻ると、「良い」には「治安」との共起関係も見られる。具体的な記述としては、「治安が良い」「治安が良く雰囲気が良い」「治安が良くて、夜が静か」「治安が良く便利な場所」「治安が良くて、住みやすい」「治安が良く大阪っぽくない」「治安面では、大阪の中だとかなり良いイメージがあります」「教育、治安面で優れている」「治安が良い。若い世代の夫婦と子ども、子どものいる家庭が多い」「自分の子どもが産まれたら、豊中で育てたいと思います。治安が良いし、やはり他の地域に比べ落ち着いていると思います」「治安が良く、静か。人も穏やかな人が多いように感じる」などがある。

治安の良さに関連して、グループ④にある「安心-安全」の語の共起からも、同様のイメージを読み取ることができる。具体的には、「安心、安全」「安全で安心して暮らせるまち」「安全で安心できる温かいまち」といった記述が見られる。

このように、治安や子育て環境については、「良い」との共起関係が見られるようにポジティブなイメージが多くみられるのだが、もちろん一部には否定的な評価も含まれている。治安については、「治安が悪い。空気が悪い」「昔より治安が悪化したかも…」という記述が見られる。子育て環境については、「便利だが子育てには適していないように思う」「子育てにお金がかかる」「夕方に病院が開いていないのも、子育てしていると不安」「治安も良く、住みやすいとは思いますが、子どもができてからは保育の負担等も含め教育面でのサービスが不足している様に感じています」といった記述が確認できるほか、「待機児童問題は深刻」「子育て世代に人気だが、保育所の激激戦区」「保育施設（待機児童が多く）が少ないので共働きが困難」など、待機児童問題への言及も見られる。

グループ⑤は「多い」を中心に語の共起がみられるグループであり、「子ども」や「高齢者」の他に、「緑」の多さについても言及されている。「緑」は「静か」という語とも共起しており、先述の「閑静な住宅街」という表現とも相まって、良好な居住環境というイメージを読み取ることができるだろう。具体的には次のような記述がみられた。「緑が多い」「緑の多い住宅街」「静かな住宅街。緑が多い」「緑が多く静かで、歩いていると気持ちの良い地域」「緑が多く街並みが綺麗。日曜日は外歩いても、静かでとても落ち着いていると思う」「子育てするのに良い。緑が多く、買い物は便利」「緑が多く、治安の良い住みやすい地域」「坂道が多いので大変ですが、緑も多く

引っ越して来て良かったと思っています」「都心に近いが、比較的緑が豊かで静かな感じ」。

グループ⑥には数多くの語が含まれているが、「交通」や「買い物」、「駅」や「店」など、生活利便性に関する語がまとまっている。「スーパー」の近さに関するグループ⑦も、生活利便性に関する共起関係として理解できるだろう。

「便」や「便利」¹⁶といった語が含まれる記述は大変多い。以下に一部ではあるが、交通利便性に関する言及が見られる文を列記する。「交通の便が良いところ」「交通の便が良いベッドタウン」「静かで、交通の便の良い住みやすいまち」「様々な鉄道の駅が近くにあり、交通の便が良い」「アクセスが便利な住宅街」「駅や空港、大阪中央環状線から近く便利な立地だけど住宅街で静かに暮らせる」「交通に便利。空港のあるまち」「主婦にはとても便利。実家が関東の為、空港も近くとても住みやすいです。又、梅田までも近いので住みやすいです」「モノレールの駅が近く便利」「環境も良いし、どこかに出掛けるのも便利。住みやすいと思います」「排気ガスが多くて、健康に悪いが、バスの便が充実していて、通勤に便利である」「静かで学校も近い。駅も近い。家は高いが交通の便はとても良い」「梅田や神戸、京都など近く、便利だが、単身者にはむかない地域」。

買い物の利便性についてのポジティブな言及が含まれる記述としては、「買い物がしやすく便利で住みやすい」「買い物に便利で公園も多く、子育てしやすい環境」「スーパーが充実している」「徒歩圏内で日常生活のことが事足りる（買い物、病院、郵便局など）」「市役所や銀行、スーパーが近いので住みやすい」「人が優しくて、学校、病院、消防署などが近くにあって安心。スーパーやおいしいごはん屋さんもあって、大好きです」「飲食店・コンビニ・薬局などがあって便利だが、もっとバリアフリーを充実してほしい」などがある。

また、単に「便利」とだけ記述されているものや、具体的な対象を示さずに「とても便利なまち」「住みやすく、便利である」と書かれたものも少なくない。

他方で、同じグループ⑥に「不便-駅」「不便-買い物」という語の結びつきがあることからわかるように、生活の不便さを指摘する記述もある。たとえば、「交通の便が悪い。買い物に不便。物価が高い」「便が良いが、商業施設が少ない」「駅近にしかスーパーがない」「交通の便は良い方だと思うが、買い物できる大きな店がない。小さいスーパーばかり」「近くのスーパーがいまいちで利用しづらい」「家の周辺に買い物する所や店がなく不便」「買い物できる所が少なく、近くにある病院も普段は利用できないので不便です」「住みやすいが、買い物に不自由する」「店が少なくなってきた」「遊んだり買い物するところがない」「子どもが多く住みやすいがもう少し店などがほしい」「非常に上品な地方で、好きです。買い物は少し不便です。あと、高いです」「治安や雰囲気は良いですが、坂がとても急で長い。その割に坂のうえに店がなさすぎて何をしても坂をおりなくてはいけないのが本当に大変、不便」など。ここにも地域差が多分に反映されて

¹⁶ ネットワーク図に「便利」（頻出語分析では82回出現で4位）という語は示されていないが、これは共起関係が強い上位30の関係に含まれなかったことによる。理由としては、幅広い語と結びつきやすい語であること、「便利」という単語のみが記されることが少なくなかったこと、などがあると考えられる。

いると思われる。

また、北東部と同様、特定の買い物の不便さや店舗の偏りについての言及も見られる。たとえば、「静かだが魅力的なお店が少なく、少し寂しい地域。住むだけであれば充分」「住環境は良いが店に偏りがある。学用品（文具や上履きなど）は車で大型店に行かないとダメ」「子ども用品や服を売っている店が近くにほとんどなく不便。駅からも遠く、何をすることも不便」「子育てはしやすいと思う。でも子どもの物、生活雑貨を手軽に買える店がない」「便利ではありますが、気楽に服を買いに行く所が減って残念に思います。前は服屋があったのに、少し不便になりました。特に肌着類」「交通面は非常に便利だと思いますが、駅周辺（蛍池）は居酒屋ばかりで一人で行ける飲食店がないのが不満です」「スーパーは充実してるけど、宝塚線沿線にもっとショッピングモールがほしい」などがそうである。

このように、中北部は生活利便性に関する記述が大変多い。単に「便利」と書かれてあるようなものも含め、数としては便利な地域として捉えられていることが多いと思われる。しかし、居住エリアや店舗の種類によっては、不便さが感じられているようだ。買い物や交通をはじめとした利便性については、両義的な地域イメージを抽出することができるだろう。「駅から徒歩圏内は生活に便利。それ以外は不便」「とても便利とまではいかないが、不便を感じることも少ない」「便利そうで不便なところ」「中途半端に便利」「徒歩や自転車で買い物等ができるため、車がなくても生活できるのが良い。しかし、どこへ行くにも少し遠いため、不便に感じることもある」といった記述が象徴的である。

次に、グループ⑧では、「道—狭い」という強い共起関係がみられる。これは端的に、道路や歩道の狭さに関連した言及が多いことを示している。典型的には、「道路や歩道が狭い」「坂が多く道が狭い」「歩道がボコボコで狭い」「道路が狭い。ガタガタの道が多い」「夜になると暗くて怖い。道が狭くて危ない」「街灯が少ない。道が狭い」といった記述がみられる。

関連して、交通量の多さも指摘されている。「道が狭い割に交通量が多い」「道が狭いのに大きな車が通るので、細い路地まで行って避けている」「道が狭く、少しゴチャゴチャしている。歩道がない道に大型バスが通るので、少し危ない」「生活するにはとても便利だが、歩道がなかったり狭かったり事故になりそうな場所が多い」。

以上のようなことがあるため、「ガタガタ道で子連れやベビーカーは危ない」「道幅が狭く、子どもを連れて出歩くには危険が多いと思う」など、子ども連れにとっての危険さを指摘する声もみられる。道の狭さに関連して、「ゴチャゴチャしている。交通量が多いのに、歩道は狭く、あっても危険。電柱いっぱいあって、はみ出して立っている。美観悪い」「世代交代が進んでいて、昔あった広い家などが取り壊され、新築が増えています。ただ、狭い道や、古い道路や橋はそのまま、街並みにちぐはぐ感があります」など、景観や街並みへの言及がなされることもある。

グループ⑨では、「田舎」と「都会」の強い共起関係が確認できる。ここからは、田舎と都会の中間、田舎と都会の両方の性格を併せもつところ、といった中北部の地域イメージを読み取ることができる。具体的には、「田舎と都会の間」「都会でもなく田舎でもなく」「程よい田舎、程よい都会」「都会の中の田舎」「田舎の都会」「田舎と都会の良いとこどり。ほどほど下町で、ほどほど

都会」「まちの中はすごく田舎だけど、国道出たら都会」「豊中は都会でもなく田舎でもない落ちつける所」「わりと都会なのに田舎のような価値観や風習が残っている」「都会過ぎず田舎過ぎず閑静な住宅街。温かみがありつつも踏み込み過ぎず程よい距離感のご近所付き合いが居心地が良い」といった記述をみることができる。

グループ⑩は、「住む - まち」「住む - 地域」といった語の結びつきを示しており、一般的な表現であると考えられるため、詳述は避ける。

まとめると、中北部に住む若い世代の地域イメージには、居住環境が良好な住宅街、生活が便利／不便なまち、子育て・教育環境の良いまち、治安の良いまち、道が狭いまち、都会で田舎なまち、といったものがあると思われる。道の狭隘さなどに中北部独自の地域イメージがみられるものの、北東部とのイメージの重なりが大きいことが改めて確認できる。

<南部地域>

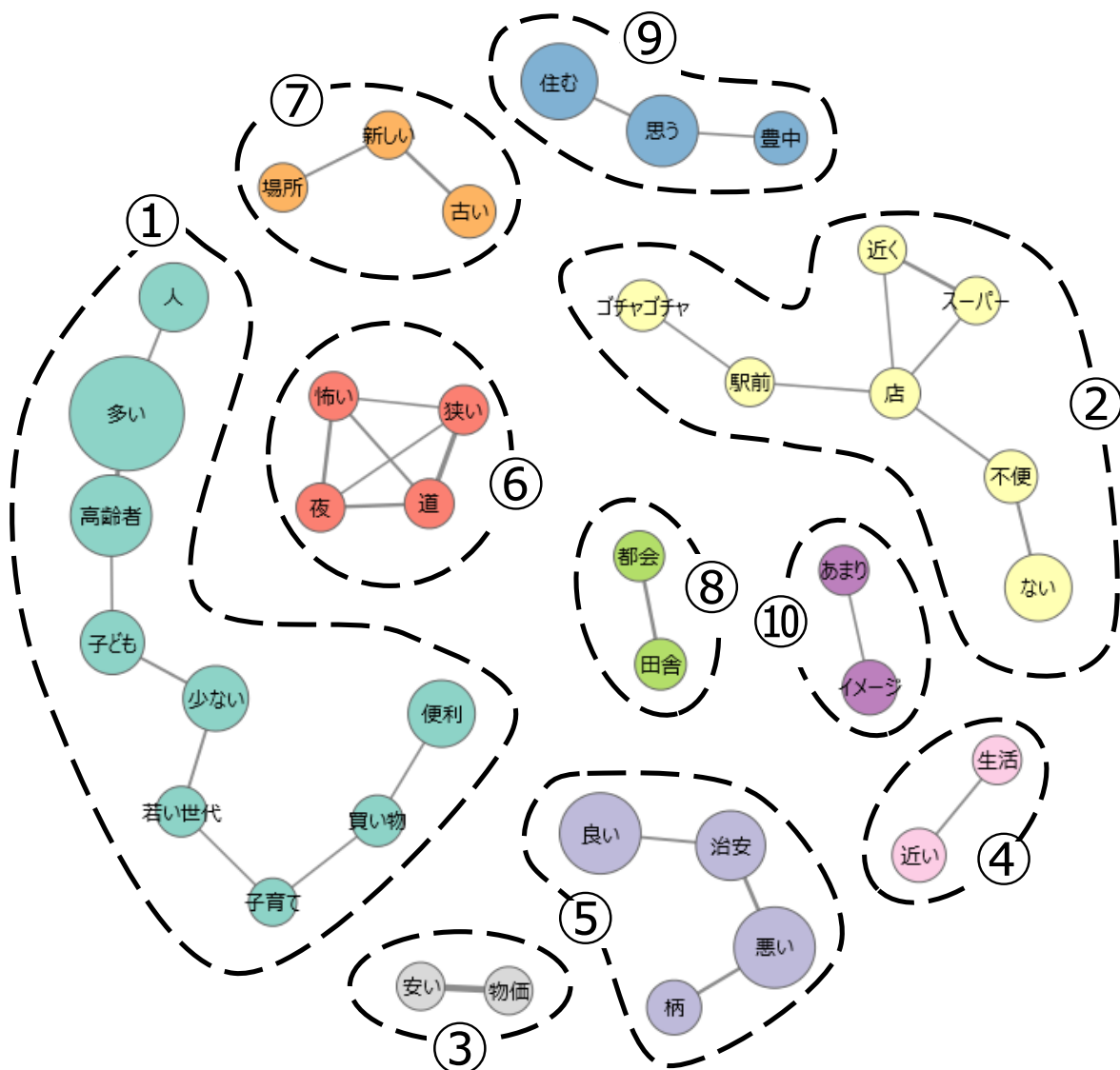
最後に、図表 29 は南部地域の共起ネットワーク図である。

グループ①には、大きくわけて2つの意味のまとまりを読み取ることができる。まず、「高齢者 - 多い」「子ども - 少ない」「若い世代 - 少ない」といった少子高齢化のイメージが見られる。具体的には、「高齢者が多い」「地元の高齢者が多い」「高齢者の多いまち」「高齢者が多く住んでいる」「世代交代しにくい、高齢者が多い地域」「若い世代が少ない」「高齢者が多い。若い世代が少ない」「周りが高齢者ばかり、若い世代が少ないです」「子どもの少ない地域」「高齢者が多い。子どもが少ない」「少子化の進んだ地域」「子どもが少なく、高齢者が多く、まさに『少子化・高齢化』を感じています」「程よく田舎で静か。高齢者が多い。野良猫が多い。小さい公園でほとんど子どもが遊んでいない」「高齢者が多く若い世代や子育て世代には不自由な感じである」「高齢者は多いけどみんな優しくして良い所」「高齢者が多い地域ですがいろんなことが聞けるので良い地域です」「高齢者が多く、コミュニケーションやあいさつができて、配慮ができる人がたくさんいる地域」「治安が悪く、高齢者の多い地域であるが、活気が溢れており、気に入っている」「音大生と高齢者のまち」などである。

また、同じくグループ①には「買い物 - 便利」という共起関係も認められる。これはグループ②にある「店 - 不便」「近く - スーパー」や、グループ③の「物価 - 安い」とあわせて、買い物の便利さ／不便さについてのイメージであると考えられる。

まず、買い物の便利さについては、「和やかで買い物に便利」「豊南市場や買い物は便利」「買物がしやすい地域」「何かと便利（スーパーがたくさんあるし、日用雑貨のそろう店等いっぱいあるので）」「遠くまで行かなくても、スーパー2店、ドラッグストア2店など、何でも買える」「交通機関も便利、買い物も何でもそろう」「電車、バス、市場、スーパーが近くにあるので住み良い所です」「買い物や移動が便利で、子育て環境が良い地域」「閑静な街並みであり、スーパーや病院など生活に必要なお店や施設が近くにあり、便利な地域である」「お店や病院が多いのは便利であるが、駅前がゴチャゴチャしていたり、歩道や住宅街の道路が狭くて危険」「下町。物価が安い」

図表 29 南部地域の共起ネットワーク図



「物価が安い。高齢者が多い」「梅田にも近いし、物価も安いから単身者は住みやすいと思う」といった記述がみられる。

他方、買い物の不便さについては、「買い物が不便」「コンビニが駅周辺ばかりなので不便」「高齢化がかなり進んでいると思う。お店の数が少ない」「近くに服の買える店が少ない」「駅前に魅力がない。ケーキ屋も花屋もない。活気がない。梅田に近くても日常生活に不便だ」といった記述が見られる。

また生活の利便性という観点では、「交通面がすごく便利」「駅が近いから便利」「駅が近いので便利。大阪市寄りなので梅田に近くて良い」「梅田に出るには近くて便利」「どこにでも、行きやすい交通の便利さがある。商業地が近いのに静かである」「あまり治安は良くないイメージがあるが、大阪の中心地にも近く便利な地域」「都会に近くて良い」「都心からも近く交通の便も良い」「都心に近く、日々の生活を送るにあたり、安定した地域」「生活する上での買い物や通勤には困らない。十三や新大阪も近くどこへでもすぐ行ける割に土地も高くない」など、交通便利性や大

阪都心への近さによる便利さに対する言及が見られる。このようなイメージは、グループ④の「近い - 生活」という共起関係に対応していると考えられる。

その一方で、「電車が遠く、バスの本数が少ないので不便」「電車に乗るには少し不便ですが、日常生活には支障なし」「庄内駅～神崎駅の中間の為、不便有り」「駅がないので不便。神戸線の神崎川と園田の間に一駅ほしい」「駅がない。通学、通勤に不便な所。だから若い世代が住まない地域」「電車が遠く、バスの本数が少ないので不便」「車がなければ不便」といった記述も見られる。庄内駅から遠いエリアを中心に、交通面で不便な地域というイメージもあることがわかる。

なお、生活面での便利さについては、具体的な対象を示さない「便利」「便利が良い」「便利で住みやすいまち」「便利だけど住みにくい」「便利で安心感がある」「親しみやすいまちでいろいろな面で便利なまち」「不便なことがあまりない」といった包括的な記述も多く見られる。

生活の便利さ／不便さに加え、グループ②には、「駅前 - ゴチャゴチャ」といった景観・雰囲気に関係すると思われる共起関係も見られる。具体的には、「駅前がゴチャゴチャしている」「ゴチャゴチャしている」「ぐちゃぐちゃしててゴチャゴチャしてる」「利便性は良いが、雰囲気がゴチャゴチャしている」「最寄り駅はとても雰囲気が良いけれど隣の駅はゴチャゴチャしている」「お店や病院が多いのは便利であるが、駅前がゴチャゴチャしている」「昔ながらのゴチャゴチャとした街並みの中に新しい住宅が混じっている」といった記述がそれにあたる。

グループ⑤は、「治安」に関するイメージのまとめであると考えられる。北東部や中北部は基本的に、治安の良さに対するイメージが確認できたのだが、南部では「治安 - 悪い」という共起関係も見られる。確かに南部でも「治安 - 良い」という共起が確認できるが、素のテキストを検討すると、多くは「治安があまり良くない」といったネガティブな文脈を形成していることがわかる。具体的には、「治安が悪い」「治安が悪そう」「最近少し治安が悪い印象がある」「あまり治安が良いとは言えないと思った」「夜うるさい、治安が良いとは思えない」「治安、働き場所が悪い」「治安が良いとは言えないし、飛行機もうるさい」「便利ではあるが、治安が悪い」「生活はしやすい。ただ、治安が悪い」「地域との繋がりはあるが、治安が良くない」「下町。治安が悪い。人情味溢れる」「治安は良くないが、人情味のある地域でもある。有名な市場など誇るべきものもある」「あまり治安は良くないイメージがあるが、大阪の中心地にも近く便利な地域」「治安が悪く、高齢者の多い地域であるが、活気が溢れており、気に入っている」「治安が良いとは言い切れないですが住みやすいとは思いますが」といった記述が見られる。

グループ⑥は、「道 - 狭い」「夜 - 道 - 怖い」など、道路や歩道の環境についてのイメージであると捉えることができる。道の狭さに関しては「道が狭い」「古くからの家が多く、道が狭いです」「歩道や住宅街の道路が狭くて危険」といった記述が見られ、中北部と同様のイメージが確認できる。道の狭さについては、「ゴチャゴチャ」という語に象徴されるような景観・雰囲気に関するイメージとも、緩やかに重なっていると思われる。

南部ではそれに加えて、夜道の怖さというイメージもあるようだ。具体的には、「夜、道が暗い」「治安が良くない。夜の道が怖い」「夜になると人通りが少なくなり、怖い」「道が狭く、夜が暗くて住み始めた頃は怖い」「道は狭いし、デコボコだし、夜はめっちゃ暗くて、怖い！」など。夜

道の怖さについては、治安への不安とも関連していると思われる。

グループ⑦には、「新しい - 古い」という共起関係が見られる。具体的には、「新しい所と古い所がある」「新しい家や場所と古い家や場所の混合」「過渡期。古い昔からのコミュニティと新しい人が、交ざりあっている」「下町と新しくつくり変えられたまちが融合している」「昔ながらのゴチャゴチャとした街並みの中に新しい住宅が混じっている」「新しく開発されている場所と古い場所とがチグハグ」といった記述が散見される。

関連して、グループ⑧には、中北部と同様、「都会 - 田舎」という語のつながりも見られる。内容が類似するテキストを具体的に引用すると、たとえば、「都会と田舎の間」「都会の中の田舎」「田舎ではないけど都会でもない」「都会の田舎」「下町の都会」「都会と下町の融合」「田舎でも都会でもない下町のイメージ」「梅田よりの都会」「都会的な所とそうでない所が融合している」などである。このように南部地域には、新しさと古さ、都会と田舎といった両義的なイメージがあることがわかる。

残るグループ⑨と⑩は、それぞれ一般的な表現であると考えられるため、詳述は避ける。

まとめると、南部に住む若い世代の地域イメージには、少子高齢化が進むまち、生活に便利／不便なまち、雑多なまち、治安に課題があるまち、古くて新しい、都会で田舎なまち、といったものがあると思われる。

以上、共起ネットワーク図と素データの引用を通じて、それぞれの地域のイメージを分析してきた。抽出された地域別の主なイメージを次の図表 30 にまとめておく。

図表 30 各地域の主なイメージ

地域	主なイメージ
北東部	<ul style="list-style-type: none"> ・緑が豊富で静かなまち ・人の流入や建物の更新が進むまち ・生活が便利／不便なまち ・街並みが新しい／古いまち ・治安の良いまち ・子育て・教育環境の良いまち
中北部	<ul style="list-style-type: none"> ・居住環境が良好な住宅街 ・生活が便利／不便なまち ・子育て・教育環境の良いまち ・治安の良いまち ・道が狭いまち ・都会で田舎なまち
南部	<ul style="list-style-type: none"> ・少子高齢化が進むまち ・生活が便利／不便なまち ・雑多なまち ・治安に課題があるまち ・古くて新しい、都会で田舎なまち

比較すると、まず、頻出語の分析でも推察されたことだが、北東部と中北部は、緑の多さや静かさなど、居住環境や住宅街としての良好さに関するイメージがやはり共通してみられた。住宅都市としてのイメージとすることができるだろう。子育て・教育環境の良さといったイメージも、共通してみることができる。

それに対して南部では、利便性を反映した住みやすさに関するイメージは見られるものの、北東部と中北部と同様の住宅都市としてのイメージや、子育て・教育環境が良い地域というイメージを抽出することは難しかった。

また、治安に対する評価の違いにも、北東部・中北部と南部との地域イメージの差を見て取ることができるだろう。大まかにいえば、北東部や中北部には治安が良いイメージが、南部には治安に課題があるというイメージが抱かれる傾向にある。

対して、いずれの地域でも生活の便利さ／不便さという両面的なイメージが見られた。生活利便性が地域イメージを形成するひとつの焦点となっていることがわかる。また、古さと新しさ、都会と田舎など、矛盾する要素が同居するまちというイメージが、いずれの地域にもみられたことも興味深い。若い世代に地域イメージをたずねた際の一般的・定形的な回答の型のひとつとして理解することもできるが、豊中市の多くの地域で共有できるイメージである可能性もある。

3-3-4. 居留意向との関連の分析

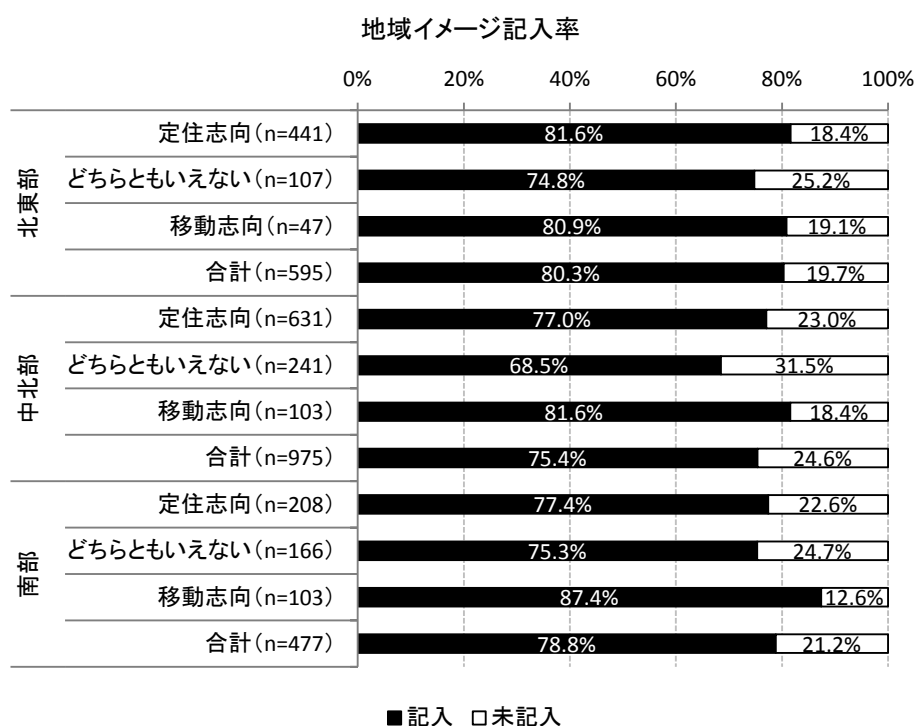
最後に、南部地域について、地域イメージと居留意向の関連について分析を行いたい。

そのために、まず事前作業として、素データにコードを付すコーディングを行う。これは、一つひとつの語ではなく、おおまかなコンセプトの出現を捉えるための作業である。具体的な例を示すと、たとえば「治安」に言及する文は、「治安」という語そのものが用いられた文だけではないだろう。「防犯」という語を用いた文も、「治安」に関する言及を含んだ文として判断できる。そこで、「治安」「防犯」といった語が用いられた文に一括して「治安」というコードを与え、「治安」というコンセプトが共通して含まれるデータとして括りだすのが、コーディングの作業である。

以上のような事前作業を KH Coder の機能を用いて行いた上で、各コードと居留意向との対応を分析する。この分析を通じて、どのような地域イメージを抱いている人が地域から移りたいと考えているのか、残りたいと考えているのかを検討する。

具体的な作業に入る前に、居留意向別の自由回答欄への記入率を確認しておく（図表 31）。いずれの地域でも「どちらともいえない」と中庸な回答をした人の記入率が低い傾向にある。また、南部では「定住志向」で 8 割弱、「移動志向」で 9 割弱と、居留意向による記入率の差が約 10 ポイント確認できる。南部では移動志向の人のほうが、地域に対して明確なイメージを抱きやすい可能性がある。

図表 31 地域イメージの記入率



コーディングのルールは図表 32 のように設定した。「治安」「高齢者」「子ども」「景観」「交通」「買い物」「利便性」の各カテゴリは、共起ネットワーク分析の結果をふまえて設定した。南部における最頻出名詞である「下町」についても、共起ネットワーク図には出現しなかった¹⁷ものの重要であると考えられるためカテゴリとして設けた。「下町」のイメージについてより詳細に検討するために、関連イメージである「人間関係」も設定した。

図表 32 コーディングのルール

コード	分類に用いられた単語
治安	治安、柄、安全、防犯、怖い、暗い、危ない、危険
高齢者	高齢者、高齢、おじいちゃん、おばあちゃん
子ども	子ども、赤ちゃん、子育て、幼稚園、保育園、学校、小学校、中学校、教育、学力、少子化
景観	街並み、ゴチャゴチャ、汚い、ゴミ、緑、自然、綺麗、小綺麗、雑多、煩雑、見晴らし
交通	交通、梅田、大阪、都心、通勤、通学、電車、バス
買い物	買い物、店、商店、店舗、スーパー、コンビニ、チェーン、市場、飲食、商業、物価、安い
人間関係	付き合い、人情、人情味、繋がり、コミュニケーション、アットホーム、気さく、温かい、優しい、フレンドリー
下町	下町、庶民
利便性	便利、やすい、不便、にくい

¹⁷ 単に「下町」と単語で示されることが多く、他の語との共起が少なかったためと考えられる。

図表 33 コーディングの結果

コード	件数	構成比
治安	67	18.0%
高齢者	55	14.8%
子ども	36	9.7%
景観	42	11.3%
交通	24	6.5%
買い物	43	11.6%
人間関係	26	7.0%
下町	52	14.0%
利便性	65	17.5%
コード無し	92	24.7%
文書数	372	

コーディング結果の単純集計は図表 33 のとおりである。「治安」が 18.0%と最も多く、次いで「利便性」17.5%、「高齢者」14.8%、「買い物」11.6%、「景観」11.3%と続いている。

次に、コード間の関係を検討するため、階層的クラスター分析を行った。これは、どのコードがどのコードと一緒に出現しやすいかを分析する作業である。結果は図表 34 のとおりであり、3つのクラスターに分類された。

第 1 に、「交通」「買い物」「利便性」「景観」がひとつのクラスターを形成している。買い物の利便性や交通の利便性が、包括的に生活利便性として言及されることが少なくないことによるものと考えられる。

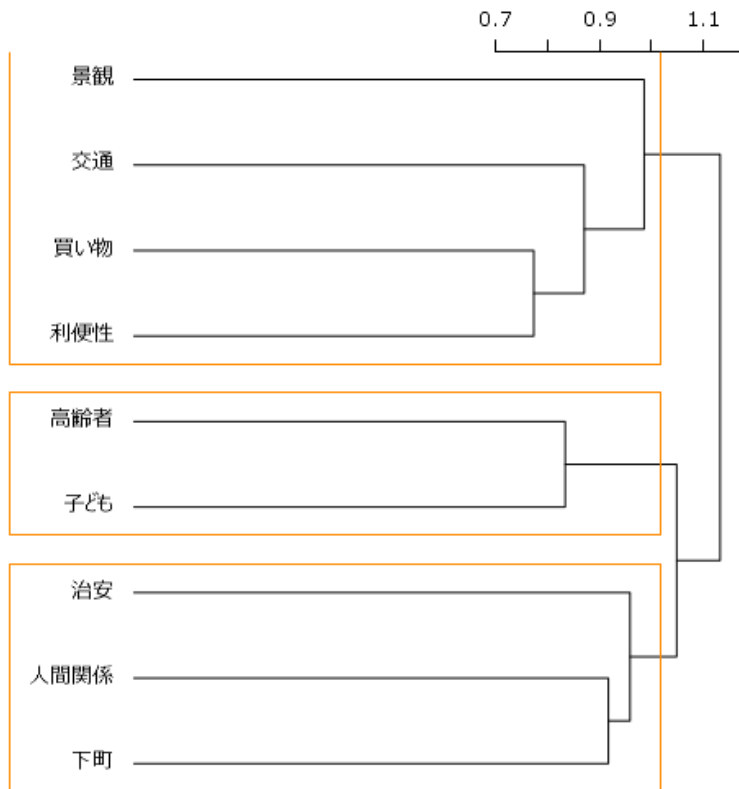
第 2 に、「高齢者」と「子ども」がひとつのクラスターを形成している。「少子化・高齢化」「高齢者が多い。子どもが少ない」「子どもが少なく、高齢者が多く、まさに「少子化・高齢化」を感じています」など、少子高齢化に関する言及が多かったためと思われる。

第 3 に、「人間関係」「下町」「治安」がひとつのクラスターを形成している。地域の「下町」のイメージには、「人間関係」に関するイメージが付随しやすいと言える。具体的には、「人情溢れる下町」「下町のフレンドリーな雰囲気」「庶民的で繋がりのあるまち」といった記述である。

他方で、「下町」や「人間関係」には、「治安」に関するイメージも結びつきやすいようだ。具体的には、「地域との繋がりはあるが、治安が良くない」「治安は良くないが、人情味のある地域でもある」「下町。治安が悪い。人情味溢れる」「下町風情のある。柄はあまり良くない」「温かい人もいれば、怖い人もいる」「ちょっと怖い時もあるが基本色んな世代の繋がりがあある」などの記述がみられた。

「下町」というイメージは、近隣のつながりの深さや温かさなどポジティブな側面と結びつきやすいが、同時に、治安への不安とも結びつきやすく、両義的なものと言えるだろう。

図表 34 コードの階層的クラスタ分析



図表 35 コードと居住意向の関連

	治安	高齢者	子ども	景観	交通	買い物	人間関係	下町	利便性
定住志向 (n=158)	14.6%	12.7%	10.1%	14.6%	7.6%	12.7%	11.4%	15.2%	19.6%
どちらともいえない (n=124)	16.1%	16.1%	8.9%	8.1%	4.0%	12.1%	4.0%	14.5%	16.1%
移動志向 (n=90)	26.7%	16.7%	10.0%	10.0%	7.8%	8.9%	3.3%	11.1%	15.6%
合計 (n=372)	18.0%	14.8%	9.7%	11.3%	6.5%	11.6%	7.0%	14.0%	17.5%

では、地域イメージと居住意向の関係はどうなっているのか。各コードと居住意向との関連は図表 35 のとおりである。カイ二乗検定の結果、「治安」と「人間関係」の 2 つについては、5% 水準で居住意向に有意差がみられた。「治安」については、移動志向の人のほうが言及する傾向にあると言える。対して、「人間関係」については、定住志向の人のほうが言及する傾向にあると言える。

3-4. 考察

本章では、地域イメージについて計量テキスト分析の手法を用いながら分析を行ってきた。結果を整理しつつ、考察を行いたい。

まず、地域別のイメージのちがいについてだが、北東部と中北部には良好な居住環境が確保された住宅地、子育て・教育環境がよい地域、といったイメージが共通してみられた。それに対し、南部にはそのようなイメージを確認することはできなかった。また、治安に関しては、北東部と中北部には「良い」というイメージが多い傾向にあるのに対し、南部は「悪い」というイメージ

が多い傾向にあった。

このように、同じ市域のなかでも、北東部と中北部との間には地域イメージの重なりがある程度見られるが、それと南部の間にはギャップがあることが確認できた。

他方で、交通や買い物など生活利便性に関するイメージについては、いずれの地域にも共通して両面性がみられた。今回は南部地域の地域イメージの特性を捉えるという目的から、各地域を一面的に捉えて比較しているが、生活利便性に関する両面的なイメージからは、個々人のライフスタイルや詳細な居住エリアなどを反映し、同じ地域内でも多様なイメージが形成されている可能性をうかがうことができる。

次に、南部地域のイメージと居留意向との関連からは、定住志向の人は人間関係について、移動志向の人は治安について、特に言及する傾向があることがわかった。ここからは、地域の人間関係に対するポジティブなイメージが、若い世代を地域にとどめる可能性があること、地域の治安に対するネガティブなイメージが、若い世代の地域からの転出を後押しする可能性があることを、それぞれうかがい知ることができる。

ただし、定住志向と地域イメージの関係については、因果関係が逆である可能性についても考慮する必要がある。これからも地域に残ることがほぼ確実な人は、地域についてのポジティブな側面をより強調しやすいバイアスがかかると考えられる。そのため、定住志向の人は、人間関係が良好だというポジティブなイメージがあるから地域に残るのではなく、地域に残るという前提のもとで地域のポジティブな側面として人間関係をイメージしやすい、という可能性もある¹⁸。また、別の要因が定住志向と地域イメージの形成に同時に影響しているという場合も考えられる。

しかし、仮にそうだとすると、それは地域の活性化にとって人間関係の良好さについてのイメージが無意味だということを必ずしも意味しない。本章冒頭で示した田中（1997）によれば、ポジティブな地域イメージは地域に対する市民の帰属感を形成するとともに、イメージの更新・発信に対する動機づけを市民に与え、そのことが更に地域への帰属感を醸成する。このような循環（ポジティブなフィードバック）の作動は、居住者の地域内での活動量を増やし活性化へとつながる可能性がある。

そうであるとすれば、人間関係の良好さについての南部の地域イメージの醸成と発信は、南部地域の活性化にとって意義があると考えられる。

対して、治安に関するイメージは、ネガティブなフィードバックを形成している可能性がある。つまり、治安に関するネガティブな地域イメージが地域に対する帰属感を培うことを妨げ、地域内での諸活動への参加に対する動機づけの形成を妨げ、そのことが更に地域に対する帰属感の醸成を妨げる、という循環の形成が危惧される。

そうであるとすれば、治安をめぐる南部の地域イメージに介入していくことは、南部地域の活性化にとってひとつの重要なポイントであると言える。

¹⁸ 治安に関しては、地域から移動するので治安に関するネガティブなイメージを抱きがちになる、という関係は考えにくい。治安をめぐるイメージは居留意向の原因として作用していると考えるのが素直だろう。

では、どのような介入の仕方が可能なのだろうか。その際に考慮されるべきは、「下町」のイメージである。南部地域に対する「下町」というイメージは、人間関係に対するポジティブなイメージにも、治安に対するネガティブなイメージにも、関連づけられている可能性がある。そのような両面性を有する「下町」（あるいは界隈性と言ってもよいかもしれない）のイメージを介しながら、治安に関するネガティブなイメージを上書きしていくことができないだろうか。

最後に、次章に向けて残された課題について整理しておく。

南部地域は治安に対してネガティブなイメージが抱かれる傾向にあった。しかし、その場合に、「治安」が具体的に何を指しているのかは、今回の分析からは判然としない。今回の質問紙では補足文のなかで短文での記入を求めたため、「治安」の具体的な中身に対する言及が少なく、他の語との結びつきが確認しづらかったこともひとつの理由であると思われる。

また、先述のように、地域のイメージは一枚岩ではない。南部の居住者が抱く地域イメージには、個々のライフスタイルなどによる差があると考えられる。特に、異なるイメージが併存している生活利便性に関してはそうだろう。その点について、今回の計量テキスト分析では踏み込んで分析することができなかった。

以上の課題については、次章のインタビューの分析で補足することにしたい。

第4章 南部地域の20～40歳代の生活と地域の関連

4-1. 問題設定	48
4-2. 方法	49
4-3. 結果	52
4-4. 考察	142

第4章 南部地域の20～40歳代の生活と地域の関連

4-1. 問題設定

昨年度の調査研究では、子育て世帯を中心とした社会減が続いており、その背景には、子育て・教育環境や治安といった地域の環境に対する評価の低さがあることが推察された。また、消費活動や社会的つながりといった面でも、他の地域とは異なる特徴がうかがわれた。

ただし、そのような南部地域の人口や行動、あるいは地域に対する評価について十分に理解するためには、地域に住む個人の具体的で総合的な生活を把握する必要がある。住む場所の選択や地域での活動、地域に対する評価などは、日常的な生活のなかで行われているものだからである。また、人びとの生活は、進学や就職、結婚など、いわゆるライフコースの変化の影響を大きく被っている。地域との関係も、そのなかで変わっていくだろう。

そこで今回は、南部地域の人びとの居住地選択、消費活動、つながり構築、地域環境の評価（子育て・教育、治安）などに注目し、その背景にどのような個人の生活とその変化があるのか、そこにはどのような地域の条件が関連しているのかを検討する。特に、昨年度の調査研究で不明だった点について考察を試みたい。具体的には、次のようなポイントである。

- ・南部地域では他地域に比べて転出志向が強い傾向がみられる。では、南部地域の人びとの居住意向の背景には、どのような地域の条件があるのだろうか。ライフコースの移行のなかで、居住意向はどのように変化しているのだろうか。
- ・南部地域は生活利便性に対する評価が高い。しかし、昨年度の質問紙調査からは、若い世代では庄内駅周辺の店舗の選好が弱い傾向もうかがえた。生活利便性の高さと庄内駅周辺の店舗の選好の低さはどのように両立しているのか。
- ・一般的に南部地域はつながりが強いとされる。しかし、昨年度の質問紙調査からは、若い世代では社会的つながりが弱い傾向もうかがえた。地域のつながりの強さと弱さはどのように両立しているのか。
- ・南部地域の地域環境の評価は、子育て・教育や治安などの面でネガティブなものに傾きがちである。しかし、そもそも「子育て・教育環境」「治安」という言葉で何が指し示されているのか。
- ・大阪音大の学生は、地域での消費の少なさなど地域との接点の少なさがうかがえる。では、地域の居住者は大阪音大とどのようにつながっているのか。あるいは、南部地域に住む大阪音大の卒業生は地域をどのように見ているのか。

ここで簡単に先行研究について触れておくと、若い世代の特定の地域での生活実態を明らかにするという問題関心を有するものとしては、阿部（2013）、轡田（2017）、石井ほか編（2017）などがある。阿部や轡田は、中国地方で生活する若者の居住地移動や仕事、余暇・消費や社会関係など生活の全体像に注目し、質問紙調査やインタビュー調査などから彼ら・彼女らの幸福の成立条件と社会的課題を浮き彫りにしている。石井ほかは、主としてインタビュー調査に拠りながら、東北や九州の若者の仕事や結婚などを切り口に、ライフコースの現状を社会経済的な構造のなか

で捉え返している。主として地方圏の若者を対象とするこれらの研究は、全国の平均的な若者、あるいは東京など都市圏の若者をモデルとして構築されてきた若者のイメージを相対化するものでもある。

ただ、豊中市の南部地域は大阪市の都心に近く、京阪神へのアクセスも良い。上述の研究が対象とする地方圏であるとは言いきれないだろう。同時に、人口減や少子高齢化といった現象面では地方圏に近く、多数の若者の流入が続く都心部としては捉え難い。都心の外縁部（「インナーシティ」と呼ばれることもある）という把握が最も近いようにも思われる。上述のような先行研究の知見を、そのまま南部地域にあてはめることは難しいだろう。

そこで今回の調査では、先行研究に学び、居住者のライフコースや生活の全体像を社会や地域の構造のなかで捉え返すという視点に立つ。それと同時に、先行研究では対象となっていない都心の外縁部にあたる、豊中市南部地域の魅力や課題を生活者の視点から浮き彫りにしていきたい。

4-2. 方法

以上のような問いに取り組むにあたり、今回はインタビュー調査を行った。インタビューは、事前にある程度質問内容を想定したうえで、対象者や当日の話の流れにあわせて適宜調整していく、半構造化された形式（丸山 2016、p.53）で行った。主な質問項目は次の図表 36 の通りである。質問項目の設定については、阿部（2013）、嚮田（2017）も参考にした。

インタビューの対象者は、南部に現在居住する 20 歳代から 40 歳代とした。昨年度の質問紙調査では、住民基本台帳の分析で特に 30 歳代の子育て世代の転出が目立っていたことをふまえ、30 歳代とその前段階の 20 歳代を対象に調査を行った。今回、40 歳代まで年齢の幅を広げたのは、もともとはインタビュー対象者の人数を確保するためという消極的な理由からだったが、結果として、30 歳代当時の選択をふりかえり再解釈する視点からの語りを聞き取ることができたという意味で、時間的な奥行きをもった調査が可能になったと考えている。

インタビュー対象者は、南部地域でのフィールドワークを通じて探した。具体的には、地域内で活動する諸組織のネットワークをたどるスノーボールサンプリングの方法で集めた。インタビューの時間は 1 時間半から 2 時間程度とし、場所は地域の集会場や自治会館、喫茶店、対象者・協力者の自宅などを使用した。インタビューは 2 人同時に行った場合や、筆者の他に調査協力者が同席していた場合などもある。調査の実施時期としては、平成 29 年（2017 年）6 月から 11 月にかけてである。

今回のインタビュー対象となった 18 人の概要は、図表 37 のとおりである。表中の居住履歴の分類は 15 歳を基準とし、その時点で南部地域に居住していた者を「地元定住」あるいは「U ターン」、その時点で豊中市内の他地域に居住していた者を「市内定住」、その時点で豊中市外に居住していた者を「転入」とした。「U ターン」は府外に転出した経験がある者とし、一時的に豊中市内の他地域や大阪府内に居住した経験がある者は含めていない。

図表 36 インタビュー調査の主な質問項目

①基本的なプロフィール
・出身地、出生年、現住地、世帯構成、職業、学歴、居住履歴、など
②子どものころの生活についておたずねします
・親にどのように育てられたと思いますか（しつけ、進学期待、など）
・進学の際・理由について教えてください
・（地元出身者の場合）子どものころと今を比べて、地域はどのように変わっていますか
・（転入者の場合）生まれ育った地域はどのようなところでしたか
③現在のお仕事について教えてください
・現在のお仕事に就いた経緯・理由について教えてください
・お仕事の内容について教えてください（場所、就業時間、休日、など）
・いまのお仕事についてどのように感じていますか（満足、やりがい、など）
・仕事について将来の不安などはありませんか（経済状況の変化、など）
④現在の場所にお住まいになった経緯・理由について教えてください
・居住地の選択に際して、何を考慮しましたか。どこを探しましたか
・より都心／地方に移動したいと思ったことはありませんか
⑤お仕事以外の普段の生活について詳しく教えてください
・買い物はどこでされることが多いですか
・休日はどのように過ごされることが多いですか
・梅田、千里中央、兵庫方面などへは、どの程度、どういった理由で行きますか
・お住まいの地域は生活しやすいと思いますか（具体的に）
・不安に思っていること、不満に感じていることはありませんか（具体的に）
⑥ご家族について詳しく教えてください
・（既婚の場合）配偶者はお仕事は何をされていますか
・（未婚の場合）結婚や子育てに対する願望はありますか
・（子育て世帯の場合）どんな子どもに育てほしいと思いますか（しつけ、進学期待、など）
・子どもを育てる環境として、お住まいの地域をどのように感じていますか
・ご両親はいまどこで何をされていますか（健康）
・家を継ぐことについてはどのように考えていますか
⑦現在の社会関係について教えてください
・現在の友人関係はどこで出会った人が多いですか
・現在、ご近所との付き合いはどの程度ありますか
・自治会など地域の組織・団体には加入・参加されていますか
⑧南部地域の印象についておたずねします
・他地域の人に南部地域を紹介するとしたら、どのように説明しますか
・地域の治安についてどう感じていますか
・大阪音楽大学と接点はありますか。どのようなイメージがありますか
・南部地域が好きか嫌いかと聞かれたら、どのように答えますか
⑨ご自身が「地元」だと思うのはどこ（どの範囲）ですか
・ご自身は「庄内の人」という感覚はありますか
・ご自身は「豊中の人」という感覚はありますか
⑩ご自身は今後、どこで何をされていると思いますか
・今後も現在の地域に住み続けると思いますか
・今後、お住まいの地域はどうなっていくと良いと思いますか

対象者の偏りだが、出身（居住履歴）の面では地元出身者が大半を占め、市外からの転入者が少なくなった。居住地については庄内駅周辺が多く、南部の東側、西側、南側については少なくなっている。出身地と居住地には明確な偏りがみられ、地元のネットワークをたどるかたちで対象者を集めたことが反映されていると考えられる。

表に示されていない属性について補足すると、姉妹が1組（Iさん、Jさん）、外国ルーツの者が3人（在日コリアンのEさん、中国からのニューカマーのQさんとRさん）¹⁹である。IさんとJさん、QさんとRさんの2組については、それぞれ2人同時に聞き取りを行っている。また、大阪音大の卒業生も2人（Hさん、Pさん）いる。

以上のようなインタビュー調査の結果について、次節で分析を行う。分析はインタビューの録音データを書き起こしたもの（トランスクリプト）から引用しながら進めていくが、引用にあたっては、冗長さの排除や個人の特定を避けるという目的で、文意を変えない程度にテキストを変更している。インタビューを直接引用した箇所はゴシック体にしており、丸括弧内は引用者による補足、「*」から始まる文はインタビュアー（聞き手）の発話である。なお、報告書の刊行に際して、インタビューに基づく記述に関しては対象者の確認と了承を事前に得ている。

図表 37 インタビュー対象者

	性別	年齢	居住履歴	家族		仕事
				婚姻	子ども	
A	男性	30歳代	地元定住	未婚	なし	被雇用(非正規)
B	男性	40歳代	地元定住	既婚	あり	自営業
C	女性	40歳代	地元定住	離別	あり	被雇用(正規)
D	男性	40歳代	Uターン	既婚	あり	自由業
E	男性	30歳代	市内定住	未婚	なし	自営業
F	男性	40歳代	Uターン	既婚	あり	自営業
G	女性	40歳代	転入	既婚	あり	主婦(パート)
H	男性	20歳代	転入	未婚	なし	自由業
I	女性	20歳代	Uターン	未婚	なし	被雇用(正規)
J	女性	20歳代	地元定住	未婚	なし	被雇用(非正規)
K	女性	20歳代	地元定住	未婚	なし	被雇用(非正規)
L	男性	40歳代	地元定住	既婚	あり	自営業
M	男性	40歳代	地元定住	既婚	あり	自営業
N	男性	30歳代	地元定住	既婚	あり	被雇用(正規)
O	女性	20歳代	地元定住	既婚	あり	自営業
P	女性	20歳代	転入	未婚	なし	自由業
Q	女性	30歳代	転入	既婚	あり	主婦(専業)
R	女性	30歳代	転入	既婚	あり	主婦(専業)

¹⁹ この3人は、公益財団法人とよなか国際交流協会から紹介を受けた。

4-3. 結果

4-3-1. 整理の枠組み

インタビュー調査の結果についてまとめていきたい。整理にあたっては次のような視点を設定する。

まず、居住地選択については、轡田（2017）の議論を参考に、南部地域の引きつける力（引力）と押し出す力（斥力）を捉える。今回のインタビュー対象者は地域に長く定住しており、これからも住み続けたいと考えている人たちが中心である。そのため、地域の斥力に関する話にも触れられるものの、地域の引力を示す話がインタビューでは表面化しやすい。居住者が転出に向かう論理については、定住志向の者が感じている地域の引力の弱まり、あるいは斥力の強まりとして推論することにした。

また、上述のように今回の質問項目は多岐にわたるため、対象者のインタビューを2つの視点から再構成する。

第1に、対象者のライフコースと地域の関係である。今回対象となった20歳代から40歳代にかけての年齢で言えば、主に進学、仕事、結婚、子育てが、ライフコースのなかで大きなポイントになると考えられる。このようなライフコースの変化を契機に、居住地の選択が行なわれることも多いだろう。

ライフコースの変化に伴う居住地選択には、ある程度個人の主体性も反映されると思われるが（たとえば、「東京の大学に進学したい」「地方でのんびりと仕事をしたい」「親元から離れて家族だけで暮らしたい」など）、周囲からの影響も大きいと考えられる（たとえば、「特定の分野を学べる大学が東京にしかない」「会社の辞令で関東の配属になった」「結婚相手の実家で同居しなければならない」など）。ライフコースは、環境による制約と個人の選好の間で構築されており、居住地選択もそのなかでなされていると考えられる。

第2に、対象者のライフスタイルと地域の関係である。消費活動や地域活動など、生活上の諸活動をどのように展開しているのかは個人によって大きく異なる。また、このようなライフスタイルのちがいはどこに居住地を求めるかにも影響しているだろう。地域環境の評価についても、何をもってそれらの環境が「良い」と判断するのか、地域の治安などの評価をどの程度、居住地選択の際に考慮するのかは、個人や家族のライフスタイルによると思われる。

また、ライフスタイルというと個人の選択の余地が大きいようにも思われるが、地域構造などの制約条件もふまえる必要がある。ライフスタイルもまた、環境による制約と個人の選好の間で構築されており、居住地選択もそのなかでなされていると考えられる²⁰。

²⁰ 以上のような、特定のテーマに関する人びとの反応を個人の生活全体をふまえて論じる視点、人びとの生活を主体性と被規定性の両側面から捉える視点については、主に都市社会学や生活史の分野で用いられてきた「生活構造」という考え方を参考にした。生活構造とは、「生活主体としての個人が文化体系および社会構造に接触する、相対的に持続的なパターン」として定義される（鈴木 1986、p.177）。生活史において生活構造概念を用いる際の視点については、谷（2008）も参照。

もちろん、ライフコースとライフスタイルはいつでも判然と区別できるわけではないだろう。ここでの区別は整理にあたっての便宜的なものである。

以上をふまえ、次のような構成で検討を進める。まず、対象者のライフコースに注目し、進学、仕事、結婚・子育てと居住地選択の関連を検討していく。ここでは、子育て・教育環境の評価についても分析を試みる(4-3-2)。次に、対象者のライフスタイルの観点から、消費活動とつながり構築、治安の評価について、居住地選択との関連も含めて検討する(4-3-3)。また、地域の今後の展望・期待について語られたことを列記する(4-3-4)。各テーマに関するまとめは各項の小括で行うこととし、本章の最後では昨年度の調査研究結果との関連について考察する(4-4)。

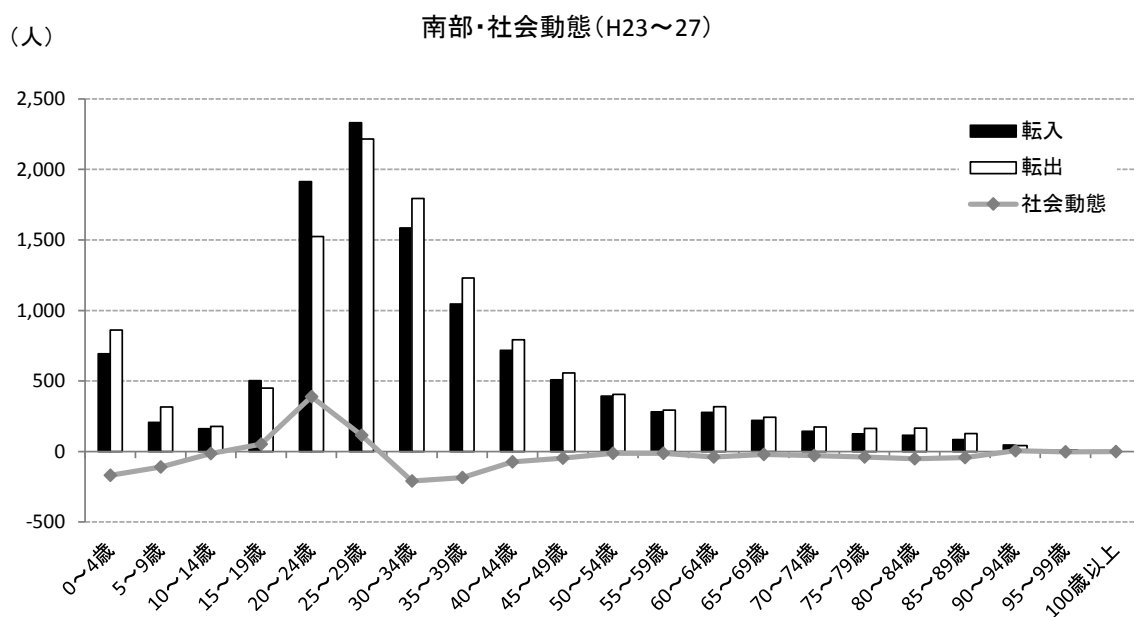
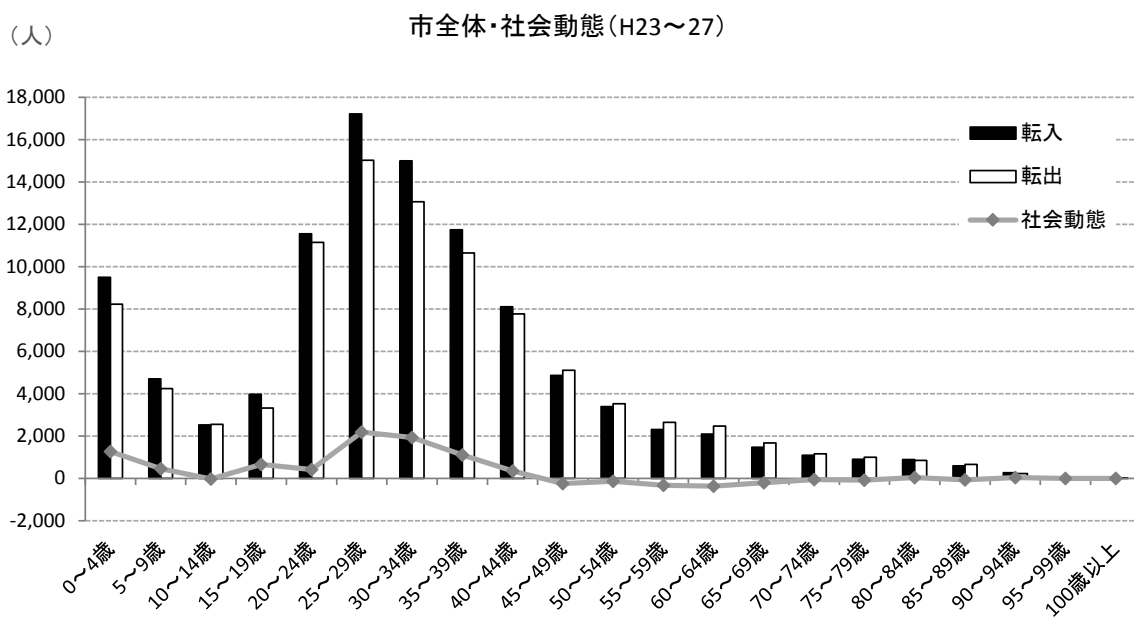
4-3-2. ライフコースと地域

まず、対象者のライフコースに注目し、地域に引きつける力(引力)や地域から押し出す力(斥力)を検討する。(1)進学・仕事、(2)結婚・子育てのタイミングで居住地選択がどのように行われているのかをみていく。

(1) 進学・仕事

昨年度の分析結果を再掲すると(図表 38)、やはり 20 歳代での移動(転入・転出)が市全体・南部地域を問わず顕著である。特に南部では、20~24 歳での社会増が大きい(転入から転出を引いた社会動態が相対的に大きくプラスになっている)。このタイミングでの移動は仕事を理由とするものが主であると考えられる。そこでまず、仕事やその前段階の進学に関連して、各人がどのような居住地の選択を行ったのかを検討することにした。

図表 38 市全域・南部地域の社会動態 (H23～27年度)



資料：住民基本台帳（各年度末現在）

①家の継承を前提としたライフコース

今回のインタビュー対象者のなかには、家の継承を前提として進学先や就職先を選んだという人が4人いた。いずれも何らかの家業を親から引き継いでいる。うち2人は不動産関係の仕事に従事しており、インタビュー対象者のなかでも特に家や家業を継ぐことを前提としたライフコースが選択されていた。

【Lさん（40歳代・男性）】

Lさんは現在、家業である不動産管理の仕事を親から引き継いでいる。代々南部地域に住んでおり、Lさんで15代目と聞いているという。祖父の代までは農業をしていたが、父親の代から農地の管理の仕事を始めた。

長男であるLさんは、子どものころから、「長男やから、家継がなあかんで」と親に耳元で言われてきたという。自分自身でも家の外に出ることはあまり考えておらず、進学先や就職先は実家から通える範囲で考えていた。

地元の学校を高校まで卒業後、大阪府内の大学へ通う。東京への憧れは、「今となってはありますよ。今となってはありますけど、当時としては、もう論外やと。自分は大阪の豊中から離れることはできんやろなつてのがあったんで。行けるのは、阪急沿線の大学、大阪府内の大学ぐらいやろなという」。

その後、大阪市内の会社に入社。初職の就職活動をする際は、大阪周辺が営業エリアになるところに絞って探していた。

会社を辞めて不動産管理の家業を継いだのは、父親が体調を崩したことがきっかけだった。自宅に事務所を構えるかたちで、滞納している家賃の回収、損傷・補修などへの対応、などを行っている。働いている時間はフレキシブルだが、クレームなどがあればすぐに対応しなければならず携帯電話が手放せない。そのため気が休まることがないという。ただし、「先祖代々から受け継いだとこやから守れって言われて育ってきてますんでね。こら守らなあかんていうので、今やってるのもわりかし性に合ってるんかなと思います」。

【Mさん（40歳代・男性）】

Mさんは現在、父親から継承した家業の不動産管理の仕事に従事している。江戸時代から代々南部地域に住み続けている家系であり、現在扱っている土地も先祖から引き継いだものである。子どものころの生活は、比較的余裕があったように記憶している。ただ、中学生のころにはそのことがコンプレックスになっていたこともあると話す。

家や家業を継ぐことは、親から直接言われたというわけではない。ただ、子どものころから家を継ぐことを意識していた。「長男だからそれは止む無しと思うし。やっぱり継がざるをえないだろうというのもあったんで。そういう気持ちはもってましたね」。

子どものころは、親から進学に対するプレッシャーは特になかったが、自分のなかでは大学に進学する必要があるのだろうと感じていた。地元の学校を卒業後、実家から通える近隣の大学へ進学。進学先は関西圏で探し、東京の大学などは考えていなかった。近くの大学に「充分魅力があった」のも大きい。

大学卒業後は大阪の自治体職員となる。就職のタイミングは時代的にバブルの終わりごろであり、民間の求人も多くあったが、将来家を継ぐことを考えて就職先を決めた。「結局、家に残る

にあたって一番影響の少ない、大阪から転勤のない職種を選んだ。結局そういう方向に自分なりに持っていったところがありましたね」。就職後も実家から通勤していた。

自治体職員を辞めて今の仕事を始めたのは、父親が体調を崩し亡くなった後である。家に事務所を構えるかたちで、土地の管理や運用、地代の管理、土地関連の問題の処理などの仕事を行っている。

Mさん自身は自身の子どもに対しても、折に触れて家を継ぐことに関して話をしている。「ちょっと申し訳ないとは思っているんですけど、やっぱり長男にはチラチラとは話してます。将来はちょっとこういう感じになると違うかなとか、言ったりはしてますね。後々、それを本人的にどうとってくれるかというのはありますが」。

このように、子どものころから家と家業を継ぐことを意識しているケースでは、進学先や初職が関西圏に絞るかたちで探されている。進学について言えば、地方圏の場合、自身が望む進学先が近隣にないため遠方へ行くことになり、実家を離れるということも少なくないだろう。しかし、南部地域から通える範囲内には数多くの進学先があり、多様なコースが選択肢として用意されている。Mさんが語るように、そのような進学先のラインナップは選ぶ側にとっても「魅力」がある。

家の継承を前提として進学先や就職先を選んだ4人のうち、2人は商店を経営している。どちらも庄内駅周辺に店舗を構えている。

【Eさん（30歳代・男性）】

Eさんは現在、家業である飲食店・食品販売店を母親と共に経営している。在日コリアン3世でもある。高校生まで家族とともに豊中市内の中部地域に住んでいたが、高校卒業後、家族の移動に伴い南部に転居している。父親と弟も南部地域で製造業に携わっている。

小中学校は当時住んでいた中部地域の地元校に通う。中学校では夜間中学の生徒と接する機会もあり、在日コリアンの歴史などについて考えるようになる。中学の先生の助言もあり、高校は朝鮮語の授業などもとることができた大阪市内の学校に進学した。

商売は母親が始めたものである。現在は庄内駅周辺を含め4店舗を経営している。庄内駅の近くに店を出した理由は、「豊南市場があるからっていうのもあって。お客さんもやっぱりお店関係の方が多いいので。豊南市場行った帰りに寄ったりとか、っていうのがあるので」。

高校卒業後、Eさんは店の経営に本格的に携わり始める。母親が働く姿を幼少期からみてきたこともあり、家の仕事に就くことは自然な流れだった。「親が小さいころから自営業してたっていうのもありますし。たまに仕事の手伝いしたりとかもあったんで、外に行くっていうのはあまりなかったですね。行こうとかっていうのは」。

4店舗も経営しているため、仕事は大変忙しく、休日はほぼない。あったとしても、店の仕入れなどに出かけることが多い。子どもころから経済的なゆとりがあった方ではないが、10年前

から特に景気が悪くなっているのを感じている。「市場自体が結構、お客さんが少なくなってるっていう。高齢化っていうのもありますし。あと、スーパー、コンビニが増えたっていうのもあると思うんですけど。10年前と比べるとだいぶ客足は少なくなりました」。

【Fさん（40歳代・男性）】

Fさんは現在、親の代からの衣料品販売の店舗を継いでいる。父親はもともと四国出身で、就職で大阪に移り住んだ。当初は大阪市内にある衣料品販売の企業で働いていたようだが、しばらくして独立。Fさんが幼少期のころに庄内駅周辺に自身の店舗を構え、それに伴って家族は南部に転入。ちょうど、南部地域の人口がピークだった昭和45年（1970年）前後のことである。「（父親が庄内に店を開いたのは）やっぱり人通りが多かったと。いろいろリサーチをしたんですけども、庄内がやはり活気づいてたというふうに言ってましたね」。

自身が子どものころ、家庭は教育に比較的熱心だった。地方の農家から大阪に出てきて、経済的な上昇を達成してきたという両親の背景があったのではないかとFさんは話す。受験を2回するのは大変だろうという親の意向もあり、高校は大学の附属校に通う。

高校卒業後は内部進学で大阪市内の大学の商学部に進み、経営を学んだ。就職活動の少し前から家業を継ぐことを本格的に意識し始め、就職先は衣料品販売や百貨店に絞った。「子ども心にやっぱり、継ぐんだっていうのはちょっとやっぱりありましたね」。就職先は関西圏を中心に探していた。「そのときは、やっぱり関西エリアでいたいという風に思ったんですね。自宅から通えたらいいなんて、思ってたんですけど」。

結果、衣料品販売の企業に就職。ただ、会社の辞令で関東方面に赴任することになった。働き始めてからは、同期のなかで最も早く店長に抜擢されるなどし、埼玉、横浜、練馬、甲府と店舗を異動。住居もそのたびに関東圏を移動している。その後、20歳代後半で父親から声がかかり、会社を辞めて南部地域へUターン。家業の店舗を継ぐことになった。

商売は、一時期はネット販売を含む多店舗経営を展開していた。ただ、衣料品市場でのファストファッションの隆盛、阪神・淡路大震災を契機とした周辺の店舗や居住者の変化といった状況の変化により、経営を縮小せざるを得なくなる。「（インターネットで売る）商品を扱うための店舗、僕らハコって言うんですけど、ハコが（諸事情で）やっぱりなくなってしまったので、できなくなった。ネットも実店舗以上に売ってたんですよ。実店舗以上に稼ぎだしてたネット商売もいまはないので、生活がめっちゃめっちゃ苦しいですね」。

不動産関連の仕事を引き継いだ2人と同様、商店の経営に携わる2人もやはり、家と家業を継ぐことを子どものころから意識していた。進学先や初職は基本的に関西圏に絞られており、実家から出ることはあまり意識されていない。家や家業を継ぐことを見越したライフコースの選択が、折々のタイミングでなされていると言える。

②結果として家業に携わることになったケース

インタビュー対象者のうち家業を継いだ人の多くは、親からの積極的な働きかけの有無にかかわらず、子どものころから家や家業を継ぐことを少なからず意識していた。ただ、次のOさんのように、子どものころは意識していなかったが、結果として家業に携わることになったというケースもある。

【Oさん（20歳代・女性）】

Oさんは南部地域の出身。家は祖父の代で建築関係の会社を立ち上げ、現在は父親が継ぐかたちとなっている。

Oさんは地元の小学校を卒業後、英語を勉強してアメリカに留学をしたいという希望から、中学校で私学に通った。親からは進学に向けたプレッシャーなどはなかったが、父親は「女の子だから口癖」で、そのことで進路が左右されることもあった。

高校卒業後は、グラフィックデザインの専門学校に進学。ただ、別の進路に進みたいという思いも当時はあった。「進学のときに悩んでたのが、ダンスとデザイン系で悩んで。1番はホンマはダンスに行きたかったけど、もちろんお父さんにまず反対されて。ダンサーになれる人なんか一握りやから、絶対にアカンって言われて。めちゃめちゃまいわけでもないのに絶対途中で挫折するっていう話になって」。

専門学校在学中、グラフィックデザインの方面で就職活動を行う。しかし、狭き門だった。デザイナー関係のアルバイトの話もあったが、専門学校の先生からはその後に結びつかないと助言される。「(グラフィックデザインの会社で) バイトっていったらこき使われるだけ。デザインの勉強はできても、そこから先は絶対ないっていう話になったんで。バイトから社員にあがれると思ったら大間違いって言われたんで。やっぱデザイナーは厳しいみたいで。で、フリーターをして」。

専門学校卒業後は、数年間フリーターをしていた。アルバイト先は、専門学校時代から勤めていた地元のカラオケ店だった。その後は、ネイリストの仕事に就くために専門学校への進学が頭によぎったこともある。ただ、母親の助言などもあり、祖父が設立に関わった職業訓練校で資格を取得。訓練校を終えた後、家族で経営している建設関係の会社に入ることになる。

子どものころには、家業に関わることについて意識したことはない。他方、弟には後継ぎとして期待がかけられていた。現在は弟も、大学を終えた後に家の会社に入っている。

入社してからは、現場から事務まで幅広く仕事をこなしてきた。最近は母親から副社長を引き継ぎ、経営にも携わるようになった。常に体を動かしておきたい性格でもあり、出産・子育てに伴って仕事をセーブするという感覚もあまりなかった。ただ、保育園がなかなか決まらなかったこともあり、本格的な職場復帰は子どもが1歳になってからだった。

経営に関与するようになってからは、仕事が一層おもしろく感じられている。目標は、会社の経営を祖父のころの水準にすることだという。「目標はあれですね、現状をもうちょっと、右肩上

がりにするぐらいですね。おじいちゃんのときの経営に戻したいんで。(中略) やっぱりおじいちゃんがやってた時代が時代なんで。もう、仕事がどんどん入ってくるような時代なんで。場数こなせばっていうのがあるんで。あと、おじいちゃんの人柄もだいぶいいんで、従業員もついてきてっていう、そういうのもあると思うんですけど。目標はおじいちゃんです」。

Oさんの場合、子どものころから家業に関わることを意識していたわけではない。おそらく、男女による社会的な対応の違い(ジェンダー・ギャップ)も関連しているのだろう。家の継承を子どものころから意識していた人は、インタビュー対象者ではすべて長男ないし一人っ子である。

ただ、家業に携わることになったOさんは、祖父の時代の経営を目標としている。現在はOさんにとっても、少なくとも仕事の上で、家の継承は積極的に意識されているように思われる。

③セーフティネットとしての実家

家や家業を継いだ人のケースをみてきたが、居住地選択を左右する条件として、やはり実家の存在は大きい。これまでは継承の側面をみてきたが、実家には(特に経済的な面での)セーフティネットとしての側面もある。このことは特に、非正規雇用の形態で就業しているケースからうかがわれる。次の3人はいずれも、正規雇用の仕事を経て現在は非正規雇用の形態で働いている。

【Kさん(20歳代・女性)】

Kさんは南部で生まれ育ち、実家で暮らしてきた。父親は現在、東京に単身赴任中であり、通常は母親と祖父母、そしてKさんで暮らしている。

小中学校は地元の学校に通う。中学校のころは「ちょっと派手なグループ」とも接点があったが、高校受験に力を入れたいと思い距離を置き始める。「高校はある程度のところは行きたいっていうのがあったから、自然に抜けていくような感じになってました」。

高校進学後は大学で建築デザインを学んだ。大学までは電車とバスを乗り継いで2時間弱かかったが、実家から通っていた。進学時は、関西圏以外の大学を探してはいなかった。父親が東京にいたこともあり、実家から出ることもできたと思うが、「たぶん入学した時は、そんなに自信なかったんやと思います。そこまで離れて成功できる気がしなかった」。さらに、著名な建築家が多いなど、講師陣が魅力的だったことも進学先の決め手のひとつである。

その後は、高校時代からアルバイトをしていた全国チェーンの飲食店で、正社員に登用され、店長として働き始める。アルバイト時代はある程度自由もきくなかで楽しく働いていたが、正社員・店長として働き始めると、労働条件は厳しかった。「やる仕事が多すぎて寝れないし、休みの日も行ってたし。結構たぶんやばいと思いますね」。仕事量が多いにもかかわらず、特定の時間内しか残業時間を記録することが許されないなかで、タイムカードをつけない日々が続いた。店舗では自分だけが正社員であとはアルバイト。客のクレームや従業員の不満は自分に向かっていた。「大学生とかダブルワークの(アルバイトの)人とかから、『稼げてない』とか。でも必要人員し

か入れれないのに、稼げないってみんなから言われても、できなかつたりとか。いろいろ誰かが欠勤ってなった時に、バタバタして、その時にみんなが不満を持って、私に全部ぶつけてきたりとか。できてないことを（アルバイトに）言ったりとかしたりしても、『もう辞めます』とかって言ったりする、そのストレスがすごくて。そうやってしていると、従業員の不満がお客様につながって、お客様がその従業員に怒って、私が謝罪しに行かないといけないってのが、もう毎日なんです」。結果、その飲食店は辞めることになる。

現在の Kさんは、隣接市の小売店で接客販売のアルバイトをしている。働くこと自体は好きで、特に接客業が性格上あっていると感じている。正社員になると時間的に融通が利かなくなり、友人と遊ぶ時間などがとれないため、非正規の形態で働くのが良いとも考えている。

また、結婚したいからというのも、正規ではなく非正規の仕事を選んでいる理由のひとつだ。「今から転職して正社員ってした時に、なんかいろいろ融通効かんかったら嫌やなって思って。その先結婚して、子ども生まれてってした時に、その先で考えたらいいかなって思って、とりあえず今フリーターしてます」。子育ての仕方や、子育て中の働き方については、現在アルバイトをしているところでパートをしている女性などから聞くことも多い。

このような Kさんは、これまで実家を離れて一人暮らしをしたいとはあまり思ったことはない。「別に何不自由ないし、家も駅から近いし住み良いし。大学の時に（実家を）出るっていう選択もあったんですけど、落ち着いてからでいいかなと思って、結局出ないまま大学中退ってなっただけなんで。まあ出るきっかけがないですよ、今。ここからバイト先も近い。バイクで全然通えるし。出るきっかけがない」。家族が好きなことや経済的な負担も、実家で暮らしている理由のひとつだ。「別にこだわって絶対ここにずっといたいっていう訳でもないです。でも、家族は好きやし、実家におれるんやったらおったらいいかなぐらいです。一人暮らしってなったら、お金かかるし」。

また、父親の関係で年に数回のペースで東京に行っていることもあり、東京にはあまり憧れはない。「東京住んだら、テレビの番協行ったりとか、ライブとかもそっちの行ったりとかってのが楽しいやろうなぐらいで。でも関西でいいなって感じです」。

【Jさん（20歳代・女性）】

Jさんは南部で生まれ育ち、現在も地域内で両親とともに生活している。母親の実家（祖父母の家）がすぐ近くにあり、子どものころからよく行き来している。なお、後述の Iさんとは姉妹の関係にあり、Jさんが妹である。

地元の小中学校に通った Jさんは、高校はスポーツ科へ進学。卒業後は、高校生のころに大きな怪我をしたことがきっかけで興味をもち、リハビリやトレーニングを学ぶ専門学校へと進んだ。

専門学校卒業後は、大阪市内のホテルのなかにあるフィットネスクラブに就職する。専門学校からアルバイトをしていたところに、卒業後、正社員として登用されたかたちである。人と接することが好きな性格もあり、職場はとても楽しく、仕事もできる方だった。そんな自分に

自信も感じていた。「X(=ホテル名)なんで、やっぱりかしこまって言葉づかい気をつけて。名前を全部把握しとかないといけないので。VIPの方なんで、対応とかも気を付けて。どのタイミングでその人が着替えされるかとかも全部把握した状態で。もうそれができる自分、やばい、みたいな」。ただ、諸事情で退職を余儀なくされる。

Jさんは退職後、子どものころからの夢だった歌手になりたいという思いもあり、大阪市内のライブハウスやストリート、商業施設のイベントなどでの歌手活動も始めた。自費制作でCDもつくった。ただ、今のところ、歌は仕事というよりも趣味のかたちで続けるのが良いとも思っている。

現在は大阪市内の衣料品販売店で、週4~5回ほど販売接客のアルバイトをしている。アルバイト先を選んだ理由は、服が好きだからということに加え、前の職場を退職後に始めた髪の毛の染色などが許される職場であること、梅田の商業施設で働きたかったことなどである。「なんで(今の店に)入ったんと言われれば、髪の毛とネイルをやってしまったので、そこがOKなところで、かつY(=大規模商業施設名)っていう。『Yで働いてます』って言いたかっただけなんです」。

【Aさん(30歳代・男性)】

Aさんは、子どものころに父親の仕事の都合で一時転出していたことはあるが、基本的には南部地域の実家に住み続けている。

Aさんの父親は地方出身の次男。高校卒業後、就職で大阪へ出てきて会社の寮があった南部に住み始めた。ちょうど、南部地域の人口が急増していた時代である。結婚後も両親は南部に住み続ける。住居は通称「ニコイチ」と呼ばれる2軒隣り合わせで建てられた住宅だった。両親が南部に住み続けた理由をAさんははっきりとは知らない。ただ、父親の勤務先が大阪府内を何回か移動するなかで、「どこへ出ていくにも近い場所ではあったと思う」と憶測する。

Aさん自身は地元の小学校、中学校を卒業後、高校は進学校へと進んだ。子どものころから親には勉強をするようにと言われていた記憶がある。地方の高校を卒業して大阪に働きに出てきた父親にとっては、子どもには大学に行ってほしいという思いがあったのではないかとAさんは推察する。進学校だった高校での勉強は大変厳しかったが、Aさんは生徒会にも入り積極的に活動していた。生徒会で豊中まつりに参加することもあった。

高校を卒業したAさんは、実家から通える大阪府内の大学に進学し、法学を学んだ。大学進学の際には、東京など遠くの大学は考えたこともなかった。

その後のAさんは、非正規雇用の形態のものを中心に、複数の仕事を体験することになる。いくつかの仕事は、そのときどきの出会いのなかから見つけてきた。まずAさんは、野外活動関連の施設でアルバイトとして働き始めた。施設に関係する団体は、Aさんが18歳のころからボランティアで関わっていたところだった。ボランティアのきっかけは、豊中市が行っていた事業に当時中学生のAさんが参加したことにさかのぼる。

また、その施設でアルバイトをするなかで、豊中市役所の職員とも知り合う。そのつながりの

なかで臨時職員募集の情報を知り、複数回働いたこともあった。イベントの企画を任されるなど、やりがいを感じることもあったという。

一時期、大阪市内にある弁護士事務所に正規の事務職として勤めていたこともある。きっかけは、高校時代から関わりをもち始めた豊中まつりにボランティアとして関わっていた際、新しく事務所を立ち上げる弁護士とたまたま出会ったことだった。Aさんはその弁護士の事務所で正規の職員として働き始める。大学時代に学んでいた法律が嫌いになったわけではなかったため、仕事自体は楽しかった。

インタビュー時には、南部地域で活動するまちづくり団体に所属し、その事業を担当するなどして働いていた。その団体についても、市の臨時職員として働くなかで知り、代表に直接声をかけたつながりから関わるようになった。「(団体の) チラシが(職場に)置いてあって、そういうのができてんなと思って。で、3月で(臨時職員を)やめるときに、ちょうどXさん(=団体の代表者名)に会って。ひょっとしてXさんに声かけたらなんかあるのかなと思って。で、声かけて。なんかあるっていても別に、何も特に思わずに声かけて。ほんなら、なんかここに来ることになったと」。

このようにAさんは、それまでのつながりや偶然の出会いのなかから、さまざまな仕事を経験してきた。ボランティアによく参加することについては、子どものころから母親が積極的に関わってきたため、そのことが影響しているのかもしれないともいう。ボランティアは趣味だとも、生活の中に浸透しているものだとも語られた。「漠然とした使い方なんですけど、(趣味は)ボランティア、みたいな」。

Aさんはひとり暮らしをしたいと考えたことはあまりない。非正規の形態で働く中で、一時的にひとりで宿泊するということが何度かあった。ただ、そのような経験を経ても、実家を出てひとり暮らしをすることは「あんまり考えたことはないです」。

以上の3人の場合も、進学先は実家から通える関西圏内で選ばれている。周囲にある大学に魅力的な講師陣がいることなどが、進学先の決め手のひとつになっているケースもある。都市圏の進学先の豊富さが、地域に人を引きつける力になっていることが再確認できる。

また、東京での生活や一人暮らしへの憧れも強くはなく、地元で暮らすこと、実家に住み続けることが進学時には選択されているようだ。地元や実家から離れることについては、場合によってはリスク回避の側面もうかがえる。大阪都心で働きたいという思いから仕事先を決めたり、そこで働いていることを自負していたケースも見られ、都会的な働き方に対する志向が抱かれる場合も、南部地域に住みながらある程度充足できているように思われる。

さらに、学校を終えた後に何らかの経緯で非正規雇用の形態で働く人たちにとって、住まいが確保されている実家は経済的なセーフティネットとして機能している面があると言える。「一人暮らしってなったら、お金かかるし」というKさんの話が象徴的だろう。関西圏の進学先を選び実家に残った場合は特に、非正規雇用での働き方を続けながらあえて実家から出て一人暮らしをするという選択は、慎重にならざるを得ないかもしれない。

また、特に A さんの場合、実家だけではなく地域がセーフティネットになっているという側面も読み取ることができるだろう。正社員からボランティア（有償を含む）の間のグラデーションのなかでさまざまな仕事あるいは活動を実践している A さんは、それらを子どものときからの社会関係をつなげることで得てきた。その社会関係は、地縁としての側面も、「選択縁」（田所 2014）としての側面も含まれているように思われる。いずれにしても、A さんにとっての南部地域での定住は、地域やその周辺に埋め込まれた社会関係とも関連している。その意味で、実家に住み続けることで蓄積されてきた「ローカルな社会関係資本」を活用しながら、南部で定住しているケースであるとも言える。

社会関係資本という概念について少し触れておく。社会関係資本に関する議論は、大まかに 2 つに大別される。いずれも社会関係を何かに転用し利得を生むひとつの資本と捉える点でちがいはないのだが、一方には、その資本が生み出す利益を主に資本の所有者が享受すると考えるタイプの議論がある。他方には、その利益が所有者以外の人も含めた共同体全員によって享受されると考えるタイプの議論がある（浅野 2011、p.39）。つながりから仕事を得てきた A さんのケースの場合、社会関係資本が仕事というかたちで所有者の利益に転換したと考えることができるため、前者のタイプの議論にあてはまりやすい。

社会関係資本の後者のタイプでの機能の仕方は、人を地域に引きつける力を探るという今回の議論の目的に照らせば、地域が人びとによって愛着を寄せられる場所になっている、といったかたちであらわれていると考えられる。社会関係資本が地域への愛着などとして表出するケースについては、4-3-3 の (2) 「つながり」で検討することにする。

④ 正規雇用で働きながら実家に住む

次にみる 2 人は、いずれも正規雇用で現在は大阪市内で働いている。調理師の N さんはこれまでずっと南部在住、独身時代は実家で暮らしていた。事務職の I さんの場合、一度会社の転勤で東海地方に移動して実家から離れたが、大阪に戻ってからは再度実家で暮らしている。

【N さん（30 歳代・男性）】

N さんは、現在、配偶者と子ども 2 人と暮らしながら、大阪市内の飲食店で調理師として働いている。父親は就職時に地方から大阪に出てきており、単身時代には文化住宅に住むなどして南部地域に住み続けてきた。

N さんは地元の小中学校に通った。当時、周囲が少し荒れていたこともあり、自身も少し「ヤンチャ」だった時期がある。ただ、「親はもうホントに立派な人間」だった。「自分のいまの生活は親の教育の賜物やと思います」。

高校卒業後は、調理師を目指して神戸の調理師専門学校へ。専門的な料理の経験が必ずしもあったわけではないため、専門学校で技術を身につけることになる。調理師の世界では、調理学校に行かなくてもいいという人もいるそうだが、N さん自身は行ってよかったと感じている。「何を

勉強して何を吸収するかっていう、人次第。僕は行ってよかったです絶対」。

専門学校卒業後は調理師の仕事に就く。ただ、最終的に自分の店をもつという目標に向けて、キャリアアップのために勤め先を何度か変えている。「もともと僕は、居酒屋、自分の店をやりたいのがあって。その勉強のためにホテルの調理師として働いて、ある程度（基礎的な）技術を身につけてから辞めようと思ってたんです。（中略）で、次は自分の目標のために居酒屋に行って、そこで2年間、まちなかの居酒屋の働き方を勉強して。いま働いてるところは結構大きな会社なんですけど、そこで経営の、店のやりくりの仕方とかを学んでみようかなと思って」。

自分の店を出したいと考えていたのは、調理師の勉強を始めた最初のことからである。友人と一緒にお酒を飲むのが好きのため、「自分の店ができたらみんな来れてすごいいなっているのがあった」。自身の想定では、いまの職場を辞めた後は、改めて街場の個人経営の居酒屋に数年勤めて感覚を取り戻し、その後に独立することを考えている。出店先として考えているのは庄内である。「落ち着いた雰囲気、庄内にはないような。かといって敷居が高いつてもないような店がいいですね」。

現在は結婚し、自身の家を建てて家族と暮らしているNさんだが、未婚時代は実家から職場に通っていた。何度か転職しているが、大阪以外で働くという選択肢はそもそもなかった。「もう、庄内出るという頭がなかったです。ひとり暮らしも別にしたいというわけでもなかったんで。もう家おったらええなって。ご飯もつくってくれるし。お金だけ入れとったらいいやと思ってたんで」。調理師の給与は「厳しいところは厳しい」面があり、ホテル時代は自身も厳しかった。そのため、当時はひとり暮らしをすることが現実的に難しかった。「お給料が少なかったんで。外に出ても、ひとり暮らしできないぐらいだったんで」。

【Iさん（20歳代・女性）】

Iさんは、現在、大阪市内の会社で事務職として働いている。母親の実家（祖父母の家）がすぐ近くにあり、子どものころからよく遊びに行っている。なお、先述のJさんとは姉妹の関係にあり、Iさんが姉である。

Iさんは地元の小学校を出た後、塾の先生に「ちょっと乗せられたみたいな感じ」もあり私立の中学に進んだ。親からは、大学進学や就職についてについてプレッシャーをかけられたという記憶はない。ただ、「わからんなりにいい高校行って、いい大学行って、いいところに就職する、せなあかんしするんやろうなと思ってました」。高校・大学と偏差値をひとつの基準にしながら、しかし、親ではなく自分で進学先を選んできた。そんな姉のことを妹のJさんは、「同じ歳の人らとはなんか、ちがう人やと思ってました」と振り返る。

Iさんは高校卒業後、実家から通える大学の情報系の学部に通う。就職先も大阪市内の企業だった。現在は「（東京は）遊びに行くところ」と感じているが、以前は東京で働きたいという思いも少しあった。ただ、実家から離れることを親が望まないという理由もあり、就職先は近くで探した。大学生になってからはフットワークが軽くなり、東京に遊びに行くことも増えたが、それ

にともなって東京への憧れも少なくなっていた。「東京に行くことってすごい元々憧れとかあったんですけど、今もうなんか、ちょっと京都行くぐらいのテンションで行けるようになったんで」。

現在は大阪市内の企業で正社員として働くIさんは、一時期、東海地方に転勤していた。「ひとり暮らしの生活自体はよかった」が、転勤先での仕事は大変だった。大阪に戻ってきてからは実家で暮らしている。「ひとり暮らしの生活自体はよかったんですけど、(転勤先の)仕事がしんどすぎて。で、大阪になって自動的に大阪に住むんやったら、家賃補助も出ないし、実家があるんで。で、実家って感じで戻ってきましたね」。

現在は比較的自由が効かなかで仕事をしている。ただ、「一生この会社におるとは思わないですけど。結婚もしたいし」。また、いまの仕事に就いてから、大学時代から学んでいたパソコンが好きだと気づいた。タイミングがあえば転職もありえるかもしれないが、いまの段階で具体的に考えているわけではない。「大学のときもずっとパソコン触ってはいたんですけど、関係ない仕事に就いたんで。就いたことによって、なんかこう、あのときもっと勉強しとけばよかったなっていうか。なんで今ちょっと、SA(シスアド)とかにも興味出てますけどね。行動に移すほどでもないですけど。っていう、やんわり、ふんわりした感じです」。

NさんもIさんも就職以来、正規雇用の形態で働いてきた。ただ、Nさんの場合は、ホテルのレストランで働いていた駆け出しのころは、ひとり暮らしは経済的に難しかった。正規雇用で働く人にとっても、実家は経済的なセーフティネットとして機能する場合があることがうかがえる。

また、Iさんの場合、実家を離れないひとつの理由は、自分たちが離家することを親があまり望まないということが大きいようだ。ジェンダーの影響を考慮することもできるだろう。ただ、家賃補助についての言及があるように、ひとり暮らしに特に経済的なメリットもないなかで、実家から離れる積極的な理由がIさん自身にとってもないということかもしれない。

またIさんは、かつて抱いていた東京で働くことへの憧れについても言及している。今回のインタビュー対象者のなかでは、東京への憧れのようなものは、他には先述のLさんから少し聞かれたのみだった。学校段階があがることに並行して、「いい学校、いい大学、いい就職」というライフコースが想定されるなかで、東京への移動志向が加熱された面があったのではないかと推察される。南部地域は都市圏に入るため進学・就職先は豊富であるが、そのなかでもより高い地位達成を志向する場合は、地域からの転出が起こりうると考えられる。

⑤「ツレ」との支え合い、「バトン」の引き継ぎ

これまで、地元出身者が南部地域に残る背景にある要素として、家の継承、セーフティネットとしての実家、ローカルな社会関係資本についてみてきた。次に、これらの要素が複合的にみられるケースを見てみたい。

【Bさん（40歳代・男性）】

Bさんはもともと豊中市外で生まれ、幼少期に家族と南部地域に転入した。市外の鮮魚店に勤めていた父親が、南部地域の市場にあった鮮魚店を引き継ぐことになり、それに伴う移動であった。ただ、スーパー形式の店舗の隆盛や、鮮魚に対する当時の風評被害の影響などにより、Bさんが小学校高学年のころに父親の鮮魚店は廃業。子どものころには、経済的にしんどい生活を感じていた時期もあった。

父親が廃業してからは、近所の目を感じてしまいあまり居心地が良くないこともあった。ただ、高校生になると市場の入り口にあった飲食店でアルバイトを始め、そのことでBさんは「地元にもう1回再登場」した。「僕が高校生のときに、そのXさん（＝店名）でアルバイトしたりとか。ほんなら、『店つぶした魚屋の子が今Xさんおるで』っていう話から、地元にもう1回再度登場みたい。それまでは店つぶしたことをつつかれるから、近所も歩きたくないんですよ。（中略）ただそのXさんだけはようしてくれて」。「結婚するときには（その店の）おっちゃんに仲人してもらってというのが夢やったから、おっちゃんに仲人してもらって。で、今度その息子が長男結婚するときには、今度は僕に言ってきて。っていう縁でいまでもつながってるんですけど。ありがたい。市場がきっかけですね」。

父親はその後、仕事があまりうまくいかない時期もあったが、Bさんが高校生のころにスーパーの鮮魚部門に就職。家計も安定してきた。

Bさんは地元の小学校、中学校を卒業し、豊中市内の高校に進学する。当時の中学校は少し荒れていた。Bさん自身は親友からの抑制もあり反学校的な行動に本格的に足を突っ込むことはなく、マジメな生徒とヤンチャな生徒の中間的な立ち位置にいた。そのようなBさんは親友と共に、他の生徒が行き過ぎた行動に出ないように抑制する役目を、先生たちから頼まれることもあった。「たとえば授業中抜け出す子がおる。ほんなら、抜け出した時点で先生が出ていたらもう授業が止まってしまうから、先生が『悪いけどBとY（＝親友の名前）で止めに行ってくれ』と。とりあえず学校から出さんといてくれと」。

高校卒業後は、進学ではなく就職を志望した。父親と同じ魚の仕事に携わりたいという思いもあり一時スーパーの鮮魚部門に勤めるが、仕事が大変厳しく半年で辞めることになる。その後はアルバイトを半年ほど経た後に、親戚のつながりで左官の仕事始める。この間、一時的に豊中市内の中部地域でひとり暮らしをしたこともあったが、基本的には実家で暮らしていた。

バブル景気の影響もあり仕事は順調だった。しかし、Bさんが20歳代後半のころに建築業界がバブル崩壊の影響を被る。その後、Bさんは30歳手前で建築関係の会社を立ち上げて独立。当初は職人を雇用していた。だが、地方自治体の契約方法の変更の影響で元請け会社が廃業するといったこともあり、Bさんの会社も経済的な被害を受けることに。そのような経験から、「不可抗力で自分の人生とか家族が傾くのは、ちょっと嫌やな」と思い、職人を雇用する形態を辞め、いわゆる「一人親方」の形態へと会社を転換することになった。「自分が一生懸命やっても、人のそういうことで人生が変わるのは、なんか本意ではないなと。だから結局、浮かぶも沈むも自分の

せいにしたいわけですよ」。

仕事内容は、当初は左官業が中心だったが、現在はリフォームなども含め幅広く建築関係の仕事を請け負っている。事務所は自宅においている。もちろんすべてではないが、仕事は同窓生のつながりのなかから得られる場合もある。同窓生と仕事を一緒にすることは、当時の仲間とお互いに支えあうような関係でもあると言う。中学校までの仲間は高校進学後、中退することも少なくなかった。そのため、「結局そっから社会に戻るのに時間かかるよね。結構みんな苦勞してたと思う」。30歳代の後半ぐらいからは、「社会に馴染めなくなった」仲間も改めて出てき始めた。だが、「それをこっちが助けて、っていうので仲間内で仕事したりとか。僕も建築してるから、ツレが電気屋やったら、じゃあそいつと一緒にやろうやとか。誰々はクーラー屋やから、じゃあクーラーはここにしようとか。誰々の後輩は水道屋やからとかっていって、いまはつながっていって。それだけじゃ食べられへんよ。当然みんな、よそともせなあかんけれども。でもなんか、そこでまた会えたんは、いますごくいいかたちかな」。

さらに、Bさんが南部地域に残ったのは、「親父が店潰したことへのリベンジ」という側面もある。「親父が店潰したことへのリベンジじゃないけど、汚名返上じゃないけど、したいっていうのは、どっかにあるんです。やけど、それがどういうことなんかは、そんなときにはわかってない。だから、はじめて地域の活動に関わったのも、ひょっとしたらそんな気もあったんかもしれん。お世話になったからとか恩返しとあって言いながらも、Z(=Bさんの苗字)っていう名前を、なんかみんなに褒めてもらいたいっていう気があったんやけど。最近はどうもそれはなくなって」。

そのようなBさんにとって家を建てることは、ひとつには、子どもに何かを残すことである。同時に、子育てをしっかりとすることが親孝行にもなると考えている。「相当無理して30のときかな、家をしたんです。それから確かに生活も苦しくなりますけども、でも、1個は子どもたちに何か残せるっていうのは親としての大前提やけど、子としてみれば、僕は親孝行やと思ってるんです。僕がうまいこと子育てしてる、うまいことっていうか子どもにちゃんと飯食わしてる、寝るとこと住むとこ与えてるっていうことが、親孝行やと僕は、勝手な理解ですけど。いまこの次バトンもつであらうやつらを、ちゃんと育てるということは、親孝行やから、とって」。

また、住宅の購入は、周囲から「そんなことでできひん人間」と「レッテル」を貼られてきた自分たちが、社会的な信用を得ることであったという。それは同窓生のあいだで、いい競争も生んだ。「家をもつっていうのは、ひとつ僕らの目標やったと思う。それこそ、そもそもなんかレッテルも貼られてるし。そんなことでできひん人間やって。家をもつって1個なんかその、社会的に信用がないとできひんっていうようなことがあって。で、僕もそうしたんやけど、1人が買えばみんな無理してやるやろと。意地でもついてくるやろと。で、それ買ったことも自慢もせえへんけども、そんなときみんなホンマに競い合っただけです」。

自営業をしていたという意味では父親との連続性があるが、Bさんは親から直接家業を引き継いでいるわけではない。そのようなBさんは、短い間ではあるがフリーターを経験していた。実家はそのとき、セーフティネットとしての機能を果たしていたのではないかと思われる。

また、Bさんは同窓生とのつながりのなかで仕事をすることもある。そこには、昔からの仲間（「ツレ」）をお互いに支え合うという意味もあるようだ。その意味では、ローカルな社会関係資本が仕事に活かされている面があると言えるだろう。住宅を購入する際にも、仲間同士の支え合いは意識されていた。

さらに、家業を親から継いでいるわけではないが、Bさんが地域に残ったのは父親の「リベンジ」という側面もあるようだ。高校生時代のアルバイトや初職についての話などにも、その片鱗が見られるように思う。自身の子どもに「バトン」をつなぐことが「親孝行」という話も含め、ここには広い意味での家の継承に関する意識を見ることができる。

⑥進学・就職を期に地域を離れたケース

進学あるいは就職の際に地域を離れ、その後に戻ってきたケースを簡単にみておきたい。Dさんは、元プロサッカー選手であり、高校から地元を離れ、チームの移籍などに伴い各地を移動してきた。Cさんは、中学から始めたスポーツで大阪の企業の実業団に入り、全寮制だったこともあり豊中市外の寮で生活していたことがある。

2人のケースをふまえると、南部地域は周囲に進学先や就職先が地方圏に比べて相対的に豊富ではあるが、仕事の都合により地域から転出するケースは当然多くあると考えられる。仕事の関係で遠方へ移動することになった、FさんやIさんのケースも想起できるだろう。また、2人の場合はスポーツだが、特別な進学コースや仕事を選択するケースもまた、地方からの転出が必要となる場合が多々あるだろう。

この2人が再度地元に戻ってきたのは子育てを大きな理由としていた。重複を排するため、2人のケースについては、本項(2)の結婚・子育てのタイミングでの居住地選択を検討する際に詳しく紹介したい。

⑦仕事の都合による転入・定住

今回インタビューをした転入者の中には、仕事の都合により転入したケースが1人みられた。Gさんはもともと北関東の出身だが、配偶者の仕事の都合により南部へ転入した。Gさんのケースは、南部地域から仕事の都合で転出した人たちが当然多くいることを確認させるものである。他方で、これまでの地元出身者の話からは聞かれなかった、移動を後押しする別の要素の存在を示唆するものでもある。

【Gさん（40歳代・女性）】

Gさんは北関東で生まれ育ち、地元から出ることがないと思って過ごしてきた。Gさんが地元を離れたときの出身市の人口は、約4万人だったと記憶している。農地や山も多く、「(車も)1人1台もってますし。仕事行くのにも、電車なんか30分に1本来るか来ないか」というようなところだった。

Gさんは高校卒業後、専門学校に行きたいと考えていた。だが、希望する花屋の専門学校は東京にしかなく、学校のカリキュラムに留学が組み込まれているなど、経済的な負担が大きかった。母親がシングルマザーだったこともあり、同校への進学は経済的な理由から断念。実家近くの短大に進学する。短大卒業後は花屋でアルバイトとして働き、後に正社員として登用される。実家は門限が厳しいなど制約が大きかったため、自由な生活が性格的に合うというGさんは、職場の近くでひとり暮らしをしていたこともある。

同県内の男性と結婚後は、配偶者の親に二世帯住宅を建ててもらい、同居していた。ただ、配偶者の大阪への転勤が決まる。Gさんが20歳代後半のことだった。Gさんが南部地域に住むことになったのは、そこに借り上げの社宅があったということに加え、車で出かけなくてもすぐ近くにスーパーや商店街がある環境に、生活の便利さを感じたことによる。

Gさんは現在、豊中市外の花屋でパートをしている。下の子どもが小学校にあがるときに働き始めようかと考えていたが、小学1年生を置いて仕事に出るのはやはり難しかった。

数年前、配偶者に東京への異動希望が出せるタイミングがあった。最終的な判断は配偶者に任せたが、Gさん自身は子どもが育つ環境が変わるのはよくないのではないかと感じていた。また、実家との距離を確保したいという希望もあった。「たぶん（親と）同居しているんなメリットもたぶんあると思うんですけど、私、自分のペースが乱されるのが何より嫌なんですよね。やりたいことが決まっているので。それが耐えきれない。ちょっとの間、田舎帰っても、今日はこれしようと思っても、これするからって決められるから。もうなんにもできない」。

南部にすでに住宅を購入しているGさんは、今後も南部に住み続けるつもりである。ここだと車が運転できなくなる年齢になっても、電車で移動ができて便利だ。「主人は田舎にまた帰りたいたいと思ってるみたいですけど。私は、もうなんだろう、田舎帰ってもね、何をしたらいいのかな」。

仕事の都合による豊中市外からの転入は、今回のインタビュー対象者ではGさんだけだったが、より広範に見られる現象だと思われる。他方で、南部地域から仕事の都合で転出するケースも多々あるだろう。

加えて、実家と距離を置きたいという話は、南部に住み続けている地元出身者からよく聞かれたエピソードとは対称的である。地元出身者の場合、実家があることは地域に住み続ける引力のひとつだった。だが、実家があることは、個人のパーソナリティを含めた諸条件によっては、地域からの斥力として働くこともある。同様のことは、次にみる実家からの自立志向が強いHさんにもうかがわれる。今回は南部地域に転入してきたケースのみだが、このような実家の斥力の結果としてすでに南部外へと転出している人、あるいは南部からの移動を志向している人も少なからずいると思われる。

また、Gさんの話のなかでは、地方と都市との生活の比較がしばしばなされ、現在の生活の良さが語られている。南部地域が都市圏にあり、さらに都心にも近いことは、より都会的な生活を求める人びとを地域に引きつける力になっていると言えるだろう。さらにGさんのケースからは、

生活利便性が確かに南部地域に人を引きつける引力になっていることがわかる。この点については、次項の(1)消費活動のパートで詳しく検討したい。

⑧大阪音大の卒業生のケース

次に、大阪音大の卒業生の移動を見ていきたい。Hさんは大阪音大の2年生のときに賃貸住宅を借りるかたちで、Pさんは進学を期に寮に入るかたちで南部地域に転入してきた。Hさんはコントラバス、Pさんは声楽が専門であり、どちらも大学卒業後はアルバイトを複数掛け持ちしながらフリーランスの音楽家として活動している。

【Hさん(20歳代・男性)】

Hさんは関西の都市部出身。生まれ育ったところは住宅街で、少なくとも自身が子どものころは「おもしろくないまち」だったと振り返る。家族は音楽には特にかかわりはなく、自身も子どものころから楽器を習わされていたということもなかった。父親は医師であり、子どものころから経済的には比較的余裕があったのではないかと言う。

高校生のときに軽音楽部に入部。エレキベースを弾き始める。そこからコントラバスに興味を持ち始め、高校2年で吹奏楽部に入部した。コントラバスの奏法は吹奏楽部にレッスンに来ていた講師から教わるが、その講師に音楽の方面での進学を相談したところ、大阪音大をすすめられる。その講師も大阪音大の出身だった。

大阪音大では教職の免許もとれることから、学生のなかには将来学校の先生になりたいと考えている人も多い。ただ、自身は音楽の方面に進学しようと考え始めたころから、スタジオミュージシャン(自分以外のミュージシャンがレコーディングなどを行う際に演奏する人)になりたいと思っていた。フリーランスのベーシストとしての仕事は、在学中から少しずつ始めていった。

大学入学後はしばらく実家から通学していたが、大学3年生のときに南部に転入し、ひとり暮らしを始める。南部に転入した理由は、もちろん大学に近く通いやすいこともあるが、大阪や京都などの都心部、あるいは新大阪駅が近く遠方へと移動しやすく、卒業後のフリーランスの仕事のことを考えてもメリットがあると考えたためである。「僕はですね、一応、音楽で食べていきたいというふうに思いまして。で、(南部地域は)大阪に出るのにすごい便利な場所なので。実家から大学へは2年間通ってたんで、通えなくはなかったんですけど、こっちに住んだ方が卒業してから便利かなと」。「(大阪市内の他にも)京都にもスッと行けますし。新大阪駅も近いですし」。

Hさんは大学卒業後も引き続き、南部に住み続けている。南部に定住している理由のひとつは、京都などにも行きやすい阪急沿線であることに加え、楽器の演奏が可能な物件が多くあるためである。転居先として十三など別の場所を探したこともある。ただ、ピアノの演奏が可能な物件でも、床に音が響くコントラバスの演奏が可能なところは南部以外ではなかなか見つけられなかった。「楽器OK、楽器を弾いていい物件っていうのが多いのが(この地域に住み続けている)一番の理由です。1回、ちがう場所を探したことがあるんですけど、やっぱりなかったんです。ピア

ノはOKでも、僕の楽器がOKじゃないときがたまにあって。自分の楽器(=コントラバス)って、地面に刺してやらないといけないんですよ。床に当てて響いてるぶん、やっぱり下の階とかにうるさかったりするんで。だから下がスナックだとか、ゲタのマンション探したりとかしてみたんですけど、やっぱり不動産屋さんとしては、言うたら得体のしれないもんなんで、苦情が来たときにまためんどくさいから、ちょっとそれやったら、みたいな。それやったらもう庄内でOKなところでいいや、っていう感じで」。

南部には、防音設備がなくとも特別な楽器の演奏が可能な物件が多くある。また、Hさんのような音楽関係者を集めている物件もあり、常識の範囲内での音出しに別の部屋の住人が比較的寛容だったりもする。そのため、地方出身者を中心に、大阪音大の在學生や卒業生、あるいは他大学を卒業した音楽関係者が「結構庄内には住んでると思います。息をひそめてるだけで」。Hさん自身、南部に住み続けてきたなかで、そのような音楽関係者とのつながりがある。「音楽関係者は結構いるですよ、ここに。うごめいてるんですよ。パークリー音楽大学とか。京都市立芸術大学、大阪芸術大学、相愛大学の卒業生だったりとかも結構散らばってますし。沖縄県立芸術大学のやつとかも前までいましたし。やっぱ楽器OKっていう物件があるよっていうので、いろんなコミュニティから集まってきて」。

Hさんは現在、メインの仕事としてはフリーランスのベーシストとして働いている。学生時代に就職活動はせず、音楽関係の特定の団体に所属しているわけでもない。ただ、演奏の仕事だけで生活することは現時点では難しいため、いくつかのアルバイトも兼職している。現在定期的に行っているのは、学童保育やホテルの配膳の仕事などである。かつて自身が教わったように、高校の部活などでの講師もしているほか、不定期で入ってくるアルバイトなどもある。仕事の場所としては、学童は大阪市内、ホテルの配膳の仕事は大阪市内をはじめ関西圏の複数の箇所に派遣される形態である。

音楽文化の変化もあり、音楽だけで食べていくことは簡単ではない。また、大阪は地域的にも音楽の仕事は厳しくなっている。「やっぱ東京に比べたら(大阪は)もう絶対的に(音楽の仕事は)少ないです。今はやっぱキャバレーとかの箱バンみたいな文化ももう廃れつつあるんで。そこに1か月ずっと弾いて生計立てれるっていうのはもうなくて。本当にもう個人事業主としてベースをあれこれやりますっていうので、売っていくしかやっぱりない」。

フリーのベーシストとしての仕事やアルバイトなどは、大阪音大の卒業生などとのつながりのなかで得られることが多い。先輩・後輩の関係の間での音楽関係の仕事のやりとりは、お互いの信頼関係のなかで行われている。「(音大の卒業生とは)いまだにつながってます。先輩から仕事もらったり。僕もその、あげるって言ったらおこがましいですけど、自分が行けないときに頼んだりとか。で、後輩は後輩で、先輩が紹介した仕事っていう責任感も芽生えて、下手なまま練習せずに行くとかないように、トチったりしないように頑張るっていうのもありますし。先輩側からしたら、(後輩が失敗したら)自分の顔を潰されるわけですから、ちゃんとやってくれそうな人に頼んで。(後輩のほうは)先輩の顔を潰さないように、その先輩が自分に言ってくれたからって

いうふうに考えて行ったりとか」。もちろん、大学の同窓生だけではなく、ジャズの世界での人間関係なども現在は築かれている。

Hさんは大学卒業後、東京に行くという選択はとらなかった。「(上京は) ちょっと怖がってやらなかったです」。「将来の不安もなかったわけではないですが、(大学卒業後は) ちょっとダラダラとした期間がしばらくは。結構みんなそんな感じの人が多いですね」。

Hさんが南部に定住している理由としては、交通の利便性や楽器の演奏に許容的な住宅があることに加え、「下町」への選好があるようだ。Hさんは大学生活について、「庄内色に染まるというか、下町な感じが僕はすごい好きでしたね」とも言う。南部でひとり暮らしをしていたHさんは、大学が閉まる夜間まで仲間と一緒に練習したりしゃべったりという時間を多く過ごす。南部でひとり暮らしをしていたHさんの部屋は、友人の「たまり場」にもなっていた。Hさんは、作者が自身の学生時代をモデルにしているとも言われる、下宿学生たちの日常生活を描いたある漫画(いしいひさいち『バイトくん』)の世界観が好きだが、「それもあるかもしれないですね、ここが好きっていうのが」。そして、大阪音大を卒業したことをHさんは誇りに感じている。「すごいこう、誇りには思ってるんですけど。このへんの地域ならではの感じっていうか。京都(の大学)とはまたちょっと違った感じで」。

また、父親が医師であり、子どものころから経済的には比較的ゆとりのある生活をしていたというHさんは、周囲から経済的に裕福と見られる環境から脱したいと考えていた。物価が安く、家賃も手頃な物件が多いという南部地域の条件は、実家から離れて自立したいと考えているHさんの志向に合致した。「やっぱり、いつまでも脛かじりはしたくないっていうのもありますし。だから、あんまりこう医者の子供っていう、こう、嫌じゃないですが、なんか、『あー、金持ちで』みたいな風に思われるっていうのは、ある程度仕方ないんですけど、そういう風にしたくないから自分でなんとか踏ん張ってやっていこうかなっていうのがありますし。それやったらもう、物価が安い、家賃が安いっていう方がいいかなっていう」。

【Pさん(20歳代・女性)】

Pさんは中国地方の山間部で生まれ育った。駅までは車で行ったほうがよく、電車は30分に1本のペースというようなところだったと言う。家族は特に音楽と専門的なかわりはなかった。ただ、母親が保育士の仕事をしていたこともあり、家にピアノがある環境ではあった。Pさんは小学校のころからピアノを習い始める。

進路として声楽の道を考え始めたのは高校2年生ぐらいから。教わっていたピアノの先生の専門は声楽で、「歌もやってみたら」とすすめられたためだと言う。もともと人前に出るのがあまり得意ではなかったが、「パーッと歌ってみたら、あ、なんかこれは人とコミュニケーションのきっかけになるかもしれない」と感じ、「ちょっと外交的になれた感じ」もした。大阪音大への進学もピアノの先生がすすめてくれた。先生の知り合いが大阪音大で教えていたためである。

両親は、大学へは行ってほしいような感じだったが、基本的にはやりたいことをやりなさいと

いう風に育てられてきた。ただ、音楽系の大学への進学は父親からは反対されたこともあった。「一生生きていけるお金を稼げるかって言われて、反対はあったんですけども」。また、「すごい田舎だったので、あそこのおうちは音楽で…なんて言うんですか、あまり周りに言えないみたいなことを（父親には）言われました」。

大阪音大の音楽科への進学に伴い、Pさんは南部地域にある学生寮に入寮した。夜まで練習できる環境だったため大変ありがたかった。

いまはわからないが、少なくとも自身がいたところの音楽科は、他大学の卒業生から「華やか、賑やか、関西っぽい」と言われることもある大阪音大のなかで、特に華やかだった。大阪音大の音楽科はオペラの講師陣が充実しており、学生が出演して年に1回行われる学生オペラが、自身の学生生活のなかでも特に印象に残っている。

身近な学生の多くは実家から通っていた。Pさんのように地方から来ている人は寮か下宿というかたちになるが、下宿の場合は庄内が多かったと感じる。

大学進学時は、学校の音楽の先生になればと考えていた。教職の免許は在学中に取得している。音楽のプロとして活動することについては、最初から難しいと考えていた。同期にも、プロでやりたいという人はあまりおらず、教職の道に進みたいという人は複数いた。

自身は在学中、あまり就職活動はせず、正社員の仕事もあまり探してはいなかった。卒業後、周囲の寮生は地元に戻る人が多かったが、自分自身は大阪にもっといたいという思いがあった。「田舎に帰ったら先生をするか、自宅でちょっと教えるか、ぐらいしかもうないので」。

現在は、フリーの音楽家としての仕事をメインに据えつつ、アルバイトを複数掛け持ちしている。Hさんと同じ大阪市内での学童の仕事と、結婚式場での演奏と事務の仕事、音楽教室でボーカルやピアノを教える仕事などである。別の短期のアルバイトなどをやっていたこともあるそうだが、1年ぐらい前からこの組み合わせで安定してきた。結婚式場での仕事は、関西一円に派遣されるかたちだという。

音楽家としてフリーで活動する際には、オペラ関係の公演団体に登録するという道もある。ただ、数年間の研修代や、公演を打つ際のチケット販売のノルマなどのため、経済的には負担が大きい。そのため、Pさん自身は団体には登録せず、人が足りないときに声がかかって賛助出演をするというようなかたちをとっている。

Pさんはアルバイトを含めたさまざまな仕事を組み合わせた働き方をしているため、毎日、何かしらの仕事が入っている。丸々休みという日はほとんどない。演奏活動の仕事は不定期で月によって全く異なり、秋冬のシーズンは仕事が多くなる。「第九ばかりいっぱいやったり」。逆に、月に2本ぐらいしか本番の仕事がない日もある。派遣の形態も含め融通の利くアルバイトを組み合わせているのは、そのためでもある。

大学卒業後は、経済的には厳しい状況もあったという。演奏活動の仕事については、なかなか収入がプラスにならない。稽古の時間があることに加え、交通費が自費であることも少なくないためだ。「演奏があるとしたらそれまでの稽古が何回かあって、その時間の拘束もあつたり。会場

が遠かったら交通費もそこまで出るわけではないので。ギャランティって一括で。「稽古の拘束時間も結局、(お給料が)出るわけではないので。そのところでなかなか、難しいなと思います」。

現在の演奏活動の仕事は、大阪音大の先生などのつながりから得られることも多い。知り合いの知り合いというかたちで、音楽関係者のネットワークも広がっている。音楽関係者とのつながりが「そのまま仕事量に割とつながると思います」。そのため、東京など別の場所へ移動することは基本的に考えてはいなかった。「つながりでいろんなお仕事いまだけているところがあるので。大学時代の知り合いが呼んでくれるので、都会に行ってイチからそれを作っていくと、大変かなというか」。

Pさんは大学卒業後、寮を出て南部で部屋を借りて住んでいる。南部に住み続けているのは、演奏が許容される住宅が多くあるためである。「一応、服部あたりまでは調べたんですけど。でも、練習ができてっていう条件とうまくマッチしなくて」。さらに、学生時代から住んでいるため、すでに都会のなかでも安心できる場所になっているからでもある。「ずっと学生時代も住んでたので、いろいろ勝手にわかるというか、なんかまだ都会のなかでも安心できるっていうところが。割と知ってるまちなので」。

現在Pさんは、大阪の大学への進学を機に引っ越してきた妹と同居している。大学卒業後、妹は大阪の企業に就職。Pさんの感覚では、妹は地元よりは都会で働きたいという思いがあったのではないかという。Pさん自身は、将来について必ずしも想像がついているわけではないが、南部の雰囲気は地方出身の自分にはマッチしているとも感じており、今後も「住み続けるような感じ」がある。

大阪音大卒業の2人の居住履歴からは、まず、演奏が可能な住宅が南部地域には多くあることが、音大生の居住を呼び込む条件になっていることがわかる。演奏が可能というのは、必ずしも防音設備が完備されているということを指しているわけではなく、同じ住宅に音楽関係者が多い場合、常識の範囲内の音漏れが許容されやすいということもあるようだ。

また、2人はともに、大阪音大の先生や同窓生などから仕事の紹介を受けることが多い。それは音楽関係の仕事に限られず、アルバイトも含めてである。互酬性の規範や信頼関係(「顔を潰さない」)が埋め込まれた音楽関係者のネットワークが仕事につながるという話は、やはり社会関係資本が仕事に転換されているケースと言える²¹。別の場所ではじめから社会関係を築くのが大変だという話からは、大阪音大の卒業生がフリーランスの音楽家として活動する場合は、居住地の選択が大阪都市圏になりがちだということも示唆している。社会関係が地域に卒業生を引きつけ

²¹ 稲葉(2011)が整理するように、社会関係資本は「信頼」「規範」「ネットワーク」によって構成されるものとして概念化できる。社会関係資本とは「わかりやすく言えば、人々が他人に対して抱く『信頼』、それに『情けは人の為ならず』『お互い様』『持ちつ持たれつ』といった言葉に象徴される『互酬性の規範』、人や組織の間の『ネットワーク(絆)』ということになる」(p.1)。Hさんが語る音楽関係者の間の「顔を潰さない」関係では、互酬性の規範や特定の他者への信頼が埋め込まれたネットワークが、仕事を得る際のひとつの資本として機能していると考えられる。

る力のひとつになっていると言える。地方出身の P さんの場合は、演奏の仕事が地方圏では得られにくいことも、地元ではなく転入先に住み続けている理由のようだ。

さらに、H さんについては、実家から自立したいという志向があり、このことが生活費を抑えることができる南部地域での居住を条件づけていた。個人の自立志向が強い場合、実家が地域からの斥力として働く可能性があると言えるだろう。このようなケースは、南部から外への転出者のなかにも見られると考えられる。

また、H さんの場合、「下町」への親和性がうかがわれ、このことが南部地域での継続的な居住へと結びついていた。後述のように、地元出身者のなかには「下町」への親和性を語る者も少なくないのだが、転入者にも同様の感覚が見られることがあるという点は特筆すべきだろう。「下町」の雰囲気は地域に人を引きつける引力になりうる。H さん自身は都市部の出身ではあるものの、住宅街だった地元をあまりおもしろいところではなかったと振り返っている。H さんの「下町」への親和性は、実家や地元からの距離化の志向と複層していると考えられる。

(2) 結婚・子育て

次に、結婚や子育てのタイミングで、居住地選択がどのようになされたのかを確認してみたい。改めて図表 38 (p.54) をみると、30 歳前後と 0~4 歳の子どもの移動が多い。やはり結婚や子育ては移動の契機であると考えられる。

そこでまず、地元出身者について、結婚・子育てのタイミングで、一時的に地域を離れたケース、南部地域での居住を継続したケース、南部地域に再転入したケース、結果的に南部居住を選択したが地域からの転出を検討したケースについて、それぞれ検討する。また、結婚を機に豊中市内あるいは南部地域に転入してきた国際結婚のケースについても紹介する。

①一時的に地域を離れたケース

【M さん (40 歳代・男性)】

家業である不動産関係の仕事を父親亡きあとに引き継いでいる M さんは、家を継ぐことを前提に、進学先や初職の就職先は関西圏内に絞って探していた。そのため、大学や職場には実家から通っていた。だが、20 歳代後半で結婚した後の 8 年前後は、少しのあいだ自分たちの家庭だけで住みたいという思いがあり、実家から離れて豊中市外に移った。

実家に戻ってきたのは、長子が小学校にあがる直前である。「やっぱりその家を継ぐっていう心づもりはあったので。妻にも言っていたので。それでちょうど上の子が小学校に上がるタイミングだったので、区切りがいいかなと思い」。その後は現在にいたるまで実家に住み続けている。住宅も家業もあるため、今後も地域に住み続けるつもりである。

M さんの場合、自分たちの家族だけで住みたいという理由から、地域からの一時的な転出を選んでいる。ただ、実家に戻って来ることを前提とした転出であり、長子が小学校にあがるタイミングで再転入している。転出を経験してはいるものの、M さんの場合は進学や就職と同じく結婚

や子育ての局面でも家と家業を継ぐことを前提とした軌跡がたどられており、そのことが結果として、南部地域に住み続けるという選択になっていると言える。

②南部地域で居住を継続したケース

【Lさん（40歳代・男性）】

家業である不動産関係の仕事を父親から引き継いでいるLさんは、将来家を継ぐことを前提に、進学先や初職の就職先は関西圏に絞って探していた。そのため、大学や職場には実家から通っていた。現在は結婚し幼少期の子どもがいる。両親とは同一の敷地内の別棟で、いわゆる敷地内別居の形態で暮らしている。

両親はすでに高齢であり、今後の親の介護については自分が中心にやっていくことを考えている。そもそも親と一緒に住んできた理由のひとつとしては、そのことが念頭にある。「結局、（親の介護は）僕がするつもりでいてますし、そのつもりで同居してますし、そのつもりで庄内ですと過ごしてるんで。だから、僕の兄弟に関しては、『両親に関しては頼む』って言われてます。嫁さんにも手かかってしまうんですけど、基本は僕が。それができるような立場にいますしね。時間的な余裕もありますしね」。

Lさんの場合も上述のMさんと同様、将来的に家を継ぐことを前提としたライフコースをたどってきた。結婚し子育てを始めても、引き続き実家に継続的に居住している。

また、実家に住み続けてきたのは、親の介護の必要性を見越してのことでもあるという。南部地域での継続的な居住は、親の介護も含め、やはり家系の連なりを意識した居住地選択のなかでなされていると言える。

同様に家業に携わる次の2人の場合も、居住地選択の主要な軸は仕事に置かれており、結婚や子育てのタイミングでもそれはあまり変わらなかったようだ。

【Fさん（40歳代・男性）】

庄内駅近くで衣料品店を経営するFさんは現在、店舗からほど近いところに家を建て、配偶者と子どもと生活している。両親は豊中市の中部地域に住んでいるため、近居の関係にある。

家を建てるタイミングなどでも、南部から移ることは考えたことがなかった。自分が生まれ育った地域であるがゆえに馴染んでいることに加え、「それよりこう、実利的なものをとってるのかもしれないですね。やっぱり、自分の経営してるお店から一番近いところでっていうことで、庄内に家買ってますので。引っ越し、んー、（子育ての）環境的にはそうですね、あんまりそのへん考えたことはなかったですね」。

【Oさん（20歳代・女性）】

祖父が立ち上げ父が継いだ会社で働いているOさんは、結婚後、実家を離れたものの、引き続

き南部地域の職場の近くに住宅を購入し住み続けている。

実家・職場に近いところに住みたいという理由で、住居は南部以外では探さなかった。「**仕事場が実家なんで、通える距離がよかったんで**」。配偶者も同様に南部の出身で、地域内の別の製造業の会社に勤めており、南部に住み続けることは同意している。「**どんなに離れてても自転車で（職場に）行ける距離内。庄内のなかやったら自転車で絶対に行けるから庄内でっていうのでしか、（新居は）探してなかったです**」。自身が常に体を動かしておきたい性格だったということもあるが、職場も近いため妊娠中や出産後も継続的に仕事を行ってきた。親元や職場も近く、南部地域への愛着も強くあるため、今後も南部から移動するつもりはない。

Fさんもまた、家業を継ぐことを考慮しつつライフコースを築いてきた。南部地域の店舗の近くに住宅を購入したのは、仕事を進める上での実利が優先された面もあるという。

Oさんの場合、結婚後に実家からは離れたものの、引き続き南部地域に住み続けている。居住地選択にあたっては、職場からの近さが優先されたようだ。Oさんは一貫して、極めて「職住近接」の形態での生活を送るというライフコースをたどっており、南部地域での定住はその結果であると言える。

ただ、Oさんの南部での定住の背景には、職場の近さの他に、南部地域への強い愛着もあるようにうかがわれた。この点については、次項（2）つながりのパートで詳述する。

いずれにせよ以上のケースでは、実家や仕事が地域内やその近くにあることが、結婚・子育て期においても引き続き南部地域に住み続ける理由のひとつになっていると言える。

③南部地域に再転入したケース

これまでの事例とは異なり、進学や就職時に南部地域から転出し、その後再転入したケースがCさんとDさんである。Cさんは実業団への就職時に、入寮のために南部地域を離れた。元プロ選手であるDさんは、スポーツ進学で九州の高校へ進学するために南部地域を離れた。2人はいずれも、結婚・子育てのタイミングで南部に再転入している。

【Dさん（40歳代・男性）】

Dさんは、九州から大阪に仕事で出てきた両親の下で生まれ育った。Dさんが生まれたのは豊中市の中部地域だが、小学校低学年のときに南部地域に家を建てて転居する。

子どものころは地元の小中学校に通う。自身は小学校高学年からはじめたサッカーで活躍し、中学のときには豊能地区の選抜チームとして大阪大会で優勝。高校は九州の学校へスポーツ進学で進む。近隣の高校への進学も考えられたが、都市部の強豪校ではレギュラーになるための競争が激しく、学校数も多いため地域ブロックで勝ち抜くことも難しい。そこで、父親の助言もあり、両親の故郷でもある九州へと移動することになる。「（高校の進学先を決めるときに）父親からも結構お尻を叩かれたというか。大阪だとたくさんチームがあって、どこが（全国大会に）出るか

わからんのに、それやったら数の少ないところに行って、そこでお前頂点立ったら、そのままナンバーワンになれるんちゃうか、みたいな感じで言われて」。結果、高校時代にも、インターハイや国体に出場するなどして活躍。卒業後は、やはりスポーツ進学で九州の大学へ進んだ。

大学進学時には、教員免許を取得し体育の先生になりたいという希望もあったという。ただ、大学ではチームとして全国大会に軒並み出場。Dさん自身も大学生の世界大会の日本代表として選ばれ、優勝することになる。在学中にはJリーグが開幕していた。戦歴目覚ましいDさんはスカウトされ、Jリーグのチームに入団することになる。

以後は、チームの移籍に伴い、居住地も各地を移動する。選手時代に結婚し、30歳をこえて引退。引退後は大阪に戻り、関西リーグのチームの監督を務めた。当時は泉南地域に住んでいた。

監督契約の終了後は、同じく元サッカー選手と共に、大阪市内のサッカースクールのコーチとして働くことになった。このとき、ちょうど長子が小学校にあがるタイミングだったこともあり、そのまま泉南地域に住み続けるかどうかという選択があった。南部地域以外での居住も選択肢に含まれていた。結果として南部に転居することになった理由は、仕事先に通える距離であること、自分が生まれ育った場所であり馴染みがあることに加え、共働きのなか実家の親による子育てのサポートが得られると考えたことが大きい。仮に親がいなかったら、南部地域には戻ってこなかったかもしれない。「(自分と配偶者の)2人とも仕事してたんで、僕の両親が近いっていうので、近くに住もうというので住んだんですけど。いなかったらたぶん、ちがうところに行ってたと思います。やっぱり協力してくれる人が近くにおったんで、こっちに住もうと」。

現在Dさんは、南部地域内にある子どものサッカーチームで監督をしている。自身が小学生のころにできたチームに戻ってきたかたちだ。監督を務めることになった経緯は、恩師とのつながりが大きい。「ちょっと自分でチームもちたいなっていうのもあったんですよ。で、こっちにもう住まいも移してて。で、僕の恩師がまだそのころチームの代表やってて、ちょっと話してたら、じゃあこっち帰ってきて、自分で一番上になって、自分でやりたいことやってみたいひんかって言っていたいたんで。じゃあ、ちょっとそこでチャレンジしてみようかなっていう感じで」。

今後は、まだ子どもが小さいためしばらくは住み続けるつもりでいる。ただ、チームの練習で運動場を使用している地元の小中学校が統廃合の対象になっていることもあり、「断言もできない」。南部地域のなかでも周囲にスーパーなどがあまりないエリアに住んでいるということもあり、生活がとても便利とも言い切れない。仕事の状況次第というところが大きい。

【Cさん（40歳代・女性）】

Cさんは、2人の子どもを育てるシングルペアレントである。現在は母親と子どもと一緒に暮らしている。

南部地域で生まれ地元の小中学校に通ったCさんは、中学校の部活で全国大会に出場した。卒業後はスポーツ進学で高校へ進み、全国大会で優勝を果たした。高校卒業後は関西の企業の実業団に就職。実業団は全寮制であり、入寮のため南部地域を転出した。

「会社に入るときに、ちょっとちがう土地に行くっていう選択肢もあった」。ただ、当時のチームの監督が、「大阪の人間は大阪にいてるべきや。わざわざよそに行って他の地域のチームを強くする必要はない」と勧めたこともあり、大阪の企業を選択する。その後、実業団の閉鎖に伴い選手を引退するが、同会社に引き続き勤めている。

結婚してからは、地域内のマンションに移り住んで暮らしていた。その後に離婚を経験。シングルになってからは、当時の行政によるサポートが十分ではないと感じる出来事もあった。そこでCさんは決心した。「そこで腹をくくったと。子どもには不自由はさせないように、一応しないとは決めました。(家計の面で) 削れるところは削るっていう。そこから私の意地が始まったんです。やっぱりね、子どもたちには責任もないので。不自由だけはさせないように、と思って、この10何年間です」。

働きながら子育てをする生活のなかで、幼少期にも子どもを十分にみることが難しかった。そのため現在は、休みの日は子どもの部活に行くことを心がけている。「子どもたちが1歳になるかならないかから保育所に行きだして。初めて歩いたのとかもみてないんですよ、私。初めてこれしましたよ、っていうのを保育所の先生に教えてもらうっていう生活を送ってきたので。(今は)なるべく休みの日は(子どもと)一緒に過ごすっていうことを、心がけてやっています」。

結婚後、そして離婚後しばらくは、実家がある南部地域のマンションを借りて暮らしていた。親と近居した理由のひとつは、親による子育てのサポートである。現在は家を購入し、母親と同居。母親は、ひとり親として子どもを育てるなかで、多大なサポートしてくれた。「(私の)母親がほぼほぼ家にずっといてくれているので。いま下の子ども、鍵とかを持ってなくてもいつも帰ってきたら誰かがいてるっていう状況にはしてくれて。それは本当に感謝しています。保育所の送り迎えも全部やってもらったんで」。「私、お父さんなんで、実は。母が、母親の役をすべてやってくれてるっていうのがあるので」。

CさんとDさんはどちらも進学や就職のタイミングで南部地域を離れたが、結婚・子育て期に再転入している。理由としては仕事の変化などもあるが、実家の親の子育てサポートが得られるという理由で共通している。実家は子育て期の家庭にとってもひとつの資源になっていると言える。

なお、結婚・子育てではなく仕事の局面に関する話になるが、Dさんが地域内での仕事を得ることになった経路は、地元出身者としてのDさんのネットワークや信頼である。ローカルな社会関係資本が仕事につながるという点で、これまで検討してきた他の対象者のライフコースと共通している部分があると言える。

④南部地域からの転出を検討したケース

地元出身者のなかには、結婚・子育てを機に南部地域からの転出を検討したケースが2件あった。いずれも最終的には南部に住み続けるという選択をとっている。

【Nさん（30歳代・男性）】

大阪市内で調理師として働くNさんは、結婚後は実家を離れ、南部地域内の賃貸住宅で家族と暮らしていた。現在の職場で働き始めてから地元に住宅を購入した。親とは近居の関係にある。

結婚後も南部に住み続けた理由のひとつは、配偶者も南部地域が地元であり、お互いの両親の老後を自分たちが見る必要があるためである。「きょうだいもみんなどっか行ってしまってるんで、親の面倒も、この流れでいったら俺たちが見なあかんねやろなっていうのがあったし」。

また、子育て環境も考慮した。「南の方で子ども育てるってなったら環境もどうなんかなみたいな話して。いっぱい高い建物ばかりで、遊ぶとこないみたいなところで住むのはどうなんかなみたいな。自然いっぱいじゃないですか、川西の方行ったら。そのへんに家買おうかなとかって話もあったんですけど」。ただ、職場との距離の関係もあり、南部での居住を継続することになった。現在は大阪市内で働いているが、ゆくゆくは庄内に自分の店を構えたいと思っている。

Nさんの場合、転出を検討した理由のひとつは、地域の子育て環境だった。南部よりも自然環境にあふれた、子どもの遊ぶ場所が多いところに移ることも選択肢ではあった。南部に住み続けることになったのは、仕事の理由（職場との距離）が大きいようだ。地域に引きつける力として仕事が、そして地域から押し出す力として子育て環境があったと言える。

【Bさん（40歳代・男性）】

自身の代で建築関係の会社を立ち上げたBさんは、独身時代は基本的に実家で生活していたが、結婚した際に親元から離れたたいと感じ、地域からの転出を検討したこともあるという。「親の近くっていうのもええんやけど、親元を離れてもいいかなっていうのと。やっぱり、もう庄内ええやろって。なんやろね、そんときはなんにも知らなかったから、地域のことも」。

Bさんは不動産屋に相談に行く。しかし、そこで紹介されたのが、南部地域の物件だった。「もう地元は離れようと思って、豊中の駅前の不動産屋さん行って、『ちょっとこのへんでええとこないですか』と。『おにいちゃんええのあるわー』って、説明されたんが南部やったんですよ。また戻ってくるんかと。でも、もうこれも何かの縁やなと思って」。結果、南部地域の住宅を購入した。

また、Bさんが地域に残った背景には、地域の市場にあった鮮魚店を潰してしまった父親の「リベンジ」という側面、親から受け取った「バトン」を子どもに引き継ぐという側面もある。

Bさんの場合は、親元を離れたたいという理由から、地元を離れることを検討する。また、現在は地域活動に積極的に参加しているBさんであるが、当時はそういったこともなく、地域のことにも疎かった。最終的にBさんが地域に残るのは、不動産屋での偶然という要素もあったものの、その偶然を「縁」と感じて地域での定住に至ったのも、地域に移り住んできた父親からの家系の連なりや、同窓生との支え合いなどに関するBさんの意識があったがゆえと言えるかもしれない。

⑤国際結婚のケース

今回の対象者のなかには、2人の国際結婚のケースが含まれている。2人は共に中国出身で、日本人との結婚を機に日本に移住した。共通点も多い2人だが、同じ中国でもQさんは大都市の出身、Rさんは地方の出身である。

【Qさん（30歳代・女性）】

中国の大都市出身のQさんは、日本人男性と結婚後、日本に来た。はじめは豊中市の中部地域に住んでいたが、その後、南部に住宅を購入した。

南部地域に家を買った理由は、配偶者の仕事の都合である。配偶者は現在、会社に勤めて営業の仕事をしている。関西圏に事務所がいくつかあるため、これまでも転勤があったし、今後も転勤の可能性がある。そのような事情から、どこにでも移動がしやすい南部に住宅を購入した。「**旦那の事務所、転勤の可能性があつて。一番遠いところは奈良もあつて。今すんでいるところの周りは、1か所から全部通勤できる距離って言われて**」。

Qさん自身は現在、専業主婦をしている。ただ、配偶者の仕事の景気は結婚したころと比べるとあまりよくなく、いわゆる「サービス残業」もある。子どもの教育費がこれからかかることが予想されるので、子どもが小学校にあがるころには、Qさんもパートなどのかたちで働きたいと考えている。「**うちは子どもが3人いるから、私も正社員みたいにずっと長時間、働けるわけではない。やっぱり旦那の収入が大事。できれば、旦那の収入がアップしてくれて、私が少しパートするのが、一番理想**」。

現在は配偶者と幼少期の子ども3人と暮らしている。永住者の在留資格も取得しており、これからも日本に住み続けるつもりである。

【Rさん（30歳代・女性）】

Rさんは中国出身。出身地の人口は100家族、500人ぐらいだったと記憶している。結婚して日本にやってきてからは、南部地域にある配偶者の実家に住んでいる。現在は、配偶者と幼少期の子ども2人、そして義理の母と一緒に暮らしている。

配偶者は現在、溶接の仕事をしている。ただ、「**うち残業ない。仕事足りない**」。結婚したころと比べると、配偶者の仕事の景気は悪くなっている。いまはまだ大丈夫だが、今後、子どもが成長すると教育費などがかかるのではないかと心配している。「**今はまだ大丈夫だけど、もうちょっと子どもが大きくなったら、たぶん…**」。子どもにはスイミングやピアノや剣道などさまざまな習い事をさせている。剣道を習わせているのは、日本的なしつけが身につくと聞いたためだ。子どもがまだ小さいことに加え、習い事の送り迎えなどもあるため、長い時間、働くことは難しい。時間を有効に使うためにも、内職がないか探している。「**働きたいけど、長い時間は無理ですよ。内職ないですか？**」。

永住者の資格も取得しており、子どもを育てつつ日本にこれからも住み続けたいと考えている。

2人に対する今回のインタビューは南部地域でのライフスタイルについての話に集中し、ライフコースについて十分に聞き取ることができなかつたが、仕事の都合による居住地選択（職場がどの地域に異動しても対応しやすい南部地域）など、他のインタビュー対象者と共通する話も聞くことができた。議論の本筋からは外れるが、Qさんが「うちの向こうの家は中国人が1家族住んでて。駅とか行ったら、しょっちゅう中国語聞こえる。中国人が少ないとは言えないんですよ」と言うように、他地域と同様、南部地域もすでに多文化地域であることを確認しておきたい。

⑥未婚者の意向

ここで未婚者の意向について、少し確認しておきたい。遠くない時期の結婚を意識している人にとって、結婚は地域からの移動の可能性があるタイミングとして、やはり意識されているようだった。他方でIさん（20歳代・女性）は、結婚後もできるだけ実家の近くに住み続けたいと考えている。理由は親があまり遠くに行くことを望まないことに加え、子育てのサポートが得られることである。

【Iさん（20歳代・女性）】

大阪市内で正規雇用の形態で働いているIさんは、早く結婚したいと考えている。ただ、結婚してもあまり実家からは遠くに行かないだろうし、行きたくはない。理由のひとつは、親による子育てサポートである。「(子どもを) 向こうの親のとこ預けたくないしな。近くにやっぱ自分の親がいるのは、絶対いいことやなとは思ってる」。母親は娘たちが結婚後も近くに住むことを希望しており、親が近くにいない子育ての大変さを自分たちに説くこともある。母親自身、親の近くに住むことでメリットが大きかったのだろうとIさんは推察する。「やっぱり自分が結構いい思いもしてるはずなんですよ。こんなに（実家の）近くに住んでて。子どももみてもらってるし。で、そうじゃないと大変やでって、すごい言ってくれてると思ってるんですけど」。

平成25年（2013年）に行われた内閣府の調査によると、性別によらず相手の親よりも自身の親との近居を理想とする傾向があるが、女性の場合、40歳代以下では相手よりも自身の親との近居が理想と考える割合が高い²²（内閣府政府統括官2014、pp.18-20）。50歳代以降は親の介護のニーズが必要となる機会も増えることから、単純な理解はできないと思われるが²³、Iさんの場合のように、自身の親との近居を望む若い世代の女性が増えている可能性もある。

²² 理想の家族の住まい方として親との近居を選ぶ場合、男性では、相手よりも自身の親と近居したいという回答が年齢にかかわらず多い（自身の親と近居：20歳代＝18.8%、30歳代＝35.1%、40歳代＝27.7%。相手の親との近居：20歳代＝7.8%、30歳代＝14.9%、40歳代＝12.8%）。他方、女性では、50歳代以降は相手の親との近居を理想とする回答が若干優勢になるものの、20～40歳代では相手よりも自身の親と近居したいと考える割合が高くなっている（自身の親と近居：20歳代＝34.3%、30歳代＝30.8%、40歳代＝29.1%。相手の親と近居：20歳代＝11.4%、30歳代＝17.7%、40歳代＝14.2%）（内閣府政府統括官2014、p.20）。

²³ 時代の変化というよりも、加齢による状況の変化とそれによる意識の変化かもしれない。

⑦子育て・教育環境の評価

結婚・子育てのタイミングで地域間の移動が起こるとすれば、そこで考慮されることのひとつとして、地域の子育て・教育環境があるだろう。昨年度の質問紙調査の結果（図表 39）でも²⁴、南部地域は子どもの教育環境へのネガティブな反応が見られる。

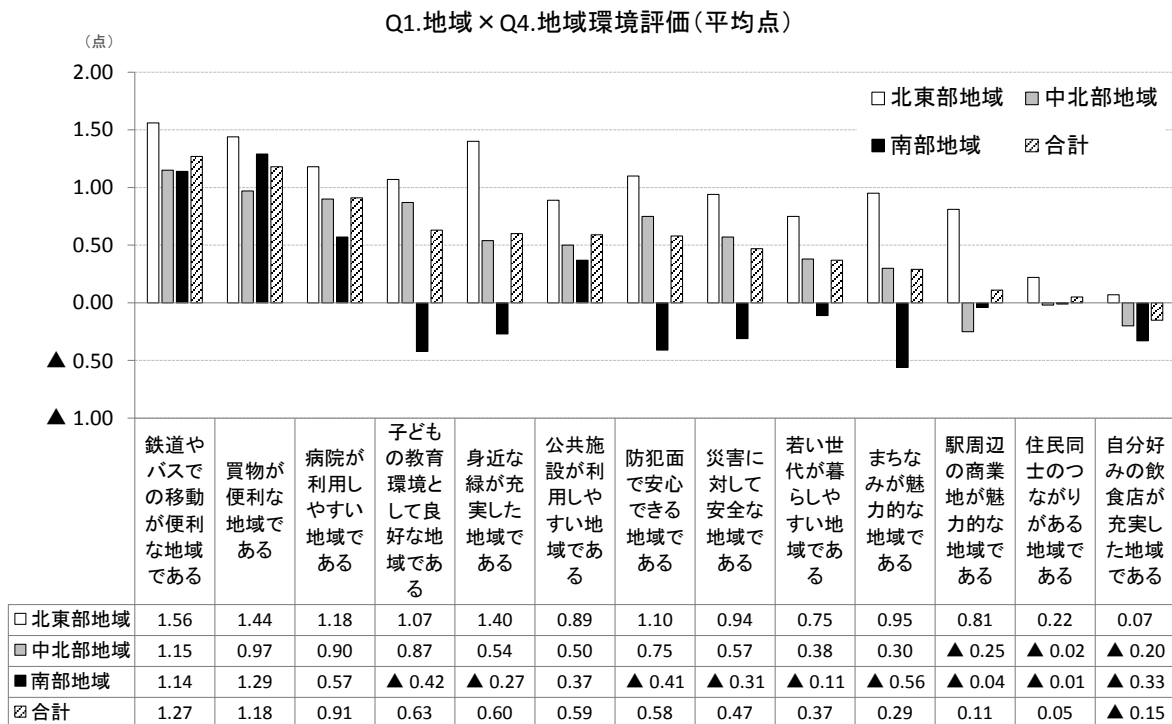
ただし、そこで想定されている「子育て・教育環境」が具体的にどのようなものなのかは、前回の質問紙調査からはわからない。生活者、特に子育てをしている人びとの視点から「子育て・教育環境」が指し示す内容について、理解する必要があるだろう。また、居住地選択との間にもどのような関連が見られるのかについても、ライフコースの変化のなかで捉える必要がある。

インタビューの結果を整理しよう。子育て・教育環境については、地域の子育て・教育環境はよいという話も聞かれた。具体的には、地域のつながりの強さからくる子どもの見守り、公共施設などで子ども向けのイベントの充実、などである。

他方で、子育て世帯を中心に、課題であるという話も聞かれた。地域環境の実態としてどこまで客観的に正確かどうかは別として、地域の子育て・教育環境の課題が主観的に意識されていることは確かである。

子育て・教育環境に関して、具体的に課題として話にのぼったのは、子どもの遊ぶ環境（自然の少なさ、商業施設の多さ、校区の狭さ、など）、待機児童問題、学校の課題（児童生徒数の少な

図表 39 地域環境の評価の平均点



²⁴ 図表 39 は、地域環境評価の各項目について、「そう思う」に 2 点、「どちらかといえばそう思う」に 1 点、「どちらともいえない」に 0 点、「どちらかといえばそう思わない」にマイナス 1 点、「そう思わない」にマイナス 2 点をそれぞれ与え、各項目の平均点を算出した結果を示している。

さ、学習指導・生徒指導面での不安、など)、治安、などである。治安への不安は、子育て・教育環境の課題とも重なっていることが確認できる。

また、地域の子育て・教育環境の話題に関して複数の地元出身者に見られた反応として、地域内に「馴染み」がある自分は地域の子育て・教育環境を特別に大きな課題とは感じない（子育てのしやすさを感じることもある）が、「馴染み」のない地域外の人に子育て・教育環境をアピールしにくいことは確かだ、という形式のものがあつた。たとえば、「僕はずっとここで育ってるんでなんとも思わないんですけど」（Nさん）、「住み慣れてるっていうことに関しては子育てはしやすいんですけど」（Oさん）というような反応である。地元出身者を中心に、地域に「馴染み」があることは、地域の子育て・教育環境に対するネガティブな評価を和らげるものになっている反面、外部からの客観的な評価もまた意識されている。

他方で、地域に「馴染み」があることが、むしろ地域の子育て・教育環境に対するネガティブな側面を意識させるという側面もあるようにも思われた。つまり、自身が子どもに育ったのと同様の環境で、自分の子どもを育てることに多少難色を示すようなケースである。もちろん、当時と現在とでは地域の状況が幾分変化していると思われるが、いずれにせよ、地域への「馴染み」はネガティブな評価を和らげる場合ばかりでは必ずしもない。

【Oさん（20歳代・女性）】

現在のOさんは祖父が設立した会社の経営にも携わっている。常に動いていたいという自身の性格もあり、出産直前まで簡単な仕事をしてきた。出産後はすぐに仕事に復帰したかったが、保育所の空きがなかったため1年強ほど待つことになった。「何個申し込んだ…10以上待ってたんですけど、ずっと。10個以上保育園書いてるんですけど、どれも来ずっていう」。

地域の子育て・教育環境の課題としては、待機児童の問題に加え、治安や学力面についてもあげることができる。ただ、自分自身は生まれ育った地域で馴染んでおり、生活にも便利なため、地域に対して大きな不満があるわけではない。子どもについても、伸び伸びと育ってくれば成績はあまり気にしない。ただ、子育てや教育の環境が地域で整っていて、周囲に良さをアピールできるとはあまり感じていない。「私はずっと29年ここにいるから、ここに馴染んでるだけで、別に育てにくいとは思ったことはないんですけど。（中略）住み慣れてるっていうことに関しては子育てはしやすいんですけど、私はね」。

【Nさん（30歳代・男性）】

大阪市内で調理師として働くNさんは、結婚後に住居を購入する際、地域からの転出も検討した。建物が立ち並ぶところよりも、自然環境が多いところのほうが子ども育つ環境としてよいのではないかと考えたためだ。最終的には、仕事をしている大阪市との距離なども考慮して南部地域に住宅を購入することになった。

地域の子育て・教育環境については次のように感じている。「バツではないけど、マルでもない

から、三角なんかだと思いますけどね。(中略) どんどんどんどん子どもも少なくなってるっていうのもありますし。遊ぶところもあるっちゃあるけど、んー、どうなんやろうな。僕はずっとここで育ってるんでなんとも思わないんですけど、他にはもっといいところはあったりするじゃないですか。他の地域に行ったら、自然が多かったり公園が多かったりみたいな。いま思うと、三角かな」。

また、子どもの教育達成をどの程度求めるのかという点についても、大学への進学を前提としている人がいる一方で、学校の勉強よりは人間性が重要だとする人もいた。両者のギャップを示す会話として、ともに学齢期の子どもを育てている Gさんと Bさんのやりとりを紹介する。Gさんのインタビューの場には、紹介者である Bさんも同席していた。その場での 2人の会話である。

配偶者が被雇用者であり、学歴による待遇のちがいを経験している転入者の Gさんは、子どもには大学に行ってほしいと思っている。他方、地元で育ち現在は自営業を営む Bさんは、学校の勉強ができるにこしたことはないが、それよりは人間性を磨いてほしいと考えている。

もちろん、地域に定住している人のなかにも、自営業をしている人のなかにも、大学進学を前提とした高い教育達成を子どもに求める人はいた。子どもの中学進学時には私立学校も選択肢のひとつであると考えている人もいた。そのため、Bさんを地元出身者・自営業者の代表として、Gさんを転入者・被雇用者の代表として理解することは正確ではない。

しかし、2人の立場の違いからは、異なる教育観の存在が確認できる。子育て・教育環境の何を課題とするのか、その課題をどの程度重く見積もるのか、居住地の移動を伴うほどのものなのかは、ライフコースのなかで形成されてきた教育観の違いにより異なってくると思われる。

【Gさん(40歳代・女性) / Bさん(40歳代・男性)】

北関東出身の Gさんは、結婚後、配偶者の転勤で南部地域に転入する。配偶者の当時の職場が豊中市内にあったこと、借り上げの社宅が地域内にあったことに加え、買い物や移動など生活の利便性が高いと感じたことも、南部地域を転入先に決めた理由である。

Gさんは一方で、地域に密な人間関係があることを、南部地域の子育て・教育環境の魅力として語る。「ここの人たちもやっぱり、すごく全く知らないおばちゃんとかでも子どもを注意してくれたりとか、あるじゃないですか。そういうのって今結構少ないと思うんですよね。(マンションの) 管理人さんとかが、こんな暑いのに連れまわしたらかわいそうやからって言って、預かったら買い物いっといでとか、全く親戚でもないおばちゃんがそう言ってくれたりとか、あやしてくれたりしてたので。こういう地域ってないんじゃないかな、って思って。だから別に庄内出たいって思ったことなかったんですよね。だから、周りからなんで庄内なん? って言われると、え、ここが好きやから、っていう。それしかないんですけど」。

他方で、Gさんは子どもには大学に行ってほしいとも考えており、その点で地域の学校に対しては課題を感じることも少なくない。転入当初は子育て・教育の環境についてあまり考慮してい

なかったが、長子が小学校に入学後、課題を認識した。「それがいま、ぶちあたってるところ。(引越してきたときは) そこまで考えてなかったなって」。

ただ、自身の周囲には、子どもの大学進学を積極的に求める人が少ないことを感じている。「みんなに聞くと、(学校は) どっかには入れるから大丈夫って親も言うんですね。どっかでは困るんです」。そのように感じるのは、仕事上の待遇が学歴によって異なることを、大阪市内の企業で働く配偶者の経験で知っているからだ。「Bさんは努力もされてるし、自営業だから。やっぱり会社員になると(学歴によって) こんなに違うの、扱いが。(中略) 大学のなかでも違うじゃないですか。院卒がいっぱいいるとかね」。

対してBさんは、父親が鮮魚店を自営で始めたことを契機に、幼少期に南部地域に転入してきた。ただ、父親の鮮魚店は子どもころに廃業してしまった。Bさんは高校卒業後、スーパーの鮮魚コーナーの仕事や左官の仕事などを経験。その後、「浮かぶも沈むも自分のせいになりたい」と思い、建築関係の会社を自分で立ち上げた。現在、会社は「一人親方」の形態になっている。

そのようなBさんは自身の子どもに対し、「大学に、俺が行ってないから行ってくれ」「どんなもんか見てきてくれ」というような話もしている。だが同時に、高い教育達成が必須と考えているわけでもない。PTA活動などに積極的にかかわるBさん自身も、地域に子育て・教育環境としての課題はあると考えている。しかし、「自分の力でどうにかしてきたから、学力とか学歴を必要とされたことがない、僕は。だから、会社で言ったらさ、ほんまの会社やったら法人じゃないと取引してもらわれへんけど、僕は法人を必要と思ったことがない。ずっと個人のままで今まできてるっていう。それを知らへんからね、僕なんかは。だから知ってるGさんとかは、身に染みてやっぱり勉強は、学歴は必要なんやって言えるんやろうな」。

また、地域の子育て・教育環境について語られる場合、豊中市の北側の地域との比較がしばしばなされる。たとえば子どもころの経験をたずねると、中学校の部活や塾などで他校の生徒に出会うなかで南部と他地域との違いを認識した、という話が複数聞かれた。自身の子どもが塾で地域差を感じたようだ、という親の立場からの話も聞かれた。地域の活動に関わっている人は、そこで他地域の人から南部地域のネガティブな評価を聞くこともあると言う。

地域の子育て・教育環境には魅力がある、という話もクローズアップしておきたい。具体的に魅力として取り上げられたのは、まず、上の引用でGさんが触れていたような地域のつながりの強さからくる、子どもの見守り環境の良さである。この点については、他の子育て中のインタビュー対象者からも聞かれた。

また、幼少期の子どもを育てている中国出身の2人からは、地域の子育て・教育環境の良さが積極的に語られた²⁵。2人は地域内にある公共施設やそこでのイベントなど、諸資源を活用した

²⁵ 積極的に地域の子育て・教育環境の魅力を語ったのが、なぜ中国出身の2人にもっぱら限られたのかという点については断定を避ける。推察できることとしては、日本人にとっては「あたりまえ」の環境が、中国出身の2人には魅力に見えたのかもしれない。まだ子どもが幼少期で小学

子育てを行っていた。公益財団法人とよなか国際交流協会が開いている、「おやこでにほんご」という外国ルーツの親子や日本人ボランティアが集う場が、自分や子どもたちの「居場所」になっているという話も聞かれた。

【Qさん/Rさん（30歳代・女性）】

中国出身で日本人男性との結婚をきっかけに日本にやってきたQさんとRさんは、幼少期の子どもを複数育てている母親でもある。

現在の子育ての悩みは、中国語と日本語の両方を子どもが覚えられるかということや、日本の子どものような「しつけ」ができるかということ、小学校にあがったときに「いじめ」がないか不安なこと、将来的に教育費がかさみそうなこと、などである。「やっぱり私たちは、日本人の礼儀とか文化が全部わかるわけではなくて、日本人みたいに細かいところがあまり詳しくわからない。もちろん子どものしつけとか、日本人のママよりはそんなに上手にできないから。学校に入ってからママが中国人だと、いじめの問題とかもし出てきたらどうかなと、それも心配になってます」(Rさん)。「日本人のお母さん、親子見たら、みんな優しい。子どもも静かにお母さんの後ろについて行って。でも、うちの子は全然。しつけをやってあげたいけど、私はあまりわからなくて。剣道の先生が、これはしつけにもなるよって言うから、それで子どもに剣道やらせてます。私、子どもにちゃんと良いこと教えられない。そんなの勉強するところあるかな？」(Qさん)。2人とも子どもには大学まで行ってほしいとも思っている。

子育ての悩みも多い2人だが、地域の子育て・教育環境はとても良いと捉えている。理由は、図書館などの公共施設が近くにあり、そこで子ども関連のイベントも多いからだ。「家の周りには図書館とか、文化館とかがあって、子どもの教育環境は結構良いと思います」(Qさん)。「住んでるところは子どもが育ちやすい。少年文化館があって、子どもの活動もあるし」(Rさん)。大阪音大の子どもが参加できるイベントにも、よく行っている。近所の公園や、園庭を開放している幼稚園にもよく行く。

このように、地域のさまざまな施設を利用している2人だが、それゆえに、公共施設の保育室が利用できる時間や幼稚園の園庭の開放時間など、施設が利用できる機会をもう少し増やしてほしいという希望ももっている。

Rさんは周囲の人から、高齢者が多い南部地域は子育てや教育の環境としてあまりよくないのでは、と言われたことがあるという。でも、「**実際は、それがいいと思う**」。Rさんは中国のなかでも「田舎」の方の出身である。出身地では子どもが生まれると、親よりも高齢者が子どもを見守ることが多い。いま住んでいるところは高齢者も含めて周囲の人はみんな優しく見守ってくれるため、子どもが育ちやすいと感じる。「温かくて、親切なおばあちゃんおじいちゃんが多い。子どもと歩いてたら、結構おしゃべりしてくる。『あー、かわいいなー、おやつあげようか』とか。『私、田舎から来たから、いま住んでるところは中国の田舎で日本の昔みたい。家の周りみんな

校にあがる前ということもあるかもしれない。

親切で、そこがなんか田舎を感じていいなと思って」。

現在、QさんとRさんの2人は、とよなか国際交流協会が庄内図書館で開いている「おやこでにほんご」という集まりに参加し、他の外国人親子や日本人ボランティアなどと活動している。参加のきっかけは、市の広報を見たり、図書館で案内を見たりしたことだ。みんなで一緒に料理をつくったり、茶話会をしたり、子どもに絵本を読み聞かせしたりしている。子ども服のお下がりの交換も助かっている。

日本人とのコミュニケーションが難しい場合も少なくないQさんとRさんにとって、この「おやこでにほんご」の集まりは自分や子どもの「居場所」になっていると感じる。「ここに来てる人は、いろんなことがわかって、私たちが言葉をたまに間違えても、わざと間違えたわけじゃないとかわかってくれる。子育て毎日忙しいとか、こっちに来てみんなでしゃべったり、コミュニケーションとったりして、ほっとする感じになってる」(Qさん)。「みんな親切で、居場所みたい。

(中略) 幼稚園、子どもを連れて遊びに行っても、お母さんたちは普通のあいさつだけで、他の話あまり深くできない。こっちに来たら、みんな信頼の関係。いろいろしゃべって、ストレスとかも解消できるし」(Rさん)。

また、Qさんは、ダブル(ハーフ)である自身の子どもの成長にとっても、「おやこでにほんご」への参加は良いことだと感じている。Qさんは子どもから1度だけ「僕何人?」と聞かれたことがある。「おやこでにほんご」には、アジアやヨーロッパなどさまざまな国をルーツとする親子が集まっているが、そのような場に参加することで、子どもには「日本人と中国人のハーフでもおかしくないとか、自分は全然特別ではないというイメージをつけさせたい」と感じている。

ここで、子育て・教育環境の評価と居住地選択の関係を整理しておきたい。先述のように、長子が小学校に上がるタイミングで地域外から戻ってきた人たちもいる。再転入の理由は、家を継ぐことや、実家の子育てサポートが得られることだった。

しかし、インタビュー対象者のなかには結婚・子育てのタイミングで移動を考えた人もいる。その場合、最終的には仕事をしている場所との距離や、実家の子育てサポートなどを理由に、南部地域での居住が選択されていた。

ただ、子育て・教育環境を理由に地域からの転出が考慮される場合があることも確かである。そのような考慮の結果、地域外に転出する人も少なからずいることが推察される。インタビューのなかでも、話し手の観測範囲の印象ではあるが、同じ集合住宅の人たち(おそらく転入者)は子どもが小学校に上がるころに南部地域より北へと転出していく、という話も聞かれた。

このように、地域の子育て・教育環境に対する評価(繰り返すが、実態を反映しているかどうかとは別である)が地域から押し出す力(斥力)として働くとすれば、それに対する地域に引きつける力(引力)としては仕事や実家の存在がある。子どもの高い教育達成を求め、子育て・教育の環境を何よりも優先する場合や、仕事や実家などの面で地域にいる理由に乏しい場合は、地域からの転出に傾く可能性があるかと推察できるだろう。地域に「馴染み」がない地域外の人には子

育て・教育環境をアピールしにくいという意識は、このような引力と斥力をともに感じるなかで抱かれているものではないだろうか。

また、地域の子育て・教育環境を評価する際、比較対象としてしばしば豊中市の北側のエリアが意識されていた。議論を先取りすると、このような比較は地域の治安に関する評価でもみられることである。南部の地域環境の評価が豊中市内での比較でなされている可能性について、次項(3) 治安の評価のパートで改めて検討したい。

(3) 小括

以上、進学や仕事、結婚や子育てといったライフコースの変化に伴って、どのような居住地の選択がなされたのかを見てきた。それぞれのライフコースはパーソナリティや偶然の影響も大きい、複数の人に関係するような南部地域が人びとを引きつける引力、あるいは南部地域から人びとを押し出す斥力も確認することができた。

第1に、学校や仕事の豊富さについて。南部地域は人口減少が進む地域ではあるが、その背景にある要因は地方圏とは異なるところも多い。たとえば、今回対象となった人たちの多くが実家から通える範囲で大学や専門学校を選んでしたことからもわかるように、都市圏に含まれる南部地域の場合、通学が可能な圏内に高校卒業後の進学先が数多くあり、学ぶことのできるコースも多様である。結果、魅力を感じる進学先を見つける可能性も高くなる。教育達成への強い志向も、関西圏内である程度充足される。

仕事についても事情は同様であろう。地方圏に比べて就職機会が身近に集積しているというだけでなく、より都心部で働きたいという希望がある場合も大阪市内の中心部に出ることで充足できる。音楽の仕事は少なくなっているという話もあったが、地方圏よりは文化産業も多いだろう。また、交通が至便な南部地域は、関西圏での職場の異動に対応しやすい。

このように、通学・通勤が可能な範囲に学校や仕事が豊富にあるという地域の条件は、南部地域に人びとを引きつける力である。これは当然のことではあるが、まずは確認しておくべきことだろう。このような地域の条件ゆえに、地元出身者は実家を中心としたライフコースを描きやすい。地方圏では進学地の移動が就職時の移動よりも圧倒的に多く、かつ、進学地に都市へ移動した若者の6割半ばが都市で就業するという調査もあるが(長須 2017、p.239)、都市圏内の南部地域はそのような状況とは異なっている。

南部地域を地元とする者が、進学や就職などのタイミングで地域外に転出する理由としては、東京への強い上京志向などを考えることもできる。ただ、今回のインタビューでは、南部地域に現在住んでいる人を対象にしたこともあり、東京などで働くことへの憧れを語った地元出身者は一部いたが多くなかった。

もちろん、南部からの転出者には、上京志向などをもち実際に上京した人もいると思われる。東京に住むことへの憧れや、地位達成の志向が強いケースなどが当てはまると推察される。ただ、インタビューでは、東京は遊ぶには楽しいと思うが、住むところとは考えていないという話がし

ばしば聞かれた。また、地域から遠くに離れて成功するとは思わなかった、上京は怖いめしなかったというように、リスク回避の意識もうかがわれた。

都市圏と地方圏の若者の意識を調査した近年の研究によると、地方圏において「上京志向」はあまりみられず、「地元志向」の高まりがうかがえるという。「都市の若者も地方の若者も、それぞれの居住地域に愛着を覚え、なおかつ高い生活満足度を持っている」（辻 2016、p.161）。実家があり、進学先や就職先がそれなりにあるなかで、南部地域から人を転出させる斥力は、特に若い世代では弱まる傾向にあると言えるのかもしれない。

第2に、実家について。今回のインタビュー対象者には、地元出身者が多く、長く地域に住んでいる家系の人も含まれていた。家産（土地や住宅、家業など）を親から子へと引き継ぐことを意識したライフコースをたどり、そのことが南部での定住につながっている人もいた。ライフコースの変更のなかで家業に携わることになり、そのなかで家系の連なりを改めて意識している人もいた。さらには、親からの家産の継承があまり認められない場合でも、親から子、さらに子への家の系譜を認識している人もいた。このように、家の継承がさまざまなかたちで意識され、実践されるなかで、南部地域に住み続けるという選択が地元出身者を中心になされていた。この場合、職場と住居がともに地域内にあるなど、極めて職住近接の生活を送る人も少なくない。

また、実家にはセーフティネットという側面もあった。非正規雇用の形態で働く人の場合は、離家してひとり暮らしをすることが実際に難しい。実家暮らしは経済的負担の軽減、家事の分有といった面でメリットがあり、それは正規雇用の人の場合でも、引き続き実家に住み続ける理由になることがある。

さらには、子育て世帯にとって、実家の近くに住むことには、親による子育てのサポートというメリットが意識されていた。一度地域を離れた人の場合でも、親による子育てサポートは南部に再転入する理由となっていた。また、地域出身の未婚者のなかには、親との近居を望むケースもあった。

これは親の立場から見れば、老後のケアが得られるということでもある。実際、他のきょうだいが実家から離れるなかで、親のケアを見越して自身は残ったという人もいた。地方圏（具体的には青森県）の若者を対象にした調査ではあるが、家を継承することが、土地や住居、家業などといった家産の継承というよりも、親をケアするという行為に関連づけて意識される場合がある、という報告もある。それは地方圏だけではなく都市圏にもある程度見られることかもしれない。

「なぜなら、人口移動に関しては、（中略）東京への流入は1950年代をピークに低下しており、1950年代や60年代に移住した人々の子どもたちが東京にとどまっていることを鑑みるならば、親との関係、とくに高齢期の親のケアを意識する中で『イエを継ぐ』という意識を持ち始めていてもおかしくはないからである」（羽淵 2016、p.107）。

このように、地元出身者を中心に南部地域に住み続けるという選択がなされている背景には、就労の不安定化や、子育てや介護といった社会保障に関連して、実家がセーフティネットとして機能しているという面があるようだ。高齢化がさらに進み、ケアのニーズが今後も高まることが予測される。不安定就労についても抜本的な解決が近い将来に見込まれているわけではない。家

族の同居に対する規範意識は社会的に弱まっていると思われるが、セーフティネットとしての実家の存在が地域への引力として人びとの居住地選択に及ぼす影響力は、強まりこそすれ弱まることはないのではないかと推察される。もちろんそのような状況は、生活困窮や介護、あるいは子育てに対する社会政策の必要性を訴えるものでもある。

他方で、実家の存在は地域に引きとどめる引力としてだけでなく、人によっては地域から引き離す斥力として働く場合もある。他地域から転入してきた人のなかには、実家からの自由や自立を志向している人もいた。このようなケースから反照して考えれば、地元出身者のなかにも実家が斥力として働き、結果として南部地域から転出した人も少なくないと思われる。

第3に、地域の社会関係と仕事の関連について。地域内に親から引き継いだ家業がある地元出身者はもちろんだが、それ以外のケースでも、仕事が地域内の社会関係と何らかのかたちで関連している場合があった。たとえば、恩師に声をかけられて地域内の仕事に転職したケースがあった。同窓生のつながりが仕事に転じたり、昔からの仲間の支え合いが仕事のなかで意識されているケースがあった。市や地域の社会関係をつなぎながら、有償・無償、正規・非正規、労働・ボランティアといった境界をまたいだ仕事・活動を続けているケースがあった。大阪音大の卒業生は、恩師や同窓生から演奏の仕事を紹介されることが少なくなかった。

このように、地域に埋め込まれた社会関係が資本となり、仕事に転用されることがある。仕事があることは地域に住むことにもつながる。ローカルな社会関係資本があることは、南部地域に住み続けるという選択の背景のひとつであると言える。

第4に、音楽関係者の居住について。南部地域は部屋での演奏が許容される住宅が少なくない。住宅の面で南部地域には、音楽関係者が集まりやすい構造があると言える。それは、必ずしも防音設備が完備されているというだけではなく、隣の部屋もまた音楽関係者であり音出しに寛容だからという場合もある。音楽関係者の集積が、さらなる音楽関係者の集積を生む条件になっているようだ。

また、すでに触れたように、京阪神や遠方への移動に便利な地域であることも、演奏活動を仕事としている音楽関係者にとってはメリットである。大学関係者とのつながりが仕事につながるという点でも、地域に住むことには意味がある。

さらに、ライフスタイルの話にも踏み出すが、音大卒業生からは「下町」との親和性を語る声も聞かれた。昨年度の調査では、大阪音大の学生は地域との間にギャップがあることがうかがわれ、後述のように、地元出身者もまた大学や学生に対してギャップを感じていた。ただ、今回インタビューした2人の卒業生からは、そのような様子は見られなかった。

もちろん、地域と親和的な学生や卒業生は、全体のなかではマイノリティかもしれない。2人が特別なケースなのか、それとも多くの学生がそうなのかとたずねると、「それはちょっと…。利便性だけでおる人もいるでしょうし」(Hさん)、「あんまりないかもしれないですね」(Pさん)とも語られた。

しかし、地域の活性化を考える際には、全体の平均ではなく突出した事例、外れ値のようなケースを注視することも大切だろう。2人は南部の環境を好んで住み続けており、また、2人以外に

も南部地域には音楽関係者が少なからず潜在しているという（Hさんの言葉を借りれば、「息をひそめている」「うごめいている」）。学生時代から住んでいる南部は、すでに都会の中でも馴染みがあり、勝手に知っており、安心できる場所になっているともいう。そして、南部地域の大学を卒業したことを「誇り」に思いながら住み続けている音楽関係者が現にいる。そのような事実は、数の多寡にかかわらず、地域の活性化を検討する際には重要であるように思われる。

第5に、地域の子育て・教育環境について。確かに地域に住む子育て世帯にとって、地域の子育て・教育環境はひとつの課題として捉えられている。具体的には、子どもの遊ぶ環境（商業施設の多さ、自然の少なさ、校区の狭さ、など）、待機児童問題、学校の課題（児童生徒数の少なさ、学習指導・生徒指導面での不安、など）、治安、などである。実態を伴うかどうかは別として、生活者の視点から見てそのような課題が認識されていることは確かなようだ。

ただ、地域への「馴染み」がある地元出身者にとっては、自分も育ってきた環境だからという意味で、子育て・教育環境に対するネガティブな評価は和らぐ場合もあるようだ。しかし逆に、地域に「馴染み」があるがゆえに、地域の子育て・子育て環境に難色を示すというケースもある。また、地域への「馴染み」を背景に、地域の子育て・教育環境は主観的には大きな課題とは感じないが、地域外の人には積極的にアピールできないというように、客観的な評価が意識されている状況もうかがえる。

居住地選択との関連で言えば、仕事や実家との関係、子どもの教育達成を求める程度などにより、子育て・教育の環境に対する課題認識が、地域からの転出という選択を後押しする斥力となる可能性もある。地域外の人には子育て・教育環境をアピールしにくいという意識の背景には、地域の引力と斥力をともに感じる状況があるのではないとも考えられる。

他方で、地域外からの転入者であっても、地域のつながりに子育て環境としての魅力を感じている場合もある。中国出身の2人からは、公共施設や市民社会組織の活動、そこでの子ども向けのイベントの豊富さなど、地域の教育環境の魅力が積極的に語られた。もちろん外国出身者という特性をふまえる必要もあるだろう。ただ、教育資源としての地域のつながりは、Gさんによっても語られたところである。子育て・教育環境の魅力を感じるには必ずしも「馴染み」は必要ないのかもしれない。

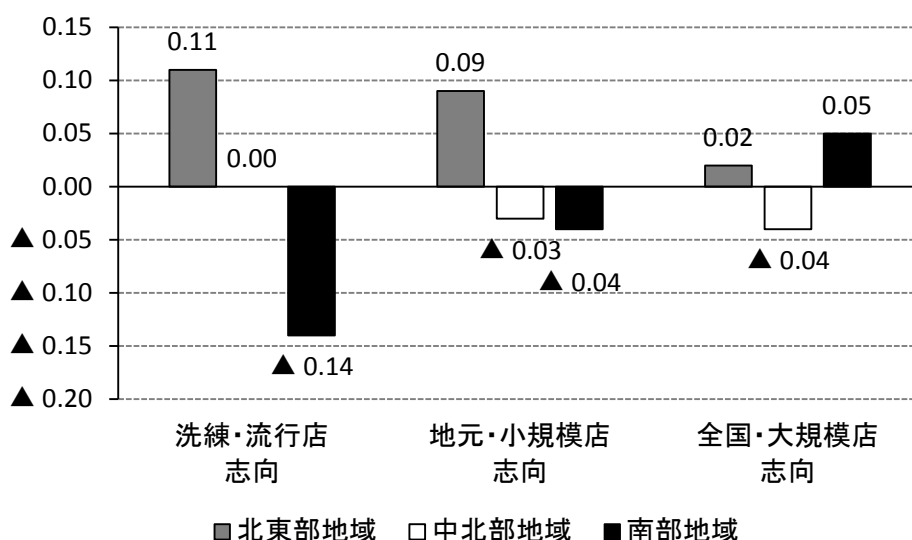
4-3-3. ライフスタイルと地域

次に、ライフスタイルと地域の関係について検討を行う。テーマは順に、消費活動、つながり構築、治安の評価である。

（1）消費活動

南部地域は生活に便利なところとされることが多い。若い世代を対象とした昨年度の質問紙調査でも、教育環境や防犯面での安心などの項目では他地域よりネガティブな評価がなされることが多いものの、鉄道やバスなどの交通利便性や、買い物の利便性などについては、他地域と同程度かそれ以上の評価となっている（図表 39、p.83）。

図表 40 店舗選好志向の因子得点平均



ただし、昨年度の質問紙調査では消費に関して、地元の店舗よりも全国にチェーン展開するような店舗を、小規模な店舗よりも大規模な店舗を、選好する傾向もみられた（図表 40）²⁶。これは、庄内駅周辺を中心とした南部地域の商業圏の特徴とは、齟齬があるようにも思われる。

生活利便性に対する高い評価と、地元の店舗を選好する人が少ない傾向とは、どのように関係しているのだろうか。

①生活利便性に対する高評価

インタビューからは、住んでいる地域は生活に便利だという声が大変多く聞かれた。「(地域は)生活しやすい。駅は近いし、車に乗って高速にもすぐ乗れる。兵庫県に行こうと思ってもすぐ行けるじゃないですか。大阪に出ようと思ってもすぐ出れる」(Cさん・40歳代・女性)。「(地域は)暮らしやすいとは思いますがね。買い物に関しても。市場もあるっていうのもありますし、あとは交通も。車で名神とかありますし。電車でもすぐ梅田行けるっていうのは、暮らしの面ではめっちゃ住みやすいまちやと思います」(Eさん・30歳代・男性)。「ダイエーとか、イズミヤとか、豊南市場とか、買えるものが全部ここでそろってしまうっていうことですよ。病気になっても歩いて行ける病院がたくさんあるじゃないですか。薬屋さんもたくさんそろってるので、病院が開いてない時間でも薬買ったりとかできますし。そういう意味ではめっちゃめっちゃ便利ですよ」

(Fさん・40歳代・男性)。近くにスーパーや市場があり買い物が便利なこと、広範囲に移動しやすいこと、病院や薬局なども近くにあり利用しやすいこと。インタビューからは、地域の生活利便性について、幅広い人たちから共通する要素を聞くことができた。

²⁶ 図表 40 の各志向は、選好する店舗のタイプに関する因子分析の結果である。「洗練・流行店志向」は「おしゃれで洗練された雰囲気のお店」「常に最新の流行を取り入れているお店」「古い建物をリフォーム（改修）したお店」の、「地元・小規模店志向」は「小さな個人商店」「地元の商店街」の、「全国・大規模店志向」は「全国的なチェーン店」「大きなショッピングモール」の因子負荷量がそれぞれ高かった。

もう少し詳しく検討してみよう。南部地域に住む人たちは、どのような消費活動を行っているのだろうか。南部地域のなかの店舗は、どの程度、どのような機会に利用されているのだろうか。地域の利便性は、どのような生活のなかで感じられているのだろうか。

②南部地域での消費

まず、当然ではあるが、生鮮食品や日用品などの買い物は自宅の周辺や庄内駅の周辺でされることが多い。庄内駅から少し離れたエリアの人でも、仕事で駅を利用した帰りに駅周辺の店舗が利用されたり、自転車を利用して駅周辺まで来ている場合がある。

【Cさん（40歳代・女性）】

大阪市内の企業に勤めるCさんは、通勤に庄内駅を利用している。そのため、買い物は会社帰りに駅の周辺のスーパーですることが多い。徒歩圏内にさまざまな商業施設があることから、生活するのに便利だと感じている。「ダイエーがあり、イズミヤがあり。で、庄内ってほんとに買い物するのに全然困らないんですよ。ライフがあり関西スーパーがあり。で、ちょっと足をのばせば、いまならニトリができ、エディオンがあり、っていう感じで」。

【Pさん（20歳代・女性）】

大阪音大の卒業生のPさんは、庄内駅からは少し距離がある場所に住んでいる。仕事に行く際は、自転車で駅まで行って仕事に行くことも多い。そのため、生鮮食品や日用品は基本的に、駅の近くの大型スーパーで購入している。豊南市場を使うことはほとんどない。自宅近くにもスーパーはあるが、そちらに行くこともあまりない。「住んでいるところの近くにスーパーがあるんですけども、あまりそっちには行かないですね。駅から帰るとちょっと回り道というか」。

【Mさん（40歳代・男性）】

家業の不動産関係の仕事をしているMさんは、現在、配偶者と10歳代後半の子ども2人と暮らしている。自宅が庄内駅に近いMさんは、普段の買い物は駅近くのスーパーに行き、ときどき豊南市場も使う。地域外出身の配偶者がこの南部地域に移り住んだ最初のころに話していたのは、飛行機が低く飛んでいることの他に、「立地とかそういった面では凄い便利な場所」ということだった。「国道も近いし、電車もあるし、ちょっとどこかに出かけようと思ったら、JRとか飛行機も結構近くで利用できるし、あとお店も市場とかダイエーやイズミヤとか結構あるんで、そういう面では便利だなと」。

【Nさん（30歳代・男性）】

Nさんは大阪市内で調理師をしている。プライベートで料理をするとき、普段は庄内駅近くのスーパーで食材を買うが、特別な機会などには豊南市場へ行く。「(普段は)ダイエーっすね。で、

ちょっとなんか特別な魚とか食べたいなってなったら、市場の魚屋行って買ったりとかしますね。ちょっと腕をふるったろかなみたいな、特別な日に。誕生日であったり、実家に親父の友だちとかが集まってワイワイしゃべるときに、ちょっとやったろかなって」。

他方、庄内駅から遠いエリアに住む人の場合、車を利用して兵庫方面など豊中市外に買い物に行くこともある。普段の買い物は不便さを感じることも少なくないようだ。買い物ではなく交通便利性の話になるが、南部の西側エリアに住む人は、どの駅も遠いという点で不便さを感じられることもある。

【Dさん（40歳代・男性）】

Dさんは現在、配偶者と子ども3人と暮らしている。普段の買い物は車に乗って豊中市外に行く。「車に乗って、大型ショッピングモールに行きます。尼崎に行ったり。あんまり、豊南市場も行かないですよ。車とかがあれば、普通に橋越えたらもう尼崎なんで」。

家族で南部に住み続けてすでに10年ほど経つが、配偶者はあまり地域に住み続けることを好ましく思っていない。治安を不安視している面もあるが、買い物が不便なことも理由のひとつだ。「不便なんですよ。スーパーとかもないじゃないですか」。

③生活利便性を理由とした転入

転入先として南部地域を選んだ理由のひとつは生活利便性だ、という地域外出身者もいた。今回の対象者の場合、自身の出身地と対比させるかたちで、南部地域の生活のしやすさに魅力を感じているようだった。結婚を機に地方から南部に転入してきた配偶者が地域の利便性を感じている、という話も聞かれた。南部地域の生活利便性は、確かに地域に人を引きつける力になっていると言えるだろう。

【Gさん（40歳代・女性）】

北関東出身のGさんは、配偶者の仕事の転勤で南部に転入してきた。Gさんが居住地として南部地域を選んだ理由のひとつは、地域の生活利便性である。「出張でこのへんに来たことがあって、生活にすごく便利だったというので。あと、物価も安いから」。Gさんの地元は、生活のために車が1人1台必要になるところだった。それに比べると、南部地域は格段に生活するのに便利だと感じられている。

今後は、配偶者は地元に戻りたいと考えているようだが、自身はこのまま住み続けたいとも思っている。子どもが独立したらどうなるかはわからないが、「こっちが便利なので、住みやすいかな」。老後を見据えても、車ではなく電車で移動できるところの方が良いのではないかと思う。「車はいずれ運転できなくても電車があるしね。考えたら、田舎なんか電車もまだ通ってない。バスも1時間に1本ぐらいしかない。タクシーしかないですからね」。

④豊南市場での買い物

生鮮食品や日用品などの買い物は、庄内駅や自宅の近くで行われる。そのため、豊南市場を利用する人もいる。ただ、今回のインタビューでは、基本はスーパーで、ときどき市場で、というような利用形態が多かった。また、個々人のライフスタイルによってはまったく利用しない（できない）人もいるなど、市場の利用には個人差がみられた。

次にみるのは、豊南市場を積極的に利用しているケースである。結婚後、その物価の安さから豊南市場の便利さを一層感じるようになり、なおさら地域から離れたたくなかったという。

【Oさん（20歳代・女性）】

祖父が立ち上げた会社で働くOさんは、結婚後に実家を離れた。これまで地域の外に出て住みたいと思ったことはない。「やっぱり、ちっちゃいときから梅田に出るのは遊びに行くときとか、親と一緒に買物行く場所なんで。住むってなるとちがうんちゃうかなみたいな」。むしろ、「庄内から出たくないです」。理由は生活に便利だからである。まず、「大阪市内に出るのもすぐやし。尼崎の方にも、伊丹とか尼崎の方に出るのもすぐやし。で、近所に新幹線、飛行機、全部あるし」。また、「豊南市場があるから。物価が安い。それは主婦になっての意見ですけど。なおさら出たくなくなりましたね」。

豊南市場を利用することは多い。「めっちゃ行きます。野菜とかは、スーパーで買うより豊南市場で買います」。ただ、「最近ちょっと仕事がホンマに忙しすぎて、豊南市場に行く暇がない」ため、豊南市場が閉まる夜などはスーパーを使うことも増えている。利用頻度が変化してはきているが、以前はよく市場とスーパーを使い分けて買い物をしていた。「前、仕事がそこまで忙しくなかったときは、お母さんと一緒に豊南市場行って、魚も野菜もですけど、安いものはそこで買って。スーパーでしかそろわないものってあるじゃないですか。そういうのはスーパーで買って。基本は安い豊南市場に行きます」。

また、豊南市場を利用する人のなかには、特別な食品を求めている場合もあった。たとえば上述のように、調理師のNさんがプライベートで腕を振るうときなどがそうである。さらに、中国出身の2人にとっては、中国の食材が手に入りやすいところとして豊南市場が認識されている。

【Qさん/Rさん（30歳代・女性）】

日本人男性と結婚した中国出身のQさんとRさんの2人は、現在どちらも子どもを育てながら専業主婦をしている。普段の買い物は家の近所や庄内駅周辺にあるスーパー、そして豊南市場ですることが多い。Rさんは少し駅から遠いところに住んでいるが、自転車で駅の近くまで来ている。2人は普段から中国の料理を作ることも多く、豊南市場はパクチーや唐辛子など、中国の食材が手に入りやすいところとして感じられている。

ただ、豊南市場については、利用していない人も多い。理由としては、営業日時が限られており仕事帰りの利用が難しいこと、商品が小分けされていないこと、スーパーマーケット形式ではないため購入に手間がかかること、などがあげられた。以前の賑わいを知る人にとっては、豊南市場は現在の家族のライフスタイルの変化と齟齬が出てきているのではないかと感じられていた。

⑤南部地域の外での消費

以上のように、豊南市場の利用には差がみられるものの、生鮮食品や日用品の購入は総じて南部地域内でなされていた。他方、生鮮食品や日用品以外の消費については、南部の地域外でなされることも多い。たとえば衣料品については、地元で買うという人はほとんどいなかった。

ただ、南部で買えないものがあるからといって、そのことを地域の生活の不便さとして感じている人はいなかった。南部にないものは梅田などで買えばいい、という声も聞かれた。大阪市内で働いている人の場合、買い物のためにわざわざ梅田に出る必要もないと感じられているようだ。

【Iさん/Jさん（20歳代・女性）】

南部で生まれ育ったIさんとJさんの姉妹は、衣料品は梅田の大型商業施設で購入するケースが多い。庄内駅周辺の商店街の衣料品店は、高齢者向けというイメージがある。「若い子の服は売ってないと思いますね」（Iさん）。駅近くにある若い女性向けの衣料品店も、昔は行っていたがいまは行っていない。

だが、南部地域に住んでいて、消費の面で何か不満があるわけではない。地元で購入できないものは、梅田で購入すればよいと思っている。2人とも仕事は大阪市内にあり、出勤の際に必ず梅田を通るため、わざわざ買い物のために梅田に行く必要もない。

*：この地域のこのへんいまいちだなどかいてないなとか、ってありますか？（中略）

J：別に不満？

I：別にない。

J：ないです、まったく。

I：なんかないなと思えば、足りないなと思えば梅田行けばいいし。で、毎日週に5回梅田を通るんやから、特に。

J：わざわざ梅田行かなあかんときもないし。（仕事に）行けば絶対行くし。

衣料品などを地域で購入することが少ないのは、ひとつには、高齢化の影響から地域内の店舗が高齢者向けの商品を扱うことが多く、自分たち世代をターゲットにした商品が少ないと感じられているためである。

また、インターネットを利用した消費活動も活発に行われている。人によっては、日用品についても買い忘れた際にはインターネットを利用することがある。子どもが小さく買い物がなかなかできない子育て世帯にとっても、ネットショッピングは便利である。南部で買えないものはイ

インターネットで買えばよい、というような購買行動が見られる。近くで購入できないものがあったとしても、やはりそのことが直接地域の買い物環境に対する不満に結びつくわけではない。

【Lさん（40歳代・男性）】

家業の不動産関係の仕事を引き継いでいるLさんは、衣料品はインターネットや梅田の百貨店、ファストファッション店などで買うことが多い。庄内駅周辺の商店街を利用することはほとんどない。「言うたらもう、商品、衣類関係もお年寄り相手のことが多いんで、全然対象外やし」。

インターネットを利用した買い物の比重も、最近が高まっている。子どもがまだ小さいため、配偶者の外出が難しいことも理由だ。衣料品だけではなく、子ども用品や生活雑貨もインターネットで購入することが多い。「もう嫁さんが子どもで外に出れないんで、子ども関係の衣類とかもそうですし、生活雑貨に関してもネットが多いですね。確かに、商店街なり100均ショップとかで見てもいいんでしょうけど、品揃えがちょっと思ったのがなかなかないなと。インターネットで調べて、もうそれで買ってしまおう」。読書を趣味とするLさんだが、本も電子書籍に移行しつつある。近所にも本屋はあるが、やはり品揃えが少なく、自分の興味とマッチしないことも多い。「以前、靴買うにしても、庄内の店で試し履きして買ったりとかしてましたけど、今はほとんどネットですね。自分の靴の形がわかってるんで、もうこのサイズやったらいけるやろってなるんで、ネットで買ったりとかしますし」。

【Oさん（20歳代・女性）】

家業の建築関係の会社で働くOさんは、近所のスーパーで生鮮食品や日用品などを購入するほか、豊南市場も利用することが多い。市場は物価が安いため、結婚してからはますます便利だと感じている。

ただ、衣料品については南部地域で購入することはほぼない。また、子どもがまだ小さいので、インターネットを利用することも増えている。「どうしても遠くに行かないとないとかやったら、もうネットになるんで、基本。出れないっていうのが大前提。子どもがいると、ゆっくり買い物ができないんで。自分がほしい服とかはそのユニクロ行くんですけど、どうしてもほしいものとか、服でもどうしてもほしい服がユニクロにないってなると、ネット、宅配っていうかたちになるんです」。また、日用品でも、最近はすぐに届けてくれるサービスもあるので、店舗で買い忘れたものをインターネットで買うことがある。

【Rさん（30歳代・女性）】

中国出身のRさんは、普段の買い物は自宅の周辺や庄内駅周辺のスーパーで買ったり、豊南市場で買うことが多い。ただ、服などは、兵庫の方面に出かけて買うことが多い。また、インターネットで服を買うことも多い。小さい子どもを育てているため、ネット通販は家でゆっくりと買

い物ができるため便利だ。庄内駅の周辺は「なんか、おばあちゃんの服ばかりじゃないかな」と感じる。緑地公園などで開かれているフリーマーケットを利用することも多い。クレヨンなど子ども向けの商品も、インターネットで買うことが多い。庄内駅周辺でも子ども向けの商品を売っていることは知っている。ただ、「あるけど、なんか少ない感じ」。

もちろん、若い世代のなかにも衣料品を南部で購入する人はいるだろう。今回の対象者のなかで言えば、Aさんがそうだった。Aさんの場合、小さいころから梅田などの都心に興味をもつことがなかったというように、衣料品などの消費にはあまりこだわりを見せないライフスタイルを送っているようだ。

ここで、商店街の側からの視点として、Fさんの話を紹介したい。庄内駅周辺の商店街にある衣料品販売店を営んでいるFさんもまた、インターネットを使った買い物をすることが増えている。電化製品も以前は大阪市内に出掛けて値段交渉をして買っていたが、いまは移動費などを考えるとネットで買った方が安いこともある。Fさん自身、インターネットで衣料品を販売していたこともある。庄内駅周辺だけでは、商圈として狭いためである。当時、ネット通販は実店舗以上の売り上げだったという。

また、現在はミセス向けの衣料品販売となっているFさんの店舗は、以前は若い人向けの服や高級服も扱っていた。しかし、社会一般の変化や南部地域の変化などにより、現在はミセス向けの地域密着の店舗へと衣替えしている。

【Fさん（40歳代・男性）】

庄内駅周辺の商店街にある衣料品販売の店舗を営んでいるFさんは、いま住んでいる地域は生活するのに便利だと感じている。家の近くに諸施設があり、梅田までも近い。そのため、生活圏をそこまで広げなくても、暮らしていくことができる。

ただ、服は梅田に買いに行くことが多い。電化製品をはじめ幅広いジャンルの商品を、インターネットで購入することも多い。「僕の場合は、会社で遠いところまで通勤してっていうのがないので。服はちょっと梅田まで買いに行きますけど、あとはネットがあるんでね。今もう電化製品から何からもほとんど幅広いジャンルを僕、ネットで買ってますね。だから別に、外に出なくても、ある程度買えるなど。昔だったら日本橋まで行って、電化製品買ったりもしてたんですけど、そういう労力を払わなくても、ネットでそれより安く買えるんですよ。それに気づいたら、電車賃かけてあそこまで行ってって思うよりは、もうネットで買ったらいいやと。なんでも買えますから。しかも安く」。

Fさん自身、若者向けの衣料品のインターネット販売を行っていた。「うち、ネットで洋服売ってたんですね。（中略）やっぱり庄内だけでは商圈が狭いので、売り上げ的にしんどいんですね。だから、全国で買ってもらうためには、ネットだということで、ネット商売を始めたんです」。売

り上げは実店舗以上だった。ただ、諸事情でネット通販はやめざるをえなくなった。

また、Fさんの衣料品店は、以前は若者向けの服や高級服なども扱っていた。しかし、景気の悪化や地域の高齢化のほか、ファストファッションの隆盛により高級服の販売は難しくなった。

「洋服自体が今ね、やっぱりファストファッションになって、いま安いものになんか変わってきてますよね。昔はね、実は高い服だったんです、うちで扱ってるものは。それこそ、10万円のスーツとか、そういうものがよく売れてたんですね」。

高級服の顧客は、いわゆる「水商売」で働いている女性や客だった。しかし、庄内駅周辺の店舗の業種の入替わりや、景気の悪化に伴う水商売の業界の変化などの影響から、徐々に顧客は減少していった。「スーツでも10万円とかドレスが5万円とか、あたり前に売れてた時代なんですね。(中略)ただね、やっぱりこんだけ景気が悪いじゃないですか。で、店に行くお客さんも減ってるみたいですね。(中略)そういうお客さんがいなくなった、イコールそういうお店も減った、そういうところで働く人も減ってる、っていうことでうちのお店もやっぱり売れなくなってきてる」。

結果、Fさんの店舗は現在、地域密着のミセス向けの商品を扱う店舗に転換している。「ホントに(いまは)50、60、70までのお客さんが多いですね。そのときまではホントに20代とか、10代の若い女の子が来て、髪アップ綺麗にしてね、いますぐ着ていくからちょうだいみたいな、そういう人もたくさんいました」。扱う商品の価格帯も一気に下がった。「10万だったものが5万になり、もう1万になり、っていう風になりましたね」。

Fさんは、このような客層の変化は阪神・淡路大震災の前後で起こったと考えている。震災の際の家屋の倒壊により、居住者が変化したのではないかというのがFさんの見立てだ。「震災がやっぱり一番、売り上げ的には転機だった。売り上げというかお客さんの層ですね。それがやっぱりちょっと変わったなど。景気の問題ももちろんあるんですけどね。あのあたりが一番、節目かなと思いますね」。

⑥子育て世代への移行に伴う消費圏の移動

すでに少し触れているが、子どもを育て始めるとやはり外出が制約されるため、子どもがいたときと同様の買い物での移動が難しくなる。特に、梅田など大阪市内への移動は少なくなるようだ。未婚時代は梅田などに買い物によく行っていたという人も、豊中市外にある郊外の大型ショッピングモールへと車を走らせるようになる。子どものためのスペースもあるショッピングモールは、子育て世帯にとって便利な商業施設として受け取られている。未婚時代は南部地域から大阪市内にかけてを中心としていた消費圏は、子育て世代への移行に伴って吹田や伊丹、尼崎や西宮などへと移動する傾向にある。大阪市を基準とすると、消費圏が北上する傾向にあると言えそうだ。

また、子育て世帯になると、庄内駅周辺の店舗は利用しにくくなるという話も聞かれた。店舗が狭い場合、子どもと一緒にいくことが難しいためだ。しかし、自家用車での大型ショッピングモールへの移動が行われているため、このことは特に南部地域の生活利便性への強い不満として

表面化することはない。むしろ、地域の交通利便性に対する声をふまえると、生活圏内にさまざまなショッピングモールがある地域として生活に便利だと感じられていると言える。

以上をふまえると、南部地域の生活利便性に対する評価は、地域内の商業施設などだけではなく、大阪市内や近隣市の商業施設やインターネットの利用といった、地域外への移動性を前提として理解することが必要であるように思われる。

【Nさん（30歳代・男性）】

調理師として働くNさんは、現在、幼少期の子ども2人と配偶者と暮らしている。衣料品などの購入は、車で吹田や尼崎、昆陽のショッピングモールなどに出かけるときに済ませることが多い。子どもができてからは、子どもが遊べる場所がある商業施設に行くことが多くなった。「最近できたエキスポシティとか、あそこへ行ったり。いろんなイオンモールとか、子どもが遊べたりする場所がある施設にはよく行きますね。逆に梅田とかはほとんど行かないですね」。

庄内駅周辺の飲食店に食べに行くこともある。ただ、「たまに、子連れOKのレストランやったりぐらいで。ほとんどないっすね」。「座敷があるとこじゃないと。やっぱり、下の子がまだハイハイやったりつかまり立ちぐらいなんで」。

結婚を機に、行動範囲は変化してきている。1人での行動が多かった独身時代の買い物先は「(大阪市内の方に)寄っていた感じ」だが、いまでは「ほとんど南の方には行かないかな」。

【Mさん（40歳代・男性）】

不動産関係の仕事をしているMさんは、梅田に買い物に行く機会はあまりない。ただ、「学生時分は梅田の辺の、例えばファイブとかナビオとかあの辺の服屋とか見に行ったりしてたんですけど」。ただ、子どもが生まれてからは、伊丹などのショッピングモールに出かける機会が増えた。「なんか子どもがまだ小さかった頃、なぜかはよくわかりませんが、その頃はなんかそこにはまったというか。一時期よく行ってました。(中略)ショッピングモールでいろんな買い物して、フードコートで食べて帰ってみたいな感じで過ごしていましたね」。

【Qさん（30歳代・女性）】

中国出身のQさんは、普段の買い物は自宅近所や庄内駅周辺の店舗で済ませることが多い。ただ、衣料品については西宮や三ノ宮など、兵庫の方面に行くことが多い。西宮のショッピングモールに行く理由は「よく子どもも遊べるので」。梅田は複雑で人も多いので、子どもを連れて行くことは難しい。

⑦南部以外の豊中市内への移動の少なさ

上述のように、子育て世代への移行に伴い居住者の消費圏は北上する傾向にある。しかし、豊中市の北側への移動はほとんど聞かれなかった。地元出身者の場合、南部以北の豊中市内への移

動の少なさは、子どものころから共通してみられるようだ。転入者にとってはもちろん、地元出身者にとっても、豊中市の北側はどのような施設があるのかよくわからないところとして認識されている場合もある。

【Aさん（30歳代・男性）】

地域のまちづくり団体に関わるAさんは、南部でも豊南地区で生まれ育ち、現在も住み続けている。Aさんにとって自転車で行くことができる江坂は生活圏だった。しかし、豊中の北側へ行くことは子どものころからあまりなかった。「あんまり北のほうへ向いてとかいうのは…。うちからやったら、川を渡ったら吹田ですね、江坂へ行けるので。江坂へ遊びに行くとかはありましたね。自転車とか」。

【Iさん/Jさん（20歳代・女性）】

IさんとJさんの姉妹もまた、子どものころから豊中市の北側へ行った記憶はあまりない。Jさんは中学生のときに、週3回ほどのペースで尼崎へ友だちに着いて行っていた。梅田まで自転車で行くこともまれにあった。「尼崎行ってたらカッコいいと思ってました。（中略）イオン、カルフルにチャリで行って。梅田にチャリで行ってたら勝ってる、みたいな」。衣料品を買ったり外食をしたりするのは大阪市内が多い。千里中央には「あんまり行った記憶ない」（Iさん）。「千里体育館ぐらい」（Jさん）。豊中駅より北にどのような店があるかがわからない。

【Lさん（40歳代・男性）】

南部地域で生まれ育ち現在は不動産関係の仕事をしているLさんは、中学生になると友だちと梅田まで映画を見に行くなどし始めた。しかし、豊中の北側へは「なかなか足は向かないですね」。子どものころは豊中駅に行ったこともほとんどなく、千里中央は「豊中市にあるんやろうなっていうような」感覚だった。「豊中北部っていうのは、住宅街っていうイメージがあって、僕らが若いっつうか小さいころに用で行くっていうことは、はっきり言ってなかったですね」。現在もやはり、豊中の北側へ買い物や食事などに出かけることはあまりない。「行っても、内環状辺りで道路沿いにある店舗ぐらいですね」。

【Oさん（20歳代・女性）】

南部地域で生まれ育ち、父親が継いだ建築関係の会社に携わっているOさんは、小学生のころは緑地公園に遊びに行くことはあったが、「北に行くことはほとんどないですね」。子どものころに親と出掛けるときは大阪市内に行くことが多かった。千里中央に行くこともあったが、「どっつかって言うと、でも梅田ですね。北区ばかり」。

小学生のころからダンスをはじめ、中高生のときは部活に入ってやっていた。高校生のときは

外で練習することもあり、箕面に行くことが多かった。「一緒にやってた子が箕面の子だったんで、箕面のメイプルホールの前とかでやってました。あとは、服部緑地」。南部であまり練習することがなかったのは、鏡の代わりにする大きなガラスや練習できるスペースがあまりなかったためもある。「だから（庄内では練習が）できなくて。友だちが教えてくれたとことか、緑地やったらみんながやってるとこの間をとって緑地みたいな。（中略）鏡はないですけど、一応合わせるのだけは緑地でやったりとか。だからメイプルホールが基本ですよ」。

【Qさん/Rさん（30歳代・女性）】

国際結婚で南部地域に転入してきた中国出身のQさんとRさんの2人は、普段の買い物は地域内で行うが、衣料品などは三ノ宮や西宮、インターネットなどで購入している。千里中央など豊中市の北側に行くことはあまりない。「子どもが遊ぶところあるの？ 上の方、どんな遊ぶ場所があるかわからない」（Rさん）。「モノレールがちょっと不便だし、高いし」（Qさん）。家族で車で遊びに行くときなどは、神戸のアンパンマンミュージアムに行ったり、須磨海浜水族園に行ったりなどもする。

ただし、高校まで中部地域に住んでいたEさんは、江坂のほか、千里中央に行くことも多いなど、他の対象者とは異なる生活圏を子どものころに形成していたように感じられた。ケースが少ないため、このような生活圏のちがいが居住地によるものと断定することは難しいが、学校区が豊中市の東部地域にも広がっていたことから、江坂へ行きそこから北上するルートが選択されやすかった可能性は考えられる。

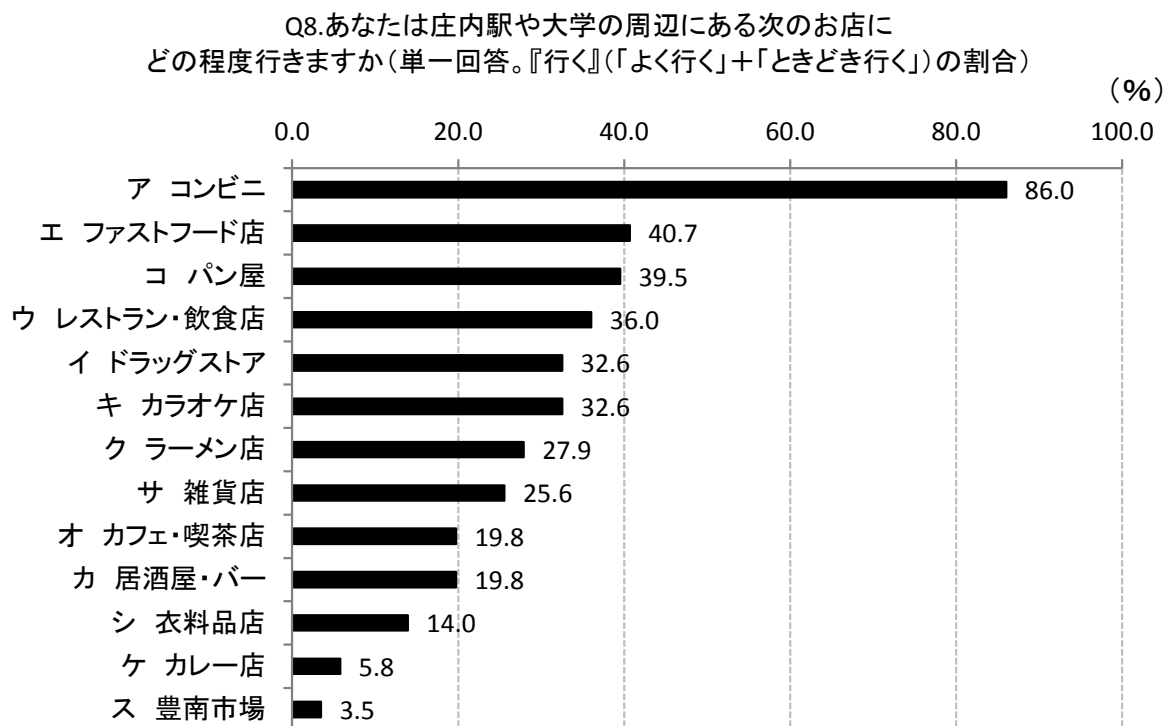
【Eさん（30歳代・男性）】

庄内駅の近くで飲食店などを経営しているEさんは、高校までは豊中市の中部地域に住んでいた。小中学校のときには千里中央まで行くこともあった。「小学校やったらそんなね、服部、行っても…江坂とかですかね。で、遠いところやったら千里中央とか、ですね。（中学になると）千里中央とかあと梅田か、ちょっとミナミの方に行ったりとかですね」。Eさんはサッカーもしていたが、子どものころはスケートボードも流行っており、それらの用品を買うために遠くに行っていた。「あんまこころへんでね、売ってないものもあつたりしたんで、っていうのはありますね。サッカー用品とかも、あんまり近くになかったんで」。

⑧大阪音大の学生の地域の店舗の利用

昨年度の調査によると、大阪音大の学生は、庄内駅周辺の店舗の利用が少ないのではないかと推察された（図表41）。豊中市外にある実家から通っていることが少なくない学生にとって、庄内駅周辺は通り過ぎるところとなっている可能性がうかがわれ、そのことは第2章の観察調査でもある程度裏づけることができた。

図表 41 大阪音大の学生の庄内駅・大学周辺の店舗の利用頻度



では、地域の人たちにとって、大阪音大の学生はどのように見えているのだろうか。インタビューからうかがえたのは、地域の人たちにとって大阪音大の学生は、消費活動を含め地域での動きがあまり「見えない」存在になっているということだ。「音大生いっぱいおるなーって感じる。駅では見るんですけど、駅でしか見ない。あんまり歩いて、あー、音大生やな…そんなに見る？見いひんな、あんまり」(Iさん・20歳代・女性)。「僕の中では音大生は庄内でお金を落とさないというイメージです。(中略)素通りしてるだけですね。あれだけたくさんの人がいま庄内で降りて、通学路にしてるじゃないですか。あそこでお金落としてるの僕、あんまり見たことないですね。唯一いま落としてるなと思うのは、パン屋さん、駅前の。あそこで買ってるのは僕よく目撃します。でも他のところでご飯食べてるとか、見たことないですね」(Fさん・40歳代・男性)。「ジャズ喫茶とかね音楽喫茶とかあって、そこで音大生が来て、演奏とかしてるんならね、行ってもええかなとかあるんでしょうけど、なかなか聞かないですしね」(Lさん・40歳代・男性)。

しかし、大阪音大の卒業生で、南部に転入してきたHさんとPさんの2人の話からは、学生たちも地域内での消費が少なくないことがうかがえる。もちろん、2人は学生時代から南部地域に住んでおり、実家から通学していた学生たちとは状況が異なる。自分たちは学生のなかでは少数派かもしれないという話もあった。しかし、学校の帰りに友だちと食事に行ったり、合同練習の終わりや公演の打ち上げで居酒屋を使ったりなど、幅広い学生の地域の店舗での消費は少なからずあるようだ。

【H さん (20 歳代・男性)】

大阪音大を卒業し、フリーランスのベーシストとして演奏活動をしている H さんは関西の都市部出身。大学 2 年生のときに将来的な仕事の利便性も考慮し、南部地域に転入してきた。H さんは庄内の「下町」の雰囲気が学生のころから好きだった。「庄内色に染まるというか、下町な感じが僕はすごい好きでしたね」。

学生時代から庄内駅周辺で買い物をしたり食事をしたりすることは多かった。「(大学時代も)外で結構食べましたけど。(中略)それこそ、もうこの商店街の、ぶっちぎり寿司とか。後はどこがあったかな。王将とかも行ったり。王将の隣、パチンコ屋の前になんかカウンターの店、あそこ結構いろいろ変わるんですけど、ラーメン屋とか行ってましたね」。「常におっきな楽器を持ってウロウロしてるんで。持ちながら行けるぐらいのところですね」。「外食は駅の向こうの焼き鳥屋さんとか」。管楽器や弦楽器の学生の行きつけの居酒屋が 1 軒あった。また、その隣に店が新しくできたが、「最近はなんかあそこが人気らしいです」。

庄内駅周辺の飲食店を学生が利用していたのは、自分に限られたことだとは感じていない。「周りも結構行ってましたね。管楽器、弦楽器、その楽器系の人らはよう行ってました」。

【P さん (20 歳代・女性)】

大阪音大を卒業し、フリーランスの声楽家として演奏活動をしている P さんは、学生時代は大学寮で暮らしていた。大学までは思ったより遠かったが、周囲にはスーパーもコンビニもあり生活には困らなかった。寮は豊南地区にあるが江坂まで行くこともほとんどなく、買い物や外食は「もう庄内が圧倒的に多かったです」。ほかの寮生も同様だと思う。

学生時代、大学に行った際の昼食は学食かコンビニが多く、学外で昼食を食べることはほとんどなかった。ただ、大学からの行き帰りなどでは、地域の店にはよく行っていた。「2 階の沖縄料理屋さん、もうなくなったかな、あったんですけど。鳥貴族は安いから行くのと。後ほかに、アルバーलってもうないんですけど。あの、コロッケ屋さんの 2 階みたいなの、とか。そのあたりに行っていましたね」。寮を出たいまでも、地域の店で食事をすることがよくある。

大阪音大の学生が地域の店舗をあまり利用していないという昨年度のアンケートの結果は、意外に感じる。「私は割と(利用してました)。周りも行ってましたけど。あ、そうなんや。(私や周りは)よく行くお店が何軒かあって、それどこか行こうかみたいな」。「声楽の人はなんかよく、稽古終わりで、集団でわーっていつも」。行きつけの店は楽器の専門によって少しずつ違う。「新しいセブンイレブンができた通りを、駅の方に歩いて行って、こっちにちょっと焼肉みたいなちっちゃいお店が、そこをこう曲がったところ。角になんかイタリアンみたいなちっちゃいお店があって。あそこはすごい、音大の先生も行くし。打ち上げなんかで声楽の人にも使われてます」。

ただ、自分や周囲の感覚が学生の間でどこまで一般的かはよくわからない。「(自分の)周り、一部かもしれませんがね。行く人は。1 回入ってみるとおいしいね、ってなるんです、割と。入りづらいっていう子が多いかもしれませんね、最初」。「おしゃれなカフェとかがちょっとできたり

したら、すごいそこに行く女子とかは多いですね」。

(2) つながり構築

南部地域は人びとのつながりが強いと言われることが多い。しかし、昨年度の若い世代を対象とした質問紙調査では、北東部・中北部地域との比較でそのような傾向は必ずしも認められなかった(図表 42)。この関係をどのように捉えればよいのか。

単身者・未婚者では社会的つながりが弱いことがわかっている。そのため昨年度は、おそらく南部地域全体で他地域よりも社会的つながりが弱いという結果が出たのは、単身者・未婚者が多いなど地域の人口構成の要因が大きいのではないかと推察した。

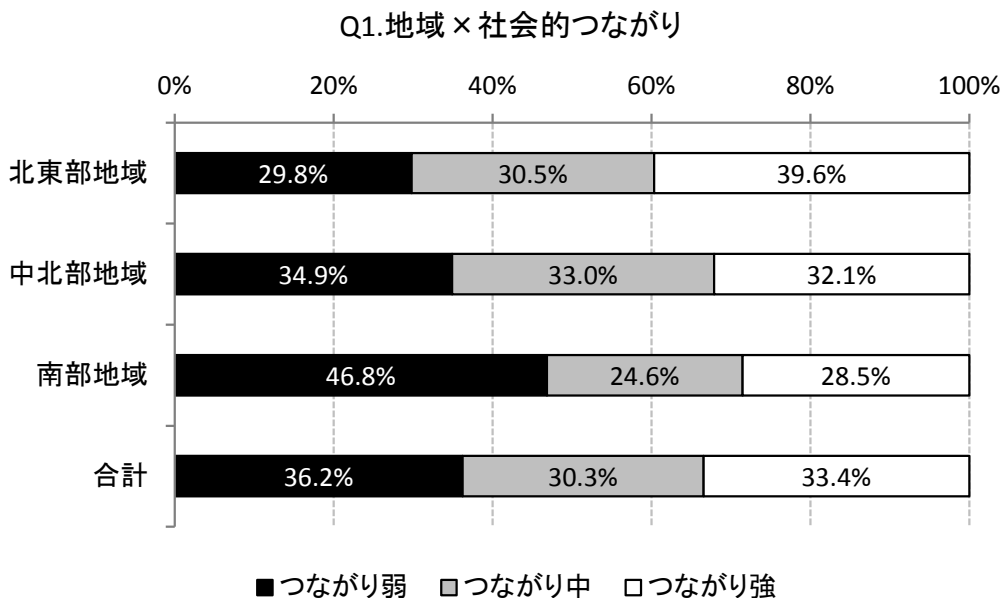
今回のインタビュー調査では、居住者の地域内外のつながり構築について、より掘り下げた分析を行ってみたい。南部地域に住む人たちはどのようなつながりを地域内外に構築しているのだろうか。つながりの構築は、どのような経路をたどって行われているのだろうか。つながりの構築は、居住地の選択とどのように関連しているのだろうか。よく言われる地域のつながりの強さと、質問紙調査から浮かび上がるつながりの弱さは、どのような関係にあるのだろうか。

①地域のつながり

インタビュー対象者のなかには、地域のつながりを積極的に構築している人たちがいた。たとえば、地域の消防団や祭りの運営に関わる人たちである。このようなつながりは、いわば親から受け継がれたものであることが多いようだ。家の継承と地域の継承の重なり、血縁と地縁の重なりがそこにはみられる。

自治会や祭り、消防団など地域の活動を通じて築かれるつながりは「地の人」が中心である。「地の人」の間ではつながりが強く、相互扶助の関係もみられるようだ。しかし、転入者などそ

図表 42 社会的つながりの地域比較



れ以外の人については接点がありません。自宅から少し離れると、どういう人が住んでいるのかわからないことも少なくないと言う。

また、地域のつながりが親から子に引き継がれるという形態がとられる場合、地域組織との接点が少ない狭間の世代が生まれやすい状況にもなっているようだ。参加者の高齢化も感じられており、地域のつながりの再生産が課題となっている。他方で、会の若返りやパレードへの参加など新たな取り組みも見られ、活動に積極的な若手も現れている。

【Lさん（40歳代・男性）】

Lさんは家業の不動産関係の仕事を父親から継いでいる。現在Lさんは、地域の祭りにもかかわっている。祭りは一時期休止していたものの、自身が子どもころに、当時の地域の若手を中心に復活された。Lさんの父親は、休止前の祭りの形式などを覚えていた世代である。そのため、復活の際には若手に知恵を出し、復活後も積極的に関わっていた。Lさんもそのような父親を見て、「僕もせなあかんねやろなって思ってたんですけど」。

Lさんは父親が体調を崩した後、初職の民間企業を退職し、家業の不動産関係の仕事を継ぐ。同時期に、消防団や祭りの運営にも関わり始める。ただ、祭りの復活にかかわった世代の人たちもすでに高齢化してきている。その子どもたちの世代も、多くが転出しており地元には戻ってこない。「その時に（祭りを）復活させた功労者たちが今ほとんど30年経ちまして、ご高齢になられて。その人らの後継ぐもんはいてるかと言うと、もういてない感じ。いてるっていうか、僕らもそうなんですけども、代わりになる人間がなかなかいてない。その功労者の息子さんとかどうなのって話になってくると、ほとんどが他へ働きに行かれてるっていう」。運営側に若い世代が少なく、「僕らの方でも、40代いうても若手と言われてしまう」。

祭りの神輿は一基でだいたい800～900kg。1人あたり30kgを担ぐと換算しても、30人は必要になってくる。しかし、神輿の担ぎ手としてLさんが想定できるのは多くても20人程度。「仮に20人でしたら、1人45キロ。もう50キロ。（中略）そうなってくると、重たい目して苦労した人間というのは、次の来年は来てくれません」。

地域の活動の参加者は、基本的に「地の人」である。地域外から転入してきた人たちはあまり参加することはない。「（活動の参加者は）もうはっきり言って、地の人ですね。何かしら庄内のこの地域に、先祖が根差してた人とか、そういう。移り住んで来た人でも、1世代、2世代住んで、その辺の顔なじみになった人とかでしたら、あれですけども」。

自治会活動も先細りの傾向にあると感じる。自身の所属していた自治会も、最近解散の運びとなった。「そうなってくると、地域のつながりっていうか、誰がどこに住んでいるかっていうのも、把握しづらいですね。僕の住んでる周りは、誰が住んでるかっていうの、わかると思います。ただ、1ブロック離れたとこなってくると、全くわかりません」。

もちろん、地域の活動に参加する人たち同士での関係は厚い。相互扶助の関係もある。逆に言うと、そのような活動に参加しない人たちのことは、よくわからない。「催し物に出てきた人間同

士のつながりが強いと思いますよ。もう一旦そういう風な顔見知りになって、全く知らない人同士ではなくなった人間同士でしたら、ちょっと困ったことがあったら、誰か手出されへんかっていうのは、それはあると思います。全く赤の他人やからお手伝いとか、そういう風なんできひんわけじゃないと思います。ただ、催し物とかそういう風なのに、活動に出て来られない人たちとの面識が僕らが無いんで、その人たちは何する人ぞという感じです」。

【Mさん（40歳代・男性）】

父親から不動産関係の仕事を引き継いだMさんが子どものころ、休止していた地域の祭りが数十年ぶりに復活した。そのときまでは、祭りの単位となる昔の旧村の区切りについてもよく知らなかった。「地元の祭りとかを見だして、そういう旧村の名前を知ったみたいなかたちでした」。子どものころは祭りに参加するというイメージはなかったが、大人になり働き始めてから「地元におられた職場などの諸先輩方からお声かけしてもらって、『祭りに出えや』と誘われて、参加した感じですね」。

祭りの参加者の高齢化を感じる。特に同年代の40歳代が少ない。自分たちの世代は、就職して引っ越してそのまま地域から離れた人が多い。他方で、「20代30代ぐらいかの人らは、いくらかちょっと増えたかなって感じ」もしている。30歳代が増えているのは、自分たちの上の世代が自身の子どもの世代に引き継いでいるからだと思う。「ただ、あいだ（の世代）がないんですね」。

祭りをはじめ地域の活動に参加する人たちは、基本的に「地の人」だ。「息子さんが（祭りに）出られてても、やっぱり元の方が地の方みたいな感じなんで。たぶんそこからの広がりで言うと、弱いのかな？ってのは思いますね」。

近隣のつきあいやつながりの維持のためにも、祭りなど地域活動は大切だ。南部地域は人のつながりが強いと感じ、そういう面では良さを感じる。ただ、やはりその関係も「地の人」が中心かもしれない。「やっぱり、これも地の人といえ、顔を合わしたら声かけれる、声かけられるとか、自然なところから会話ができるとか。そういう昔ながらの近所の付き合いの面が、やっぱり（この地域は）深いかな」。

【Nさん（30歳代・男性）】

調理師として働くNさんは、上述のLさんやMさんより若い30歳代である。父親は地方から仕事の都合で南部地域に転入してきた。そのような父親は、祭りの復活時から参加しているメンバーの1人である。そのため子どものころから、祭りにも参加してきた。「（祭りを改めて）やりはじめたときに、親父もたぶん最初から参加してたんやと思うんですよ。それと同じくして、僕が生まれた感じで。だからずっと参加はしてますね」。

数年前に、祭りの復活に関わった父親世代で構成された青年会が一旦解散。その子ども世代を中心として、新たな会が立ち上がった。「青年会の中心ってなったメンバーの息子さんたちとか

が、僕と同じぐらいの年代の人らで。で、その年代の人らが中心に、いま活動をしようかなって
いってやってる感じですね」。自身はその会でいまは会長になっている。会長になったのは、前の
会長だった父親からの指名だ。「次、俺やろうなと思ってたんで。うすうす感じてたんで」。

同世代の仲間たちとの関係は、これまで継続的に密だったわけではない。「ちょっと離れてたん
ですけどね。やっぱり高校とか25ぐらいまでの間は、みんななんかいろんなことやってるんで。
ちょっと歳も重ねてきて、ちょっとみんな落ち着いたら、集まってきて」。Nさんの現在の住まい
は、祭りの単位である旧村の外にある。同じ世代の仲間もまた、同じように実家からは離れてい
る。だが、「みんな祭りの時期になったら帰って来るんで。準備の段階やったり」。

会の活動としては、基本的には秋に行われる祭りの準備である。「清掃活動も年に何回かあるん
ですけど。神社の境内の掃除やったり、地域の掃除やったりをたまにやって。でも、その会でな
んか別に集まるとかでは特にはないですね。みんなでどっか遠足行くみたいなんはない。昔はあ
ったみたいなんですけど、今はないですね」。

Nさんもやはり、祭りの参加者の減少や高齢化を感じている。「お神輿の担ぎ手がどんどんど
ん高齢になっていって。僕たちもおるんですけど、その下がまだいないっていうか。下ってな
ったら、自分たちの息子なんで。何年後、何十年後とかってなるんですけど」。また、自分たちの
世代も、神輿の担ぎ手として体力が落ちていると感じる。「やっぱり昔の人って力強いんっすよね。
足腰がしっかりしてるっていうか。それがあったんすけど、今の若い、僕もなんですけど、そこ
まで力がないんですね」。

昔に比べると、地域のつながりが減退しているように感じる。「まち全体がたぶんそうやと思
いますね。なんか、昔はもうみんなつながってるのもあったけど、どんどんどん個人個人にな
ってるじゃないですか。地域自体のつながりっていうのがなかったり。地区の運動会とかも、た
ぶん人少なくなってると思うんですよ。(中略)人と人とのつながりがどんどんどんなくなっ
ていってるんじゃないかなと思うんですけどね」。

地域のつながりを回復するためにも、祭りはひとつの手段として大切だと感じる。親を起点に
子どもがつながるといふより、子どもを起点に親がつながるといふことでも良いのではないかと
考えている。「子どもたちが来たって言ったら親も来ると思うんで。子どもから親がつながるっ
ていうのも全然ありやと思いますけどね」。最近、南部フェスタのパレードに自分たちの神輿も参
加することに決めた。「ちょっとでも知ってもらえて、こんなんやってるんやったら行ってみたい
なっていう人が、来るだけでもいいですし、担ぎたいっていう人もおるんやったらどんどんウェ
ルカムなんで、それは」。

若い世代が地域の活動につながる回路としては、PTAの存在も大きい。親世代が地域とのつな
がりをおもってない場合も、PTAを入口として他の活動にも参加するということが見られ
る。転入者が積極的に地域での人間関係を築いていくなかで、PTAの活動に接続されていくとい
うケースも見られた。ただし同時に、PTA活動の負担を語る声や、地域活動に対する世代間の認
識のギャップに関する声も聞かれた。

また、G さんからは、PTA から派生した母親たちの自発的な集まりの話もあった。情報交換やストレス解消といった自助的な機能をもつと思われる非組織的な集まりであり、関係者の生活のなかで小さくない意味をもっているのではないか。転入者である G さんを中心に行っているという面でも興味深い。

【G さん（40 歳代・女性）】

北関東から配偶者の転勤で転入してきた G さんは、幼稚園のときから役員をしていた。転入者の G さんに声がかかったのは、子どもが幼稚園に入る前から積極的に公園などに行っていたことがきっかけだ。「めっちゃ公園行ってたんですよ。公園デビューっていうか。子どもを遊ばせるのに、ずっとマンションの中にいるわけにいかないじゃないですか。で、うちの子は人見知りだったんで。もういろんなとこ連れ歩かなきゃと思って公園に行ったんですけど」。幼稚園についての情報などは、そこで出会った母親たちから得た。同時に、幼稚園に入ってから、幼稚園の役員を任されることになる。

子どもが小学校に入ると、PTA からも声がかかった。何度か断ったが、最終的には役員を務めることになる。PTA の役員を務めてからは、学校の先生の仕事がとても大変だということ、地域の協力が必要だということがわかった。「学校のことは学校の先生に任せとけばいいっていう感覚だったんですよ、私も。でも、身近に先生たちをみたら本当に気の毒で。教師ってこんな大変なんだって思って。それは確かに感じましたね。地域の方の協力がないとやっぱり、子どもたちもいろいろなね、体験ができない。七夕とかとんどとか。（中略）都会だとね、七夕なんかもう、笹手に入れるのが大変でしょ。それをやっぱり、地域団体の方がやってくれるので、子どもたちも短冊書いてとかできるじゃないですか。いい文化だなと思って。それはでも、地域の方がやってくれないと難しい。PTA だけではできないので。そういうのはすごく感じましたね」。

ただし、役員の仕事はとても大変だった。「月の半分ぐらい学校にずっと入り浸ってる」というような時期もあった。当時はまだ専業主婦だったが、いまはすでに仕事も始めているため、PTA の仕事からは少し距離を置きたいと考えている。

他方で G さんは、当時 PTA の役員を務めていた母親たちを中心に、自宅で定期的に食事会を開いて集まっている。子育て中の女性たちが夜に飲食店に集まることは、家の人や地域の人々の目もあり、なかなか難しい。そのなかで、G さんの自宅では定期的に、母親同士で集まる場を設けている。近くに子育てなどの相談相手がない人も少なくないなかで、お酒も交えながら情報交換をしたり、子育てや進学悩みなどについて話す、貴重な「たまり場」だ。「そういう場もないとね、私もやっぱり詰まりますしね」。

【B さん（40 歳代・男性）】

父親が鮮魚店の自営を始めるため、幼少期に南部地域に転入してきた B さんは、子どもを育てるまで地域活動を積極的に行ってきたわけではない。B さんの親も、それまで特に地域とつなが

りがあったわけではない。「親父らも特に地域のこと何かしてたっていったら、やっぱり店潰した時点ではもう、地域とは縁切れてたし」。

しかし、Bさんの長子が小学校にあがると、PTAの役員に声がかかる。その話が自分にきたときには、もう断るのは難しかった。また、「親父が店潰したことへのリベンジ」という側面が、はじめてPTAの役員を受けた当時はあったかもしれない。

PTA活動をはじめてからは、そこに紐付けられた他の地域組織の活動にもかかわるようになる。「全部に顔突っ込んでんのは、やっぱりこの校区がどういう動きをしてんのかと、この団体がどの動きをしてるっていうことをまず把握する。僕が3年前まで何もしてなかったから。PTAに関わるまでは何にも知らへんかったんで。当然みなさんよりも30年やってる人たちとおんなじように、もしその人らに意見言おうとするんであれば、そんだけのことはせんと聞き入れてはもらえへんかな」。

ただ、地域活動を進めるなかで、世代間のギャップも感じている。Bさんの感覚では、自分たちの地域では阪神・淡路大震災の復興の際に地域の活動が盛り上がり、現在もそのときの世代が中心となって地域の活動を牽引している。しかし、その世代から自分たちの世代までの間の世代が、地域とあまりつながっていない。また、上の世代の人たちは、自分たちの世代が直面している状況をあまり理解していないと感じることも少なくない。「確かにいまがんばってくれてはる人たちが、震災のときに活躍した人ら。それを知ってるから、それがあからたぶんずっとがんばれたんやと思う。(中略)ただ、もっと(下の世代に)繋いでおいてくれたら、僕は5歳上、10歳上の人に相談できねんけど、僕がいま相談すんのは65とか70の人に言わなあかん。その人らに話しても、『PTAでどうにかならへんのか』って言うけど、『PTAって何人いてるんですか人が』っていう。『いてるやろう』って言うけど、『いやいやもう、みなさんのときとはちがうんです』と。っていう話が、それも昨日の話やねんけど。そういうジェネレーションギャップがある」。

参加者同士の意見の調整も難しい。Bさんは現在「一人親方」として建築関係の仕事をしているが、本業とのちがいを意識することもある。「会社やったら僕がこうする、当然人も集めてこうするってできるじゃないですか、僕の責任で。でも、地域はそれができひん。僕の意見なんていうのは別に個人の意見であって、それを取りまとめた総意っていうかたちで進めていかへんと。でも、その取りまとめたものっていつつ、最初にこう思ったものと絶対ちがうものになるんですよ。例えばスローガンひとつつくろうにしても、3班にわかれてスローガンつくって、じゃあここのこの言葉いいからこの言葉、ここのこの言葉、って(合わせて)やったら、(できたものは)なんやねんこれってなるんですよ。他のことでもそうなんです。その、あいだあいだとってってできたものって、え、これかホンマにほしかったのは、ってなるんですよね。そこは仕事とはちがって。仕事では僕がこの枠やと思ってズレたら、いやこっちゃと、せめてズレてもこんだけや、ってことはできるんやけども、地域のことできひんのは、そこかな。近道がみえてもその近道にいけない。相手はそっち行くんや、あ、そっか…っていうことはすごく」。

だが同時に、Bさんは本業にはない魅力を地域活動に感じてもいる。「自分で自分(の仕事)に

値段をつけるっていうのを10何年してると、値段つけてええことがすごいまは楽で。だから、やりすぎてもかまわないんですよ。やりすぎたら周りの人に迷惑かけるからしないですけど。仕事でね、たとえば壁を塗り替えました、屋根を塗り替えました、そしたら『足場かけてるついでに全部ほかも塗り替えたほうがいいですよ』と。こっちは善意で言ったとしても、『あんた儲けようと思って言ってるやろ』って勘違いされたら、もうそれまでですよ。かといって、それを言われんのビビって（やらないのか）。結局おんなじ足場かけたんやから屋根も壁も全部ほかのともやっときましようっていうのが、自分の親やったらそう言うし。（中略）だからこういう（地域活動の）ボランティアは、僕がいくら提案しようが、ここで何時間話そうが、別にみなさんから何ももらう必要もないし。っていうのが、なんか、僕としては心地いい。だから、何が目的ってよう言われんねんけど、ただもう、そういう環境が楽しいっていう」。

他方、ひとり親のCさんの場合、仕事と子育ての合間で、PTAや学校行事に積極的に関わることは難しい状況にある。地域の活動は自身の母親が担っている部分が多い。ただ、休日は子どもの部活のサポートにあたることが多く、Cさん自身は他の保護者とそこで接点を有している。

【Cさん（40歳代・女性）】

シングルペアレントとして2人の子どもを育てているCさんは、家が自治会に加入している。しかし、仕事と子育ての合間に地域の活動に参加することはなかなか自身ではできておらず、自身の母親が参加することが多い。「昔マンションに住んでたときも、町内会っていうのもなかったですし。で、5年前にいまの家に引越してきたときも、一応、町内会っていうのはあるみたいなんですけど、ほんとに回覧板が回ってくるだけで。で、お年寄りが多いんですね、すごく。で、なかなか私も参加することもできないですし」。

地域のつながりが強いのは、自分たちのもう1つ上の世代、母親の世代であるように感じる。「おばあちゃんのつながりって結構強くて。私たちが子どものときの同級生の親同士だったりとか。で、ポーっと歩いてたら、何々ちゃん言うて、後ろから（同級生の）おばちゃんに呼び止められて、久しぶりやなー、言うて。なので、私たちの1代上のほうが、つながってますね。誰々さんが最近調子悪いみたいやで、みたいなのを母親が話してるのとかは聞きますね」。

他方、Cさん自身は、休日はほぼ子どもの部活のサポートに当たっている。平日に子どもと一緒にいる時間がなかなかとれないこと、小さいころからあまり見てあげることができなかったことなどが理由だ。学校行事に参加することも難しいCさんにとって、子どもの部活への参加は、他の保護者とのつながりができる機会のひとつでもある。「小学校からスポーツのチームと一緒に動いてもらった保護者さんも、いっぱい中学校に来てはりますし。で、新たに中学からのお付き合いっていうのも。だから、学校行事になかなか私が参加できないので、ほとんどクラブの関係の親御さんとかかわりっていうかたちになってますね」。「私は恵まれてるのかもしれないですけど、子どもたちがスポーツを始めてくれたってことで、すごいいろんな父兄さんから、すご

くほんとお気遣いもいただいていますし。すごく恵まれてると思います」。

このように、今回のインタビューでは、居住者が地域でつながりを形成する経路としては、親からの継承と、PTA など子どもの学校との関係が主なものであった。いずれにしても地域のつながりの構築は、家族を起点としている場合が多い。昨年度の調査で分析したように、南部地域は若い世代における単独世帯や未婚者が多いことを人口構成上の特徴のひとつとしているが、それらの人びとは、やはり地域のつながりに接続する経路を相対的に欠いていると考えられる。

また、インタビューからは、南部地域に単独世帯が多いという印象をもっていないケースもみられた。「(地域に住んでいるのは) ファミリーか、おじいちゃん、おばあちゃんのイメージ。へー、そうなんや。(単身者が多いイメージは) 全然ないな」(Jさん・20歳代・女性)。「(単身者は地域に) いんのかな。逆に住むとこあんなのくなって思いますけどね。このあたりとかいったらもう、個人の住宅ばかりじゃないですか。(中略) マンションも建ってたりするからおるっちゃおるんやと思うんですけど。でも1人暮らし…ちょっとわかんないっすね」(Nさん・30歳代・男性)。

居住者の話からは、家族を起点とした地域のつながりは確かに強い面があるように思われる。相互扶助の関係も見られるようだ。他方で、これは南部だけに当てはまることではなく、一般的な傾向であると思われるが、単独世帯や未婚者は地域につながる回路を欠いており、見えにくい存在になっていると言える。

他方で、地域に密着した活動ではあるのだが、地縁とは少し異なるかたちのつながりとして、すでに前節(2)結婚・子育てのパートで触れた、外国人親子が参加する「おやこでにほんご」などのケースなども見られた。日本人とのコミュニケーションが難しい場合もしばしばある外国人の保護者にとって、そこはひとつの「居場所」として感じられている。

Gさんの自宅で行われている母親たちの集まりも、おそらくは同様の機能をもっているのだろう。もともとは同時期にPTAの役員をしていた人たちが中心であり、地縁から出発しているとも言えるのだが、そこからは少し距離をおいた、自発的・非組織的な「居場所」のひとつであると捉えることもできる。

また、これも前節(1)進学・仕事のパートで少し触れたが、Aさんが参加しているまちづくり団体も、子どもの学習支援を行っていたり、小さい子ども向けの駄菓子屋を毎週開いたり、さまざまな相談を受け付けていたり、イベントや学習会を不定期で開いたりなど、地域内外の人がかかわるひとつの「居場所」としての側面がある。Aさん自身、そこへの所属により新たなつながりを得ていると考えられる。

自治会やPTAなど、地域のなかにはさまざまな組織を中心として形成されている地縁があり、それはときに家族を介して再生産されている。つながりは相互扶助を促したり、後述するように地域への愛着を醸成している面もある。他方、それだけではなく、地縁から半歩ずれるようなかたちのつながりも、地域のなかには形成されている。そこもまた、情報交換やストレスの解消、

新たなつながりの形成といった、個々の生活者にとって重要な機能をもつ場（居場所）となっているように思われる。

地域の社会関係のもうひとつの場である商店街ではどうか。庄内駅周辺の商店街で衣料品店を営んでいる F さんは、自分の子どものころからの商店街の社会的なつながりの変化を語る。背景には、商店街のなかでのチェーン店の増加があるようだ。また、商店街を中心に飲食店・食料品販売店を 4 店舗経営している E さんは、仕事が忙しいなかで他の店主と関係をもつことが難しい現状について語った。そのなかで、両者とも庄内まつりの復活や庄内バルなど、若い世代を中心とした商店街での試みへの期待は小さくない。

【F さん（40 歳代・男性）】

父親が立ち上げた衣料品店の店舗を継いでいる F さんは、自身の子どものころ商店街を歩くと周りからよく声をかけてもらったことを覚えている。おまけを付けてもらえるなど、人情を感じることも少なくなかった。「特に商店街にいてるからかもしれませんけど、僕は子どものときは、店主っていうのはみんな声かけてくれましたね。パンを買いに行ってもそうですし、八百屋さん行ってもそうですし。（中略）そこに買いに行くと、顔見知りになって、X さん（＝F さんの店舗名）の息子さんっていうことで、普通に歩いてたら声をかけてもらえるものではありましたね。そういう意味では、人情ですよ、これまけとくわー、とか。これちょっとおまけにつけとくわー、とか。薬買いに行ってもね、おまけのおもちゃとかくれたり。パン屋さん行ったら、パンを、これまけとくわーとか。切れ端あるからこれあげるわー、とか。そういうのが、人情かな。別に物くれるから人情ではないんですけど、そういう気持ち。これしてあげるわ、あれしてあげるわ、っていう気持ちがやっぱり強いなというのはやっぱり、庄内ならではかなと」。

ただ、最近はそのようなつながりが商店街のなかでも減少しているように感じる。背景には、チェーン店が増え、店主が減ったことがあるのではないかと F さんは考えている。「今までは全部、店主がいてるお店だったんですね。チェーンのお店ってなかったんですけど、そっからチェーンのお店に変わりましたね。だから店主が地の人とかじゃじゃないんですよ。いてるのは店長なんですね。店長イコール、派遣されたり、雇われてる店長ばかりに変わってきましたね」。チェーン店の場合、商店会などへの参加の機会も少ない傾向にあるという。

また、店主の高齢化が進むなかで、若手との意見のすり合わせが難しいことも少なからずある。庄内駅周辺にある商店街は筋ごとに複数にわかれている。シャッターを閉める店舗も増えたりという変化もある。上述のように、商店街への関わりが薄いチェーン店も増えている。このようななかで、商店街については、「だんだんだんだん、狭くなってきてるなど。より幅広い意見が聞けなくなってきたんじゃないかなと」感じることもある。

そのようななかで、2 年間ほど休止されていた年 1 回の商店街での庄内まつりを、再度始めることになった。庄内まつりの計画は F さんも含めた若い人たちが中心に行っている。「若い人が

今回はちょっと動いてるので、やっぱり（まつりを）復活させて、庄内の活性化のために動いていこうということで、やってる部分はありますね」。

この数年は庄内バルなども始まっている。個々の商店の売り上げには直接結びつかないこともあるかもしれないが、今後のことを考えると、全体での活性化につながるものと期待している。前回のバルの運営には、商店街で飲食店を出している F さんの弟もかかわっていた。「みんなそういう思いをやっぱり持ってるんですね。自分の店を守っていくのももちろん大事ですけども。集客とか、庄内全体を活性化するためには、そういうお祭りとかイベントごとをしていかないといけないな、っていう風には思います」。「庄内のここにこんなお店があるんだとか、そういう次につながるようなきっかけになればなと僕は感じますね」。

【E さん（30 歳代・男性）】

庄内駅周辺の商店街で母親と飲食店・食料品販売店を営んでいる E さんは、店舗が 4 つあることもあり、休日があまりないなかで働いている。休日があつたとしても、仕入れなどに出かけていることも少なくない。そのなかで、商店街の他の店主らと関係をもつことも難しい状況にある。「（仕事）終わってから、飲み歩いたりとかしたら（他の店をやっている若い人たちと）いろいろな話ができると思うんですけど。ずーっとね、商売してるんで。ここにパッと買いに来たお店の方とは、いろいろ話をチラッとしたりはするんですけど」。

そのようななかで、さまざまな店舗の人とつながることのできる庄内バルは、よい機会だと思っている。「（バルに関しては）儲け云々は別にして、いろんなお店の方と、ちょっとでも情報交換ができるっていう部分では、かなりいい取り組みだとは思っています。（線路の）反対側の情報やったりとか。あとはお店同士のつながりもできるっていう部分では」。

E さんは自身の居住地では自治会に加入しておらず、近所づきあいもあいさつ程度であるなど、地域とのつながりは強い方ではない。ただ、商売をしているなかで、「人情も結構なんかあつような、感じはありますね」と、地域のつながりの強さを感じることもある。

②地元の同窓生とのつながり

次に、地縁の別の形態として、地元の同窓生とのつながりについて見てみる。今回のインタビュー対象者、特に地元出身者のなかには、小中学生のころ同級生や先輩・後輩とのつながり（総じて、同窓生とのつながり）を現在でも有している人たちがいた。同窓生とのつながりの強さがどこまで南部地域に特徴的な現象と言えるのか、今回のインタビュー調査だけでは客観的な判断はできないが、そのようなつながりを多くもつ人には「この地域ならではのつながり」として意識されていることもあった。

また、同窓生とのつながりは、人によっては現在の仕事と関連することもあった。たとえば D さんは、地元の恩師とのつながりが、サッカーチームでの監督の仕事へとつながるなど、地元での社会関係と仕事に関連していた。実際の仕事のなかでも、同窓生とのつながりは活かされる場面が多々あるようだ。

【Dさん（40歳代・男性）】

Dさんは現在、地域の子どもたちのサッカーチームで監督をしている。現在も中学校のころのサッカー部の友人との付き合いは残っている。当時の仲間と一緒にサッカーをしたりもしている。

また、チームの監督をするなかで、コーチに同窓生がいたり、同窓生の子どもを指導することも多くある。「いま自分も父親なんで、僕らの年代の子の子どもが入ってきたりして。何年か前まで、今もそうですけど、同じコーチに後輩がいたり先輩がいたりとかで、そこもこの地域のいいところかなとは思いますが。つながってんのが。で、子どもみたら、あそこの親、あいつの後輩やとか。（親が）試合観に来たりとかしたら、あれ？とか。すごい多いですね」。

チームを運営していて、保護者からの無理な要求はあまり多くない。その理由についてDさんは、学校での先輩・後輩関係がいまでも残っているからではないかと話す。「どっかでつながりがあるから、この人には言われへんな、っていうのが、すごいこの地域ならではのつながりのところだと思います」。そのような同窓生のつながりもあるなかで、子どもの家庭背景の課題や、子どものいじめの問題などに気づくこともある。

すでに示したように（前節（1）進学・仕事）、Bさんについては小中学校のころの地元の友だちとの関係がいまでも続いている。高校で出会った人とのつながりもある。同窓生のなかには、他地域に移動していたり、海外で仕事をしている人もいる。このように、社会関係を多方面に伸ばしているBさんだが、この関係が仕事につながったり、仲間内での相互扶助の関係が成立するといったこともあるとのことだった。他方でBさんは、同窓生との関係が残っているがゆえに地元に住ぶらなくなった人の存在も語っている。つながりの強さが、一部の人とのつながりを難しくする可能性があるという逆説がここには見られる。

【Bさん（40歳代・男性）】

Bさんは現在でも、小中学校や高校の同窓生など、幅広い人たちとのつながりを保持している。特に中学校時代の仲間は、人生の節目で「いい競争」をしあうなど、現在でもつながりが強い。

「中学のツレはやっぱり、僕とかと一緒にあったやつらは、（大学進学とか）そんなこと考えてなかったと思う。それよりかは、自分が好きなやつと結婚するとか。そこはどうにかなるじゃないですか。がんばれば、とか。身近なところであいつよりかはがんばる、あいつよりかは先に家買うとか。そういうなんか、いい競争があった」。

他方で、同窓生とのつながりゆえに、地元に住ぶらなくなった人もいる。子どもに貼られた「レッテル」「イメージ」が、現在でも引き続き影響しているのだとBさんは言う。「やっぱり昔のレッテルって恐ろしくて、してもないこともしたっていつまで経っても言われる。彼らは、それがなくなるとやっぱり最終的には行きたいよね。だから、そのレッテルを強く貼られてるやつらは離れる」。

当時の関係性が現在でも少し残っていることもあるため、地元の仲間と集まる際は、庄内ではなく少しずらした場所を選ぶこともある。「やっぱり上下のつながりも悪かったから、みんな社会人になって電車乗んのも怖がってたもん。『何々先輩に会おうの嫌やわ』とか言って。(中略) いままでこそだいぶん減ったけども。(中略) だから、僕らが飲み会すんのも、庄内ではあんまり飲みたいくないと。服部とか、江坂とか、ちょっとずらして飲んだりとかするね」。

他方で、地元の小中学校の同窓生とのつながりはもうほとんどなく、同窓生との関係は高校以降が中心になる人たちもいた。背景には、中学校からの私立学校への進学や、高校進学時の受験勉強への傾注、高校での部活への熱中のほか、現在の仕事の忙しさ、当人のパーソナリティなどがあるようだ。このようなことをふまえると、もちろん例外ケースはあるものの、子ども期のライフコースの選択（進路選択）が、地元の同窓生とのつながりの多寡に緩やかに関連しているように思われる（ただし、中学校で私立学校に進学後も、地元の友だちとの関係が切れずに今も続いているというケースもあり、友人関係の範囲が進路選択だけによって決定的に決まるわけではない）。また、同窓生ではないものの、地縁とは関連のない芸能人のファンのつながりや、音楽関係の趣味のつながりなども一部に見られた。高校以降の同窓生とのつながりや、趣味のつながりなどは、南部地域の地理的範囲を超えたつながりとなっている。

【Iさん（20歳代・女性）】

地元で生まれ育ち、現在も実家に住んでいるIさんは、中学校で進学校に通った。その関係もあり、小学校時代の地元の同窓生とのつながりはほぼなくなっている。「(友だちは) だいたい大学ですね。たぶん小中一緒やとそのまま仲良くなるんかなと思うんですけど、中学で私立に行ったことで、地元の友だちがイコール小学生のときの友だちになるので、もう1人も連絡先も知らんし、当時携帯もなかったから、アドレスを知ってるわけでもなく、残ってない」。現在の友人関係は大学のサークルで知り合った人が中心で、京都や大阪市内などに住んでいる。電車に乗ることが好きで、友だちと旅行に行くことも多い。女性アイドルグループのファンで、ライブの遠征に行くこともある。

【Jさん（20歳代・女性）】

地元で生まれ育ち、現在も実家に住んでいるJさんは、地元の小中学校に通った。中学校では少し「ヤンチャ」な子との関係もあったが、自身は親が厳しかったこともあり、あまり深入りはしなかった。高校はスポーツ系のコースに進学。バスケットボール部での練習に熱中したため、地元の友だちとは疎遠になった。地元の同級生はすでに子どもを育てていることも少なくなく、集まる時間もなかなか取れない。「1人仲いい子がいて、でもその子は子どもがいるんで、ちょっと、手伝ってよとかはありますけど」。

現在の社会関係は、高校のときの同窓生か、音楽関係の知り合いである。音楽関係のグループ

は、知人をたどった先で入った。そのつながりで名古屋などにライブ出演に行くこともあるが、少しずつ距離を置き始めてもいる。「誰々と誰々がおるところに、グループとして入ってる。なんか、イベント出るってなったら私も流れで呼ばれるみたいなのところにいるんですけど、それを抜け出すべく、私は姿を消しつつある」。音楽関係の知り合いは、大阪や神戸の他、名古屋や東京などにも広がる。

【Kさん（20歳代・女性）】

南部で生まれ育ち母親の実家で家族と同居しているKさんは、中学校時代、「ちょっと派手なグループ」と接点があったこともある。ただ、高校の受験勉強に力を入れたいと思い、その交友関係は疎遠になった。そのグループの子たちは、まだ地元でつながっているようだ。「私はないですけど、その子たちはみんなまだ一緒にいます。成人式の集まりとかのときは、みんなそこでワイワイなってるけど、私は全然。喋るし、ワーって一緒にみんなでなって、飲んだりそんな時はしたけど、別にその後連絡取ったりとかは全然しないです。その時だけ。久しぶりやなー、みたいな感じで」。自分自身は直接関係をもっているわけではないため、彼女たちの近況については詳しくないが、「(SNSで)繋がってる子が繋がったりとかして」断片的に情報が入って来ることもある。

Kさん自身の社会関係の中心は、現在では幼稚園からの友だちと、高校で仲が良かった友だちだ。高校のときの友人とは、現在でもよく食事に行ったりなどつながりがある。高校の友だちは豊中市外の阪急沿線に住んでいることが多いため、食事をするときはみんなが集まりやすい梅田になる。

また、女性歌手や女性アイドルのファンであり、ライブなどでつながった友だちもいる。「ずっと小学校の時から好きなのがaikoで、aikoのつながりのお友だちが結構おって、ライブとかでしゃべったりする友だちがおって、それがもう高校からずっとつながってて今まで。で、毎年ライブの時もそうやけど、それ以外でも普通にプライベートで飲んだりとか、ご飯行ったりとかはしてます。旅行行ったりとか」。ライブの遠征などにも活発に出かけている。「来週も行くんで。千葉の方に、ライブで」。

【Aさん（30歳代・男性）】

南部地域で生まれ育ち、まちづくり団体に関わるAさんは、小中学校の同窓生との関係はいまではほとんどない。「個人的に会ったりとかいうのはあんまりないですね。たまにだから、こないだも近所のお店に行ったら、中学のときにいた子が入ってきて、久しぶりやんみたいにおうたぐらいで。僕自身は動いてるテリトリーは変わってないんで。それでもあんまり見いひんから、みんなどっかへ行ったのか、その中で場所を動いてんのか、どうなんかなっていう。同窓会をやったって話も、昔に1回聞いたぐらいやったんですけど、そんなに聞かんっていう感じで」。

また、Aさんは高校で進学校に通った。当時、同校は経営方針を転換し進学指導に力を入れ始

めたところということもあり、Aさんも受験勉強に傾注する。ただ、同時に生徒会活動にも熱心に関わった。いまでも付き合いがあるのは、その生徒会のメンバーが中心である。「ほぼ同じ同期で生徒会入ったやつがクラスも一緒やったんですけど、そいつがいまやっぱり長いつきあいの友だちですね。あとはやっぱり同じ年賀状のやりとりしたりとか、そんなんはやっぱり生徒会の人間ですね」。高校のときの他の人たちがどこへ行ったのかは、あまりよくわからない。同窓会をするのは難しいと思う。「なんでかっていうと、結局ほんまに、大学受験一本槍で、俺はここ入んねんとか言うて、言ったけど結局あかんかったりしたら、やっぱり言ったのにあかんかったから、もうそのままフェードアウトしてしまうわけじゃないですか。とかいう関係性があるから、同窓会はできへん」。

以上のように、一方で同窓生のつながりを現在でも強く保持している人がおり、そのつながりは仕事に活かされるケースもある。ローカルな社会関係資本のひとつとすることができるだろう。しかし、地元の同窓生のつながりが、地域から人を遠ざける斥力となっているケースの存在もうかがわれた。

他方で、仕事の多忙さや、子ども時代の学校の進路などの関係で、地元の友だちとの関係が疎遠になるケースもある。また、そもそも小中学校時代の友人がほとんど地元に残っていないという人もいる。当時の同窓生のうち実際にどの程度が転出したのかはわからないが、関係を有していた範囲のちがいもあるのではないかと思われる。

③地域への愛着・安心感

地元の社会関係が地域への愛着・安心感を生んでいると思われるケースもあった。今回の調査では、特に若い世代でそのようなケースが複数みられた。ここでは、20歳代の女性4人の事例をあげてみたい。血縁や地縁を中心とした地域のつながりは、若い世代の地域への愛着や安心感に結び付き、地域に住み続ける引力になっている側面もある。

先に、社会関係資本には2つのタイプの考え方があることを示した。第1に、その資本を利用して得られた利益は所有者に帰せられるという考え方。第2に、その資本を利用して得られた利益は共同体の他の成員にも広がるという考え方である。地域への愛着や安心感の醸成は、社会関係資本についての後者の考え方にあてはまりやすい。地縁をはじめとした社会関係は、地域への愛着や安心感というかたちで、人びとを地域に引きつける力になっていると言えるだろう。

【Kさん（20歳代・女性）】

Kさんは母親の実家で家族と暮らしている。Kさん自身は現在フリーターをしており、ひとり暮らしは経済的に難しいという事情もあるものの、京都の大学に進学した際にも、実家を出ることはあまり考えたことがなかった。そんなKさんが現在も地域に住み続けている理由をたずねると、実家や地域に対する愛着が語られた。「庄内は好きです、私。（中略）住み良い思います。そ

うですね。最近は全くあれですけど、この地域のお祭りとかも、ずっと友だちと一緒に、よく行ったりしてたし。(中略) 中学とかまではずっと2日間丸々友だちとこの地域のお祭り、太鼓引っ張ってってしてました。「地域的にも嫌いじゃないですし。特にじゃあ今、町内会の人と私が関わり持ってるから、そこが好きっていうのはないですけど、でも近所に別に悪い人がおる訳じゃないし」。

【Oさん(20歳代・女性)】

祖父が設立し父親が継承している会社に携わるOさんは、「庄内大好きです、私」と話す。地域に対する愛着の理由は、生活が便利な他に、地域の雰囲気が好きなためである。「たぶん豊中市の、なんかホンマに豊中駅の方とかは住めないです。高級住宅街っていうイメージがあるんで。下町感がいいんです、ここの」。

祖父は地域でいわゆる世話役のような存在でもあった。そのため、近所の付き合いもOさんに引き継がれている。「周り近所で、私旧姓Xなんですけど、Xを知らない人がいてなかったんで。みんなにかわいがってもらったのがあるんで」。地域の中には「私が知らなくても向こうが私の名前を知ってる」という関係がある。「『おじいちゃんの顔に泥を塗るなよー』って、『はよ家帰れー』って言われたりとか。私が知らん人が私を知ってたり。Xさんとこの孫かいな、みたいな」。

【Iさん/Jさん(20歳代・女性)】

IさんとJさんの姉妹は、現在実家で家族と同居している。南部地域には母親の実家(祖父母宅)もあり、2人は小さいころから2つの家の間をよく行き来していた。現在でも、祖母と2人で旅行に行ったり、祖父と同じ趣味に関わったりなど、祖父母とのつながりは強い。

2人の祖父はこれまでに地域のさまざまな活動に関わってきた、地域の世話役のような存在である。そのこともあり、2人は地域には居心地の良さを感じている。「なんかみんな知り合いみたいな。なんか、ちょっとどっかおじいちゃんで行ったら、みんなあいさつしてくるとか」(Jさん)。地域の治安が課題とされることも少なくないが、「私のなかではおじいちゃんがいるから怖くない。(中略)なんかあったら言ったら、みたいな。めっちゃある」(Jさん)。また、自分が地元と感じるのは祖父がいるところ、自宅と祖父母宅を結んだ線の周辺だとも話す。

④「地元」の範囲

ここまで「地元」という言葉を特に定義せずに使用してきたが、地域の居住者にとって必ずしも「地元」の範囲が一致しているとは言えない。そこで今回のインタビューでは、「あなたにとって『地元』と思える範囲はどこですか」という質問を行った。

転入者にとっては、もちろん南部地域が「地元」という感覚はあまりみられない。ただし後述のように、人によっては必ずしもないわけではない。

他方、地元出身者の「地元」の範囲は人によってちがいがみられ、行政区分としての南部地域に一致するケースは少ない。主な「地元」の境界とされたのは、線路や学校区などである。ただし、いずれの場合も南部地域の北の境界である名神高速道路の以北を「地元」とするケースは、あまり見られなかった。

「(地元は) もうほんとにちっちゃいです。すごくちっちゃいです。(中略) 庄内でも、X (=小学校区名)、Y (=中学校区名)。で、小学校からZ中 (=中学校名) に行ってる子たちもいてるので、Z中校区とかね、そのへん。すごい狭いです」(Cさん・40歳代・女性)。

「(地元は) この辺、X中 (=中学校名) じゃないですか。Y中 (=中学校名)、X中あたりはたぶん全然地元です。この辺は、Z (=小学校区名) とかは違うけど」(Kさん・20歳代・女性)。

「地元やなって思うってなると、どうでしょうね、自分の家のこっち (=東) は川なんで。川なんで、川はこえたら吹田なので、こっからもう駅のほうですね。(中略) 豊南市場ぐらいますか」(Aさん・30歳代・男性)。

「僕は地元ってなったらもう、駅前とかには全然思い入れないんですよ。行くことなかったから。(中略) 僕もともとX (=町名) に住んでいまのどこに来てても、近所は知らん人ばかりです。どこの誰っていうふうに。直線でいったら300メートル、400メートルのところで、若干疎外感を感じたし。(中略) 庄内の駅前も地元じゃないかも。町会のレベルかもしれないですね」(Bさん・40歳代・男性)。

「地元っていう意味だったら、僕のなかではもう(名神) 高速のところまでですね。高速を越えてくると地元とは言わないなと」(Fさん・40歳代・男性)。

「名神のとことかは、まだ地元な感じはしますけど。(中略) (それより北に行くと) だんだん地元感が薄れていく感じはありますけど。だから本当に地元って言ったら、庄内駅の付近。(中略) 豊南町とかになると、またちょっと違う感じがするんですよね。駅の線路挟んで東と西、全然違う感じがあるんですよ」(Oさん・20歳代・女性)。

また、地縁に深くかかわっている人の場合、旧村の区切りが浮上することもある。

「住んでて、庄内って言われると、もう庄内駅を中心としたエリアだけですね。庄本神社、椋橋神社の方とかは、庄内なんでしょうけども、ちょっと違うエリアちゃうかなと。ほんま村のあれで言うエリアだけですね」(Lさん・40歳代・男性)。

南部以北を「地元」に含めたのは、高校まで豊中市の中部地域に住んでいたEさんと、中学校時代に中部地域のアミューズメント施設で遊んでいたというKさんに限られた。その2人についても、「地元」の範囲の北限は服部付近までとなる。

「庄内に来てから10年以上になるんですけど、庄内も含めて地元ですね、服部から庄内も含めて。で、僕も服部住んでたときは服部でも庄内寄りの方なんですね。駅で言うたら、庄内と服部はどっちもおんなじぐらいの距離だったんで」(Eさん・30歳代・男性)。

「地元って、ラウワン (=ラウンドワン) とかあるじゃないですか。あの空港線手前の。あの辺とかまでは地元です。(中略) だってラウワンとあって、みんなめっちゃ溜まってたんで、中学の時とか。あれは地元(の仲間)が集まる感じやと思うんですけど」(Kさん・20歳代・女性)。

以上のように、今回インタビューの対象となった多くの地元出身者にとって「地元」の範囲は、南部地域（あるいは庄内）よりも細分化され、校区や線路といった代表的な境界はありつつも、人により少しずつ異なる傾向にあった。ここからは、地域居住者の感覚上、南部地域内に地理的・認識的な境界線がいくつか走っていることがわかる。

他方で、名神高速道路より北が「地元」に感じられることが少ないという点では、多くの人に共通した意識がみられた。ここからは、地域居住者の共通感覚として、南部地域とその北側との間に地理的・認識上の境界線が横たわっていることがわかる。南部地地域とその北側との関係については、本項（3）治安の評価のパートで詳述したい。

⑤地域と大阪音大のつながり

すでに述べたように、大阪音大の卒業生の2人は、大学の同窓生や先生とのつながりやそこからの派生で、演奏活動などの仕事を得ることが少なくなかった。その点で、南部地域の地縁とは異なるものの、やはりローカルな社会関係資本が保持されており、それが仕事に転用されているケースとして理解することができた。

では、大阪音大の卒業生の2人は、南部地域の地縁や地域活動などには関わりがあるのか。Pさんは在学中に、大阪音大と豊中市教育委員会が連携して行っている「サウンドスクール」などに関わったことがある。ただ、必ずしも南部地域の学校に関わっていたわけではなく、卒業後の現在は近所づきあいも特にあるわけではない。

もう1人の卒業生であるHさんは、大学在学中には庄内駅周辺の商店街で流れる音楽の演奏に携わるなど、地域での活動にもかかわっていた。また、「下町」に対して親和性を覚えており、転入者ではあるものの南部地域を「地元」として捉えている。ただ、そのようなHさんも、現在は音楽関係者以外の地域でのつながりはあまりないようだ。

【Hさん（20歳代・男性）】

大阪音大を卒業し、現在はフリーランスのベーシストとして演奏活動をしているHさんは、学生時代、商店街での活動にかかわったことがある。「地域と密着しようとしてはった先輩らは何人かはいましたけど。企画が好きの子とかは、企画系のことがしたい子とかは結構、地元でもできるんちゃうかっていう風にやったりとか。そういう先輩もいっぱいいましたし。商店街のテーマソングとか。（中略）いま流れてるやつ、僕ベース弾いてるんですけど。（中略）そういうのもなんか、やってもらったり、っていうのは割としてました」。そのような活動に対して、当時は大学からのバックアップなどは特になかった。

Hさんは「下町」の雰囲気積極的に好んでもいる。Hさんはすでに10年近く南部地域に住んでおり、庄内には「地元」という感覚もある。

では、地域出身者にとって、大阪音大と学生はどのような存在なのだろうか。既述のように（本項（1）消費活動）、学生たちの地域内での消費活動は地域の人びとからは、あまり「見えない」

存在になっている。また、学祭などの機会も含めて大学の敷地内に入ったことがある人や、学生たちと接点をもったことがある人も少ないようだ。「残念ながら（大阪音大の中に入ったことは）ないですね。自宅からちょっと西に行ったらあるんですけど、前を通るくらいまでしか、ないですね。（中略）例えば、僕が行ってた大学とかでしたら、近所の人でも散歩道かねて、校門に普通にスーッと入ってる人とかもいたんですけど。（大阪音大は）どうなんでしょうかね、（中略）なんかあまりスーッと入っていけるイメージが、ちょっとないかなって思う」（Mさん・40歳代・男性）。

商店街で飲食店を営んでいるEさんは、ときどき大阪音大の学生が店に来ることもあると話す。ただ、学生は「下町」に慣れていないように、Eさんには感じられている。「たぶん、どうしたらいいのかわからない部分がね、音大生側にもあると思いますね。（自分の飲食店に）音大生がたまに入ってこられたら、ちょっとこう（戸惑う人もいる）」（Eさん・30歳代・男性）。学生に対しては、家庭環境の良さなどを感じ取っている人もいた。

今回のインタビュー対象者のなかで、特に大阪音大と積極的に接点を持っていたのは、幼少期の子どもを育てている中国人女性2人であった。「大阪音大には行ったことがある。イベントの時。食堂で何かピアノ弾くとか、クリスマスの時とか。年中に何回もやってる」（Rさん・30歳代・女性）。イベントの開催は幼稚園で配られるチラシで知り、小さな子どもの参加ができない場合を除き積極的に行っているという。大阪音大との接点が積極的に語られたのが、結婚を機に転入してきた中国出身者2人だったというのは印象的だが、幼少期の子どもを育てる専業主婦2人の子育ての一環と捉えるならば、合点がいくとも言える。幼少期の子どもを育てる人のなかには、大阪音大の附属幼稚園への入園を選択肢として考えている人もいた。ただ、同じ子育て中の人でも、大阪音大と疎遠な人はいる。大阪音大は子育てのなかで利用できる地域の資源のひとつだが、今回のインタビュー調査からは、そのような認識が地域に住む子育て世帯の間に広く共有されているとは言い切れない。

地域の人からは、大阪音大を地域のひとつの魅力として活かせるのではないかという期待の声もあった。高齢者の集まりや、学校の卒業式や運動会といったイベントで、大阪音大が演奏というかたちで関係してもよいのではないかと、という要望も聞かれた。地域の飲食店・喫茶店などで演奏していれば聞きに行くかもしれない、という話もあった。

ただ、少なくとも現時点では、地域に住む多くの人にとって大阪音大とその学生たちはやはり縁遠い存在であると考えられる。地域にとって大阪音大は対外的なアイコンのひとつではあるが、だからといって大阪音大について詳しくは知らない、という次に引用するような感覚が、典型的なものではないだろうか。

【Iさん（20歳代・女性）】

南部地域で生まれ育ち、現在も実家に暮らしているIさんは、小学生のときに1度、学校の授業の一環で演奏を聞きに行った記憶がある。ただ、それ以外の接点はあまりない。「（学生は）駅

では見るんですけど、駅でしか見ない。あんまり歩いてて、あー、音大生やな…そんなに見る？ 見
いひんな、あんまり」。

そのようなIさんにとって、地域と大阪音大の関係は次のように把握されている。「庄内とかな
んもないやんって言われたときに、いや音大あるからって言うことは多い。音大はあるから、み
たいな。音大は、結構有名ですよ？ 音大はあるって言ったことはあるんですけど、だからと言
って音大の何を知ってるわけではない、みたい。だからそんな音楽のまちと思ったこともない」。

(3) 治安の評価

南部地域の課題としてしばしば言及されるのが、治安である。昨年度の質問紙調査でも、豊中
市の北東部地域や中北部地域に比べて南部地域は、「防犯面で安心できる地域である」という項目
に対するネガティブな反応が多かった（図表 39、p.83）。地域の治安に対するネガティブな評価
が、南部地域における子育て世帯の転出の背景にあるのではないかと推測された。第3章の分
析においても、治安の課題は地域のイメージを形成していることがうかがえ、治安に対するネガ
ティブなイメージは地域からの転出志向と相関していた。

では実際、南部地域に住む人たちにとって、地域の治安はどのように評価されているのだろう
か。そもそも治安という言葉で何が指し示されているのだろうか。地域の移動とはどのように関
連しているのだろうか。

なお、議論をはじめの前に念のために確認しておく、他地域に比べて南部地域において犯罪
が特に多く見られるといった傾向は、管見の限り確認できない。今回インタビュー対象となった
人たちにも、地域の治安について他地域との客観的な比較ができる情報をもつ人はいなかった。
ここではあくまでも、治安の問題は事件や事故などの実態ではなく、人びとの認識の問題として
取り扱う。

①治安の意味

治安については、今回のインタビューのなかでも、それを不安視している声は聞かれた。地域
の治安の悪化を明確に不安視し、防犯メールに登録したり監視カメラを自宅につけたりするなど
対策を施しているという話も出た。自分は不安には感じないが転入してきた配偶者は不安を抱い
ているようだ、という既婚男性もいた。昔は確かに治安が悪かったかもしれないが今は地域の環
境も様変わりし改善されている、という話は多数聞かれた。

ただ、対象者の多くからは治安に対してあまり強い不安は聞かれなかった。治安について話を
振った際によく聞かれたことのひとつは、「薄暗いところがある」や「道が狭いところがある」と
いうような、「空間」に焦点をあてた地域の印象である。そのため、庄内駅前が綺麗になったこと
と治安の改善を結びつける話もあった。「住んでしばらくして、あ、ちょっと、女の子はひとり
は怖いとこやなどは思いましたね。ちょっと薄暗いっていうこともありますし」（Hさん・20歳代・
男性）。「ちょっと道が細かったり、奥の方の道に入ったら（若干）暗がりになったりするんで、
そういった意味では（別に事件起こるとかじゃないですけど）、ちょっと怖い。とか、そう

いう面はあるんですけど。治安の面でいったらそんなに悪いことはないと思うんですけど」(Mさん・40歳代・男性)。

また、治安については、地域の課題というよりも、世間一般で広く見られる課題として捉える話もあった。つまり、「いまの時代は何があるかわからない」や「昔とはちがっていまは普通の人々が急に変わることがある」というような話である。いわゆる体感治安の悪化と呼ばれる現象を想起することもできよう。自分が子どものころは幼稚園にも1人で歩いて行っていたが、我が子にそれをさせるのは、地域というよりも時代が変わっているのが難しい、といった話も聞かれた。

さらに、治安については、大阪音大の学生の通行量との関係を指摘する声も、一部に聞かれた。すなわち、学生の行き来が多い庄内駅の西側と、少ない東側では、治安のイメージに差があるという話である。第2章で見たように、確かに線路の東西で音大生の往来には差があった。そのことと治安のイメージの関連は明確ではないし、地域の居住者にとってどの程度広く見られる認識なのかはわからない。ただ、音大生の往来の量と地域のイメージの間に、お互いがお互いの原因になるような関係²⁷が成り立っている可能性も考えられる。

②「治安が課題とされやすいところ」という認識

以上のように、「空間」などに結びつけられたり、世間一般に広くみられる課題として治安は理解されていたのだが、同時に、今回のインタビュー調査からは、地域の治安は過大には不安視されていないように思われた。「治安に課題であるところ」「治安が不安なところ」というより、周囲から「治安が課題とされやすいところ」「治安が不安視されやすいところ」という感覚が、対象者の多くに共有されていたように思われる。インタビューのなかでは、地域外の人が地域の治安を不安視していたというエピソードも複数聞かれた。南部地域の治安に関する居住者のイメージは、子どものころからの経験を含む、地域の外からの反応で形成されていることも少なくないのではないか。

地域環境の評価の一環で地域の治安に関して質問紙調査などを行い、その結果を分析する際には、「地域の治安には課題がある」と思う人も、「地域は周囲から治安が課題とされやすい」と思う人も、同じ「地域の治安には課題である」という評価を示している人として、括られる可能性がある。少なくとも、「地域は周囲から治安が課題とされやすい」と思う人は、自身ではあまり治安の課題に実感がなかったとしても、「地域の治安は良い」という評価を示しにくくなると考えられる。

【Eさん(30歳代・男性)】

Eさんは以前、地域外で食事をしているとき、近くの人たちが南部の治安について話をしているのを聞いたことがある。「他のところからも来る人は、やっぱり庄内はっていう方も。最近でもちら

²⁷ 学生の往来が地域のイメージを形成し、そのイメージが学生の行動を左右し、さらに——というような関係。

っとね、ラーメン屋さんだったんですけど、豊中の方の。ちょっとちらっと話聞いただけなんですけど、その方はどっから転勤して庄内に変わるって言うて、どうしよう、みたいな」。Eさん自身は、「いや、庄内大丈夫やけどなと思いつながら」それを聞いていた。「イメージが浸透してっというのもあると思うんですけど」。

【Jさん（20歳代・女性）】

南部地域で育ち実家で暮らしているJさんは、小中学校は地元の学校に通った。当時、地域外の「ちょっと離れてる豊中の子」に自身の中学校区を話したところ、「なんかもう、一歩引かれるみたいな」経験をしたことがある。

Jさんは、地域の治安は確かに課題かもしれないが、「なんかそれに勝ついいものもあると思う」とも話す。「ポジティブに捉えたらフレンドリーやし。みんなほんま気取ってない。プライドあるけど、みたいな。だから、いいとこ。治安悪い、まあそうですね。でも、何か危険があつてとかじゃないじゃないですか、別に。そんなんじゃないから、別にいいかな」。

【Bさん（40歳代・男性）】

南部地域で育ち建築関係の自営業をしているBさんは、地元の小中学校に通った後、豊中の北側の高校に進学した。当時の中学校は昔ほどではないが「荒れ」が残っていたため、他校から来た生徒たちは南部地域から来た自分たちを、少し敬遠しているところがあったと言う。「親からも言われてんじゃないかな。（中略）だいぶん敬遠されてるなっていう感があったですね」。

自身が子どもだった時代の「荒れ」のイメージが、現在の他地域の保護者にも残っているのではないかとBさんは感じている。「やっぱり向こうの北のほうからのイメージでいうと、（中略）悪いっていうイメージはずっとあった。だからそれを感じた人たちが僕ら世代になって子育てを北でしてるから、なおさら馴染まへんすよね、それは」。

また、これまでの引用箇所にも含まれているが、インタビュー対象者のなかには、イメージとしての「治安」と、実際の「危険」を区別する視線が見られる場合があった。地域云々ではなく社会全般で治安が悪化しており、子どもを育て始めてからそのことに特に敏感になったが、南部地域については「馴染み」があるため何が危険で何が危険ではないかがわかる、というような見解が示されることもあった。「治安が課題である」というよりも「治安が課題とされやすい」というような捉え方の背景には、地域に「馴染み」がない地域の外の人にとっては危険（＝課題）に見えるかもしれないが、「馴染み」がある自分はその実際には危険でないことがわかる、という論理が潜在している場合があるとも考えられる。

【Cさん（40歳代・女性）】

南部地域で生まれ育ち、現在は学齢期の子どもと自身の母親と暮らしているCさんは、自分自

身では地域の治安を不安に思ったことはない。「それもきっと慣れやと思うんですよ。私たち生まれたときからここにいるので、これが普通なんですね」。「何が危険で何が危険じゃないかっていうのは、ここに住んでるからこそわかる」。

ただし、「やっぱり子どもをもった段階で、気をつけないといけないところは、あるなっていうのに気づいた」。世間一般に、昔とは違って現在は行動や思考が読めない人が増えていると感じるからだ。「昔って、ちょっとこの人危険やなっていうのを、察することができたと思うんですよ、私たちが子どものときって。感じるものってあったと思うんですけど、いまって普通の人急に急になってというのが結構あるので」。

ただ、このような治安の悪化は、南部地域に特別なことではなく、世の中全体の話である。「庄内っていうこの地域だけではなく。電車とか乗ってても、ほんとに普通の人急に何かしなことをやりだしたりとか、結構目の当たりにしてるので。それはもう、世の中全体の話やとは思いますが」。

さらに、これまでの引用からもうかがわれるように、地域の治安について語られるとき、比較対象としてしばしば登場するのが「北」である。それは主に豊中の北側であるが、豊中市外の北摂であることもある。「北」と「南」を比較するなかで地域の環境が評価されているという側面については、後で詳しく検討したい。

③治安を捉え返す

大阪音大の卒業生にとって、南部地域の治安はどのように捉えられているのだろうか。卒業生の2人からは、やはり地域の治安についてあまり課題だとは捉えられていなかった。そして、「下町」が好きなHさんの話で特に興味深かったのは、大阪音大の学生が地域の治安について語る時、それは多くの場合「自虐」の側面もあるのではないかと、という認識である。

【Hさん（20歳代・男性）】

Hさんは地域の「下町」の雰囲気が好きだという。「下町」の雰囲気とは具体的に、いうのは、高齢者の多さや、飲食店の多さ、治安というよりも人情の深さなどを指している。「おじいちゃん、おばあちゃんが多いっていうのは、ありますし。飲み屋が多いっていうのも、そうですし。なんかこう、治安が悪いっていう感じでもないような感じがしますし。一応その、人情じゃないですけど」。周囲からは「あ、庄内なんや、いいね」とうらやましがられることも多い。

治安に関しても、道が薄暗い感じはあるが、自身ではあまり課題には思っていない。自身が在学中は、女性も含めて、学生の間で地域の治安についてネガティブな評価が強かったという印象もない。昨年度の学生アンケート調査では、学生の中に地域の治安についてネガティブな印象が多かったが、その結果についてHさんは、先輩から引き継がれた「自虐」的なイメージが多分に反映されているのではないかと解釈する。「そのアンケート（の結果）は、僕の印象ですけど、先

輩からのイメージだけでたぶん成り立ったんちゃうかなと。(中略)庄内はもう…みたいな。好きだけど自虐のようにたぶん言ってるのが、そのまま(先輩から)伝わってきて。具体的にどのへんがって言われると、たぶんその子らもあんまり、よくはわからないんじゃないですかね」。ネタとして学生の間で広まっている話もある。「郵便局の裏の側溝に自転車ごと落ちるとか。それ、僕の体験談なんですけど」。

地域に住んですでに10年ほどになるが、治安について地域の外の人からネガティブな評価を聞いたことはない。地域と一緒に住んでいる人(おそらく音楽関係者)の間で、一種の「自虐」として地域の治安に言及されることはある。「別になんか、怪訝な顔される方は僕は会ったことなんです、庄内に住んで。そういう顔をする人は、一緒に庄内に住んでる人です」。

地域の治安がある面では自虐的なユーモアを含みながら、地域の中で語られることがある、という話は、地元出身者からも聞かれた。「ちょっとあると思います。そういうのは。ネタみたいな感じで」(Iさん・20歳代・女性)。「自虐はあります。逆におもしろいんでその方が。ちょっとユニークな人が多いから、そういう面で言ってます。(中略)ほんま庄内こういうところあるよな、みたいな。地元とか友だちと話す感じですね」(Kさん・20歳代・女性)。

地域の治安に関する自虐的ユーモアと関連していると思われるのが、主として地元出身者から幅広く語られた、次のような自己紹介のエピソードである。こちらから話を振ったわけではないものの、南部地域のイメージが語られる際に複数の人から同じ形式の話を聞くことができた。

「僕らもね、『どこに住んでるんですか?』っていったら、『あ、豊中です』っていったら、『あ、いいとこですね』とは絶対言われるんですよ。『豊中』っていったら。で、『豊中のどこなんですか?』って言われたときに、『庄内』って言ったら、『あー…』みたいな感じで」(Dさん・40歳代・男性)。

「私は『豊中市に住んでます』って言い張るんですけど、(相手の反応は)『あ、いいとこ住んでるねー』。(中略)『庄内です』って言ったら、『あー…』」(Jさん・20歳代・女性)

「『どこに住んでんの?』って聞かれたときに、(中略)『豊中』とは言います。とりあえず言います。ただ、その豊中を知ってる人だったら『豊中のどこ?』って聞いてくるんで、あ、もうこれは観念しななっていうので『庄内』って言いますけど(笑)」(Oさん・20歳代・女性)。

「豊中って言ったら『あっ素敵な所に住んでるね』っていう感じがあるんですよ。(中略)なんか綺麗な豊中のまちっていうイメージがたぶんあるんですよ、話した時に。でも、『豊中のどの辺?』みたいな感じ言われた時に、『いやちょっと大阪市内寄りの一番大阪市内に近い、ちょっと豊中チックじゃないところやけど』みたいな感じで話しちゃいます。やっぱ豊中の北側の方が、豊中の綺麗なイメージ持ってるんで、私は」(Kさん・20歳代・女性)。

「あんまりこの辺のこと知らない人とか、この近隣ぐらいまでは知ってる人とかに言う場合だったら、『豊中の庄内に住んでるねん。豊中市やねん』って。『あ、阪急沿線やん。ええとこやん』って。『でも、南の側だから、どっちかと言ったら、十三や尼崎とかに近いねん』みたいな言い方をする時もありますね」(Mさん・40歳代・男性)。

「評判がよくなかったりするじゃないですか、庄内って。でもそれを、逆におもしろく思いますね。『どこに住んでるの?』って聞かれたら、最初は『豊中』って言って。『あ、豊中なんやどのへん?』『庄内』『え!』絶対1回曇るんですよね、表情が。それが、おもしろいと思う」(Nさん・30歳代・男性)。

このような自己紹介に関する話は、南部の主に地元出身の人たちに広く共有された、一種の自虐的なユーモアを交えたエピソードなのではないだろうか。このエピソードは一方で、相手が口ごもったり、表情が曇ったりする、という話からもわかるように、地域が周囲からネガティブに見られている、ということの報告でもある。しかし同時に、それは聞き手であるこちらに笑いを誘うような口調で語られるとともに、相手の反応を「おもしろい」と捉え返す語りもみられる。自虐的なユーモアは、地域に対する周囲からの評価、ネガティブな客体化に対して、それを主体的に捉え返し、ポジティブな方向に意味を書き換える試みであるように見える。

また、治安のイメージを捉え返すという点では、これまでに示した引用の端々からもうかがえるように、地域のつながりと治安をおなじ事柄の裏表の関係で捉える認識も複数から聞かれた。第3章のイメージ分析でも、「人間関係」と「治安」と「下町」がイメージの上で近いところにあることがうかがえたが、このことはインタビュー調査からも裏打ちされる。治安の課題は、「フレンドリーさ」や「居心地の良さ」や「人が生きている感じ」といった地域の魅力の裏面としても捉えられることがある。

【Aさん(30歳代・男性)】

南部地域で生まれ育ち、現在は地域のまちづくり団体にも関わっているAさんは、地域の「裏の魅力」を語る。「裏の魅力っていうんですかね。たとえば、(一般的に)魅力って言われたら、ここが綺麗とか、こんないいところがあるみたいなっていうのが思うんですけど。庄内ってどうやって言われたら、なんか雑多とか、なんか周りどちがうとかいうその後ろにある、人とか、その人の流れとか、人が生きてんねんっていうか。そういう、躍動感っていうのが綺麗(な言い方)なんでしょうけど、躍動感じゃなくてもっとドロドロしたものが動いてるといふか。人がいてるんだ、みたいな」。

Aさんが具体例としてあげたのは、豊南市場の朝の様子だ。「朝の9時には、10時かな?には売り切れてしまう魚屋さんがあるんですよ。もう8時ぐらいに行ったら、その店の前の道まですごい人がブワーいてるんです。でもその前に、こんなかごにカキがいっぱい入ってたりとか、そんながあるんですね。そんなのがあるって、なかなかないよなっていう気がして。なんかそこに人が集まって、その人たちが、なんかこう、ワサワサしてる。なんて言うたらええんですかね、ワサワサしてるって言ったらおかしいね。なんかこう、それがみておもしろいんですよね」。

そのような地域の「裏の魅力」は、人によっては、治安の課題として捉えられているのかもしれない。「(昔は)もっと人が多くて、もっとぎゅうぎゅうとお店も集まって、っていう裏側がそういうもん(=治安の課題)やったんかなっていう気はするんですよね」。Aさんが魅力に感じ

ている「人がここにいるんだよっていう感じ」「人がいて人が生きてるんだっていう」感じを、マイナスのイメージでとらえる人もいるかもしれない。「僕はあんまりその、都心とかわからないんですけど、建物があって綺麗な街並みでとか、公園があって緑があってとかっていう。その綺麗さじゃない、まったく正反対のものが（庄内には）あって。人がいて人が生きてるんだっていうのが、そういう端々に出てきて。それをみた人が、たとえば、マイナスのイメージをもったりしてる」。

地域の治安に関しては、路地の狭さや暗さといった「空間」などに焦点をあてた不安が示されており、このような点の改善に向けた取り組みが求められるだろう。ただ、地域の治安に対する評価には、自虐的ユーモアの側面が含まれていたり、地域のつながりの強さなどと裏表の関係にあるという認識が含まれていたりする。また、「治安が課題とされやすいところ」というような、地域外からの客観的な評価が織り込まれていることもある。そうだとすれば、たとえば地域の治安に関する質問紙調査の結果を他地域と比較し、「地域の治安に対する評価が他地域よりもネガティブである」＝「地域に治安の課題が大きい」とストレートに判断することは難しいかもしれない。そのような判断に基づく情報の提示は、今回のインタビューの対象者の間で認識されていた「治安が課題とされやすいところ」という地域イメージに数字の裏づけを与え、強化するようにも思われる。

③地域を捉える認識枠組み

これまで、地域の治安の評価についてみてきた。その上で、地域の評価がしばしば「北」との対比でなされていたという点について、さらに考えてみたい。「北」との対比は、治安だけではなく子育て・教育環境の評価のところでも見られた。「南」と「北」を比較するフレームが人びとの間に共有されており、そのことが、地域に対する評価を枠づけているという側面はないだろうか。

今回のインタビューでは、対象者に自分が「地元」と感じる場所・範囲についてたずねている。また、「豊中の人」という感覚があるかという質問も重ねて行った。結果、居住者の多くは自身を「南部の人」や「庄内の人」とは感じやすいが、「豊中の人」だとは感じにくい傾向にあった。

本項(2)のつながり構築のパートで「地元」の範囲について検討した際、名神高速道路より北を自身の「地元」に含める人は少ないことを指摘した。また、本項(1)の消費活動のパートで、インタビュー対象者の多くは豊中市の北側への移動経験に乏しいことについても触れた。消費も含め豊中の北側への移動が希少であり、具体的なイメージを持ちにくいことが、自身を「豊中の人」だとは感じにくいひとつの理由になっているように思われる²⁸。

また、自身を「南部の人」「庄内の人」だとは感じて「豊中の人」だとは感じられにくい背景には、すでに引用した自己紹介のエピソードにも一部垣間見えるが、「豊中」のイメージの核を豊中市の北側におく認識もあるように思われる。そのため南部地域は、豊中市内よりも大阪市内や

²⁸ もちろん逆に、豊中市内の北側の人びとの南部地域への移動経験も少ないと思われる（とよなか都市創造研究所 2017、p.117-118）。

阪神間の各市に近いエリアとして紹介される。このことは、大阪音大の卒業生で転入者でもある、Hさんからも聞かれたところである。「どこにおるんって言ったら、わかりやすく言ったらたぶん豊中なんですけど、豊中市っていうよりかは、十三の近くとかは言ったりします。豊中です、とは言わないですね。(中略) 豊中市っぽくはないかなと。ロマンチック街道的な感じではないんで」(Hさん・20歳代・男性)。

また、「北」と「南」の関係には、「東京」と「大阪」の関係が重ねられることもあった。マスメディアなどでも、「東京」と「大阪」は文化的なちがいが強調されることがある。社会一般に広まっているそのようなイメージが、個人的な経験の裏づけを介しつつ「北」と「南」の関係にも投影され、両者のちがいが強調されているという面があるのではないだろうか²⁹。

【Aさん(30歳代・男性)】

南部で生まれ育ち、現在は地域のまちづくり団体に所属しているAさんは、かつて豊中の北側で働いたことがある。窓口の担当だったが、そこは驚きの連続だった。「東京へ行ったことはないんですけど、ここは東京かと思いました」。たとえば、何か要求があるとき、「このへんの人やったら普通に、『ちょっとちょっと』みたいな感じで来るじゃないですか。『ちょっと聞いてくれるか』みたいな。向こうの人は理路整然と言いに来はるんですよ。『ここはこうでこうだから』みたいな感じで、理路整然ときて」。対応した後も、「南のほうっていうかこっちやったら、また来るんですよ。『にいちゃんありがとうな』とかいう人になるんですよ。それがもうなんか(向こうでは)サラッと流されるというか」。

【Kさん(20歳代・女性)】

南部地域で生まれ育ったKさんは、父親が単身赴任で東京に行っている関係もあり、年に数回は東京に行っている。他方で、子どもころから地域のお祭りなどに参加してきた。近所の人にはみな顔なじみであり、人のつながりが強いと感じている。そしてそれは、東京とはちがうところだと思う。「市場とかは、もうおばちゃんとかとめっちゃしゃべるし、だからそういうのはあります。だから、ちょっと『あっ、Kちゃん』みたいなんで、ちょっと安くしてもらったりとか、たまにあるし。でも、東京とか絶対ないし」。祖母などは、家の近くを通る人とみんな友だちになる。「よく通るおばちゃんとしゃべって、ずっと家の前で長話してたりするんで。そういうの絶対ないじゃないですか、東京とか」。

【Fさん(40歳代・男性)】

南部で生まれ育ち、現在は衣料品販売店を営んでいるFさんは、店を継ぐ前に仕事を覚える

²⁹ 推測ではあるが、このような「東京」的なものと「大阪」的なものが重ねられた、「北」と「南」の対比のフレームで大阪音大が理解されていることが、地域の人びとの大阪音大への距離感を増幅させているのではないか。学生らの経済的な「ゆとり」や「上品さ」といったイメージを「下町」の雰囲気と対比させる語りなどから、そのような印象を受けた。

目的で、チェーンの衣料品販売店を展開する企業に勤め、販売の仕事をしていていたことがある。赴任先は関東各地だった。学生が多いまちから高級住宅街、マンモス団地の中心、地方など、特色がちがうまちの店舗をまわった。

その経験のなかで、東京と大阪、あるいは南部地域の特徴を感じてきた。「比べるとやっぱり、あ、庄内違うなっていうのはすごく感じます。たぶん庄内でずっといたら、たぶんわからなかったことだとは思うんですね」。まず、売れる服の傾向が異なる。「東京の方はやっぱり、どちらかと言うと綺麗な感じですよ。色も単色のものが（売れる）。今またちょっと変わってきてますけどね。みなさんご存知のとおり、やっぱりこっちは柄柄ですね」。

また、（いまは少し東京も変わってきている部分もあるが）買い方も異なる。「その当時は、（東京では）値段の交渉もできなくて。そのへんがまず、ひとつ全然やっぱり関西圏と東京圏ではちがうなと。まけてもらう文化がやっぱりなかったですね」。「独特の文化、スタイルをもってるのはやっぱり関西の方ですね。東京は、画一化してるんですね。（中略）いま流行ってるよっていう服あるじゃないですか。そのスタイルをもうそのまま着るんですね。でもこっちは人は単品買って、自分で合わせるわって。（中略）ただ、今はだいぶ変わってきましたよね。その当時の話はやっぱりさうでしたね。今は東京の人でも、やっぱりスタイルが増えましたね」。

売る方にも話術が必要だ。こちらの方が人情も強いように感じる。「東京は、自分で選んで自分でこれっていうのを決めて買っていきますよね。だから、向こうのお店やってるときも、もう接客なしでも買ってくれる人とかも結構いてたんですね。自分でもうある程度スタイル決まってる、これとこれ、みたいな感じはありましたけど。こっちは、商店街、特に庄内の話ですけど、話だけ聞いてもらって帰る人もいますし。でも本当に日常会話から、店の前に立ってて、あ、久しぶりみたいな感じで、こんにちわって言ったら、じゃあ寄ろうか、みたいなところがあって。で、話してるうちに、しゃあないな、買っていこうか、みたいな。そういうところはやっぱり全然違うなと思いますね。人情とかっていうものは、強いんじゃないですか」。

そして、「結構僕のイメージでは、そういう東京系のものが、（豊中の）北側の人じゃないかなっていう風に感じるんですね」。「やっぱり、（豊中の）南と北っていうのは、僕の中では関西、関東ぐらい差がちょっとあるんじゃないかなと思いますね」。

対して、豊中市外から転入してきた人は、このような「北」と「南」を対比させるフレームを有していないことがある。これはそもそも、豊中市についての明確なイメージをもっていないためと思われる。地方圏出身者の場合、南部地域は「都市」と「地方」の対比のなかで、「都市」の方に位置づけられて生活利便性が高く評価されたり、あるいは「地方」の方に位置づけられて地域のつながりがポジティブに評価されたりしていた。地方出身の配偶者の南部地域への印象として、既婚者から同様のことが語られることもあった。

【Gさん（40歳代・女性）】

Gさんは、北関東から配偶者の仕事の都合で転入してきた。出身地に比べると生活が格段に便利であったことが、南部地域に住んでいる理由だ。地域が好きで、これからも住み続けたいと考えている。

Gさんはそもそも、「庄内とか、地域別に考えたことはない」という。「豊中の人と庄内の人ってちがうんですか?」。自身の出身地が地元という感覚も薄れてきている。「地域の人って感じがするって、えー、なんだろう。庄内の人って感じがするのはヒョウ柄に、別の柄とか合わせてるおばちゃんとか見ると、おー、庄内の人やなって思うけど。若い人とかそんなに、感じないかな。（中略）自分が庄内の人かっていう感じがするってなんだろう」。

Gさんは、子どもを大学に行かせたいと考えている。そのため、学校の学習指導の面には課題を感じることもある。ただ、治安に関しては、地方ではあまりみかけない喧嘩などをみると「びっくり」することはあるものの、「あ、そういう人たちがいるんだ」という感覚で、自身ではあまり気にしたことはない。

【Pさん（20歳代・女性）】

Pさんは中国地方の山間部出身。大阪音大への進学を機に、南部地域にある学生寮に移り住んだ。卒業後も南部に住み続けているのは、演奏ができる住宅があることが大きな理由だ。また、地方出身のPさんにとって南部は都会に感じるが、都会のなかでもすでにここには馴染みができているため、住むのに安心感も覚えている。

そのようなPさんは、豊中についてのイメージをあまりもっていない。「私、土地土地の印象みたいなのをあんまり知らないんですけど。豊中っていったら、いいところっていうイメージなんですか?」。Pさんは周囲から地域の治安の課題について聞くこともある。しかし、自分ではあまり実感が無い。「私自身は別に（被害に）会ったわけでもあまりないので、実感があんまりないんですけど。っていう感じですかね。あ、悪いのか、っていう感じ」。

【Qさん（30歳代・女性）】

Qさんは中国のなかでも100家族、500人程度が住む「山の中の、ちっちゃな村」の出身である。日本人男性と結婚し、南部地域に引っ越してきた。地域は利便性が高く、公共施設やそこで子ども向けのイベントなども充実しているため、子育て環境としても良好だと感じている。

そのようなQさんにとって、南部地域は「田舎な感じ」がする。高齢者が多く、親切な人が多いためだ。「私、田舎から来たから、中国の田舎で日本の昔みたい。（中略）家の周りね、みんな親切で、そこがなんか田舎感じていいなと思って」。そのような南部地域は、都会のような冷たい人間関係ではないという印象もある。「そんなみんな都会みたいな、マンション住んで、隣と何年も顔合わない冷たく…」。

自身を「豊中の人」というよりは「大阪の人」あるいは「北摂の人」と捉えるケースもあった。就業などで豊中市外の人と付き合うことが多くあったという経験が、背景にはあるようだ。自分の「地元」がどこかは「見る視点による」という話も聞かれた。

【Lさん（40歳代・男性）】

南部地域で生まれ育ったLさんは現在、父親から家業である不動産関係の仕事を継いでいる。そのようなLさんは、自身の「地元」がどこかについては「見る視点によりますね」と言う。「嫁さんの実家に戻ってる時に、地元やと言うと、豊中市全体言いますし。ここで地元やと言われると、もうX（＝町名）って感じになりますし」。

ただ、自身の肌感覚としては、どこの人かと問われると「豊中の人」というよりは、「大阪の人」あるいは「北摂の人」と感じる。今の仕事を継ぐ前は、大阪市内で民間の企業に勤めていた。企業には、大阪府内から人が集まっていた。「そうすると、やっぱり地域的なあれ（＝性格）が出て来るんですよ。大阪南部の泉南地域の人間は祭り優先なんで、平日でも休む。ほんで、大阪の淀川と大和川に挟まれた大阪市とか、東大阪の人間ていうのと、北摂、淀川以北の人間。大阪以北の人間て、僕も含まれてるのはどうかはわかりませんが、わりかしさっぱりした感じで、時間と時間のあれをきちっと。（中略）だから、豊中の人っていうか、豊中人て言う風なイメージはあんまり持ったことないですね」。

また、治安に関してLさんは、あまり良いとは感じていない。防犯対策も施している。「うちにも防犯カメラつけてます。テナントにも防犯カメラつけてます」。

このように、南部を認識する際のフレームには、比較の対象となるところによって、いくつかのバリエーションが確認できた。もちろん、1人の認識枠組みがどれかに必ず固定されているというわけではなく、複数の枠組みを使い分けている場合もあるだろう。それこそインタビューのなかでも聞かれたように、「見る視点による」ことも多いだろう。今回確認されたものとは別のフレームもあるだろう。

だが、南部地域の子育て・教育環境や治安などを語る際に頻繁に使われていたのは、「北」と比較して「南」を捉えるフレームだった。「都市」と「地方」の比較で南部地域を捉える地方出身の転入者は、あまり地域に対してネガティブなイメージを抱いてはいないようだった。どこを南部の比較対象とするのかが、地域の評価を左右する側面もあるのではないだろうか。「北」と「南」を対比させるフレームは、南部地域の環境に対する評価をネガティブな方向に傾けているように思われる。

最後に、地域を認識する際の枠組みに関するこれまでの議論を地域の内部から相対化するために、地元出身者であるAさんのケースをとりあげたい。Aさんは、今回のインタビュー対象者では唯一と言ってよい、「豊中の人」という感覚を明確に語った人だった。同時にAさんには、「庄

内の人」という感覚もある。Aさんいわく、2つの「祭り」を経験した結果、自身の地域的なアイデンティティは二重になっているという。

このケースからは、「豊中の人」という感覚と「庄内の人」という感覚は決して二項対立的に捉えることはできない、ということが確認できる。南部に魅力を感じ、「庄内の人」として地域に住み続けることと、「北」も含めた豊中市に愛着をもち「豊中の人」という感覚をもつことは、両立しうる。両者は背反的な関係には必ずしもない。

【Aさん（30歳代・男性）】

南部地域で生まれ育ち、現在は地域のまちづくり団体に所属するAさん。母親が地域の活動に熱心なこともあり、Aさん自身もまたボランティアを趣味としている。

たとえば、高校の生徒会で参加したことをきっかけに、豊中まつりにもかかわってきた。運営側に回っていたこともある。Aさんは中学生ぐらいまでは、「だいたいみんなこのへんはおんなじやろうな、みたいな感じ」で、地域の外についての視点を持ち合わせていなかった。しかし、「新しく豊中まつりに手伝いに行くというのがそこから出たんで、またもうひとつちがう、庄内からちょっと広がったっていう世界っていうのは、新しくできたっていうのはありますね」。

Aさんはこれまで、地域外に転出したいと考えたことはない。何か明確な理由があるわけではなく、「なぜかいるんです」と話す。地域に住み続けている理由についてさらに深く聞くと、Aさんは中学生のときに地域の祭りに参加した経験を語った。「(ある地区の祭りで) その地区じゃなくてもよその人にも法被貸しますよっていうのが始まって。そのときにはじめて、祭りに本格的に参加したっていうのがあったんです。何年か続いて出ててっていうのがあって。なんとなくそのへんの体験っていうのが、どっかにあんのかなっていう気もするんですけどね。(中略) 地域というか、なんというか、そういうものにはじめて接するわけじゃないですか。祭りというか。なんかそれがどっかに、どっかにあんのかなっていう。「昔の庄内のなかの、昔のとこへなんか入っていくっていう感覚っていうんですかね、お祭りにしても」。「田舎がないんで。祭りを子どもたちに見たとかっていうのはあっても、自分が近くの祭りに実際に参加したっていうのは、やっぱりなんかちがう感じとか」。

そのようなAさんに「豊中の人」というアイデンティティはあるのかと話を向けると、「庄内の人」と「豊中の人」という感覚が二重にあると語られた。「僕たぶん二重やと思うんですよ。豊中っていうアイデンティティは、豊中まつりっていうのに関係して。で、またその(豊中まつりのなかで)『アイラブ豊中』っていう言葉があって。それで豊中の人、豊中市民とは言わないんですけど、豊中の人っていう感じはあったっていうか、出てきた、身についたっていう感じですね」。

「豊中まつりにかかわるようになって、(中略) 南から北みたいな。南しか知らなかったけど、中部も東部も北もあるよ、みたいな見方っていうか。感覚がなんか、できたっていうんですかね」。

ただしAさんのなかでは、「豊中の人」よりも「庄内の人」のほうがベースにある。「豊中の南部ではないんですよね。南部の豊中なんですよね、感じ方は。(中略) 我々は庄内やっていうのが

(4) 小括

本項では、居住者のライフスタイルと地域の関係について検討してきた。簡単に整理しつつ、若干の考察も加えていきたい。

第1に、生活利便性の内実について。居住者にとって、南部地域の生活利便性は高いと感じ取られている。普段の買い物は自宅や庄内駅の周辺で行われる。買い物環境をはじめとした生活利便性を転入や定住の理由とする人もいる。生活利便性は南部地域に人びとを引きつける引力になっているようだ。

ただし、地域内であまり買わないものもある。庄内駅周辺で売られている一部の品目は、高齢者に寄っていると感じられており、衣料品などは大阪市内の他、北摂他市や阪神間のショッピングモールなどで購入されることが多い。大阪市内で働いている人の場合、わざわざ買い物に梅田へ出掛ける必要もない。インターネットの利用も幅広く行われている。そのため、地域内で買えないものがあるからといって、それは地域の生活利便性の不満にはあまり結びつかない。

豊南市場については、まったく行かないという人からよく利用するという人まで個人差がみられる。よく利用するという人は、価格の安さや商品の新鮮さを魅力に感じている。あまり行かないという人は、販売量や営業時間が自身のライフスタイルとマッチしないと感じている。特別な食材を購入する際などにも使われ、中国の食材が手に入りやすいという声も中国出身者から聞かれた。

また、買い物などが行われる南部地域の居住者の基本的な消費圏は、特に未婚者にとっては南部地域から大阪市内にかけてであることが多い。ただ、結婚し子育てを始めると、子どもを連れて歩き回ることが難しい大阪市内の利用頻度は下がる。対して、阪神間や北摂には子どもを連れて利用しやすいスペースが豊富な大型ショッピングモールなどがある。未婚のころは南部から大阪市内にかけて広がっていた消費圏は、結婚し子育て世帯になるに伴い、南部から阪神間・北摂にかけてというように、少し北側に移る傾向にあるようだ。もっとも、豊中市の北側への移動はあまりなされない。

このように、自家用車で行ける範囲には大型ショッピングモールも豊富なため、南部地域での消費の不便が語られることがあっても、やはり地域での消費に対する不満は顕在化しない。むしろ、周囲に大型ショッピングモールが多い点に、生活の便利さが感じられている面もある。

確かに、生活利便性は南部地域の魅力として、人びとを引きつける力になっている。ただ、南部地域は、少なくとも今回のインタビュー対象となった20～40歳代の多くの居住者の消費ニーズを、地域内だけで充足しているわけではない（豊中市内で充足しているわけでもない）。彼ら・彼女らの消費ニーズは、地域外の商業施設やインターネット通販などによって補われている場合が多いようだ。居住者によって感じ取られている利便性は、日常の買い物を賄える地域内の商業施設等の充実の他に、地域外への移動性の高さも含めた利便性であると言える。このことから、

地域の生活利便性に対する評価と、地域内での消費活動の程度が、必ずしも連動していない可能性も示唆される。

また、特に南部地域の西側エリアの人にとっては、日常的な買い物や、移動の不便さを指摘する声も聞かれた。このような地域内の差が、第2章でみられた、生活に便利／不便なまちという相反する地域イメージの背景にあると考えられる。

第2に、血縁を介した地縁の構築について。南部地域の出身者のなかには、消防団や祭りの運営、PTAなど、地域での活動に積極的な人がある。そのような地縁に基づく活動は、しばしば血縁とも関連している。つまり、地域内のつながりが親から子へと引き継がれている場合がある。ここには「家の継承」と「地域の継承」との重なりが見られる。この場合、地域のつながりは強く、相互扶助の関係も見られる。地域に対する愛着や安心感にもつながっているようだ。その意味で、血縁を介して再生産されている地域のつながりは、南部地域に居住者を引き付ける引力になっている面があると言える。

ただ、高齢化の影響や人口の転出などにより、地域活動は難しくなっているという声も聞かれる。地域活動への参加の経路が血縁による場合が少なくないということは、転入者や未婚者・単身者などが地域との接点を持ちにくいということでもある。地元出身者にとっては、地域にいる未婚者や単身者の層が認識されていない場合も少なくない。

第3に、学校を介したつながり構築について。地縁に含めて捉えることもできるが、学校のPTA活動は、親から引き継ぐ地縁が乏しい人や転入者の人も含め、地域での活動に居住者を結び付ける経路となっている。地方都市における若者の生活について調査した阿部（2013）が報告するところによると、地域の活動から距離を置いた生活を送る若い世代も、それを必要とするような状況、特に子育て期に入ると積極的な参加を志向する（pp.55-57）。地域が置かれている状況は異なるものの、今回のインタビューの結果と符合するところである。

また、学校を介したつながりには、同窓生との関係もある。地元の小中学校を中心とした同窓生との関係が、現在でも続いているという人がある。同窓生との関係が仕事に活かされるというケースもみられる。同窓生との関係は、ローカルな社会関係資本の機能も有していると言える。この意味で、同窓生とのつながりは、特に地元出身者を地域に引きつける力になっているようだ。ただし、一部の地元出身者にとって同窓生のつながりは斥力としても働く。ライフコースの選択のなかで、地元の同窓生とのつながりは切れているという人も少なくない。

第4に、大阪音大の学生と地域の関係について。多くの居住者にとって南部地域は「大阪音大のあるまち」と認識され、大阪音大は地域のアイコンのひとつとして受け止められている。特に幼少期の子どもを育てている世帯にとって、大阪音大はひとつの資源として積極的に利用されている場合もある。しかし、居住者の多くにとっては、大阪音大や学生は直接の接点に乏しい、疎遠な存在でもあるようだ。

学生の地域内消費は必ずしも少ないわけではない。在学中から庄内駅や学校周辺での飲食の機会も多々ある。確かに、学生のなかには地域の店舗が「入りづらい」と感じている者もあり、そ

の意味では学生の方から地域の店舗の魅力が見えていない面もあるだろう。ただし、地域の居住者の方からも、学生の姿が見えていない面がうかがえる。

音大生のなかには地域と積極的に接点をもつ人もいる。「下町」に対して親和性を示し、地域への馴染みを感じている者もいる。卒業後も地域に残る場合もあり、南部地域内には音楽関係者のネットワークが潜在している。そのなかで、仕事が融通されていることもある（社会関係資本の仕事への転用）。もちろん、このような学生や卒業生はおそらくマジョリティではないだろう。ただ、存在することは確かである。

第5に、地域の治安について。治安については、世間一般に幅広くみられる課題として、南部地域に特有な課題とは切り離して考えられることもあった。具体的な事件・事故などの事象というよりも、路地の狭さや暗さといった「空間」などに焦点をあてて捉えられている面もあった。

また、「治安に課題があるところ」というよりも、「治安が課題とされやすいところ」という捉え方も見られた。このような認識の背景にあるのは、地域に長く住んできたことによる「馴染み」であった。つまり、地域に「馴染み」があるため、外の人には危険（＝課題）に見えるかもしれないものが、実際には危険ではないことが理解できている。ただし、地域への「馴染み」が、治安への課題を感じさせやすくするという面もあるように思われた。治安の評価に関しては、子育て・教育環境の評価との重なりも見られる。

加えて、地域の治安に対する評価は一種の自虐的ユーモアであるという声や、治安の課題は魅力の裏面であるというような話も聞かれた。周囲から「治安が課題とされやすいところ」として客体化されやすい地域を、主体的に捉え返し、ポジティブな方向に意味を書き換える試みとしても理解できる。また、このような捉え返しは、地域の治安について居住者が評価する際、その評価結果をどのように受け取ればよいのかについても、再考を促しているように思われる。

第6に、地域を捉えるフレームについて。南部地域の治安や子育て・教育環境に対する評価からは、「北」と対比させるかたちで「南」を捉える枠組みが見られた。そこにはしばしば、「東京」と「大阪」のイメージの対比も重ねられている。その他には、「都市」と「地方」の対比や、北摂・泉南など大阪の各エリアの対比のなかで、南部地域を捉えている人もいた。しかし、地域環境のネガティブな評価は往々にして、「北」との対比のなかでなされている。「北」と「南」を対称的に捉えるフレームのなかで、地域のネガティブな評価が必要以上に増幅されている側面もあるのではないか。

もちろん、豊中の「北」と「南」を比較する視点は、「北」の側の人にもあることが想定される。第2章のイメージ分析で用いた自由記述の中には、「大阪っぽくない」点に北東部や中北部の地域イメージをみているケースもあった。インタビューでも一部の人は、「北」からのネガティブな評価を見聞きしていた。外部からの評価が内部での評価に反映されているという側面も、あるように思われる。

4-3-4. 地域の今後について

次節でインタビュー調査の結果の考察を行うが、その前に、ここで地域の今後に期待することについて対象者から聞かれたことを列記する。それぞれが多様であるためまとめることはできないものの、対象者のライフコースやライフスタイル、現実の生活に根差した展望として理解していただきたい。

①新しい家を建てる

【Dさん（40歳代・男性）】

「やっぱ、人が増えるためには何をせなあかんかって、魅力がないとたぶんこないと思うんですよ。それをどのようにしてやるのか。ほんとにもう、新築の家を建てたりね。やっぱり、いま空き家ばかりで、人が住んでないのにあるんで。で、道も狭くてあんなとこ火事になったらほんとにね、もう大変なことになるぐらいのところなんで。そういうところを整備して、ほんとに住みやすい環境とかつくってあげたら、人ってね、増えていくんかなって」。

②まちが綺麗になる

【Kさん（20歳代・女性）】

「今、駅のところ自転車停めれなくなったりとか。前までって、全部自転車わんさかになってたじゃないですか。それはめっちゃ庄内な感じやったけど、今はスコーンと抜けているのは気持ちいいです。ああいう風に変わってくれるのは全然もう」。

③商店街の活性化

【Pさん（20歳代・女性）】

「十三の方に学童でいま行くんですけど、なんかあっちの商店街、すごくなって言うんですか、栄えてるじゃないですけど、なんか活気があって。あんな感じで庄内もなったらいいのになって思ってる」。

【Fさん（40歳代・男性）】

「商店街、面で庄内というものを活性化していくためには、やっぱり協力してやっていかないといいもやっぱりあるんですね。そういう意味で今回のお祭りも、僕もちょっとはかんでますけども、やっぱり、活性化はやっぱりしていかないといけないっていうのはやっぱり思いますね」。

④子どもと子育て世帯を支える

【Bさん（40歳代・男性）】

「小中一貫校になるんなら、こんな学校にしようとか、こんなふうにしたい、あんなふうなものがあったらいいねっていうことを、前向きに話していかへんと、できてしまったものに、なん

の思い入れも愛着もなくなってしまう。昔の小学校できたときって、おらが村に小学校、っていう熱い思いがあったわけじゃないですか。(中略) 役所の人らと盛り上げてくしかない。それはやっぱり子どものためかな」。

「説明会があったときにね、言ったんですよ。これ、自分ち建てんのと一緒やと。小学校がこれからできることが決まったと。でも、何ができるかは決まってない。だからみんなで家建てる時に設計図を描くのと同じですわと。1階にトイレあったほうがいいよとか、2階にお風呂、リビングこれぐらいとか、キッチンなんかこう…とかっていうことを、みんなで。あれやってるとき一番楽しいじゃないですか、と。遠足行く前の日みたいなかたちで。だから、意見言ったらどうこうじゃなくて、それは、言ってほしいと」。

【Lさん (40歳代・男性)】

「僕がずっと住んでた中で、やっぱり人口が減っていったのと、高齢化ってのをやっぱり感じますんでね。もうちょっと若い人らが寄りつくまちに、もしくは住んでもらえるまちになっていたらええかなっていうのは。(中略) その辺、一番ええのは、いま豊中市役所のサービスコーナーが市場のところ、庄内駅前庁舎にできると。ほんだらね、人が少ない地域の主産業は何かと言われると、役場なんですよ。(中略) だからある意味、庄内地域における主産業を一番人の集まるところに持ってきてもろうたってことは、わりかし、まちの集約とか活性化にはええんちゃうかなと思う。ただ、それに対して役場だけじゃなくて、それに付随する子ども病院であったりとか、子どもクリニック、24時間でも対応してもらえるのをつけてもらえると、若い人らは寄って来るんちゃうかな」。

「同じ100人の子育て世代を分散させて住ませるよりも、密集して住ませる方が、他から集まってきやすくなると思うんですね。ある程度そういう風な感じで、目玉的なところを地域につくらんと、今のままでは過疎がより一層進んでいくんちゃうかなっていうのがイメージ的にあります」。

【Mさん (40歳代・男性)】

「老人ホーム等と保育園とかこども園とかをコラボさせて。で、たとえば、おじいちゃんおばあちゃんらと小さい子たちが交流するとか。コミュニティの形成とまでじゃないですけど、なんかそういうところから親御さん、子ども、お年寄りといった世代間のつながりもできたらどうかなってちょっと、ちょっと勝手に思ったりしてます」。

⑤地域のつながりの再構築

【Nさん (30歳代・男性)】

「昔はもうみんなつながってるのもあったけど、どんどんどんどん個人個人になってるじゃないですか。地域自体のつながりっていうのがなかったり。地区の運動会とかも、たぶん人少なく

なってると思うんですよ。人と人のつながりがどんどんどんどんなくなっていったんじゃないかなと思うんですけどね。(中略)地域のつながりが増えれば、いいんじゃないかなって思いますね。人と人のつながりというか」。

⑥大学を地域にもっと開く

【Hさん(20歳代・男性)】

「音大はもっと変わった方がいいんじゃないかな。(中略)なんか、オープンな感じに。だからなんかもう、出入り自由みたいな感じにしてもいいんじゃないかなと。学食に近所の人が食いに来るといいな」。

⑦中年層を増やす

【Aさん(30歳代・男性)】

「いまのままでやったら、もうホンマに確実に…。いま高齢者が増えてきて、さてどうするって言うところで、これがはじまったとこやしたら、もうどんどん高齢化する、というよりは、人口が減っていくと思うんで。いまからその、若い人って言って、そのたとえば、子育て世帯とか、子どもをとかっていうのも大事だと思うんですけど、やっぱこのへんって中年代、40とか30後半とかがやっぱ支えてきたまちなような気がするんですよ。そういう人びとこそ入れて、で、なにかしら地元のことやしてもらって。そこへ、あわよくばそっから若い人を、そして子ども世代って言う、子ども世代を連れてってというのがあれば、それはいいんでしょうと。だから、まちを回してる年代って言うか世代を入れずにいきなりその子育て世代とか、子どもを連れてくるって言うのは、このまちにはちょっと無理があるんじゃないかとは思ってますよ」。

「(子育て世帯が地域にたくさん) いればもちろんこれからの支えになるから、って言うのもありやと思うんですけど。じゃあそしたら今の現状に、なんかこう、カンフル剂的に一発なにか打ち込むにしては、時間がかかりすぎるという。時間をかけるのであれば、それを成熟するまでもっていく環境がないと、成り立たないと思うんです。そこまでの間をもたせるでもいいから、そういう中間層を入れておくべきやと思うんです。いま回ってないと、子育て世代とか子どもたちがおっきくなったときに寂れてしまってるのもう、またそっからはじめないといけないとなると、ちょっとそれは二度手間なのかなって言う気はする」。

⑧外国ルーツの子どものつながり

【Eさん(30歳代・男性)】

「僕、韓国って言うこともあるんで、そういう韓国の子たちとかもどういう風に、地域とどういう風につながっていくかなって言う部分は関心はありますね。(中略)いまハギハッキョって言うのは、1年1回集まったりとか、いろいろ集まりはあると思うんですけど。僕んときはあんまりそういうのがなくて、小学校でも、小中でも(在日コリアンの子は)おったけど、そういう

子どもたちとあんまり交流がなかったっていうのがあるので。(中略) やっぱいま、外国の方も結構多くなって、クォーターとかハーフの方もいまめっちゃめっちゃ多くなってると思うんですけど。どういう風にしてそういう子どもたちが地域でつながっていけるかっていう部分は、興味がありますね」。

4-4. 考察

本章では、インタビュー調査を通じて、南部地域の人びとの居住地選択、消費活動、つながり構築、地域環境の評価（子育て・教育、治安）などについて検討した。それぞれのテーマの検討結果の詳細は各項の小括を参照することとし、ここでは昨年度の調査結果との関係について考察を行いたい。

第1に、居留意向に関して。昨年度の調査結果では、南部地域では子育て世帯を中心とした転出が目立っていた。20歳代後半で転出志向が強まるとともに、地域の環境に対するネガティブな評価が色濃くなる傾向もみられた。

今回のインタビュー調査では、対象者が地域居住者であるため、転出者の居住地選択のプロセスを直接追うことはできない。ただ、子育て世代への移行に伴い、地域の子育て・教育環境や治安などに対する評価がネガティブになる傾向があることはうかがえた。第3章の結果をふまえても、移動志向が強く、実際に地域外へと転出した人たちにとって、地域の環境評価が地域からの移動を後押しする斥力となっていた可能性が推察できる。

ただ、地域環境の評価がネガティブなものであったとしても、それは直接、地域からの移動志向へとつながるわけではない。図表43に地域に引きつける力（引力）と、地域から押し出す力（斥力）を整理した。地域の引力としては、生活圏内にある進学・就職先の豊富な選択肢、家・家業の継承、セーフティネットとしての実家、親による子育てサポート、親の老後ケア、仕事の近接性、地域への愛着や安心感、生活利便性、「下町」への愛着などが見られた。地域への愛着や仕事

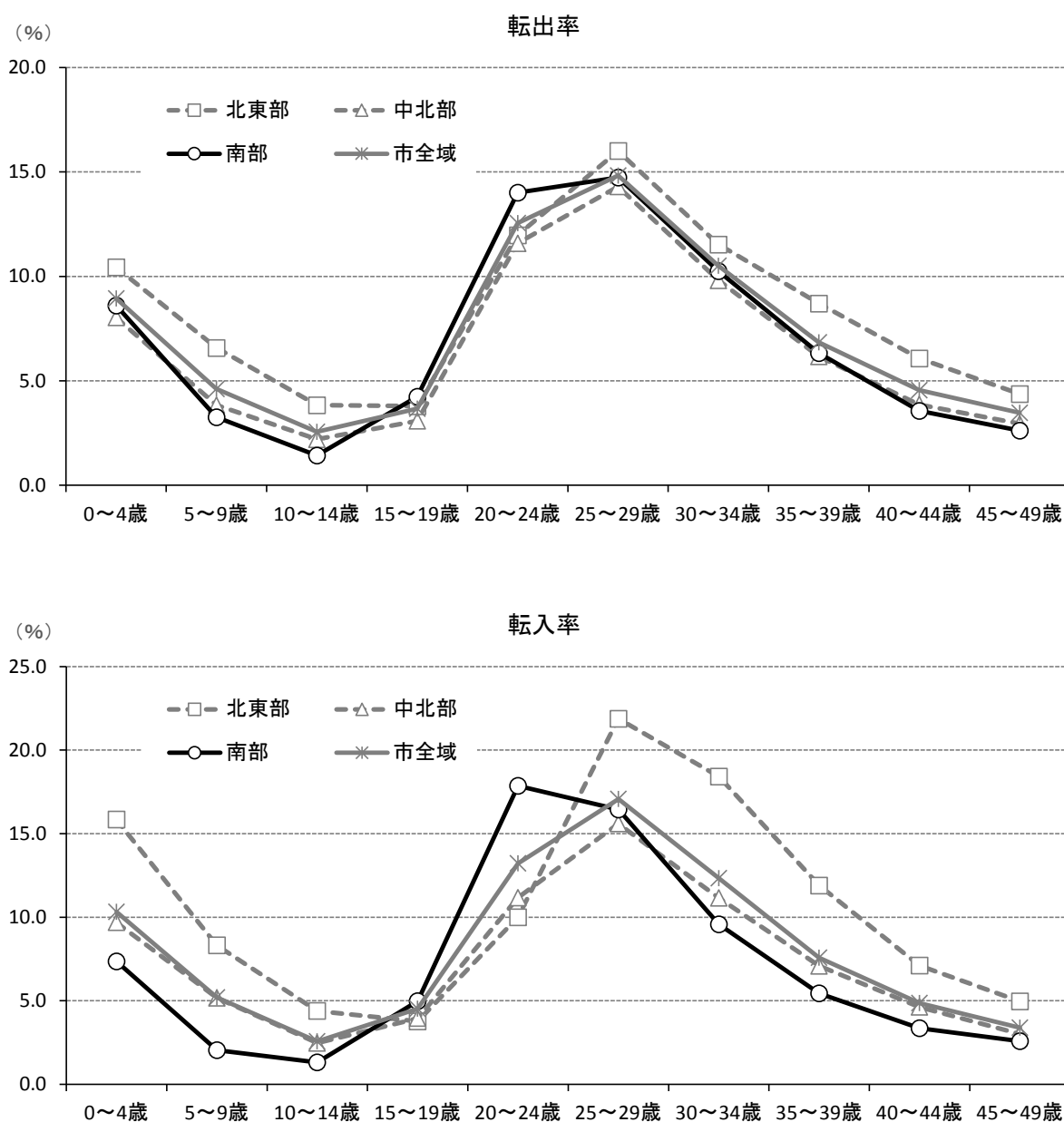
図表 43 南部地域の引力と斥力

	地域に 引きつける力（引力）	地域から 押し出す力（斥力）
ライフコース	<ul style="list-style-type: none"> 生活圏内の進学・就職先の多様な選択肢 実家（家の継承、経済的なセーフティネット、子育てサポート、親のケア、など） 仕事の近接性（地域のつながりが仕事と関連するケースも） 楽器練習可の住宅（音楽関係者の居住） 	<ul style="list-style-type: none"> 実家（自立志向、自由志向） 当人の強い地位達成志向など
ライフスタイル	<ul style="list-style-type: none"> 生活利便性（生活圏内の商業施設の豊富さと地域外への高い移動性） 地域への愛着や安心感（地域のつながりとの関連） 「下町」の雰囲気への選好 	<ul style="list-style-type: none"> 子育て・教育環境へのネガティブな評価 治安へのネガティブな評価 地域のつながりからの距離化

などには、ローカルな社会関係資本が関与していることもうかがえた。このような地域への引力が弱い場合、あるいは、地域からの斥力が強い場合、地域からの転出志向へと傾きやすいと整理できるだろう。

ここで改めて、社会動態について確認してみる。図表 44 は、住民基本台帳に基づいて算出した、0 歳から 49 歳までの 5 歳階級別での、平成 24 年度（2012 年度）から平成 28 年度（2016 年度）にかけての 5 年間の転入率と転出率である³⁰。グラフは可視性を考慮し、南部と市全域、そして昨年度の質問紙調査でも対象地域とした北東部と中北部のみを表示している。

図表 44 5 歳階級別・地域別の転入率・転出率（H24～28 年度）



³⁰ 居住人口に対する転入者と転出者の割合。各年度末時点での地域別・年齢別の転入者・転出者数の合計を、各年度始め時点での地域別・年齢別の人口の合計で割り、100 を掛けて算出。

これをみると、転入率と転出率で地域別の動きにちがいがあることがわかる。転出率については、地域間の差はあまり大きくない。それに比べると、転入率は地域間の差が開いている。南部に注目すると、20～24歳の年齢層での転入率が他地域に比べて高く、これはおそらく就職に伴う転入であると思われる。そして、30歳代から40歳代にかけては、他地域より転入率が低い。0～4歳の転入率も他地域と開きがある。南部地域は子育て世帯の転入率が豊中市内で相対的に低いと考えられる。

以上から指摘できるのは、南部地域でみられる子育て世帯の社会減傾向は、地域から外へ出ていく人が多いという要素よりは、外から地域に入ってくる人が少ないという要素によるところが大きいということである。子育て世帯の社会減傾向に歯止めをかけるためには、地域外の子育て世帯に訴求する地域の条件に注目することが重要であると言える。

この観点から南部地域の引力と斥力について改めて検討すると、今回のインタビュー調査で確認できた地域の引力については、実家や社会関係、地域への愛着などを中心に、効力が地域出身者に限られるものが多い。楽器の練習が可能な住宅が多いという地域の条件は、子育て世帯には訴求しにくい。実家との関係や地位達成志向、地域のつながりからの距離化といった斥力についても、個人のパーソナリティに左右される部分も大きく、政策的なアプローチは容易ではない。

「下町」の雰囲気を選好については、それがどこまで地域外の子育て世帯を引きつけるのに有効なのか判断が難しい。地域のつながりの強さを好意的に評価する人にとっては、子どもを見守る環境が充実しているという面で、それが子育て環境の良さに映る可能性はある。幅広い子育て世帯に訴求することは難しいかもしれないが、特定のライフスタイルを選好する人にターゲットを絞ったアプローチとしては考えられる。

地域外の子育て世帯に幅広く当てはまり、政策的なアプローチの余地があるものとしては、地域の生活利便性をアピールすることと、ネガティブに映る傾向にある治安や子育て・教育環境を改善していくことであろう。この2つのポイントについては、更に詳しく2点目、3点目の考察で取り上げたい。

第2に、地域の生活利便性について。昨年度の調査によると、南部地域は生活利便性が高く評価されていた。ただ、地域内の店舗に対する選好は弱い傾向も見られた。この関係をどう捉えればよいのか。

今回のインタビュー調査では、生活利便性に対する高評価を理由に転入してきた人や、結婚後に地域の生活利便性を再認識し定住志向を強めた人などがいた。生活利便性は、地域に人を引きつける引力として作用している側面があるように思われた。

もっとも、居住者が捉えている生活の利便性は、地域外にも広がる生活圏を前提としている。生鮮食品や日用品など、普段の買い物は地域内のスーパーや豊南市場などで充足できるが、それ以外の買い物、たとえば衣料品などは地域外で購入されることが少なくない。庄内駅周辺の店舗は高齢者をターゲットとしており、若い世代向けの商品が少なくと捉えられてもいる。ただ、大阪市内に近く（大阪市内の通勤者にとってはわざわざ買い物のために行く必要もない）、地域外の

生活圏内に大型のショッピングモールも多数あり（子育て世代への移行に伴い、生活圏は大阪市内からショッピングモールが立地する北摂・阪神間へと北上する傾向が見られる）、インターネットでの購入機会も増えてきているため、地域内で買えないものがあっても、それは生活利便性への不満にはつながらない。むしろ、地域の外も含めた生活圏内に多様な商業施設があり、そこへの移動が容易なことが、地域の居住者が「南部は生活に便利だ」と評価するときの理由の一端になっていると言える。

生活利便性については、地域外の子育て世帯にも幅広く訴求しうる要素のひとつとして考えられた。この点を地域外にアピールする場合、日常的な買い物などが地域内で充足できる点に加え、近隣のショッピングモールなどへの移動性の高さを伝えることも重要であると言える。ただしそのことは、人口を呼び込むという面からの活性化へのアプローチとしてはあり得るかもしれないが、地域内での消費活動の増進という面では地域の活性化にマイナスに働くかもしれない。

また、以上の検討からは、生活利便性に対する評価が高いことと、地域のなかでの消費活動が活発なことが、必ずしも連動しているわけではないという可能性も示唆される。居住者の中での豊南市場の利用頻度の個人差の背景にも、生活利便性の評価と地域の店舗の利用実態のギャップがあるのではないかと。ただ、今回は直接のインタビュー対象者ではないため把握ができないが、高齢者の場合は利便性の評価と利用の実態の齟齬が小さい可能性も考えられる。

第3に、地域環境の評価について。繰り返しになるが、昨年度の調査研究では、南部地域の環境評価については、子育て・教育環境や治安といった面でネガティブな反応がみられた。

今回のインタビュー調査でも、子育て・教育環境や治安について、課題として捉える声はしばしば聞かれた。インタビューではより具体的に、子育て・教育環境に関しては、子どもの遊ぶ環境（自然の少なさ、商業施設の多さ、校区の狭さ、など）、待機児童問題、学校の課題（児童生徒数の少なさ、学習指導・生徒指導面での不安、など）があげられた。治安に関しては、「空間」などに焦点をあてた不安や不満が語られた。地域の子育て・教育環境や治安の面については、これらが改善の重点になってくるのではないかとと思われる。

他方で、地域の子育て・教育環境については、地域のつながりの強さが子どもの見守り環境として適していること、公共施設などでの子ども向けのイベントが充実していることなどを中心に、ポジティブに評価する声も聞かれた。地域の子育て・教育環境を積極的に捉える声があるという点も、確認しておきたい。

また、地域の治安については、それを自虐的ユーモアとして語る傾向もうかがえた。質問紙調査で数字として示される地域の治安に対するネガティブな評価には、もちろん深刻な不安を抱えるケースもあると思われるが、一部には周囲からネガティブに客観視して捉えられがちな地域の治安を、主体的にポジティブに捉え返す自虐的なユーモアとして表明されているケースも含まれていると考えられる。治安に対する不安の解消に努めるのはもちろんとしても、質問紙調査で示される数値を他地域とストレートに比較にすることについては、もう少し慎重であってもよいかもしれない。

その上で今回のインタビューからわかったのは、居住者が地域環境を評価する際に、しばしば「北」との対比で南部地域を認識しているということである。「北」と「南」には、「東京」と「大阪」のちがいにに関して広く見られるイメージも重ねられていた。このことは、南部と他の2地域との間の地域イメージの重なりが小さいという、第2章の分析結果とも符合する。

南部地域に対するネガティブな評価は、このような「北」と「南」を対比的に捉える認識フレームのなかで、強調されているという面があるのではないだろうか。もちろん、豊中の「北」と「南」を比較する視点は、「北」の側の人にもあると思われる。インタビューの一部からは、「北」から「南」に向けられたネガティブな評価が報告された。外部からの評価を内部に取り入れている面もあるのかもしれない。

そうであるとすれば、子育て・教育環境や治安の改善をこれからも推進していくことはもちろんとしても、「北」に対する「南」という認識フレームが前提である場合、地域環境の評価の改善は鈍くなりがちになるということはないだろうか。

転入者や音大卒業生、中国出身者からは、今回のインタビュー対象者で過半を占めた地元出身者とは異なる、地域についてのポジティブな見方がしばしば聞かれた。地域のイメージは歴史的に形成されたものであり、地域のアイデンティティや誇りに結びついている面もあるため、一朝一夕に変化が進むことは難しく、早急なイメージ刷新が望ましいわけでもない。ただ、子育て・教育環境や治安を含む南部地域についての評価を、地域の内部にいる多様な人びとの視点から相対化しながら、漸進的にずらしていくことも必要ではないだろうか。

第4に、地域のつながりについて。南部地域はしばしば、地域のつながりが強いところとして評価されることもある。しかし、昨年度の質問紙調査では、若い世代における地域のつながりは、他地域に比べて低い傾向が指摘できた。この印象と実態の関係をどのように捉えればよいのか。

昨年度は、南部地域で社会的なつながりが弱い傾向にあるという結果が出たのは、地域に住む若い世代に単身者・未婚者が多いからではないかと考えた。今回のインタビュー調査でも、その仮説は基本的に支持されたと言える。

単身者、あるいは転入者が地域のつながりと接点をもつ機会は相対的に少ないようだ。地域組織のなかには、親から子へと参加が継承されるケースが幅広く見られた。家の継承と地域の継承は一部で重なっている。そのため、家を単位としてつながりがある人たちの間では相互扶助の関係が形成されていたり、そのような関係のなかで幼少期から過ごしてきた人は地域に愛着を抱いていたりと、つながりの強さが確認できる。地域活動と接点がなかった人の場合でも、子育て世代への移行に伴い、PTAなどを入り口に地域の活動へと接続されるケースが見られた。このような傾向は、地方圏に暮らす若者を対象とした別の調査でも見られるようだ(阿部 2013)。しかし、そのようなかたちで再生産される地域のつながりは、転入者や単身者などとの接点が薄い。単身者が相対的に多く居住している地域として、南部地域が認識されていない場合もある。

もちろん、地縁と転入者・単身者との接点の少なさは、南部地域に特有の構造とは言えないだろう。広く日本社会に見られる傾向であると考えられる。ただ、南部地域は代々住み続けている

家系もあり、旧村の区切りがときに浮上することもある。南部地域は一方で、「地の人」によって形成されてきた歴史あるまちと言える。他方、南部地域は高度経済成長期に地方圏から関西圏に働きに来た、主として単身者が手頃に入居できる文化住宅などが整備されたことにより、人口が急増した地域でもある。南部地域には流動者のまちという性格もあり、それはすでに一定の歴史を成している。「地の人」に対して「風の人」(小島 2014)のまち、という言い方もできるだろう³¹。南部地域におけるつながりが強さと弱さを持ち合わせているように見えるのは、ひとつには、「地の人」によって形成されてきた地域のかたちと、「風の人」によって形成されてきた地域のかたちが、高度経済成長期以降、併存してきたという面もあるのではないか。

他方で、地縁から半歩ずれるかたちで自発的に、場合によっては非組織的に形成されている「居場所」も地域のなかにはある。そのような「居場所」でのつながりも、相互扶助などの機能を有しているようだ。地縁から相対的に距離のある人びとと地域を橋渡しするような場として、このような地縁から半歩ずれた「居場所」を捉えることもできるだろう。

第5に、大阪音大の学生や卒業生など音楽関係者について。昨年度の調査では、学生は南部地域との接点が少ないのではないかと考えられた。地域内での消費活動は少なく、治安を中心に地域に対するネガティブな評価も少なくなかった。

ただ、今回インタビューを行った大阪音大の卒業生は、南部地域で学生時代から頻繁に消費を行っていたようだ。治安に関しても、対象となった2人は特に不安を強く感じているわけでもない。もちろん、対象となった2人は学生時代からの地域居住者であり、学生のマジョリティである地域外の実家からの通学生とはちがって南部地域との接点がそもそも多い。ただ、自分たちの周囲の学生も地域内の消費は必ずしも少なくなかったという話もあった。いずれにしても、地域との接点が多い学生がマイノリティであったとしても、「下町」を好きと語り、馴染みのある地域であると語り、南部地域にある音楽系の大学を卒業したことを誇りに感じていると語ることもあったという事実は、地域の活性化を考える際に重要であるように思われる。

しかし、在学中は商店街での曲づくりなどへの関わりがあった場合でも、卒業後はそのような活動は見られない。フリーランスでアルバイトも掛け持ちしながら生活をするなかで、仕事が忙しくなるという状況もちろんあるだろう。

他方で、地元出身者にとっても、大阪音大やその学生に対しては縁遠い存在のようだった。例外は幼少期の子どもを育てる中国出身の女性たちのケースで、彼女らは大阪音大が開いている子どもも参加できる音楽イベントによく行っていた。子育て世帯にとって大阪音大は、地域のなかにある資源のひとつであると言える。大学の地域貢献への期待の声も聞かれた。ただ、インタビュー対象者の多くは、大阪音大を地域のアイコンとして認識しているものの、大学と具体的な接点を持ってはいなかった。

³¹ ただし、小島(2014)では、「土の人」(地元出身者など)と「風の人」(転入者など)という対比がなされている。

楽器の演奏などが可能な住宅が多いという地域内の条件から、南部地域には大阪音大の学生や卒業生のみならず、音楽関係者が広く潜在している可能性がある。大阪音大の側でも、豊中市立の幼稚園・小学校・中学校に教員や学生を派遣し授業や部活動の指導などを行う「サウンドスクール」といった事業や、「音楽で人と社会をつなぐ」をテーマに掲げたミュージックコミュニケーション専攻の設置など、地域連携の取り組みの展開が見られる（西村・久保田 2016）。このような流れに倣差すことで、南部地域に住む卒業生や音楽関係者のネットワークを地域のなかで可視化し、地域の活性化につなげていくこともできるのではないか。地域に根づいた生活者である彼ら・彼女らは、大阪音大と地域を媒介するような位置にいるように思われる。

第5章 おわりに

5-1. 本年度の調査研究の結果	150
5-2. 活性化の方向性についての考察	151

第5章 おわりに

5-1. 本年度の調査研究の結果

南部地域の活性化に向けた本年度の研究は、主に3つのパートにわけられる。結果の詳細については各章の考察などに譲り、ここでは各パートの概要について簡単に整理しておく。

第2章では、庄内駅周辺における大阪音大の学生の滞留状況に関する分析を行った。大阪音大の学生が庄内駅周辺の空間をどのように利用しているのか、一定の地点に留まる滞留という行動に注目し、観察経路法という方法を用いて調査と分析を行った。

その結果、庄内駅周辺で滞留している学生は非常に少ないことがわかった。また、学生が線路の東側に移動することはほとんどなく、地域外からの通学者が多くを占める大阪音大の学生は、もっぱら庄内駅周辺を大学から駅までの移動の空間として利用していることがうかがえた。

ただし、学生の往来が多い駅西側では属性間の滞留の差は小さかった。つまり、学生が地域での滞留が少ないのは、学生の特性というよりも、駅周辺の空間の特性によるものと考えられた。

大阪音大の卒業生に対するインタビュー調査によれば、学生による庄内駅周辺での消費は少なからずある。地域内で滞留している学生はマイノリティかもしれないが、その存在を可視化していく仕組みが、空間に埋め込まれることが必要ではないだろうか。

第3章では、若い世代の地域イメージと居住意向の関連についての分析を行った。昨年度行った質問紙調査の地域イメージに関する自由回答について、計量テキスト分析という手法を用い、南部地域の居住者が地域に対してどのようなイメージを抱いているのか、イメージと居住意向の関係はどうなっているのかを分析した。

その結果、まず、南部地域のイメージとして、少子高齢化が進むまち、生活が便利／不便なまち、雑多なまち、治安に課題があるまち、古くて新しい、都会で田舎なまち、といったものが抽出された。居住環境や住宅地としての良好さ、治安や子育て・教育環境についてのイメージといった面で、北東部や中北部との間にはちがいがみられた。

イメージと居住意向の関係については、「治安」に関するイメージを抱いている人は転出志向が強い傾向にあることがわかった。他方で、地域内でのつながりや人のフレンドリーさなど「人間関係」に関するイメージを抱いている人は、定住志向が強い傾向にあった。

さらに、「治安」と「人間関係」のイメージは、「下町」のイメージの近くにあることもわかった。このことは、インタビュー調査からも確認することができた。「下町」のイメージを介しながら、治安に関するネガティブなイメージをポジティブなイメージへと捉え返すこともできるのではないだろうか。

第4章では、南部地域の20歳代から40歳代の居住者の生活と地域の関連について検討した。フィールドワークに基づくインタビュー調査から、居住者がどのような生活のなかで、居住地選択や南部地域の環境評価、消費活動やつながり構築などの活動を行っているのかを分析した。

その結果は多岐にわたるが、まず、居住地選択に関連して、対象者のライフコースやライフスタイルから地域に引きつける力（引力）と地域から押し出す力（斥力）を析出した。引力の弱さ、

あるいは斥力の強さとして地域からの転出志向を、引力の強さ、あるいは斥力の弱さとして地域での定住志向を理解することができた。

また、子育て・教育環境や治安をはじめとした、しばしばネガティブに評価されがちな地域環境については、「北」と「南」を対比する認識フレームの利用や、自虐的ユーモアの戦略など、質問紙調査の数値の解釈の再考を促すような、地域に対する生活者の見方も浮かびあがってきた。

地域の生活利便性については高く評価されており、地域の引力になっていることが確認できた。ただ、消費活動は地域内だけではなく地域外でも、あるいはインターネットを利用するかたちでも活発に行われている。生活利便性への評価は、高い移動性を前提としていることがわかった。

さらに、つながり構築については、しばしば聞かれるイメージ通り、インタビューからも南部地域におけるつながりの強さを裏づけることができた。地域のつながりは、ローカルな社会関係資本として、相互扶助や仕事、地域への愛着などとも関連しており、居住者を地域に引きつける引力になっていると考えられる。

しかし、血縁を介して再生産されることもある地域のつながりには、単身者などが接続できていない可能性も示唆され、昨年度の調査結果は追認されたと言える。地域内には地縁から半歩離れた「居場所」もみられるが、そのような場を介して、地縁と接点の薄い人たちを地域のつながりに橋渡しする可能性も示唆された。

そして、大阪音大と地域の関係は、相互に疎遠な関係が一方で認められた。居住者にとって大阪音大は地域のひとつのアイコンであるが、具体的な接触は少ない。消費やまちづくりなど地域との接点を有する学生もみられるが、それは必ずしもマジョリティではないかもしれない。ただ、楽器の練習などが可能な住宅が多くあるという条件から、大阪音大の学生や卒業生のみならず、音楽関係者が南部地域には集まりやすくなっている。南部地域に愛着や馴染みをもって住み続けている学生や卒業生もおり、彼ら・彼女らは大阪音大と地域を媒介し、地域の活性化に結びつける存在として重要であるように思われる。

5-2. 活性化の方向性についての考察

2年間の調査研究をふまえ、最後に、南部地域の活性化に向けてどのような方向性が考えられるのか、考察を行いたい。なお、現在すでに進められている各方面の施策の充実が、南部地域の活性化のベースとなることは言うまでもない。

昨年度は、A) 学生をターゲットとした庄内駅周辺の雰囲気を活かした店舗・まちなみの展開、B) 単身者をターゲットとした「居場所」でのゆるやかなつながりの醸成、C) 子育て世帯をターゲットとした「音楽」を媒介したつながりの形成、という3つの方向性を示した。以下では、「駅前」「居場所」「音楽」「下町」というキーワードを中心に、昨年度の結論を修正・再構成するかたちで、具体的な提案を交えながら南部地域の活性化の方向性について改めて検討してみたい。

①「駅前」を学生の滞りが起こりやすい空間にする

主な結果
【H28 研究】 <ul style="list-style-type: none">・ 庄内駅を利用する 20 歳前後の若者（特に女性）の多さ（交流人口としての大阪音大の学生）・ 大阪音大の学生の多くは大学から庄内駅にかけてのエリアでの消費が少ない
【H29 研究】 <ul style="list-style-type: none">・ 大阪音大の学生の庄内駅周辺での滞留の少なさ（駅西側の空間の特性によるところが大きい）・ 大阪音大の学生の庄内駅の東側への移動の少なさ・ 治安や雑多性に関する地域イメージ・ 一部の学生（卒業生）の活発な地域内での消費・ 空間に焦点づけられた治安意識（駅周辺空間の改善による治安改善の感覚）

庄内駅を利用する大阪音大の学生の多さは、南部地域の交流人口の面での特徴のひとつである。学生という交流人口を、消費を含めた地域内での活動につなげて可視化することは、地域活性化のひとつの方向性として重要であると言える。

具体的には、学生の往来が多い線路西側の道路に面したところに、路面店やテラスがある店舗、移動販売車、ベンチなどが増えると、地域内での学生の滞りが増えるのではないかと。購買の様子が外からみえる庄内駅の西側出口すぐの路面店では、地域の人にも学生の消費が認識されていた。このような事実からは、屋内ではなく街路で、誰にも見えやすい目線の高さ（1階部分）で学生の姿が見えることが、学生やまちの印象にとって重要であることがうかがえる。

また、線路を渡って庄内駅の東側に学生が移動するような仕掛けがあると、地域内での学生の見え方、ひいては、まちの空間のイメージにも変化が起きるのではないかと。音楽関係のイベントの路上での定期的な開催、テラスや屋台などの設置による空間利用の変化に関する社会実験の実施、さらには学生主体で企画運営される音楽をテーマとした店舗の設置、などが考えられないだろうか。昨年度の報告書の結論部で示した「コト消費」（経済産業省地域経済産業グループ 2015）や「空間体験」（木下・広瀬 2013）といった考え方をふまえるならば、「音楽」（後述③とも関連）あるいは「下町」（後述④とも関連）をテーマとした商品・サービスを一体的に提供しながら、学生以外にも含めた消費者を呼び込むという方向性も重ねて考えることもできるだろう。

インタビューのなかで治安の課題として語られたことのひとつは、道が薄暗かったり狭隘だったりする「空間」の問題であった。庄内駅周辺の「空間」が近年きれいになったことは、治安の改善として認識されてもいた。学生の滞りが増えるような仕掛けを駅前の「空間」に施していくことは、中長期的には治安に関するイメージを改善していくことにもつながるのではないかと考えられる。

②「居場所」を介して単身者と地域をつなげる

主な結果
【H28 研究】 <ul style="list-style-type: none">・南部地域の単身者の比率の高さ・単身者の社会的つながりの弱さ・ひとりでの充実した私生活を志向する人の定住志向の強さ
【H29 研究】 <ul style="list-style-type: none">・地域のつながりの強さに関するイメージと定住志向の相関・地元出身者を中心とした南部地域のつながりの強さ・血縁を介した地縁の再生産。地域のつながりと単身者の接点の薄さ・地縁から半歩ずれた「居場所」の存在・ローカルな社会関係資本の仕事や地域愛着形成との関連

代々住み続けている人も多い南部地域は、しばしば人のつながりが強い地域と言われる。しかし、単身者が多いという地域の特性を背景に、つながりの弱さもうかがわれた。南部地域は地域のつながりの強さと弱さがコントラストを成しやすい条件にあると考えられた。

インタビュー調査では、地縁から半歩ずれるかたちで自発的に、場合によっては非組織的に形成されている「居場所」が地域のなかにあることもわかった。このような「居場所」が、地縁との接点が希薄だった人たちを地域に緩やかにつなげる場になることが期待される。

このことは、昨年度の報告書でも触れた、サードプレイス（オルデンバーグ 2013）の議論とも重なるところである。サードプレイスとは、家庭や職場以外に自分の居場所と感ずることができるところを指す。具体的には、カフェやバーなどの店舗、公園や図書館などの公共の場などがあげられることが多い。このサードプレイスを地域にもつ人ほど、その地域への愛着度が高まるとともに、個人の生活の質が高まることも指摘されている（川村・谷口 2013）。

団体やサークルのようなどころだけではなく、飲食店など店舗の形態をとるものも含め、地域のなかで自分の「居場所」と認知される場があることは、南部に多い単身者の生活の質や地域への愛着を高める可能性がある。地縁から半歩ずれた「居場所」をもつことは、家族以外の紐帯を身近に確保するという意味でも意義があるだろう。

今後は、高齢者のみならず、未婚率の上昇などを理由とした壮年期における単身者の増加も予測されている（藤森2017、pp59-67）。全体的な人口減傾向のなかで未婚者の割合が増加していくということは、地域活性化を考える際にも、未婚者の地域での活動のあり方を考慮する必要性が高まるということである。単身者の緩やかな社会的つながりを醸成し、彼ら・彼女らの暮らしやすさを地域のなかで高めていくこと、地域での活動を増やしていくということは、今後の地域活性化の方向性のひとつとして提示しうると考えられる。

具体的なケースをあげるならば、ひきこもり経験者を支援し、豊中市内でも活動している特定非営利活動法人ウィークタイでは、生きづらさを抱える若者が中心に集う「だらだら音楽集会」

という会を開いている。そこでは必ずしも常に音楽の練習などが行われているわけではないものの、音楽という目的を設けることでさまざまな人が集まりやすくなるそうだ(泉2018)。「音楽」というソフトは、異なる価値観をもつ人たち同士の対話の形成に効果的であるとも言われる(西村・久保田2016、pp.53-54)。次の③で述べるような音楽を媒介とした「居場所」づくりも、模索できるのではないだろうか。

ただ、そもそも単身者が現在どのような「居場所」をもっているのか/いないのか、求めているのか/いないのかなどについては、十分に整理されていない部分も多い。今回のインタビュー調査でも、単身者にアプローチすることはできなかった。単身者の生活に関する研究を進め、彼ら・彼女らにとって有用な「居場所」になりうる公共空間や商業空間のあり方を検討していく必要もあるだろう。

③「音楽」の仕事地域から発信する

主な結果
<p>【H28 研究】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子育て世帯の社会減傾向 ・子育て・教育環境へのネガティブな評価
<p>【H29 研究】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子育て・教育に関する明確な地域イメージの乏しさ ・楽器などの練習が可能な住宅の集積に伴う音楽関係者の居住 ・大阪音大でのつながりを起点としたフリーランスの音楽家の仕事の獲得 ・地域住民にとって大阪音大は地域のアイコン。他方で、地域住民と大阪音大の接点の少なさ ・一部の子育て世帯の大阪音大のイベントへの参加

地域活性化という観点から考えたとき、地域に住む人びとの大阪音大とのつながりが必ずしも多くないこと、地域に住む音楽関係者が地域との接点をあまり保持できていないことは、ひとつの損失であると捉えることができる。地元根づいた音楽関係者は、地域と大阪音大とのギャップを媒介し、地域活性化を促す存在として期待できるだろう。

一般的に、芸術系・音楽系の大学を卒業する学生のうち、フリーランスで働く人は少なくないようだ(久保田 2018、p.27)。そのようななかで、大阪音大の卒業生をはじめとした地域に住む音楽関係者を主な対象としながら、音楽の演奏活動だけでなくより幅広い音楽関係の職域を、南部地域を拠点に開発・発信していく試みを進めることができないだろうか。そのことは、大学卒業後の音楽関係者のキャリア形成を支えることにつながる。同時に、演奏可能な住宅が集積しているという優位性のもとで、大阪音大の学生や卒業生をはじめ、音楽関係者を居住者として地域にさらに呼び込むことにもなり得る。フリーランスの音楽家の場合、仕事はつながりのなかで獲得されるため、多くの音楽関係者が居住しているということそれ自体が、さらに関係者を呼び込む条件になるだろう。

音楽の職域の開発は、音楽関係者のキャリア支援に留まらず、音楽に関する地域の潜在ニーズを掘り起こすなかで、それを充足することにもつながるだろう。行政や財団、ホールや音楽関係者、そして地域の人びとの間をとりもちながら、地域のなかで音楽の企画を立ち上げる、「地域音楽コーディネータ」という働き方も提唱されている（久保田 2018、pp.228-234）。

また、子育て支援や福祉・医療ケア、ソーシャルワークの分野での潜在的なニーズとの結びつきを考えることもできるだろう。インタビューのなかで大阪音大のイベントに参加していたのは、幼少期の子どもを育てる人だった。一部の子育て世帯にとっては、確かに大阪音大の音楽関連のイベントは子育ての資源のひとつとして利用されている。西村・久保田（2016）は、南部地域における音楽教育のプログラムの開発や実施、そのための拠点の設置などを構想しているが、その構想に大阪音大の卒業生や地域に住んでいる音楽関係者のネットワークが絡むことで、さらに地域に根ざしたものになるのではないか。

④「下町」イメージを再構築する

主な結果
<p>【H28 研究】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一部の大阪音大の学生の「レトロ」な雰囲気を選好 ・地域の治安や子育て・教育環境などに対するネガティブな評価
<p>【H29 研究】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・治安イメージと移動志向の相関、地域のつながりイメージと定住志向の相関 ・「下町」イメージを媒介した治安イメージの改善可能性 ・「北」との対比で構築される南部地域のイメージ ・地元出身者だけではなく転入者・音楽関係者・外国人の「下町」の雰囲気を選好

調査研究の結果をふまえると、南部地域の歴史的かつ独自の「下町」としての魅力をも、これまで以上に地域の内外に向けて発信していくことが、外から交流人口や定住人口を呼び込む面でも、あるいは、ポジティブなフィードバックを形成して人びとの地域での活動を増やすという意味でも、重要ではないかと考えられる。

ただしこの場合、「下町」イメージの押し出しが、「北」との対比を強めるという懸念もありえる。インタビュー調査からは、「北」と「南」が対比されるかたちで南部地域の環境評価がなされており、それにより地域環境の評価が必要以上にネガティブな方向に表出されがちになっている可能性が懸念された。地域を捉えるフレームをずらす必要があるだろう。「北」との対比フレームを必ずしも共有しない地域内部の他者（音楽関係者、外国人、転入者、など）や、地域の外部（関西圏の他の「下町」、など）に開かれた「下町」イメージの再構築が重要であるように思われる。

「下町」イメージの発信の基盤となるのは、やはり歴史であろう。高度経済成長期以降の南部地域について、人びとの生活に根ざした歴史を残しておくことが重要ではないか。南部地域が経験した急激な変化とその後の推移は、これから全国的に人口減少が進んでいく日本の戦後史的に

も、貴重なひとつのケースであるように思われる。しかし、特に人口のピークを越えた後の南部地域に何が起こったのか、振り返るための資料は多くない。生活史の聞き取りの蓄積などを進めたり、関西のインナーシティとネットワークを結び共同でのイベントを開催したりするなど、関西の戦後史、あるいは日本の戦後史のなかで豊中市の南部地域を捉える歴史的なアプローチが、「下町」としての南部地域のイメージをポジティブなカタチで発信していく際のひとつの足場になるのではないだろうか。他の「下町」との比較のなかで、南部地域の新たな魅力や独自性も浮き彫りになってくるように思われる。

また、南部に数多く残る文化住宅も「下町」イメージを構成する要素だと思われるが、これもひとつの資源となりうるのではないか。まちづくりの手法として空き家のリノベーションが各地で進められ注目が集まっているが、そこで利用される建物は、しばしば100年単位で残っている歴史的な町屋などであったりする。しかし、南部地域をはじめ高度経済成長期に関西圏に数多く建てられた文化住宅のリノベーションについては、スポットライトが当たることが少ないように思われる。南部地域を拠点にしながら、関西圏に数多くある文化住宅の利活用を、新たな「下町」イメージとともに発信することもできるのではないか。すでに、大阪府茨木市を拠点に、文化住宅を利用したアートイベントなどの開催を行う動きもあるようだ³²。江戸時代や明治時代に建てられた「大阪長屋」が主な対象だが、大阪市内にある長屋での生活を一般に公開（「暮らしびらき」）するイベントなども開かれている³³。これらの取り組みに学ぶこともできるだろう。

さらに、①で述べたような音大生の滞留を惹起する庄内駅前空間の展開や、③で述べたような音楽関係者の仕事の開拓・発信など、大阪音大や学生・卒業生と地域のつながりが増えるような取り組みの推進は、新たな「下町」のイメージづくりに寄与するのではないか。ネガティブなイメージがさらなるネガティブな状況を地域に呼び込む「螺旋的衰退状況」を転換するひとつの手法（『コンテキスト転換』のための強力な“武器”）として、アートが有用であることは、しばしば指摘される場所である（田所 2017、p.110）。ただ、そこでアートとして取り上げられるのはしばしば美術の方面であり、音楽を絡めた「リノベーションまちづくり」などの取り組みを聞くことはあまりないように思う。音楽大学がある「下町」の先駆的な試みとして、耳目を集めやすいのではないか。

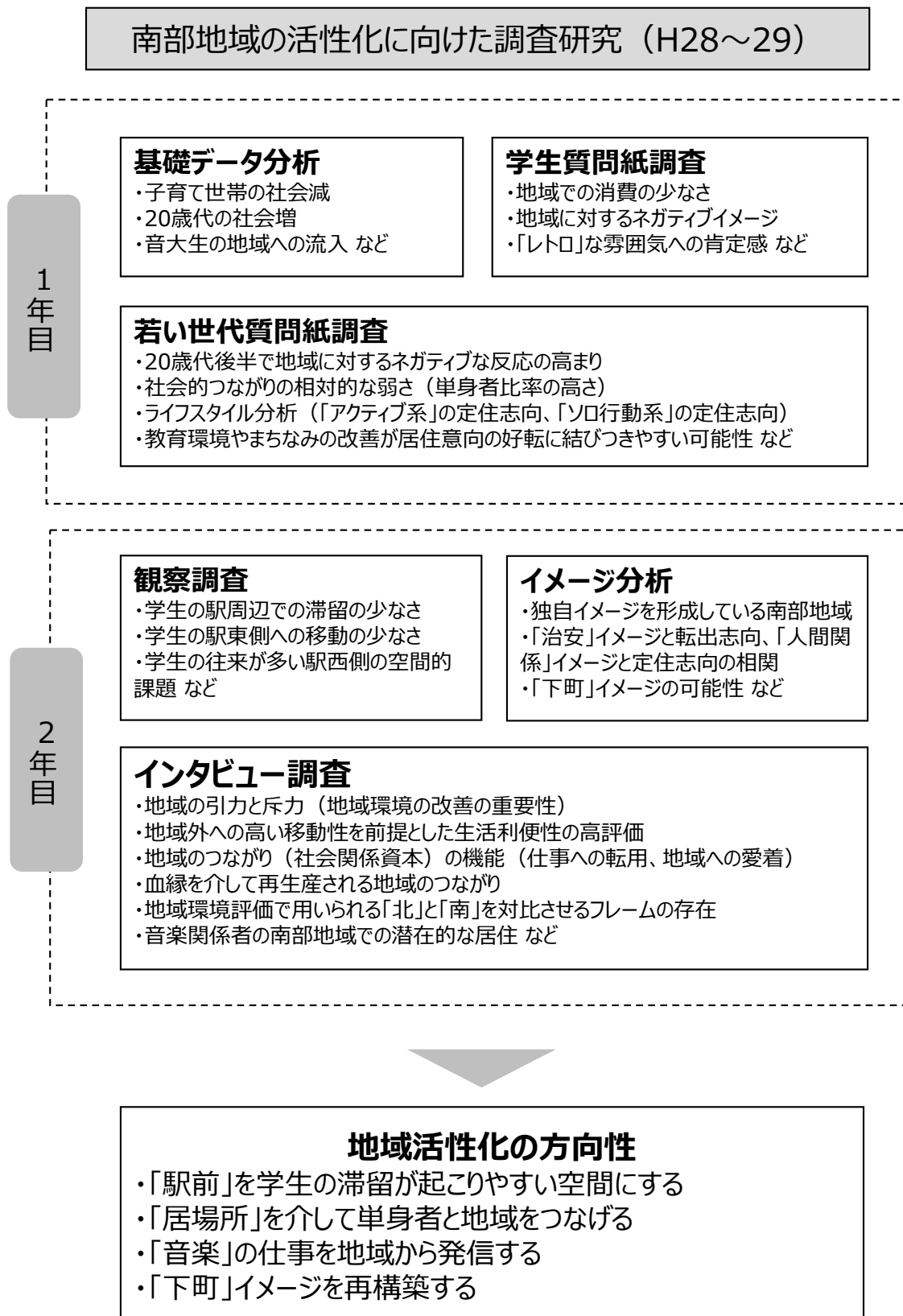
加えて、豊中市内の質問紙調査などで用いられる地域環境に関する評価基準は、再考できるように思われる。現行の質問紙調査では、「北」との差異化のなかで地域のネガティブな評価が必要以上に刺激されている面があるのではないか。地域を評価する基準はさまざまにありえる。東京都荒川区で「荒川区民総幸福度（GAH）」という指標が開発され、地方自治体での幸福度調査の先駆となったのはよく知られているところである（荒川区自治総合研究所 2010）。また、近年では、「住みたいまちランキング」などとは異なるカタチで都市の魅力を評価するために、身体感覚や動詞で都市を評価するという観点からの尺度の開発の試みもみられる（島原・HOME'S 総研

³² 前田文化 (<http://maedabunka.com/>)

³³ オープンナガヤ大阪 (<http://opennagaya-osaka.tumblr.com>)

2016)。南部地域の「下町」のポジティブな側面を浮き彫りにする評価尺度を、独自に開発することも考えられてよいのではないだろうか。

図表 45 調査研究の概要



参考文献

- 阿部真大、2013、『地方にこもる若者たち——都会と田舎の間に出現した新しい社会』朝日新聞出版
- 荒川区自治総合研究所編、2010、『あたたかい地域社会を築くための指標——荒川区民総幸福度（グロス・アラカワ・ハッピネス：GAH）』八千代出版
- 浅野智彦、2011、『若者の気分 趣味縁からはじまる社会参加』岩波書店
- 藤森克彦、2017、『单身急増社会の希望——支え合う社会を構築するために』日本経済新聞出版社
- ゲール,J、2014、『人間の街——公共空間のデザイン』鹿島出版会
- 羽渕一代、2016、「現代的イエ意識と地方」川崎賢一・浅野智彦編『〈若者〉の溶解』勁草書房、pp.85-109.
- 樋口耕一、2014、『社会調査のための計量テキスト分析』ナカニシヤ出版
- 細井亮佑・寺田充伸・小林祐司・佐藤誠治、2011、「テキストマイニングを用いたアンケート自由記述欄の分析による生活環境評価」『日本建築学会九州支部研究報告』50、pp.505-508.
- 稲葉陽二、2011、『ソーシャル・キャピタル入門』中央公論新社
- 石井まこと・宮本みち子・阿部誠編、2017、『地方に生きる若者たち——インタビューからみえてくる仕事・結婚・暮らしの未来』旬報社
- 泉翔、2018、「生きづらさを抱える若者を支える——自助グループによるひきこもり経験者の『支援』」『TOYONAKA ビジョン 22』21、pp.36-43.
- 河合孝仁、2017、『「失敗」からひも解くシティプロモーション——なにが「成否」をわけたのか』第一法規株式会社
- 川村竜之介・谷口綾子、2013、「まちなかの居場所が生活の質・地域への意識に与える影響に関する研究」『土木学会論文集 D3』69（5）、pp.335-344.
- 経済産業省地域経済産業グループ、2015、『平成 27 年度 地域経済産業活性化対策調査（地域の魅力的な空間と機能づくりに関する調査）報告書』
- 木下斉・広瀬郁、2013、『まちづくり デッドライン』日経 BP 社
- 小島多恵子、2014、「風の女神たち——度胸と愛嬌の女性リーダーたち」荻谷剛彦編『「地元」の文化力——地域の未来のつくりかた』河出書房新社、p.105-124.
- 越中康治・目久田純一、2017、「道徳の教科化に対する教師・保育者及び学生の認識（2）——テキストマイニングを用いた分析」『宮城教育大学紀要』167-176.
- 久保田慶一、2018、『大学では教えてくれない音大・美大卒業生のためのフリーランスの教科書』ヤマハミュージックメディア
- 轡田竜蔵、2017、『地方暮らしの幸福と若者』勁草書房
- 丸山里美、2016、「フィールドワーク」岸政彦ほか『質的社会調査の方法——他者の合理性の理解社会学』有斐閣、pp.37-94.
- 森田哲夫・入澤覚・長塩彩夏・野村和広・塚田伸也・大塚裕子・杉田浩、2012、「自由記述デー

- タを用いたテキストマイニングによる都市のイメージ分析』『土木学会論文集 D3 (土木計画学)』 68 (5)、pp.315-323.
- 長須正明、2017、「学校社会は地方と向き合っているのか」石井まこと・宮本みち子・阿部誠編『地方に生きる若者たち』旬報社、pp.221-247.
- 内閣府政府統括官、2014、『家族と地域における子育てに関する意識調査報告書』
- 西村理・久保田テツ、2016、「大阪音楽大学の地域連携——人と社会をつなぐ音楽の場に向けて」『TOYONAKA ビジョン 22』 19、pp.49-57.
- オルデンバーグ,R、2013、忠平美幸訳『サードプレイス——コミュニティの核になる「とびきり心地よい場所」』みすず書房
- 島原万丈・HOME'S 総研、2016、『本当に住んで幸せな街——全国「官能都市」ランキング』光文社新書
- 鈴木淳子、2011、『質問紙デザインの技法』ナカニシヤ出版
- 鈴木広、1986、『都市化の研究』恒星社厚生閣
- 田所承己、2014、「〈つながる／つながらない〉に対する基礎的視点」長田攻一・田所承己編『〈つながる／つながらない〉の社会学』弘文堂、pp.2-17.
- 田所承己、2017、『場所のでつながる／場所とつながる——移動する時代のクリエイティブなまちづくり』弘文堂
- 高史明、2015、『レイシズムを解剖する——在日コリアンへの偏見とインターネット』勁草書房
- 武田重昭・西川文香・加我宏之・下村泰彦・増田昇、2010「利用実態から捉えたニュータウン再生に資する屋外空間の活用に関する研究」『都市計画 別冊 都市計画論文集』 45 (3)、pp.787-792.
- 田中美子、1997、『地域のイメージ・ダイナミクス』技報堂出版
- 谷富夫、2008、「ライフヒストリーとは何か」谷富夫編『新版 ライフヒストリーを学ぶ人のために』世界思想社、pp.3-19.
- 豊中市、2016、『豊中市まちづくりのための市民意識調査報告書』
- とよなか都市創造研究所、2013、『豊中市の活力・魅力づくりに関する調査研究 (II)』
- とよなか都市創造研究所、2016、『総合計画等の見直しにかかる基礎調査』
- とよなか都市創造研究所、2017、『南部地域の活性化に向けた調査研究 I』
- 辻泉、2016、「地元志向の若者文化——地方と大都市の比較調査から」川崎賢一・浅野智彦編『〈若者〉の溶解』勁草書房、pp.147-176.
- 塚田信也・森田哲夫・西尾敏和・湯沢昭、2015、「自由記述データに着目した限界自治体における生活質評価に関する分析——群馬県南牧村を対象として」『日本建築学会計画系論文集』 80 (708)、pp.361-368.
- 山口創・趙松楠・中塚雅也・山下良平、2014、「テキストマイニングによる農村地域課題の特性と変化の把握——兵庫県を事例として」『農村業問題研究』 50 (2)、pp.107-112.
- 山崎亮、2016、『縮充する日本——「参加」が創り出す人口減少社会の希望』PHP 研究所

謝辞

本調査研究を進めるにあたり、多くの方々にご協力ならびにご指導をいただきました。ここに感謝の意を表します。

まず何より、今回のインタビュー調査にご協力くださいました南部地域の市民のみなさまに、心より感謝申し上げます。インタビューのみならず、報告書の確認作業も含めご協力いただき、誠にありがとうございました。また、インタビュー対象者を募るにあたっては、自治会、消防団、PTA など地域の各組織で活動されている方々からのご紹介を得ました。対象者をつないでくださった方のなかにはインタビューを受けてくださった方もおられるため、お名前をあげることは差し控えますが、みなさまのご協力なくして今回の調査研究は成立しませんでした。心より感謝申し上げます。どうもありがとうございました。

インタビュー調査においては、しょうないガダバや公益財団法人とよなか国際交流協会のみなさまにもご協力いただきました。インタビューの遂行と分析にあたっては何より、しょうないガダバの常石憲靖さんと、大阪大学未来共生機構第五部門の山本晃輔特任助教の協力が欠かせませんでした。みなさま、どうもありがとうございました。

また、昨年度の若い世代調査や学生調査にご協力いただいた市民や学生のみなさまに、再度感謝申し上げます。大阪音楽大学ミュージックコミュニケーション専攻の西村理准教授と、久保田テツ准教授には、勉強会や昨年度の質問紙調査でお世話になりました。どうもありがとうございました。

とよなか都市創造研究所運営委員会委員のみなさまには、さまざまな観点からのご指導やアドバイスをいただきました。深謝申し上げます。

南部地域の活性化に向けた調査研究Ⅱ

No.18-02

平成30(2018)年3月

500円

編集・発行 とよなか都市創造研究所

〒560-0022 大阪府豊中市北桜塚3丁目1番28号(市役所別館3階)

TEL : 06-6858-8811

FAX : 06-6858-8801

URL : <http://www.tium-toyonaka-osaka.jp> E-mail : tium@tcct.zaq.ne.jp

